

五胡十六国時代遊牧民研究

市来弘志

## 目次

### 序言

#### 第一部 五胡十六国時代民族史への視点——研究史

##### 第一章 魏晉南北朝民族史研究と民族理論

##### 第二章 中国における「淝水之戦論争」とその影響

##### 第三章 後趙史研究にみる民族史研究の焦点

#### 第二部 五胡十六国時代前期における民族関係——冉魏政権をめぐって

##### 第一章 乞活と後趙政権——五胡十六国時代前期における流民問題の諸相

##### 第二章 冉閔の胡人虐殺について

##### 第三章 冉閔政権と漢人たち

#### 第三部 五胡十六国時代後期における遊牧民の活動——大夏と統万城

##### 第一章 代来城と統万城——匈奴鉄佛部の国家形成

序言

1 5 25 43 59 71 85 97

第二章	統万城の戦略的位置	111
第三章	赫連勃勃の領土拡大過程と農牧境界線	133
第四部	華北における牧畜民と牧畜	
第一章	五胡十六国・北魏の牧畜	146
第二章	五胡十六国北朝期の華北平原における牧畜民の活動	160
第三章	五胡十六国時代の鄴城周辺における牧畜民と牧畜業	180
第四章	魏晋期の酒泉と河西における家畜と牧畜業——画像磚の分析を通じて	191
第五章	遊牧民の千年の都——故都西安の歴史地理的概観	202
結語		222

## 序言

五胡十六国という時代はどのようなイメージを持たれ、歴史学上はどのように認識されているのだろうか。一般的なイメージは曖昧模糊としているか、正直あまりよろしくない。日本人の中国史知識は三国志からいきなり唐代に飛び途中は空白である、とはよく言われる所であるから、五胡十六国時代に確固たるイメージなどあるはずもない。中国人とりわけ漢族は往々にして漢・唐といった統一された大帝國を歴史上の誇りとしているので、人によっては五胡十六国時代を「異民族に侵略された乱世」とさえ考えている。これは中国の歴史学者の認識とは明らかに異なるのだが、専門家以外の人々が依然としてこのようなイメージを持っているのは残念ながら否めない。

歴史学者が五胡十六国時代を語る時、ほぼ同時代に起きた所謂ゲルマン人の大移動がアナロジーとしてしばしば用いられる。曰く「中国史上の民族移動期」「北魏（あるいは唐）はフランク王国に相当する」云々。時代が近く現象もよく似たこの二つの歴史事象を比較検討するのは、歴史学の方法として極めて自然であり意義深いことである。しかし両者に対する認識と評価には大きな隔たりが存在している。

まだ西欧近代を賞賛する歴史観が主流であった頃、ヨーロッパ中世は「暗黒時代」とされ、その嚆矢となったゲルマン人の大移動は「蛮族の侵入と古代文明の破壊」と捉えられがちだった。川勝義雄はそのような頃に魏晉南北朝時代を「華やかな暗黒時代」と呼んだ。「乱世は人びとを、しばしば恐るべき苦難と悲惨につきおとす。ことに、北方や西方から多数の異民族が侵入し、華北の先進地帯を荒らしまわったわれわれの時代には、たしかに暗黒時代の様相が、いたるところに見いだされる。漢帝國崩壊後のこの時代の様相は、かのローマ帝國崩壊後の、いわゆるヨーロッパ中世暗黒時代に酷似する。しかし、この中国における暗黒時代には、ヨーロッパにおけるよりも、はるかに華やかな文明が花咲いた。」「中国の古代文明は、この長い乱

世にもかかわらず、断絶するどころか、かえってその一貫性を保持しつつ、しかも、よりゆたかに、より広い範囲に発展する」<sup>1</sup>と彼は言う。川勝が「華やかな文明」の例として挙げる王羲之・顧愷之・陶淵明は、いずれも五胡十六国と同時代の江南の人である。

川勝は所謂中国史の時代区分論争において、魏晋南北朝隋唐時代を中世と位置づける京都学派の旗手として、論争の最前線に常に身を置き続けた。彼にはヨーロッパとの比較を通じて魏晋南北朝時代を中国の中世であると論証し、さらに文明の衰退したヨーロッパに比べ魏晋南北朝時代の中国が華やかな文明を発展させたことを示して、中国史上におけるこの時代の重要性を強調したいという意図があったようである<sup>2</sup>。しかし川勝のこの言葉は二つの前提があつてはじめて成立するものである。一つは中世ヨーロッパは古代文明が破壊された暗黒時代であるということ。もう一つは中国文明は秦漢から魏晋南北朝を経て隋唐まで一貫性を保持して発展してきたということである。だが西欧近代を手放しで肯定する無邪気な歴史観が影を潜めると共に、中世を再評価する動きがヨーロッパの歴史学界において活発になり、新しい時代を開いたゲルマン人の大移動は積極的な価値を与えられるようになった。かくて川勝の拠る前提の一つは崩れてしまった。

ではもう一つの前提はどうか。三崎良章は「ゲルマン民族の移動は、現代に続くヨーロッパの枠組みの成立につながったと評価される。ところがゲルマン民族の移動に比べると、「五胡十六国」についてのこれまでの評価には否定的なものが多い。」と述べる。なぜなら「天命を受けた天子が天下を統治するという中国的正統王朝意識、伝統的中国認識からすると、この時代は混乱の時代として批判されるべきなのかもしれない」<sup>3</sup>からである。このような伝統的意識に則って書かれた歴史書を額面通り受け入れれば、五胡十六国時代に一度乱れた中国は、やがて「漢人」の隋唐によって統一され、五胡の人びとは「漢人」の大海に没し消え入ってしまったかのように見える。かくて中国史の一貫性は保たれる格好になる。このような歴史観に囚われる者は五胡十六国時代を否定的に見ることしかできない。そして五胡十六国時代に否定的なイメージを抱く人が少なくない現在、秦漢から魏晋南北朝隋唐まで中国文明の一貫性を認める考え方には、未だに一定の支持があると言わざるを得ない。だが

「現代に生きる我々がそれを慣習的に引き継がなくてはならない謂われはない。」という三崎の提言に私は全面的に賛同したい。ヨーロッパの古典古代文明に引導を渡し新しい時代を切り開いたゲルマン人の大移動が評価されて、五胡十六国時代が貶められて良いはずがない。田村実造は早くから五胡十六国時代の重要性に着目し、「いわゆる五胡民族の華北への移動・潜伏は、その人口のおびただしき、またその規模の雄大さにおいて、はたまたそれが中国および東アジア世界におよぼした歴史的意義の重要性において、ヨーロッパ史上のゲルマン民族の大移動を上回るであろう。」<sup>4</sup>と述べている。実際近年の研究によつて、四世紀以降の中国は遊牧民の強い影響を受けて変容を遂げ、その延長線上に華開いた隋唐期の中国文明は三世紀以前とは大きく異なっていることが明らかにされつつある。中華思想の尻尾を引きずる歴史観からは脱却しなければならない。ならば五胡十六国時代をどのように見るべきなのだろうか。

谷川道雄『隋唐帝国形成試論』は、内陸アジア史ではなく中国史研究の側から五胡十六国時代に積極的評価を与えたという点で、日本の研究史上において画期的な存在である。ただ谷川がこの書を『五胡北朝政治史』としなかった理由を「唐代研究でゆきづまった問題の壁を、それ以前に遡ることによってつき破ろうとした」と述べるように、これは隋唐帝国の存在を所与のものとして、河を下流から上流に遡るように探求したものであり、言わば隋唐からの視点である。しかし隋唐帝国の形成は、例えば中国が再統一されずヨーロッパのような諸国分立が固定化される状態を含め、四〇五世紀の歴史がはらんでいた様々な可能性の一つの結果に過ぎない。本稿では河を遡るのではなく、河の源流が発する山の頂から下流を俯瞰するような視点を試みてみたい。

そこで本稿は次のような構成をとる。

まず第一部「五胡十六国時代民族史への視点——研究史」では、日本と中国における五胡十六国時代史研究史上の論争を整理することにより、その特色と問題点を指摘し、併せて背景にある歴史観についても言及する。

第二部「五胡十六国時代前期における民族関係——冉魏政権をめぐる」では、五胡十六国時代前期で最も酸鼻を極めた出

来事と言われる冉閔の胡人虐殺事件をめぐり、この時代の民族・種族の意識や政治的關係について考察する。

第三部「五胡十六国時代後期における遊牧民の活動——大夏と統万城」では、五世紀に匈奴鉄佛部の赫連勃勃によって建国された大夏とその首都統万城を主に取り上げ、古くから中国本土に移住していた諸族が活躍した四世紀に対し、新たに草原地域から進出してきた遊牧民が主役となる五世紀の諸相を分析する。

第四部「華北における牧畜民と牧畜業」では視野を広くとり華北平原・河西地方・関中平原における牧畜民の活動について考察し、牧畜業の状況や自然環境の変化との関連にも言及する。

このように五胡十六国時代を政治、地理、自然環境、産業等様々な角度から多角的に分析し、その複雑で豊かな相貌を明らかにしていきたい。

- 1 川勝義雄『魏晉南北朝』「はじめに」（講談社『中国の歴史』第三卷、一九七四年）
- 2 川勝前掲書の氣賀澤保規「解説」。
- 3 三崎良章『五胡十六国——中国史上の民族大移動』「序章 民族の時代」（東方書店、二〇〇二年）。
- 4 田村實造『中国史上の民族移動期——五胡・北魏時代の政治と社会——』「はじめに」（創文社、一九八二年）
- 5 谷川道雄『隋唐帝国形成試論』「序説 隋唐帝国の本源について——中国中世の国家と共同体」（筑摩書房、一九七一年）。

## 第一部 五胡十六国時代民族史への視点——研究史

### 第一章 魏晉南北朝民族史研究と民族理論

#### はじめに

五胡十六国時代のみならず魏晉南北朝史、とりわけ民族史の研究には多くの困難な問題が存在する。史料が少なく、しかもそのほとんど全てが漢人の記録者によって書かれたという点は、最大の困難としてまず挙げられる。民族史研究には大変複雑な政治的問題がついて回り、言い難いことが多々あるという点も、非常に深刻である。

同時に、中国には民族に関する特異な考え方があり、中国人学者の発想が大きな制約を受けることも問題である。それは往々にして大漢族主義という形を取るが、清朝の版図を基本的に継承した現代中国の領土を前提とし、その中に存在する諸民族の歴史を全て中国という一国史の中に包括しようとするため、それぞれの民族の立場、特に魏晉南北朝史においては胡人の側に立って歴史を構想するのが極めて困難になっている。これは学問的に大変不幸なことである。

そこで本章では、最初にそのような困難の原因になっている民族に関する考え方を概略的に整理し、続いてその考え方が魏晉南北朝民族史に適用された場合、いかなる困難が発生するかを具体的に見ていきたい。



## 一 「中華民族」という思想

現代日本語および漢語における「民族」という語は、元来明治期日本で「Nation」の訳語としてあてられた造語で、以後専らその義で用いられてきた。ネーションという概念自体が近代の産物なので、その訳語である「民族」を前近代に用いることの可否自体議論されるべきであろうし、実際中国史研究の場においても様々な議論が交わされてきた。

前近代における中国には様々なエスニック集団（ひとまず「民族」とは呼ばずにおく）の対立が存在した。むしろ中国史はその関係を軸に描くことができるものである。本稿の主題である五胡十六国時代には、支配者のみならず庶民レベルにまで胡漢のエスニックな対立感情が存在していた。また顧炎武の「保天下者、匹夫之賤、與有責焉耳矣」（『日知録』卷十三「正始」）という有名な言葉に、近代ナショナリズムに近い概念を見いだす考え方もある。だがこれはあくまで類似である。五胡十六国時代の様々なエスニックグループや、明末清初における満漢の対立感情に「民族」「民族主義」の語を当てはめ、これを不用意無自覚にネーションやナショナリズムと同一視した場合、救いがたい混乱を招くことは明らかである<sup>2</sup>。しかし近代中国における民族史研究は意識的あるいは無意識的にこれを同一視し、案の定救いがたい混乱を生じながら進められていった。

伝統中国における王朝支配体制は「中華帝国」と呼ばれるが、この中華の統治理念は「文化主義」であり、血統を重視する「民族」とは相容れない。つまり中華帝国の支配体制は、原理的にネーションを否定し境界によって画定された領土を否定する建前によって成立するものであり、中華皇帝の正統性は血統や出自ではなく「徳」によって保証される<sup>3</sup>。これは逆に言えば、支配者がいかなる出自であれ、「天子の徳」を持っていれば建前の上の正統性は保証されるということである。このような伝統中国の論理を逆手にとって異民族の中国支配を正統化する言説は、既に五胡十六国時代最初の胡人皇帝である劉淵に見られるが、この論理と支配体制を最も洗練させたのは清朝である。雍正帝による『大義覺迷録』はその白眉であり、儒教の伝統的

華夷観による満洲批判はその論拠に大きな打撃を受けたと言って良い。

しかし儒教論理に従う士大夫と異なり、庶民にあっては必ずしもそうではなかった。太平天国の大きなエネルギー源の一つは、「滅満興漢」のスローガンに象徴される満漢のエスニックな対立感情であった。これは必ずしも近代的なナショナリズムと同一視できるものではなく、多分に伝統的な華夷観を残したものだだったが、やがてナショナリズムと同一視される中で、全く新しい局面が生まれることになった。

前近代中国におけるエスニック集団を近代的なネーションと同一視する議論は、例えば清末における康有為・梁啓超など変法派の『新民叢報』と、孫文・章炳麟など革命派の『民報』の間で戦わされた有名な論争に見られる。康有為らは漢人と満人が既に文化的に一体化し「満漢不分」であるとして、革命派の「種族革命」を批判する。これに対し革命派は、変法派の主張は種族 (race) と邦国 (State) を混同しているが、漢人にとって問題なのは文化でなく「種族」であり、文化が同一であろうとも満人と漢人は「種族」を異にしており、満人の圧政に漢人が抵抗するのは当然だとして「排満興漢」を唱える。これは伝統中国の「文化主義」的論理からは出てこない議論であり、漢人を「種族」(民族) とみなしている。<sup>5)</sup>

このような「排満興漢」論を推し進めていった場合、「恢復」されるべき「中華」は明朝の領域である本土十八省であり、「驅除韃虜」とは満洲人を長城の「関外」に駆逐することである、という結論が当然導き出される。実際鄒容の『革命軍』の主張はそのように読めるし、章炳麟も『民報』編集長時代(一九〇五―一九〇七年)までは「復仇」「光復」を唱える中でそのような主張を述べている。そもそも興中会のスローガンである「驅除韃虜、回復中華」によって恢復されるべき「中華」とは本土十八省であり藩部が含まれていないことは明らかである。ところが孫文は清末を通じて新国家の領土や民族構成について積極的に何も述べていない。広東人であり海外生活が長かった彼にとって、清朝の藩部や関外の東北地方は全く想像力の及ばない世界であった。孫文のみならず清末期において政治的单位としての「中国」の領土空間には大きな揺らぎと曖昧さがあり、革命派の中でも一致した認識はなかったのである。<sup>6)</sup>

しかし結局いくら「種族」を強調したからといって、革命後の新国家が「種族」ごとに分離独立することを革命派は容認しなかった。彼らが新国家の名称に選んだのは、種族名でも王朝名でもない文化的名称である「中華」であった。そしてこの新国家の国民は「中華民族」と呼称された。「中華民族」の語は一九〇五年頃から広く使われ始め、当初はそれが漢族を意味するのか、満漢蒙回蔵の五族を指すのかに見解の相違があったが、次第に「漢」「滿」等の区分よりも包括的な内容を示すものとされ、辛亥革命後には五族を超えるより高次の概念と考えられるようになった。ただし中華民国成立時の「中華」「中国」が具体的に何を指し示すかは、清末同様に曖昧模糊としてつかみ所のないものであり、実際その解釈は時代状況によって揺れ動くのである。

漢族以外の諸「種族」を中華民国につなぎ止める論理として、孫文は「五族共和」を提唱した。孫文は一九二一年一月一日、臨時大總統就任に当たって発表した宣言で、「国家の本は人民にある。漢・滿・蒙・回・蔵の諸地を合わせて一国とし、漢・滿・蒙・回・蔵の諸民族を合わせて一人とする。これを民族の統一という」と述べた。また九月三日の北京における五族共和進会・西北協進会主催の孫文歓迎会で、各民族の代表を前に演説し、「漢・滿・蒙・回・蔵の五大民族が一家をなし、平等の立場で一致団結して、中国を世界の文明大国の地位に押し上げねばならず、これは全世界人類の利益につながる」と呼びかけた。これは「種族革命」とは大いに面目を異にする主張である。孫文が漢族以外の諸民族に最も接近したかのように見えた時であった。

しかしこれは孫文が「驅除韃虜、回復中華」に代表される大漢族主義を捨てたことを決して意味しなかった。例えば九月の演説に際しても、孫文自身は自らの言葉の対象となる「回」がそもそもいかなる民族なのか、理解していなかったと思われる。彼は現在の回族にあたる「回民」と、現在のウイグル族に当たる「纏回」の区別すらついていなかったのである。この程度の認識であるから、彼の言葉がどこまで本気だったかすら疑わしい。各民族の熱烈な歓迎に感激し舞い上がった末のリップサービスだった、と言われる所以である。<sup>7)</sup>

孫文の「五族共和」は実際には諸民族に平等の権利を認めるものではなく、大漢族主義と大差ないものであった。<sup>8</sup>一九二〇年代になると彼は五族共和を否定する発言を繰り返すようになる。一九二一年三月に中国国民党本部特設駐粵辦事処で行われた「三民主義の具体的方法」と題する演説では、「彼ら（満・蒙・回・蔵）はことごとく自衛能力を持たず、わが漢民族が彼らを幫助しなければならぬことが分かる。……本党は今後なお民族主義について努力を要し、満・蒙・回・蔵をわが漢民族に同化させて、一大民族主義国家を形成せねばならない。」と述べる。<sup>9</sup>これは五族共和の明確な否定である。それが最も露骨に示されたのが、孫文晩年の思想を代表する連続講演「三民主義」である。<sup>10</sup>孫文が一九二四年に黃埔軍学校の学生に行った連続講演は「三民主義演説」と総称されるが、その第一講「民族主義」で彼は「中国の民族について言えば、その総数は四億人であり、その中には数百万のモンゴル人、百万あまりの満洲人、数百万のチベット人、百数十万のムスリムトルコ人が混ざっているだけで、外来民族の総数は一千万人に過ぎない。従って四億人の中国人の大多数は、まったく漢人であるといつてよい。同じ血統、同じ宗教、同じ慣習を有する完全な一つの民族である」と述べている。<sup>11</sup>これは漢族以外の民族を漢族に同化させようという大漢族主義そのものである。孫文はこの演説の中では「中華民族」ではなく「中国民族」という言葉を用いているが、実態は大差ないものである。「中華民族」の意味は五族共和から大漢族主義の方向へ大きく振れたのである。もともと漢族に他の民族を同化し単一の「中華民族」としようとする思想は、辛亥革命以前から革命派の中に存在していた。章炳麟と並ぶ革命派の論客だった王精衛は一九〇五年に既に、中国史は漢族が多民族を同化吸収しながら単一民族を形成する途上にあり、この進化の法則に逆らう満洲は革命によって排除しなければならず、「民族主義の実行は、一民族を一国民にする」ことだと主張していた。<sup>12</sup>孫文の言説も「五族共和」からの転向というより、もともと存在したこのような傾向が顕在化したものと言えるだろう。

この傾向は孫文の死後ますます強くなる。一九二六年一月、国民党第二次全国代表大会（二全大会）において採択された「二全大会宣言」には、「二全大会宣言」で明言された「弱小民族の自決・自治権」は盛り込まれず、その上弱小民族に「狭隘な

民族主義」が存在することを激しく批判した。一九二九年三月の国民党第三次全国代表大会（三全大会）では、「もとよりモンゴル・チベット・新疆省は歴史的にも地理的にも国民経済においても、中国民族の一部である」「民族主義の上では、漢・満・蒙・回・蔵の人民は強力な「国族」を作るべきである」と、より露骨な同化論が展開された。日中戦争が激化すると、国民党政権は国家の凝集力を強めるため、西洋近代の近代国民国家観念を中国に機械的に当てはめ、中華民國の国民全体を「中華民族」と呼称し、<sup>13</sup> 蒋介石は漢族以外の「弱小民族は民族にあらず、宗族なり」と、<sup>14</sup> その歴史文化的独自性ひいては民族としての存在さえ否定し、大きな反発を招いた。かくて「中華民族」の実態は大漢族主義と全く変わらぬものとなった。

一九三一年の満州事変以来、日本の侵略が日に日に激しくなり、しかも日本が民族対立を巧みに利用して中国の分断を図ったことから、諸民族の自決・自治権という主張や、たとえ歴史文化的であれ各民族の独自性を認めることは、反愛国的と考えられるようになっていった。このような状況下では歴史学・歴史地理学・民族学等もいきおい大漢族主義に傾斜せざるを得ない。そのため日中戦争期に書かれた魏晉南北朝史や宋代史といった、民族の上で微妙な問題を孕む時代の歴史研究書には「愛国的民族主義」が横溢し、女真人やモンゴル人のみならず五胡諸国や胡人をも侵略者呼ばわりし、南朝に抗日下の中国を重ね合わせるなど、もはや歴史研究書というより現代中国思想史の資料として読むほかない類のものが少なくない。例えば日中戦争中に主要部分が執筆された呂思勉『兩晉南北朝史』（開明書店、一九四八年）は、「五胡乱華」への悲憤慷慨に満ち、胡人君主を「野蠻」「荒淫暴虐の主」と呼ばわり、南朝への過剰な感情移入から「愛国」「愛中華」等々の言葉が散りばめられる。日中戦争期における中国知識人の「愛国的口吻」が活き活きと息づいているという点では貴重な資料と言えるだろう。しかし魏晉南北朝史の研究書としては、ほとんど正視に堪えないと評する他ない。そこでは「中華民族」とは即ち漢族であり、漢族以外の民族は、侵略者でなければ、漢族に同化吸収されるものとしての地位しか与えられない。

また歴史地理学において象徴的なのが古都をめぐる議論である。一九二〇年代には西安・北京・洛陽・南京・開封が中国を代表する五大古都とされていた。ところが一九三〇年代に日本との戦争が始まると、これに杭州を加えた六大古都説が広く支



持されるようになり、一九八八年の中国古都学会で安陽を加えた中国七大古都が公認されるまでほぼ定説となった。定都の期間が短く統一王朝の首都になったこともない杭州が、他の五つの都市と並んで「六大古都」と称されるのは明らかに不釣り合いである。これは金やモンゴル帝国と対峙した南宋の状況に、日本と戦う中国を重ね合わせる当時の感情が背景にあったものと考えられる。<sup>15</sup>

しかし一九三〇年代に全ての学者が大漢族主義的「中華民族」論に与したわけではない。顧頡剛を中心とする禹貢学派は国民党とは異なる考えを持っていた。一九三四年に北平で創刊された『禹貢半月刊』は中国近代人文科学の嚆矢と呼べるもので、回民特集を二回も組むなどいわゆる「辺境民族」の研究に重点を置いている。顧頡剛はその「発刊詞」で、今まで中国は地理と民族の研究を怠ったため、帝国主義者の侵略を受けてしまったのだと言い、中華民国の「あるべき」領土がどのようにして現代の形まで「進化」してきたのか、その「あるべき」領土内に住む民がどのようにして「国族」（中華民族）のレベルにまで進化してきたのかを考証することを目標とした。<sup>16</sup> 彼は中国は「中華民族」という一つの民族によって形成される国民国家であるべきだ、とは考えていた。この点は国民党と同様である。しかし顧頡剛達が『禹貢半月刊』で繰り返し強調しているように、その「中華民族」とは孫文のような「種族」にとらわれたものではなく、「反帝国主義のナショナルアイデンティティを持つ者」であり、孫文が言ったような「血統」「生活」「言語」「宗教」「風俗習慣」をたとえ異にしても同じ中華民族とみなすものである。<sup>17</sup> 「中華民族」へのこの考え方は、国民党と反対の方向に振れたものと言えるだろう。もともと日本軍が北平を占領した一九三七年夏以降、顧頡剛以下禹貢学会の主要メンバーはこの地を離れ中国奥地に逃れて『禹貢』は停刊となり、戦争の激化に伴って彼らのような考え方は次第に主張し難くなっていった。

民族学はそもそも政治的に極めて微妙な領域そのものを扱う学問であるため、「中華民族」をめぐる動向に直接的に振り回されることになった。その中で欧米における「民族」の定義や概念が中国に合わないことに気付き、中国により適応した民族理論の確立を目指したのが費孝通である。彼は一九三三年に清華大学大学院でシロコゴロフ、一九三六年にロンドン大学でマ

リノフスキーに師事し、最先端の民族学を学んだ後、一九三八年に帰国し中国西南地域の「少数民族」研究や社会学研究を行った。中華人民共和国成立後、一九五一年から一九五二年には民族識別工作を行う「中央訪問団」に参加し、貴州と広西の責任者となった。ここで彼は当時流行していた「歴史的に形成されてきたところの、共通の言語・共通の地域・共通の経済生活を持ち、共通の文化において表現される共通の心理状態を持った、人々の堅固な共同体である」というスターリンによる民族の定義が、中国の実状に全く合わない事に大きな疑問を持った。一九五六年に中国政府は全国の「少数民族」に対し全面的な社会歴史調査を行うことを決定し、費も初めの一時期は雲南でのフィールドワークに加わったが、一九五七年には反右派闘争で批判され、文化大革命を経て、一九七八年に中国社会科学院民族研究所副所長として公職に復帰するまで、長期にわたり逼塞を余儀なくされた。復帰後一九八〇年代における費の主たる研究テーマは農村の小城鎮であり、社会学に分類されるものである。一九八八年夏に彼は久しぶりに民族研究に関する考えを整理し、この年十一月に香港中文大学において「中華民族的多元一体格局」と題して講演を行い、一九八九年にはこの講演を巻頭論文とする論文集『中華民族多元一体格局』が出版された。<sup>18</sup>これが現代における「中華民族」論の決定版であり言わば欽定解釈である。

費孝通の「中華民族」論については多くの論文で紹介されているのでここでは贅言せず、毛里和子による簡潔なまとめを紹介しておく。毛里は費孝通自身が「簡述我的民族研究経歴和思考」で述べた問題提起を次のようにまとめる。(一) 中華民族とは、中国領内の五六民族の民族実体であって、五六民族の総称ではない。つまり中華民族の一体感は、普通の民族一体感より一段上のレベルのもので、いわば中国領域内に住む諸民族は「二重のアイデンティティ」をもつ。(二) 諸民族が分散した多元状況が一体化するプロセスが重要で、その場合の凝集力の核心が漢族である。(三) 高いレベルと低いレベルのアイデンティティ(認同感)は排斥し合うものではなく共存できるものである。そして費孝通の主な論点として三つを挙げる。第一は、漢族自体が歴史的に中国領域で生きてきた諸民族の接触・混合・融合の複雑なプロセスを通じて生まれ、その中で「中華民族多の凝集的核心」になっていったこと。第二が、中国領域内に住む諸民族はその形成は多元的だが一体を形成し、「中華民族多

元一体の構造」が生まれたこと。第三が、この「中華民族」は、「自然発生的な民族実体」として数千年前から徐々に形成されてきたが、一九世紀半ばから列強と対抗する中で、「自覚的な民族実体」になっていったことである。<sup>19</sup>

費の中華民族論の大きな特色は、漢族を「凝集力の核心」としながらも「少数民族」と同格の一つの民族として扱い、中華民族をその一つ上のレベルの「民族」としている点である。これは大漢族主義とは一線を画するものである。毛里は、通常の国民国家であれば「国民」に当たるものを費孝通はあえて「中華民族」と呼んでいると考えてよい、とする。中国共産党は「人民」と「国民」を社会主義の階級的立場から峻別してきたため、「国民」の語を軽々しく使えないという背景がある。一九七〇年代まで中国の統一を支えてきた社会主義・毛沢東思想などのイデオロギーは八〇年代にほぼ終焉を迎え、中国はアイデンティティ・クライシスに陥った。そこで鄧小平時代からは「愛国と富国」「中華民族」を国民統合の原理に引っ張り出している。そのため一九八〇年代以降に疑似国民論、変形した国民論としての中華民族論が喧伝されてきたのである。<sup>20</sup>

毛里に従えば中華「民族」という呼称自体が政治的意図に満ちているということである。中華民族とは実際は費や孫文の言うように「自然発生的な民族実体」ではなく、「国民統合の目的から構成的に語り出された言説であり、いまここには決して現前することのない、理念としての国民共同体」「統一国家の建設に論理的に先行して仮構された想像的な「内的国民」」であって、「徹底的に二〇世紀の言説」である。<sup>21</sup> にもかかわらずその正統性を遙かな過去の歴史に求める点で、現代では政府の唱導する「愛中華」の愛国主義とも符合している。そもそも「ネーション（国民）」なるものの自体が「イメージとして心に描かれた想像の政治共同体である」と定義され、所詮は虚構であると言い得るのだが、中華民族論の虚構性は際立っている。西村成雄はこれを「実態としては存在しないネーションとしての中華民族を形成しなければ列強からの侵略に抵抗しえないとするナショナリズムを生み出すほどに、二〇世紀世界の中国政治空間に作用する大気圧は大きなものがあつた」と評する。<sup>23</sup> 二〇世紀の中華民族論の系譜は、帝国主義時代の強迫的な危機感の中で生み出された壮大な虚構が、あたかも実体を持つかのように認識され、時に現実をも引きずっていった過程であると言えるだろう。そしてそれは大漢族主義と常に際どい表裏一体の関係



にあった。

先述のように費孝通の中華民族論は粗野で傲慢な大漢族主義とは異なるものである。費は漢族を凝集力の核心としながらも、「少数民族」の漢化には「多元一体格局」の多元の部分を弱体化させる、と明確に反対している。<sup>24</sup> 西澤治彦は、中華民族を最上位の概念として設定することにより、漢族を五五の「少数民族」と同じレベルにまで「引き下げて」いるのは大きな意識改革であり、異民族の漢化だけでなく、その逆の漢族が異民族に吸収同化されていたことも指摘した点は、従来の漢族中心史観では決して出てこないものであった、と評価する。<sup>25</sup>

しかしながら西澤自身が認めているように、やはり費の中華民族論も漢族中心であり、多元を認めつつもあくまで一体の方に重点が置かれているのは否めない。しかも非常に政治性が強いいため、近現代の分析に用いるとたちまち現政権の民族政策に絡め取られる恐れがある。むしろ漢族のプロトタイプすら存在せずその形成過程であった古代の分析には一定の合理性があり、日本でもその方面で活用されている。<sup>26</sup> 西澤は「中華民族多元一体構造論が、彼の生涯をかけた研究であり、祖国中国に対する老学者の「遺言」のような重みがある」と言うが、碩学費孝通生涯の理論が、現体制の民族政策を支えるイデオロギーと化してしまっているのは誠に痛ましいことである。

中国の歴史学研究においては近現代のみならず古代史研究にもこのような中華民族論は取り入れられている。その場合やはり多元よりも一体を重視し、「少数民族」を軽視する傾向が濃厚に見られる。そこで次節ではこのような理論の影響を受けた魏晉南北朝史研究の困難な問題点について考察する。

## 二 魏晉南北朝民族史研究における困難な問題点——日中韓の論争を通して

それでは魏晉南北朝民族史研究において、いかなることが問題となるのか、具体的に例を挙げて考察してみよう。ここでは

周偉洲、川本芳昭、朴漢濟という、中国、日本、韓国をそれぞれ代表する魏晋南北朝史研究者の間でかわされた一種の論争を紹介し、その論点を整理する中から問題点を明らかにしたい。

朴漢濟は魏晋南北朝史、特に五胡十六国北朝史を長年に渡って研究し、この時代を理解する独自の歴史観を構築してきた、韓国における中国史学界を代表する碩学である。『中国中世胡漢体制研究』（新潮閣、一九八八年）で朴は「胡漢体制」という、五胡十六国北朝史において胡人の役割を非常に重視した考え方を提唱し、これは韓国のみならず中国・日本の学界にも大きな影響を与えている。

周偉洲は中国における魏晋南北朝隋唐民族史研究を代表する大家である。一九九七年に“胡漢体制”与“僑旧体制”——評朴漢濟教授關於魏晋南北朝隋唐史研究的新体系（『中国史研究』一九九七—の「総合書評專欄」に掲載）を発表し、朴漢濟の理論を批評した。

周はまず二〇世紀の国内外の学者が、魏晋南北朝隋唐期を理解するため提唱した大系として「貴族政治論」「閼隴集團論」「隋唐世界帝国論」「冊封体制論」等を挙げ、朴漢濟が『中国中世胡漢体制研究』で提唱した「胡漢体制」（北朝）と「僑旧体制」（南朝）を、新しい体系と位置づける。朴が南朝を説明するために提唱した「僑旧体制」とは、長江流域に華北から移住した「僑民」と従来からの住民である「旧人」の関係を軸にした理論で、両者が政治・軍事・経済・文化の面で衝突・融合し、最終的に新しい体制が成立する、とするものである。朴は「僑旧体制」の構図は、移住民である胡人と漢族の関係を軸にした「胡漢体制」と類似しているとして、両者をあわせて「僑民体制」と称し、この過程を通して隋唐世界帝国が形成されたとする。

周は朴の提唱する「僑民体制」（胡漢体制と僑旧体制）について、魏晋南北朝時代の民族移動と大融合の特徴をうまく説明でき、視野が広く当時の歴史状況に符合する、とする。特に現在（一九九〇年代）の学术界に存在する二つの研究傾向、すなわち徹底した「漢化論」を主張し、胡族の歴史的作用を無視する傾向と、民族矛盾を小さく階級矛盾を誇大に大きく見る傾向の誤りを正すのに非常に有益である、と高く評価する。周自身も「漢化論」について、胡漢融合の中の胡族の要素への認識が

足りない、と手厳しく批判する。

その上で「胡漢体制」の不備を次のように指摘する。胡漢体制論を応用して五胡十六国北朝史を理解するのは必要かつ正しいが、胡漢両者を対等ということはできず、一方が主導的、他方は副次的な立場にあった。もちろん五胡が胡漢融合の中で果たした役割や、漢化の中でも胡族の特徴が残ったことを等閑視するのは誤りである。しかし胡漢を並列し、主と副とを分かつたず、内遷した五胡の漢化や、胡漢融合の中では漢化が主流であったということを否定するのも、また誤りである。五胡は最終的に漢族と融合（漢化）したのである。胡族の人口は漢族より圧倒的に少なく、胡漢融合の関係は、河に例えれば本流と支流の関係であり、主流が漢族、支流が胡族である。

中国の学者が最も受け入れがたいのが、胡漢の文化が互いに融合し、最終的に漢族にも胡族にも属さない、すなわち *Synthesized* やれた第三の形態の文化を生み出した、という点である。世界のどの民族も孤立的に存在発展したわけではなく、相互に影響・吸収・融合したが、二つの民族が融合した後、第三の民族と文化に変化することは歴史上少なく、多くの場合、主導的な民族・文化が、それ以外の民族・文化を吸収融合するものである。秦漢以来の漢族の発展過程から見ると、隋唐時の漢族は胡族の新鮮な血液を加えて、新たな発展と変化を遂げた、というのが正確である。魏晋南北朝期の胡漢民族融合を経ても、漢族およびその伝統文化は依然として存在していたが、胡族およびその文化は消滅し、非漢非胡の第三の民族と文化は存在していない。

このように周は朴の「胡漢体制」理論に高い評価を与えながらも、民族融合における主流はあくまで漢族の側にあるとし、胡族を漢族と同等に扱うことは肯定しない。

日本における魏晋南北朝民族史研究を長年に渡ってリードしてきた川本芳昭は、二〇〇一年に発表した「民族問題を中心としてみた魏晋南北朝隋唐時代史研究の動向」（『中国史学』第一一卷）で、朴の「胡漢体制」論及びこれに対する周の反論について論評した。この論文は『中国史学』誌からの、魏晋南北朝隋唐史の学会動向を、民族問題についての研究の現況や問題点

の観点から行ってほしい、との依頼に基づいて書かれたものである。

川本は朴の研究について、二〇〇〇年に若手魏晉南北朝史研究者の集い、および中国史学国際会議で朴が行った発表を基に次のように紹介要約する。

従来の五胡——北朝時代史の研究は、胡族の入華はそれまでの中国における統治のしくみに改変を加えるものではなかったとしているが、朴はこうした考えには疑問があるとして、均田制・身分制・村落制（都城制）に対する胡族の影響を追求し、「胡漢体制」論を具体的に確認する。そして「胡漢の問題」を当該時代の社会体制全般を根本的に規定する問題と捉え、漢族の文化と胡族の文化との相互融合が、最終的には胡族にも漢族にも属さない *Synthesize* された第三の新文化となったと主張する。北朝の「胡漢体制」と南朝の「僑民体制」は魏晉南北朝時代における人口移動によって生じた双子の体制であり、この二つを統合して「僑民体制」と呼ぶことができ、隋唐帝国はこの過程を経過して出現したのである、と主張する。

朴に対する周偉洲の批判は二つの点からのものである。その一は、「胡漢体制」論を認めるとしても、その主流はあくまで漢族であり、胡族は従の位置にある、という考え。その二は「*Synthesize* された第三の新文化」を否定し、主導的位置を占める民族あるいはその文化が、非主導的位置を占める民族あるいは文化を、吸収融合して発展する、という考えである。

川本は周の批判に、胡族の漢化＝同化という観点への傾斜を感じる。周の観点には「漢族中心主義」的見方への傾斜が見られ、この点で自身の観点は朴の観点により近い、という。さらに吉岡真「北朝・隋唐支配層の推移」(『岩波講座世界歴史』九、岩波書店、一九九九年)が、北魏支配層の過半数以上(六〇～八〇パーセント)を非漢族が占め、北魏から隋・唐前期を通じて支配層の最上位に位置していたと考えられてきた山東・江左貴族が、一貫して絶対的少数派であったと結論することを引用し、周の「漢族↓主・胡族↓従」は相当な問題を孕んでいる、と指摘する。

川本は朴の「*Synthesize* された第三の新文化」論にまでは賛同しない。胡漢融合によって「新たなる中華」が出現するという点は、川本も従来より主張してきたが、それが「第三の文化」と言えるほど前代と全く異なったものとはいえない、とす

る。その上で川本は周の論に、ア priori に漢族というものの存在を前提として展開されているような懸念を抱く。そして同様のことを朴や吉岡の見解にも感じる。当該時代にあつては、漢族と胡族の境界を明確に確定することは極めて困難であり、漢族というものの存在をア priori なものと前提して議論を進めることは、かなり荒い議論となる危険性があり、当該時代の漢族が「形成過程の漢族」であるということをまず第一に念頭におくべきであるという。

川本は南朝においても、非漢族が漢族と分かちがたいほどの中国化を経て「漢族」となっていた一方、漢族も「蛮化」し非漢族ときわめて近接した存在となつていき、こうした融合を経て、新たな「漢族」が生まれてくる点に注目する。これをふまえて、漢族というものをいわばア priori なものとして捉え、他の要素を大きく取り入れつつ変容していた当時の状況に重きを置かない見解は、当時の実態とずれる面が多々ある、と述べる。川本の考えは朴に近い部分が多く、周に対する違和感が強い。

朴漢済はこれらの議論を受けて、二〇〇三年に「胡漢体制のための弁明——金裕哲・周偉洲・川本芳昭教授の論評に答う」(『歴史学報』一七七)を発表した。『中国中世胡漢体制研究』に対する三者の論評に回答したものだ、ここでは韓国の金裕哲に関する部分は置いて、周と川本への回答を紹介する。

朴は周および黄烈による、民族融合において漢族が主導的な民族であるという考えを「主次(主支)論」と名付ける。そして周の「漢化」概念は漢族への同化であり、全ての現象を漢化と考える視点は問題であるという。また周が胡族人口の少なさを論拠にしたことについて、文化の融合問題において、影響の多寡・比重(パーセント)を以てその主次を論ずること自体、無意味で非科学的であると批判する。

また「第三の形態の文化」はウィットフォーゲルの「第三文化(Third Culture)」とは異なるという。ウィットフォーゲルの「第三文化」論は、二つの民族の文化が融合し、元来の「親文化」とは異なるものに変容すると考えるが、「Synthesizeされた第三の新文化」は、胡漢二重的、あるいは胡漢協和的な段階を抜け、それを超克した、胡的体制と漢的体制が融合して



現れる、その次の段階の姿である。ある文化が別の文化に完全に同化する形態、二つの文化が共生的な関係で併存している形態、そのいずれでもない第三の文化、そのいずれの可能性も含んでいる。このような誤解を招く可能性のある用語を用いたのは、魏晉南北朝期に起こった文化統合の影響の大きさを強調し、文化における全般的な精神社会の変化に注目したかったため、すなわち中国社会の変化の大きさを強調したかったからである、という。

朴は、川本の「漢族」についての考えについて、基本的主旨において共感を表明し、「漢」「漢族」という用語を分析する。漢代に使われたような「漢」という言葉（王朝名・国家名）は、漢代の後は歴史上に現れない。唐代以降の「漢」は、民族的な観点からは「原中国」（プロト・チャイナ）とみなされる。現代の「漢族」は、歴史上に出現した九〇あまりの少数民族が統合されてつくられた民族である。このように「漢」「漢族」といつても時代により意味する所は全く異なる。その上で川本に対し、「漢化」という言葉を「文明化」「互化」「交化」「華化」といった言葉、とりわけ最もふさわしい「華化」という言葉に置き換えてはどうかと提案する。胡族は受動的に漢化したのではなく、能動的に漢文化を自らの意志でもって選択した、とする川本の考えに、朴は同感する。胡族が漢という名称でもって自らの民族名を変えたといっても、必ずしも漢化とは言えないし、清朝が典型的な例であるように、中華は胡にとっても漢にとっても専有物ではなかった、とする。

最後に「余論」として、なぜここまで胡を強調するのかを述べる。中国の民族問題に関する史料ほど歪曲がひどいものはない、勝者による史料の歪曲においても、民族問題に関する史料は最も深刻である。それには意図的なものばかりでなく、遊牧民族に対する無知によって、遊牧民の独特な習俗を漢族的なものとして概念化し記述する場合もある。これはまさしく「文字の拘束」「文字の暴力」である。胡族側の史料は貧弱でほぼ皆無なので、史料の中から胡族の役割をつかみ出す作業は至難の業であり、多くの研究者も胡族の影響を指摘しつつも、それを具体的には明らかにできていない。したがって「胡漢体制」論によって解きほぐすことのできる研究主題は無窮無尽であると信じる。例えば北魏から唐初までは一貫して鮮卑語が使われ重要な役割を果たしており、北魏は二重言語体制で、皇帝は言葉の通じる者と政治を論じ決定したのであって、通訳を通さな

れば意思の疎通が図れない漢族官僚の影響は大きくない。これはモンゴル帝国とよく似ている。しかしこのようなことがなかなか論証されないのである。そして最後に正確な知識と確実な史料と多様な研究成果に基づき、研究を批評する姿勢が必要である、と締めくくる。

この三者の意見の応酬を見ると、朴と川本の考えは比較的近く、周との隔たりが大きい。歴史上の「漢族」をどう考えるか、胡と漢の関係をどう捉えるか、という点で最も違いが際だっている。そして周の考え方には明らかに大漢族主義的傾向が認められる。

周は決して教条的で硬直した学者ではない。むしろその対極にある人である。文革中にチベット族の多い地域に下放されたこともあり、いわゆる「少数民族」の心情を理解しようと努め、様々な政治的問題に直面するこの分野において、最も柔軟で良心的な研究を行ってきた学者の一人である。その周でさえ「漢族」の問題に関しては、どうしても譲ることのできない一線がある。ここに魏晋南北朝民族史研究における、中国人学者の抱える困難が集約されていると言えるだろう。

#### おわりに

「はじめに」で述べたように、中国における民族史研究には非常に困難な点がある。しかもそれは研究対象や研究方法そのものではなく、現代の政治に関わる問題であり、本来の研究とは何の関係もないものである。十九世紀後半から二十世紀前半にかけて、帝国主義列強の侵略に晒され、国土は四分五裂し民は疲弊して屈辱の極みにあった中国が、これをはね除けるため「近代国民国家」の建設を志向した時、民心を一つにして「国民」を形成し、分離しかかっていた清朝の藩部を繋ぎ止めるため捻り出したのが「中華民族」論であった。この時代には「中華民族」論といい「黄帝の子孫」云々といい、壮大な虚構としか言いようのない言説が出現するが、侵略への危機感がそれだけ切迫していたということであろう。

「中華民族」論はもと大漢族主義に傾く要素を持っていた。費孝通のように意識的に大漢族主義を否定しようと努めた者もあつたが、日中戦争期や、社会主義のイデオロギーが有効性を失った一九九〇年代以降のように、中華民族が国民統合の原理として強調される時期には、大漢族主義の方向に強く振れていくことになる。

魏晉南北朝民族史は現代から一七〇〇年以上前の時代を扱う分野ではあるが、「中華民族」論がその根拠を遠い過去に遡らせようとする傾向があるため、その影響からは免れない。この時代における「胡人」の存在感を「漢人」以上に重視したり、中国の分裂的傾向を過度に強調することは許されず、あれほどの動乱をもあくまで「中華民族」の中の内戦と位置づけ、最後は漢人を核とする「民俗融合」の大団円に持っていかなければならない。当然のことながら外国人の目からは詭弁とも見える論理を駆使し、不可解な結論を導き出す場合もある。このような操作が政治を意識して意図的に行われているのか、あるいは少なからぬ漢族の学者が無意識に大漢族主義的考え方を持っているため、意図せず行われているのかは定かではないが、学問的には誠に不幸なことだと言いたい。

そこで次章では、中国における魏晉南北朝史研究史上に名高い論争を通じて、魏晉南北朝民族史研究における問題点をより具体的に考察していきたい。

<sup>1</sup> 中国の歴史教科書はこのような考え方に貫かれているため、現在中国領である新疆地域やチベットが中国本土の政権と没交渉の時期にも、その歴史にいちいち触れるのに対し、過去に領土であつたが現在領土ではない朝鮮半島、ベトナム等にはほとんど言及しないという構成になっている。小島晋治・並木頼寿監訳、大里浩秋・川上哲正・小松原伴子・杉山文彦訳『入門 中国の歴史——中国中学校歴史教科



- 書』(明石書店、二〇〇一年)。
- 2 日本人が *Fudalism* を「封建制度」と訳したのを、中国史上における「封土建国」と同一視して議論するなど、近代における中国史研究には、このような混乱がまま発生した。
- 3 小倉芳彦「国家と民族」『逆流と順流』研文出版、一九七八年。
- 4 劉淵は重臣劉宣に自立を勧められ「天帝王豈有常哉、大禹出於西戎、文王生於東夷、顧惟德所授耳。」(『晋書』卷一百一劉元海載記)と応じる。
- 5 村田雄二郎「現代中国と中華ナショナリズム」(『日中経済協会会報』第二三四号、一九九三年)、「中華ナショナリズムと『最後の帝国』」(蓮實重彦・山内昌之編『いま、なぜ民族か』、東京大学出版会、一九九四年)。
- 6 村田雄二郎「中華民族論の系譜」(飯島渉・久保亨・村田雄二郎編『シリーズ20世紀中国史—中華世界と近代』、東京大学出版会、二〇〇九年)。村田は革命派の藩部認識について「南方中国を主要な陣地とする革命派にとって、『外中国』の存在は一般にリアリティを欠いた、遠い世界での出来事であるか、清朝の腐敗と野蠻を連想させるネガティブな打倒対象でしかなかった。」「孫文は『外中国』や『満洲』の領土問題や民族統合が突きつける政治課題にはさしたる関心を持たなかった」という。
- 7 松本ますみ『中国民族政策の研究』(多賀出版、一九九九年)第二章「中華民国時代の民族論と民族政策」1.「五族共和論をめぐる諸問題」。
- 8 例えば一九一九年、北京政府の大總統段祺瑞の腹心徐樹錚はモンゴルに出兵し、一九一一年に独立宣言を發して以来事実上独立状態にあった「外蒙古」の独立を取り消し、孫文に打電してこれを報告した。孫文は徐への返電で、これをモンゴルの「五族共和」への復帰として徐の功績を賞賛している。
- 9 『孫中山全集』第六卷。訳文は松本前掲書第二章2.「五四運動以降の孫文と『民族主義』」によった。
- 10 藤井昇三「孫文の民族主義」(藤井昇三・横山宏章編『孫文と毛沢東の遺産』、研文出版、一九九二年)。
- 11 訳文は小野川秀美編、島田虔次訳『世界の名著七八 孫文・毛沢東』(中央公論新社、一九八〇年)によった。

- 12 村田雄二郎「二〇世紀システムとしての中国ナショナリズム」(西村成雄編『現代中国の構造変動3 ナショナリズム——歴史からの接近』東京大学出版会、二〇〇〇年所収)。
- 13 黄興濤、小野寺史郎訳「近代中国ナショナリズムの感情・思想・運動」(飯島渉・久保亨・村田雄二郎編『シリーズ20世紀中国史1 中華世界と近代』、東京大学出版会、二〇〇九年)。
- 14 蒋介石『中国之命運』、一九四三年。
- 15 妹尾達彦『長安の都市計画』、講談社、二〇〇一年
- 16 顧はまた弟子の史念海との共著『中国疆域沿革史』(商務印書館、一九三八年)を発表し、第一章緒論で「近年以来、強力な隣国(日本を指す)は虎視眈々と我が地を得ようとの野心を持ち、満・蒙は我が旧土ではないと言う」「二寸の山河といえども、軽々しく敵人に与えてはならない」と記す。ヨーロッパにおける地理学や民族学の成立期がそうであったように、顧においても歴史地理学の重要な目的の一つは、中国の国土と支配の正統性を主張することであった。
- 17 前掲松本ますみ『中国民族政策の研究』第二章「中華民国時代の民族論と民族政策」4.「孫文後の民国時代の民族論」。
- 18 費孝通主編『中華民族多元一体格局』(中央民族学院出版社、一九八九年)。日本語訳は費孝通編著、西澤治彦他共訳『中華民族の多元一体構造』(風響社、二〇〇八年)。費孝通の学問的履歴については、費孝通、塚田誠之訳「エスニシティの探求——中国の民族に関する私の研究と見解」(原載『国立民族学博物館研究報告』二二巻二号、一九九七年。前掲『中華民族の多元一体構造』所収)を参照した。
- 19 毛里和子『周縁からの中国——民族問題と国家』第三章「民族は作られる——民族識別と中華民族論」(東京大学出版会、一九九八年)
- 20 毛里和子「中華世界のアイデンティティの変容と再構造」(毛里和子編『現代中国の構造変動7 中華世界——アイデンティティの再編』、東京大学出版会、二〇〇一年所収)。
- 21 村田雄二郎前掲「二〇世紀システムとしての中国ナショナリズム」。
- 22 アンダーソン、白石隆・白石さや訳『定本想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行』「序」(書籍工房早山、二〇〇七年)。
- 23 西村成雄「二〇世紀史からみた中国ナショナリズムの二重性」(前掲西村成雄編『現代中国の構造変動3 ナショナリズム——歴史からの

接近』所収)。

<sup>24</sup> 費孝通、西澤治彦訳「中華民族の多元一体構造」(費孝通編著、西澤治彦他共訳『中華民族の多元一体構造』風響社、二〇〇八年所収)。

<sup>25</sup> 前掲西澤治彦『中華民族の多元一体構造』「解題」。

<sup>26</sup> 鶴間和幸「中国文明論」(尾形勇・鶴間和幸他著『中国の歴史1 2 日本にとって中国とは何か』、講談社、二〇〇五年所収)。

## 第二章 中国における「肥水の戦い論争」とその影響

### はじめに

中華人民共和国における五胡十六国史研究は、中国史研究全体から見れば研究者や論文の多い分野とは言えないが、しばしば活発な論争が行われ注目を集めることがあった。その中でも最も多くの研究者が参加し盛んに論議が戦わされた最大の「熱点」が、前秦の苻堅と淝水の戦いをめぐる問題である。

周知のように、チベット系遊牧民氏族によって建国された前秦は、五胡十六国時代において全華北の統一に成功した唯一の王朝である。英主苻堅に率いられた前秦は、中国統一を目指して東晋に攻め寄せるが、三八三年淝水の戦いで大敗し、前秦軍主力は壊滅、退勢を立て直せぬまま王朝自体も崩壊した。伝統的中華思想の下では、五胡十六国時代は「五胡乱華」と称される。当然淝水の戦いも東晋を善とし、前秦を夷狄の侵略者として徹底的に悪玉とする見方に終始してきた。中華人民共和国成立後も、学会の主流は淝水の戦いを、氏族の侵略に対する漢族の民族防衛戦争と捉えてきた。即ち前秦は氏族が漢族を征服し残虐に民族圧迫を加えた政権で、淝水の戦いは氏族が江南の漢族を奴隷とするために発動した種族奴役戦争であるとされた<sup>1</sup>。そこには氏族及び前秦政権に関する見直しの動きはほとんどなかった。

しかし一九六〇年代以降、苻堅と淝水の戦いについておよそ三度にわたって大きな論争が行われた。最初は一九六〇年代初め、武漢で中国史上の民族と境域に関する学会が開かれた折、苻堅の民族政策は優れており漢族文化への態度は出色であり、もし前秦が東晋に勝っていれば南北統一は二百年も早く実現し民族統一に有利であり、正義は東晋にばかりあるのではない、

という従来の説とは異なった見方が提出された。これについて賛否両論が交わされたが、この問題は会のメインテーマではなかったこと、多くの学者が苻堅の名誉回復に反対したため議論が深まらないまま終わってしまった。二回目は一九七九年に黄烈氏が従来の説を真つ向から否定する刺激的論文を発表して以来、数年にわたった論争である。三回目は一九九三年秋、世界謝氏宗親総会と中国社会科学学院歴史研究所、中国魏晋南北朝史学会が北京で共催した「謝太傅安石与淝水之戦学術研討会」の席上である。

この三回の論争のうち、一回目の武漢史学会上の討議は時間も短く参加者も少なく、問題提起は重要だったものの十分に議論が深まったとは言えない。三回目の「謝太傅安石与淝水之戦学術研討会」上の討議は、基本的問題認識や賛否両論の論理展開が二回目の論争の焼き直しに近く、独創性は少ない。二回目の論争は参加者も論文数も圧倒的に多く期間も長く、重要な論点が次々提出され議論も非常に深まった。何より文革終了後徐々に復活しつつあった五胡十六国史研究を一気に活性化させ、多くの研究者をこの分野に参入させ、論争中に関わられた議論は現在に至るまで大きな影響を与えている、いわばその後の五胡十六国史研究の潮流を形成した論争である。

そこでここでは一九七九年以来のいわゆる「淝水之戦論争」を取り上げて論点を整理し、これを通じて中国における五胡十六国研究の特徴と問題点を分析してみたい<sup>2</sup>。

## 一 前秦政權の民族的性質

先述のように一九六〇年代まで前秦苻堅と淝水の戦いに関しては、ほとんど全面否定に近い言説しか無かった。これに対し中国社会科学学院歴史研究所魏晋南北朝研究室長だった黄烈は、「关于前秦政權的的民族性質及其对東晋的戰爭性質問題」(『中国史研究』一九七九—二)を発表し、このような従来の見解を真つ向から否定し、全く正反対の主張を展開した。この一本の画

期的論文から肥水の戦い論争は始まる。

黄は前秦には民族的色彩は薄く、氏族が漢族を征服した政権とは言い難いとして、次のように主張する。氏族は古くから漢族文化の影響を受け、三国時代から中国内部に移住して漢族と共存し、漢族との融合が進行していた。政権を樹立して統治者となった時には、既に「野蛮な征服者」の状態ではなく、漢化が完成に近づいた状態であり、氏族と漢族の矛盾はほとんど無くなっていた。苻氏集団は本来部族連合集団だったが、後趙時代に漢族的な部曲組織に変わり、部族貴族の特権は消滅した。十六国時代の少数民族政権の多くは、一般的に漢族社会に適応しようとするが、完全には適応しきれず民族矛盾が激化する。前秦はこの時代の他の少数民族政権に比べ、漢族の統治の伝統を多く継承しており、比較的よく漢族の社会経済に適応していた。また前秦政権は、略奪虐殺を行った一部の少数民族政権とは明らかに違っていた。苻堅は氏族内部の後進的勢力と戦い、徹底して漢族的政治制度を推進した点で、他の少数民族政権とは際だって異なっている。

無論氏族と漢族の間に全く何の矛盾もなかったわけではない。漢族は依然として少数民族を蔑視していたし、東晋を正統とする考えは漢族に大きな影響を持ち、前秦にとって何とも言えない巨大な圧力となっていた。また前秦は本拠地である関中から東方へ大量の氏族を移住させており、これを「後進的軍事植民」と称して前秦の民族的性格を強調する意見があるが、これは領内の少数民族を鎮撫するのが目的であって、漢族を圧迫するものではない。当時の漢人士人の民族偏見を根拠にして、前秦政権が漢化していることを否定などできない。前秦政権は明らかに漢族の社会経済の基礎の上に、氏族と漢族がある程度融合して建てられた政権であり、民族的性格はそれほどない。

黄烈のこの主張は、従来の通説とあまりに異質である。そのため直ちに激しい賛否両論が巻き起こることになった。特徴的なのは、黄の主張が決して学界の中で突出孤立したものとはならず、多くの賛同者が現れて、むしろこちらの方が論争を優勢に進めていくことである。

徐揚傑<sup>3</sup>は、いち早く黄烈支持の論陣を張った。徐は最初に黄烈の説に全面賛同の意を表明し、前秦の政策を逐一検討する。

徐によれば、苻堅はよく統治に励む、中国史上でも数少ない有為の皇帝の一人であった。苻堅は中国統一を根本政策としており、統一を望む当時の各族人民の願望になっていた。彼は中央集権を強め国家の統一を強化し、人材登用に力を入れ、漢族の先進文化を優遇し、農業を振興し水利事業を興し、農業生産の回復に努めた。このため漢族の先進的経済は破壊されることなく、華北経済は回復した。このような政策を採ったため、苻堅の治世は「文景之治」「貞観之治」のような状況となった。

これに対し東晋では貴族制度が爛熟腐敗し、人民は搾取されるばかりで苦しんでいた。前秦の国内政策は、漢族が集中する華北で非常に好い結果を収めたのだから、おそらく東晋征服後の江南でも、漢族の先進経済文化を破壊蹂躪することなどあり得ない。もしも前秦が東晋を倒し中国を統一していたならば、江南人民の生活は良くなり、漢族の先進経済文化は発展繁栄はしても、蹂躪されることはなかったであろう。徐の主張は、前秦と苻堅を手放しで賞賛し、淝水の戦いにも大きな肯定的意義を与えるもので、黄烈より更に一步踏み込んだ結論である。

趙文潤<sup>4</sup>は、苻堅は王猛等の漢族の人材を登用して現実的政策を実施し、氏族貴族を抑え漢族士族と協力して中央集権を確立し、漢族儒教文化を振興し、勸農政策を採り水利事業を興して生産を回復し、民族の壁を取り除くべく努力して民族融合を促進し、華北に平安をもたらしたと、苻堅を非常に高く評価する。前秦政権は氐漢の地主階級を主体として成立した「封建政権」であり、政権の民族色はほとんどない。そして苻堅を英雄、中国史上最も傑出した皇帝の一人とし、中国人民の気高い精神的財産と絶讃する。

汪敏芬<sup>5</sup>は、苻堅の名宰相として活躍した王猛を評価する。汪は前秦政権は当時の歴史条件下で自然に出現した政権で、一概には否定できず、歴史的に見ても統一政権より割拠政権の方が善政を布く場合が少なくなく、前秦の統治を暗黒時代と見なすことはできないという。王猛は前秦の漢化を推進し、農業政策に力を入れ、経世済民の志を持って施政に当たり、漢族人民に利益をもたらしたとする。

この一連の前秦再評価の動きに対抗し、従来の説を堅持して黄烈達に真っ向から立ち向かったのが孫祚民である。彼は先ず



「处理歴史上民族關係的几个重用準則——讀范文瀾《中国歴史上的民族闘争与融合》」(『歴史研究』一九八〇—五)で、批判の第一の矢を放った。この論文は范文瀾「中国歴史上的民族闘争与融合」(『歴史研究』一九八〇—一)に關して書かれたものだが、孫は其中で黄烈と徐揚傑を手厳しく攻撃している。孫の論点は肥水の戦いの評価に集中しているが、前秦政權の性質についても、戦争を人民を圧迫する道具に使い、十三、四年に渡り大規模な兼併戦争を繰り返して生産を破壊し、社会は動揺し人民は流離の果てに死んだ、と徹頭徹尾否定し抜く。そして前秦は氏族が漢族を征服して樹立した、民族的色彩の強烈な政權であると述べ、再評価など一顧だに与えていない。

孫祚民は續いて「試論肥水之戰的性質及有關係的几个問題」(『中国史研究』一九八一—二)で、黄烈と徐揚傑を標的にさらに猛烈な批判を展開する。孫は先ず、前秦苻堅の統治下で華北の人民は苦しみの中に陥り、連年の戦争徵發で疲弊し、苻堅の政治は日増しに腐敗していき、前燕滅亡までは相対的に安定していたが、それ以後は漢族の先進文化經濟に深刻な破壊を加えたとする。そして徐揚傑が「もし前秦が江南を征服しても漢族を厚遇しただろう」と述べたことについて、これは全く何の根拠もなく、歴史に「もし」はあり得ないと批判し、徐の説は主觀的偏見論で歴史をねじ曲げており、學問的研究態度とは言えない、と一刀両断に斬り捨てる。孫はさらに前秦が民族圧迫を行っていたのは明らかであり、たとえ氏族が漢化していたとしても程度の問題で、民族的性格は残っており、黄烈の漢化に関する考察は不正確であるという。苻堅は特に前燕滅亡後、各族に殘虐な略奪虐殺を実行した「野蛮な征服者」であり、前秦政權の民族的性格は明白であると断言して、返す刀で黄烈をも斬ってしまう。孫の批判の言葉は極めて激しく、その勢いは一種異様ですらある。

筒修・劉精誠<sup>7)</sup>は、永嘉の乱以来社会の主要矛盾は民族矛盾となり、祖逖や桓温の北伐は反侵略反略奪反破壊の進歩的性質を持つ、と当時激烈な民族矛盾が存在したことを強調し、黄烈は東晋と前秦の民族性を無視したと批判する。前秦の華北統一は、氏族軍事貴族集団が強大な軍事力で他民族を征服した結果であり、氏族は被征服民族の權利を奪い民族圧迫政策を採った。国内には民族矛盾が充満し、そのため前秦は他の十六国諸国同様不安定で、政權基盤は脆弱だった。さらに王猛死後統治集団は



驕り高ぶり、各族人民に益々搾取圧迫を加えた。これに対して東晋は貴族制度が発展途上段階でまだ腐敗しておらず、謝安の施策で政治的に安定していた。東晋が腐敗していたとの意見に対し簡・劉は、貴族制度が腐敗墮落するのは南朝後期になってからで、東晋時期はまだ健全であると反論する。そして民族差別政策を実施し、人と土地を略奪する目的で戦争を繰り返す前秦は、江南人民に決して安寧を与えられないと結論し、前秦を全面否定する。

蔣福亜<sup>8)</sup>は論文冒頭から黄烈、徐揚傑、趙文潤の三人を名指して、苻堅統治時期の華北経済、民族融合状態を過大評価していると批判する。蔣は前秦の経済の例として関東を取り上げて分析する。前燕の腐敗した統治下で疲弊した関東経済は、前秦統治下でも全く回復せず、その後苻堅が奢って次々に征服戦争を起こすと、大量の人材と資源が消耗し、安定した生活環境は破壊され、次第に頻繁に大軍が動員されるようになると、飢饉が発生し人民は疲弊し、経済は完全に崩壊したという。

また前秦時期にはまだ氏族の漢化は充分でなく、氏族漢族とも民族意識が強烈で、民族矛盾は先鋭化していた。前秦は漢・前趙以来の被征服少数民族上層部優遇の伝統を踏襲し、彼らを信頼して主要な軍事力をこれに委ねた。苻堅は表面的には漢族を尊重したが内心は信頼しておらず、漢族貴族は実際は少数民族貴族より低位に置かれ、王猛以外に軍権を任せられた者はいない。しかも苻堅は王猛にも必ずしも全幅の信頼を寄せていなかった。王猛は漢族地主階級の利益を代表して、少数民族上層部と権力を争ったが、政権内の濃厚な民族性の壁を破ることはできなかった。苻堅は前燕を滅ぼした後、軍事動員で経済を破壊し、異民族に残虐な虐殺略奪を行い、氏族を他民族の上に置いて民族及び階級矛盾を激化させた。その最たるものが関東への軍事植民であり、これは明らかに漢族の鎮撫を目的としている。このように蔣は前秦の民族性、残虐性を強調し、激しい言葉で黄烈等を批判する。

楊国宜<sup>9)</sup>は、苻堅が治績を上げられたのは専ら王猛の生前で、前燕滅亡までは前秦統治集団は緊張感を保っていたが、それ以後急速に驕り高ぶり政策を変更し、征服戦争を繰り返して安定的生産環境を破壊してしまい、また民族矛盾は建国以来一貫して深刻で、いつ激化してもおかしくない状況で、淝水の戦いの時に全ての矛盾が爆発して前秦は崩壊したという。

孫祚民等の激しい批判にさらされた黄烈は、「民族融合与淝水之戦」(『中国史研究』一九八一—四)で満を持して反撃に出る。黄はある政権の民族性質を考える場合、民族融合の到達程度を考慮すべきで、民族融合のもとから民族性質の改変を見ずに、過去から踏襲された民族的要素を取り上げて民族性質の改変を無視しては全てを誤るという。氏族と漢族は長期に渡り高度に融合していたため、少数民族の単一民族政権とは異なり、前秦の統治は漢族の伝統を踏まえて行われた。漢族士人は政権内で氏族貴族と同等かそれ以上の地位にあり、前秦は漢族地主階級の利益を保護する代わりその支持を得、漢族は前秦の統治に比較的満足していた。従って前秦政権の統治集団は氏族単一ではなく氏族漢連合であり、前秦は漢族地主階級と氏族貴族の両方の利益を代表する性質を持っていた。孫祚民が民族性質と言う場合、氏族の要素ばかり見て漢族の要素を見ておらずあまりに一方的である。民族圧迫は政治的には不平等な待遇、経済的には深刻な搾取として現れるが、当時の漢族はそのような目には遭っていない。前秦には民族圧迫は存在せず、あるのは階級圧迫だけである。こうして黄烈は孫の放つ批判全てに渡って全面的に反論し、自説を断固として譲らない。

曹永年・周増義<sup>10</sup>は黄烈と孫祚民の論戦を踏まえた上で、前秦は果たして中国に対立する外国であり氏族は異民族なのか、と孫に対する根本的疑義を提出する。氏族と漢族の間には古くからの長い交流があり、前漢以来氏族の居住地域は漢族王朝の支配下にあつたのだから、これは明確に中国であり、氏族は周以来の多民族国家としての中原王朝の一部分である。東晋と前秦の対立は魏呉蜀三国の対立のようなもので、あくまで中国国内における分割割拠王朝である。もし前秦を外国と言うのなら、五代の王朝は全て外国になってしまう。東晋と前秦の争いは伝統的多民族国家内の問題であって、断じて「侵略」などというものではない。また前秦の統治は開明的で人民に有利であり、民族略奪奴役や経済破壊は全く存在せず、民族矛盾もほとんど無かったという。

邢友徳<sup>11</sup>は、淝水の戦いが民族征服戦争かどうかを判断するには、前秦の民族政策を見る必要があるという。苻堅は漢族的教養と思想を身につけた人物で、他の十六国諸国に比べ漢族に重任を委ね、人材登用に当たっては民族を差別せず能力主義をと

り、民族平等政策を実施し、民族矛盾の緩和に出色の成果を上げ、華北経済の復興にも成功した。孫は前秦の民族政策とは直接関係ない史料を使って民族矛盾を強調しており、全く見当外れである。そして前秦の民族政策は十全とは言えないが比較的良好なものだったとする。

このように黄烈が論文を発表して以来、彼の説をめぐって多くの論文が発表され、激しい論争が展開された。黄烈説への賛否両論は歴史的事実を正反対に解釈しており、論議は全く平行線をたどり交わることはなかった。特に黄烈と孫祚民の論戦は、互いに相手を罵倒する非難合戦に近い域に達し、妥協の余地はなかった。

一九八五年頃から論戦は大局的理論的方向から個別具体的分析に移り、結局論争の結論めいたものは出なかったが、やがて黄烈説がほぼ学界の主流となっていた。

## 二 淝水の戦いの性質

既に述べたように従来淝水の戦いは、前秦が東晋を征服し漢族を奴隸とするために発動した「民族征服戦争」「種族奴役戦争」とされていた。これは非常に単純な勧善懲悪の見方である。

黄烈は<sup>12</sup>この評価を全くひっくり返した。黄は淝水の戦いを南北統治集団間の兼併統一戦争という。当時民族矛盾は全く消滅したわけではないが、前秦はこれを大幅に緩和することに成功し、氏族もかなりの程度漢化しており前秦の民族的色彩は薄い。この前秦と東晋の争いを種族奴役戦争というのは妥当ではない。苻堅の理想は中国の統一であり、これ自体そもそも漢族的概念である。これに対し東晋の戦いは、東晋士族集団の経済的利益と政治的特権を守るためのものであり、いかなる意味でも漢族人民の種族圧迫への反抗などではない。前秦はまだ体制が固まりきらないうちに淝水の戦いを発動し、大規模な徴発を行って民族階級矛盾を激化させ崩壊したが、これは淝水の戦いの兼併統一戦争としての性質と矛盾するものではない。こうして黄

は淝水の戦いの民族性を否定し、前秦を悪玉から解放して東晋と同等の位置に置いた。

徐揚傑は、かつて史学界は淝水の戦いについて、前秦の側は侵略略奪不義であり、東晋の側は漢族の先進経済文化を後進民族の蹂躪から守る自衛正義の戦争としていたが、これは完全に誤りであると述べる。淝水の戦いは客観的に見て、江南の人民を東晋の悪政から救う義挙である。前秦の側からすれば中国を統一するための進歩的な正義の戦争であり、東晋の側からすれば腐敗した貴族階級の利益を守るための戦争である。前秦が敗れたのは戦略戦術的失敗のためであって、たとえ敗れたとはいえ正義の戦いであった。これは黄烈以上に大胆に淝水の戦いを肯定する主張で、特に淝水の戦いを正義の戦いとした点が反対派を刺激し、批判の応酬が交わされることになる。

孫祚民は徐揚傑の淝水の戦い義戦説に激しく反発し、戦争における正義性と不正義性を問題にする。戦争は兼併戦争であろうと侵略戦争であろうと不正義であり、兼併戦争なら正義という議論は間違っている。しかも徐の戦争に関する正義と不正義の区別は極めていい加減である。また戦争の性質は発動された政治目的によって判断されるべきである。黄、徐が誤った結論を出すのは、彼らが「客観効果」によって戦争の性質を判断するからである。前秦が領土と人を奪うため東晋を攻めたのは明らかなのだから、淝水の戦いは当然侵略戦争である。前秦統治時期の華北社会が比較的安定していたことと、淝水の戦いの目的は直接関係ない。たとえどんな統治をしようとも、侵略目的で発動された戦争は侵略戦争である。前秦が華北で行った心が寒くなるような歴史現実に目を塞ぎ、「もし東晋を滅ぼしたなら江南人民の生活は良くなるだろう」（徐揚傑「淝水之戦的性質和前秦失敗的原因」）などという仮定と推論で以て、苻堅の侵略戦争を正義とし美化するなど非科学的である。黄・徐は社会制度の先進性と後進性を絶対視する余り、戦争の正義性と混同している。進歩的戦争なら肯定されると言うのなら、新興の生氣ある国家が、腐敗衰弱した国家を侵略するのは全て正義になるし、先進国が後進国を侵略するのは義挙になってしまう。この論法では歴史上の侵略戦争のほとんど全てが進歩的として肯定される。「侵略有理」の結論を導くような議論は不正確である。このように孫は黄・徐を非常に手厳しく批判して止まず、あくまで淝水の戦い侵略戦争説を主張する。

趙文潤は、<sup>15</sup>黄烈、徐揚傑に全面賛成の意を表し、孫祚民を批判する。苻堅が東晋を討った理由は領土の拡大でも人口の略奪でもなく、東南の一隅に割拠する東晋を滅ぼして中国統一の大業を実現するためであった。当時の歴史条件下では統一は民族融合、生産発展に有利で、淝水の戦いは中国統一のための正義の戦いであり、民族性を強調するのは不適当である。前秦が敗れたのは戦略戦術的誤りによる偶然の結果であり、必然的なものではない。もしも苻堅が中国を統一すれば民族矛盾もやがて大きく変化しただろう。淝水の戦いの敗北は中国の統一を二百年遅らせた。真に惜しむべきことである、と淝水の戦いを全面肯定する。

蔣福亜は、<sup>16</sup>淝水の戦い前夜にはまだ中国統一の条件は熟しておらず、民族融合も充分ではないという。前秦は民族性が非常に強いため、戦争は強烈な征服性と略奪性を帯び、これは前秦の発動するどの戦争にも一貫していた。東晋は確かに腐敗していたが、政権の腐敗は決して東晋の抵抗の正当性と正義性を否定する理由にはならない。淝水の戦いは明らかに民族征服戦争で、統一戦争なら正義であるという黄烈・徐揚傑・趙文潤の考えには反対であると述べる。

筒修・劉精誠は、<sup>17</sup>戦争の統一性と正義性は同じではなく、淝水の戦いの民族的性格は否定できないとし、統一戦争についての議論を展開する。戦争の正義性は統一戦争か否かではなく、進歩的か否かで決まる。統一戦争には三種類ある。農民戦争が失敗し群雄割拠の状態になった時、これを統一するための戦争は、階級闘争の性質を持ち非正義である。統治者集団の内部闘争の性質を持つ統一戦争は、正義と非正義の両面を持つ。民族圧迫を行う統治者集団が別の民族を征服する戦争は、民族闘争の性質を持ち、表面的には統一戦争だが、実質的には全く何の進歩的意義もない非正義の戦争である。淝水の戦いは前秦の戦争目的にも戦争の結果にも進歩性がない。東晋の側から見れば、これは確実に民族征服に対する自衛戦争であるとする。

黄烈は「民族融合与淝水之戦」で孫祚民を徹底的に批判する。孫の論法ではたとえ前秦が完全に漢化したとしても、その戦争は兼併統一戦争ではなく侵略ということになる。では秦が六国を統一し、魏が蜀を滅ぼした戦争も侵略なのか。なぜ前秦だけは完全に漢化しても侵略戦争なのか。桓温の北伐が正義で淝水の戦いは侵略とは矛盾している。この種の中国史上の各民族



への不平等には何の科学的根拠もない。そもそも兼併戦争即侵略戦争というのなら、中国は一度分裂したら統一できなくなってしまう。国内が統一に向かうのが歴史の発展方向に符合するのなら、これは人民の利益と願望にかなない戦争も肯定される。孫は歴史上の中国を漢族及び漢族王朝の範囲に限定し、少数民族を中国の外に排斥しているから、前秦のような氏漢が高度に融合した国家すらをも外族、民族侵略というのである。歴史上の民族関係に対する場合、必ず平等の立場に立ち、同一の基準に基づき、歴史事実を尊重して分析を行うべきである。「華夏正統」といった陳腐な觀念の影響と害毒を肅正し、歴史上の少数民族に祖国の歴史における平等な構成員の地位を与えるべきであり、我々の考え方の方がより公平である。これはつまり孫の主張は旧時代の華夷思想の産物だということで、非常に痛烈な批判である。

曹永年・周増義は氏族及び前秦を中国史の一部分と捉え、異民族扱いすること自体に反対する。前秦は中国国内に建国した割拠政権の一つであるから、東晋と前秦の対立は中国国内の問題であり、当然淝水の戦いは侵略ではない。淝水の戦い以前に前秦が行った戦争も全て進歩的統一戦争であり、種族奴役戦争の要素など微塵もない。孫祚民の理論では淝水の戦いだけでなく、歴史上著名な戦争はことごとく略奪奴役戦争になってしまう。孫は中国と漢族王朝を同一視しているが、これは漢族封建統治階級の伝統的觀念の残滓である。これでは元朝や清朝は中国史の範囲外になる。中国と漢族王朝を同一視するような伝統概念を根拠にした理論は棄て去るべきである。このように曹・周は孫の論を根本的に否定し、考えを改めるよう迫るのである。

邢友徳は統一<sup>19</sup>は社会的にも文化的にも人民の利益であり、苻堅は中国の統一を切望していた。このような戦争を兼併統一戦争と呼ぶして何と呼ぶか、と統一戦争説を強調する。孫の理論では中国史上の統一戦争は全て侵略となる。統一は各族人民の願望であるにもかかわらず、東晋は統一に努力しなかった。孫は根源的に少数民族が樹立した政権を中国史の構成部分と見なさず、そういった政権の遂行した統一戦争を、国の主権を侵し領土を占領したものと見ている。苻堅の進めた統一戦争は歴史の大局から見れば進歩的で、人民を救う義挙である、という。

李季平は、淝水の戦い<sup>20</sup>は中国統一の名の下に、前秦が領土拡張、略奪、民族圧迫を目的に起こした戦争であるとする。苻堅

は「王化」等の美名を標榜して戦争を遂行したが、氏族貴族の経済的利益と政治統治を維持することが、隠された真の目的であったという。

以上のように、淝水の戦いの性質をめぐる議論は、戦争の正義性の定義、統一戦争の是非から、中国史上に少数民族をいかに位置づけるかの根本的議論に及び、激しい言葉で批判の応酬が繰り返された。そのなかで賛否両者の立場があまりにかけ離れていることが浮き彫りにされた。

ここまで激烈はほどなく下火になった。これについても前秦政権の民族的性質問題と同様、次第に黄烈説が学界主流となり、今では淝水の戦いを種族奴役戦争などという論者はほぼいなくなり、全面肯定とまではいかなくても、淝水の戦いは一定の高い歴史的意義を認められるようになっていく。

### 三 「淝水の戦い論争」の総括と評価

以上見てきたように、中国では一九七九年から一九八三年頃にかけて、前秦及び淝水の戦いをめぐって白熱した議論が闘わされた。これはいずれも賛否両者の見解があまりに違いすぎて噛み合わず、次第に非難合戦に近い状態に陥って明確な結論は出なかった。しかし成果がなかったわけではない。この論争は、この時代の歴史を研究する上で重要で根源的な問題を次々と組上に載せ、研究を深化させたからである。そのためこの後の五胡十六国史ないしは魏晋南北朝史研究に、この論争は非常に大きな影響を与えている。一九八九年には早くもこれを総括する論考が書かれるようになり、一九九〇年代になるとその動きはさらに進展した。そこで次にこれらの論考を概観しながら、この論争の意味についてあらためて考えてみたい。

景有泉「近十年来淝水之戦討論略述」(『文史知識』一九八九—六)はこの種の論考としては最も早く書かれたものである。一九八九年に発表されたこの論文は、「近十年」という題名が示すように一九七九年からの論争を主に取り上げている。なお

「略述」というように、論争における各論者の論点を整理し並列したもので、論評や評価は加えていない。景はこの論争の主要論点として、一・淝水の戦いの性質、二・戦争の性質を判断する原則、三・交戦した双方（前秦と東晋）の勝敗の原因、四・淝水の戦いにおける双方の兵力強弱、を挙げ、さらに各論点について小項目を立てて分析する。本節の問題関心に近い「一・淝水の戦いの性質」については、1・前秦政権の性質、2・前秦の社会状況、3・東晋の社会状況、4・苻堅はなぜ対東晋戦争を発動したのか、5・兼併統一戦争か民族侵略戦争か、6・淝水の戦いにおける正義はどちら側にあるのか、の六つ、「二・戦争の性質を判断する原則」については、1・民族戦争に正義と非正義の区別はあるのか、2・兼併統一戦争に積極的意義はあるのか、の二つの小項目を立てている。この項目の立て方自体が景の論評とも言えるが、全体として黄烈氏を中心とする側と孫祚民氏を中心とする側の意見が全く対立している様子が浮き彫りになる。

また景は『中国歴史研究專題述評』（景有泉・宋強剛・胡凡主編、黒竜江人民出版社、一九九〇年）の「一、古代部分」に「淝水之戦研究綜述」を執筆しており、やはり各論点を整理し概要を示している。

論争の主要当事者の一人である蒋福亚は、『前秦史』（北京師範学院出版社、一九九三年）第五章第四節「淝水之戦的性質及南勝北敗的原因」の中で、論争を整理した上であらためて自説を展開し、批判に反論している。蒋は基本的に自説を堅持している。

崔明德・趙志堅「建国以来关于淝水之戦・前秦政権研究述評」（『中国史研究動態』一九九六—一一）は、一九七九年の論争を含めた中華人民共和国建国以来の淝水の戦い研究に関して、非常に網羅的かつ詳細な総括と評価を加えたものである。この論文は、一・戦争の性質を判断し戦争の類型を区分する原則、二・前秦政権の民族的性質、三・淝水の戦いの性質、四・前秦が失敗し東晋が勝利した原因、五・淝水の戦いにおける双方の兵力の問題、六・さらなる研究への展望、の六章より成り、一九九〇年代初頭までの研究を取り上げている。各論点のまとめ部分は各論者の主張を公平的確に紹介する秀逸な研究史であり、中国における淝水の戦い研究史を知ろうとする者にとっては極めて有益である。



「六・さらなる研究への展望」は著者の総括と評価である。ここではまず研究が不足あるいは薄弱な点について次の六つを挙げる。一・議論の中には具体的事件や人物の研究だけではなく、史学理論に関する探求もあった。民族融合あるいは民族同化の歴史過程への評価、少数民族政権の中国史上における地位、少数民族政権と漢族政権の関係、歴史上の人物を評価する基準と原則は何か等である。これらの理論は討論の前提であり、これが解決できなければ討論を深めて妥当な結論を出すことはできないが、理論問題は研究がまだ不十分である。二・学界の大多数はクラウゼビッツの「戦争とは他の手段を以てする政治の継続である。」という著名な原理を、戦争の性質を判断する理論的根拠とすることに賛成するが、これを具体的にどう運用するかについては意見が分かれている。三・「兼併統一戦争」あるいは「中国を統一する正義の戦争」説と、「民族征服戦争」あるいは「民族侵略戦争」説は、子細に見ると双方に一致する部分がかなりある。苻堅が淝水の戦いを起こした目的は東晋を併合し全国を統一するためだったこと、淝水の戦い前夜にも民族矛盾は依然として存在したこと、北方の民族融合は未完成だったこと、苻堅政権は封建政権だったこと等である。しかし兼併統一戦争論者は氏族と苻堅政権の漢化を強調し、民族侵略戦争論者は苻堅政権は氏族の利益を代表し当時の主要矛盾は民族矛盾だと強調する。問題の鍵は当時の南北の民族矛盾と苻堅政権の民族的特性をどう認識し量るかということである。この問題には自然科学の定量分析の方法は使えないので、さらに深く検討しなければならない。四・前秦の失敗原因の研究が東晋の成功原因の研究より多い。五・苻堅のマクロ的研究が多くミクロ的研究は少ない。評価が多く具体的研究が少ない。

これをふまえて最後に次のような方面への研究を提言をする。一・淝水の戦い、前秦政権及び苻堅に関する史学理論研究を深める。二・マルクス主義の軍事理論と中国の現実を結びつけて、戦争の性質を判断し戦争の類型を区分する妥当な原則を得る。三・前秦政権の民族的性質を一体かに評価するか。四・淝水の戦いを魏晋南北朝期あるいは全中国前近代史の中で研究し、赤壁の戦い等やモンゴルと南宋、満洲と南明の戦争と比較し、その性質をよりはっきりさせる。五・前秦の失敗と東晋の勝利の原因についてより深く研究する。六・苻堅へのミクロ的および多角的研究を進める。

この後の研究者達がこの提言の全てに充分に応えているとは必ずしも言い難い。史学理論や前秦の民族的性格の問題は已然として難しい。近年の研究はむしろ日本と同じように個別細分化の方向へ向かっている。しかしこれ程の大論争が行われた以上、前秦と淝水の戦いを論じる研究者はいかなる場合も論争を意識しそれを踏まえた議論を展開せざるを得ず、一九七九年の「淝水之戦論争」は研究史上の画期であると同時に、現在の研究者にとって大きな土台であることは共通に認識されている。

#### おわりに

五胡十六国時代は民族動乱の時代であり、この時代の政権なり国家なりを考える場合、その民族的性質は避けて通れない問題である。淝水の戦いをはじめとする戦争も、政権の民族的性質を考察する上で非常に重要な要素となる。特に中華人民共和国は現在も深刻な民族矛盾を抱えているため、彼の国の学者にとってこの問題は遠い過去の他人事ではない。「淝水の戦い論争」はこの重大な課題を、彼らの土俵の上で真剣に議論したものとと言えるだろう。

無論これは中国の研究状況の中で交わされた議論であり、日本人である私の目から見ると奇異に感じざるを得ない点が多々ある。歴史的概念としての中国と現在の中華人民共和国を同一視し、「少数民族」の歴史を強引に中国史に取り込もうとする発想や、戦争についてその正義性を大真面目に論じる姿勢は、背後に政治的意図さえ感じられて甚だしい違和感を覚える。また黄烈等は孫祖民を「華夏正統」と批判するが、黄らが前秦と苻堅を肯定的に評価するのは、氏族が「漢化」し、中国の統一を目指し、漢族とその文化を尊重したからであり、これもまた中華思想的な漢族主義からする評価であって、結局は孫と同様の思想の上に立っているに過ぎない。だが五胡十六国時代を研究するに当たって必ず考慮しなければならない大きな問題を、淝水の戦い論争が提示したのは確かなことである。その意味でこの論争の意義は大きい。

ただしこの論争は良くも悪くも中国における五胡十六国史、ひいては魏晋南北朝史や民族史研究の大きな特徴を如実に示す

ことになった。とりわけ中国の研究者の多くが民族問題よりも階級問題を重視するマルクス主義史観と、大漢族主義・中華思想の両方の影響を受けるため、五胡十六国時代の一方の主人公である遊牧系諸民族や五胡政権の立場に立った歴史観を持つのが極めて困難であることは、中国における研究の重大な欠点として指摘することができよう。

このような立場に立った研究は、非常に偏った視点から歴史を見ることにならざるを得ない。しかも多くの研究者がそのことに無自覚で、研究傾向に偏りが存在すること、自分の立場が偏ったものであること自体認めようとしない場合も少なくない。この問題については第一章で詳述したが、本章で述べてきたような中国における研究の立場と歴史観が、五胡十六国時代史の豊かな内容を解明する上で障害となり、解釈の幅を狭めてしまっているのは紛れもないことである。しかもそれは中華人民共和国の民族政策の根本に関わる問題なので、中国の個々の研究者には如何ともし難く、このような障害を乗り越えて研究を進めることこそ外国人研究者の能く成す所ではないかと思われる。

<sup>1</sup> 前秦の苻堅を高く評価した数少ない例として、何慈全「苻堅和王猛」『歴史教学』一九六三——二二がある。

<sup>2</sup> 本文で取り上げ言及する論文以外に、この時期淝水之戦論争に関連した論文として次のものがある。万繩楠「東晋的“鎮之以静”政策和淝水之戦的勝利」『江淮論壇』一九八〇——四、邱久榮「淝水之戦双方兵力略釈」『歴史研究』一九八〇——二、舒朋「淝水之戦双方兵力問題綜釈」『北京師院学報』一九八三——二

<sup>3</sup> 「淝水之戦的性質和前秦失敗的原因」『華中師院学報』一九八〇——二

<sup>4</sup> 「試論苻堅的治秦与伐晋」『陝西師大学報』一九八一——二

- 5 「評王猛」(『浙江師範学院学报』一九八一—二)
- 6 論文冒頭の説明によれば、この論文は范文瀾氏が一九六二年夏に『歴史研究』編集部に預けたものの、事情により発表しなかったものである。一九七九年十二月に編集部は、あらためてこれを公表することにし、事実上氏の遺作となった。
- 7 「関于淝水之戦性質の商榷」(『学术月刊』一九八一—五)
- 8 「淝水之戦前夕北方的形勢及・水之戦的性質」(『北京師院学报』一九八一—四)
- 9 「從民心向背看淝水之戦的性質」(『江淮論壇』一九八二—一)
- 10 「淝水之戦的性質和处理歷史上民族与疆域“准則”——与孫祚民同志商榷」(『中国史研究』一九八二—二)
- 11 「論淝水之戦的性質」(『社会科学輯刊』一九八二—五)
- 12 前掲「関于前秦政權的民族性質及其对東晋的戰爭性質問題」
- 13 前掲「淝水之戦的性質和前秦失敗的原因」
- 14 前掲「处理歷史上民族關係的几个重用準則——讀范文瀾《中国歷史上的民族闘争与融合》」及び「試論淝水之戦的性質及有関的几个問題」
- 15 前掲「試論苻堅的治秦与伐晋」
- 16 前掲「淝水之戦前夕北方的形勢及淝水之戦的性質」
- 17 前掲「関于淝水之戦性質的商榷」
- 18 前掲「淝水之戦的性質和处理歷史上民族与疆域“准則”——与孫祚民同志商榷」
- 19 前掲「論淝水之戦的性質」。
- 20 「再論淝水之戦的性質」(『東岳論叢』一九八二—一)

第一部 五胡十六国時代民族史への視点——研究史

## 第三章 後趙史研究にみる民族史研究の焦点

### はじめに

中国における五胡十六国時代史研究は、地方史レベルまで含めれば各々の国についていずれも研究が行われているが、やはり特定の大国に研究が集中する傾向がある。五胡十六国時代において河西を除く華北の統一に最初に成功した後趙には研究者の関心が高く、専論こそ決して多くはないもののかなりの言及がなされている。本章では文革終了後から一九八〇年代までの後趙に関する研究を取り上げ、特に関心が集中した「階級矛盾と民族矛盾」「胡漢分治」「君主評価」の三つの問題について整理したい。

一九七九年以降の後趙史研究は、同時期の著名な論争の影響を大きく受けている。黄烈「関于前秦政權的民族性質及其对東晋的戰爭性質問題」(『中国史研究』一九七九—一)を発端とするいわゆる「淝水の戦い論争」である。前章で詳説したようにこの論争の論点は多岐にわたるが、最も問題になったのは前秦及び淝水の戦いの民族的性質であった。黄烈は、前秦は漢人の封建統治制度を取り入れた漢化状態が完成に近づいた政權であって民族的性格は少ないとし、淝水の戦いは南北封建統治者階級の兼併戦争であって民族戦争ではないと規定する。これは淝水の戦いは氏族が漢族に対して行った種族双役戦争である、とする従来の学説を真っ向から否定するものであり、また胡人政權を肯定的に評価するものである。この点をめぐって賛否両論が入り乱れ激しい論争が行われた。この論争が後の後趙史研究に与えた影響は甚大であった。以後の後趙史研究はこの「淝水の戦い論争」が後趙に波及するという形で進展していく。本章で取り上げる三つの論点も、この論争があつたればこそ高い



注目を集めたのである。

# 一 「階級矛盾と民族矛盾」

階級矛盾と民族矛盾の問題とは、五胡十六国時代の社会における主要矛盾は階級矛盾だったのか、或いは民族矛盾だったのかという議論である。マルクス主義を国是とし国内に深刻な民族問題を抱える中華人民共和国の歴史学者にとって、この問題は建国以来一貫して重大な関心事である。

文化大革命中は全く沈黙していた中国の民族関係史は、一九七七年に発表された「徹底批判“四人幫”製造民族分裂的罪行」(『文史哲』一九七七—二)を皮切りに活動を再開したとされる。<sup>1)</sup>この論文は、江青が匈奴を「外敵」と呼び長城を「外敵の進入に抵抗する」ものだと述べた事を取り上げて、所謂四人組は「大漢族主義」であり、中国の諸民族の歴史的一体性を損なうものだと批判する。現在の中国領内で活動した民族の歴史は全て中国史の範囲内であり、漢族とその他の民族の歴史を区別しようとする主張は、中国分割を企てる帝国主義者の陰謀であると決めつける。そして四人組は、中国の歴史的一体性を否定し、中国に対するソ連の領土的野心に荷担したという。文革終了後もソ連と厳しく対立する中国にとって、このような論文は政治的に必要とされるものだったが、あまりに政治的で決して建設的な研究ではない。しかし、民族矛盾を極度に軽視或いは無視する、という立場がはつきりと打ち出されてはいる。ともかくも文革後の民族矛盾をめぐる論説はこのようにして開始された。

先述の通り後趙史における民族矛盾と階級矛盾の問題の研究は、淝水の戦い論争を承ける形で行われた。そこでは後趙建国の前段階である西晋末の争乱の性格、その後の建国過程、後趙建国後の石勒時代、石虎即位後の各時代における民族矛盾と階級矛盾のあり方が論議された。後趙建国後については「三 君主評価」でも触れるので、ここでは西晋末の動乱を中心に述べ

る。

一九七九年から一九八〇年代前半にかけて、学界をほとんど覆ったと言わなければならない。それは民族矛盾を極端に軽視し、当時の主要矛盾はあくまでも階級矛盾であって、民族矛盾は各族統治階級が捏造したものであり、西晋末の起義は本来階級闘争であったのに、劉淵、石勒等の胡人君主がこれを政權樹立のため利用し、民族矛盾を煽り立てた、という論である。<sup>2</sup> 胡人政權（ここでは匈奴の「漢」、後趙）成立後については、民族矛盾が主要矛盾に躍り出たという説と、五胡十六国時代を通じてあくまで主要矛盾は階級矛盾であるという説がある。<sup>3</sup> 以下、代表的な論考を紹介する。

洪延彦は、<sup>4</sup> 西晋末には西晋王朝側の民族圧迫は非常に残酷で少数民族の起義を引き起こしたとする。また五胡十六国を「乱世」「中衰時期」とする旧来の史観を批判し、范文瀾『中国通史簡編』の言葉によつてこれを「北方民族融合」時期とした。

王仲犛は、<sup>5</sup> 西晋末の起義は「各少数兄弟民族人民」と漢族人民の共同起義で、階級闘争と民族闘争が結合された形で進行したのだが、運動の主導権が各部落渠帥に移つてからは、部落渠帥はそれを政權統治に利用したとする。そして民族矛盾は後趙末期に最高潮に達したという。

蔣福亜は、<sup>6</sup> 西晋末の少数民族起義は西晋の搾取に対する階級闘争であり進歩的なもので、主要矛盾は階級矛盾だったが、反抗闘争の中で少数民族統治者が主導権を奪い、人民の闘争を自己の政權を樹立する為の道具に変えてしまい、闘争の方向をねじ曲げて残酷に他の民族を略奪虐殺したという。具体的には南匈奴の劉淵が三〇四年に挙兵し「漢」を建国してから状況が変わり始め、三二一年に「漢」の軍団が洛陽を陥落させて西晋を一旦打倒した時、最終的に民族矛盾が主要矛盾となったとする。それからは漢人流民集団は東晋に従つて「漢」や後趙と戦うようになり、以後民族矛盾は相当長期に渡り北中国の主要矛盾となったという。

孫鉞は、<sup>7</sup> 西晋末の起義を「各族人民の連合起義」と規定し、その中には各族中の上層分子を包括する時もあったが、起義の主体は最も深く重い圧迫を受けていた労働人民であり、各族共同の階級闘争は民族融合の道を平坦なものにしたとし、階級矛

盾を重視する。

邢友徳は、西晋政権は過酷な民族圧迫を行った「各族人民の牢獄」であり、劉淵・石勒の挙兵は、反民族圧迫闘争の色彩がある程度持っていたものの、実質的には階級闘争の性格を具えており、当時の主要矛盾は民族矛盾ではないとする。劉淵や石勒が農民闘争の主導権を奪い取ったという意見については、根拠が乏しいと否定する。邢は五胡十六国時代を二つの段階に分け、劉淵の挙兵から西晋の滅亡までは西晋の漢人士族地主階級と各族人民の矛盾、西晋滅亡から北魏の華北統一までは胡漢地主階級と各族人民の矛盾が主要矛盾だとする。従って五胡十六国時代を通じ一度として民族矛盾が社会の主要矛盾となった事はなく、各族統治階級の挑発扇動によって一時的に民族矛盾は緊張状態になったが、各族人民には根本的に利害衝突はなかったという。そして当時の民族矛盾を強調する論を、時代の一面しか見ないものだとして批判している。

羅宏曾も、各族統治者が各族人民の起義を利用し、民族矛盾を挑発して人民の団結を破壊し、漢人世家豪強と合作して政権を樹立し各族人民を搾取したとする。それに対して人民は共同起義して階級闘争を行い、これが民族融合を加速したという。

淝水の戦い論争の火つけ役である黄烈は論争の課程で民族矛盾について盛んに言及した。黄の民族矛盾に対する基本的な考え方は「民族矛盾とは実質的に階級矛盾なのである」という言葉に象徴される。<sup>10</sup> 黄は五胡十六国時代の諸政権は何れも漢人士族と合作しなければ存続できず、胡漢統治階級と各族人民の対立が主要矛盾であると述べる。そして胡人政権が漢人を迫害する目的で行う政策、戦争以外は民族矛盾の産物ではないとし、そのような露骨な民族圧迫は少ないという。

このように民族矛盾軽視、階級矛盾重視の論調は、一九八〇年代前半の学界を席卷した。<sup>12</sup> しかし一九八〇年代後半になるとこの傾向の行き過ぎに対する見直しが行われ始める。

陳可畏は、民族矛盾は普遍的に存在し、これを軽視するのは誤りだという。そして後趙などの胡人政権は漢族を圧迫し民族対立を激化させたと述べ、従来の論調に反対し民族矛盾を非常に強調する。ただしこのような主張は少数派で、大多数は依然として階級矛盾を重視していた。しかし以前のように極端な民族矛盾軽視に走る事もなく、どちらもある程度重視する傾向に

ある。

白翠琴は、<sup>14</sup>西晋末の動乱の中で各族が争って政權を樹立しようとしたため空前の民族対立が発生し、五胡各国は軒並み胡漢分治等の民族差別政策を行ったので、往々にして民族戦争が発生したという。だが当時各族人民間に対抗性の矛盾は存在せず、当時の民族矛盾は階級矛盾の特殊な反映だとする。五胡諸政權は胡漢貴族の連合政權で、両者の間には矛盾が存在したが、人民を搾取するという点では一致協力しており、これに対する各族共同起義は民族融合を促進し、この胡漢貴族と各族人民間の階級矛盾こそ主要矛盾であるとしている。<sup>15</sup>これは民族矛盾を軽視した結論だが、当時民族戦争が発生し民族対立が激化した事を無視してはいない。

主要矛盾をめぐる論争は、一九八〇年代に論点が出尽くした感があり、一九九〇年代以降はあまり行われていない。以後の研究はこれらの論議をある程度ふまえて行われており、今に至るも影響はあると言えよう。

## 二 胡漢分治

五胡十六国時代の諸政權の多くは民族によって異なる統治方法をとった。後趙は漢人に対しては西晋同様の漢人的統治方式を採用し、漢人以外の諸民族（所謂胡人）に対しては別に大单于を置いてその配下に属させる二重支配体制を施行した。これを「胡漢分治」という。この政策に関しては、民族矛盾の問題と関連して非常に興味深い議論が行われた。

孫鉞は、<sup>16</sup>胡漢分治は少数民族政權が漢人居住地域を強固に支配するための政策で、民族間の懸隔を作り出して民族矛盾を引き起こし、各族人民の団結を妨害した民族圧迫政策だと述べる。

蔣福垂も、<sup>17</sup>胡漢分治は各族統治者が本族の人民に特権を与え、民族矛盾を煽り各族人民の共同起義を阻むために行った政策だとする。

張秀平は、後趙の胡漢分治は漢族人民に対する圧迫の上に政權を樹立しようとするものであり、各民族の融合を阻害する反動的政策とする。そしてこのような政策を行った結果、各族人民と後趙統治者の矛盾は激化して政權の基礎を揺るがし、石勒の死後速やかに各族人民の起義を招いたと述べる。張は石勒及び後趙政權に高い評価を与えているが、胡漢分治だけは否定し石勒の唯一の汚点としている。

韓国磐は「談談石勒」『社会科学戦線』一九八一—三二で、胡漢分治は漢人の地位を低下させるもので石勒の漢人蔑視の現れであり、長い間漢人に虐げられてきた胡人の漢人に対する報復的行動であるとする。また『魏晉南北朝史綱』第四章「中国北方的割拠諸王国」（人民出版社、一九八三年）では、胡漢分治は胡漢が習俗や社会環境を異にする実状に適応してはいるが、胡漢の間に懸隔矛盾を醸成し、また往々にして胡人の地位は漢人より高くこれが漢人の不満を呼び、後趙末期の胡漢衝突の原因となったとしている。

万繩楠もまた、胡漢分治は後進的政策で民族融合を阻むものとし、胡漢分治と徙民政策を積極的に推進した前趙に対して各族人民は激しく反抗し、後趙は前趙より進歩はしたものの、狭い民族主義的限界から完全には抜け出せなかったという。

馮君実<sup>20</sup>は、胡漢分治における胡制は後進的部族国家の官制を踏襲したもので、胡制を統括する大単于及び単于台の設置は、民族圧迫の存在を反映しており、胡制が完備し大単于の地位が重いほど胡人貴族による民族圧迫が重いとする。

繆鉞<sup>21</sup>は、羯族は他胡人に比べて粗野で、胡漢分治を実施して常に漢人を蔑視し圧迫を加えたとする。

このように一九八〇年代前半の諸研究においては、胡漢分治は即ち民族圧迫の現れであり民族融合を阻む後進的政策であるとして、全面的に否定されている。これを肯定的に評価した論文はこの時期ただの一本もない。前節で述べたように、階級矛盾を強調し民族融合を重視するこの時期の論調の中では、各族の接触雑居を阻むとされる胡漢分治が否定的評価を受けるのは、至極当然と言えるだろう。

しかし一九八七年になって胡漢分治を肯定する論考が発表され始めた。邱久栄<sup>22</sup>は、胡漢分治肯定を初めて唱えた。邱は先ず

「胡漢分治は果たして民族圧迫と民族差別の産物なのだろうか。」と、従来の一般的見解に疑問を提示する。邱は胡漢分治の背景として、後漢末から魏晉期にかけて大量の胡人が中国内部に移住していた事、胡人達は次第に漢化していたものの固有の制度、言語、習俗を保持し、発展段階も各々異なっていた事を挙げる。しかも胡漢分治はこの時代になって突然出現した制度ではなく、秦、漢、魏、西晋等の少数民族統治方式を立場を換えて行つたもので、後漢の護匈奴中郎將・護羌校尉、魏の南匈奴五部統治等も胡漢分治であると述べ、胡漢分治は秦漢以来の歴史発展がもたらした当然の結果で、五胡十六国時代の客観的現実を反映した政策であり、民族差別圧迫の目的で実施されたのではないと結論する。後趙の胡漢分治については、胡人優遇政策ではあるが漢人を排斥しているわけではなく民族圧迫ではないという。

王延武もまた<sup>23</sup>、「後趙政権崩壊は胡漢分治政策の必然的結果だと言われてきたが、実際には胡漢分治政策の実施は政権崩壊の根本原因ではない。」と最初に従来の説を批判する。王は胡漢分治の歴史的條件として胡人が伝統的部族国家の復活を強く望んだこと、生活の安定を保証されるなら胡人の部族的国家の支配下に入っても良いという気分が、漢人の中に高まっていたこと、漢人地主が郷里における支配的地位の承認を条件に胡人政権への協力を望んだこと、胡人軍事貴族集団と漢人士族集団が合作し均衡する政治條件が整ったことを挙げる。

王は後趙政権を、胡人軍事貴族集団と漢人士族集団が車の車輪のように支えあいバランスをとっていた政権と考える。胡漢分治は両者の勢力範囲を確定し争いを避けるために有効な政策であり、胡漢双方の人民にとって有利であり、後趙の封建的政治を軌道に乗せ安定させる。王は後趙安定の原因は胡漢分治にあるという。しかし石勒の死後、胡人軍事貴族集団の首領であった石虎が政権を握ると胡漢のバランスが崩れ、胡人貴族は漢人士族を排斥し各種社会矛盾が激化する。その結果後趙末期には民族対立が頂点に達し、漢人軍事貴族の首領である冉閔による胡人虐殺の中で後趙は滅亡するのだが、王は後趙滅亡の原因は胡漢分治政策そのものにあるのではなく、胡漢分治が破壊され両者のバランスが崩れた事にあるとし、胡漢分治政策は合理的であると結論している。これは、胡漢分治が民族矛盾を激化させ後趙滅亡の原因となったという説への、正面切った反論で



あった。

この二つの論文は胡漢分治に関する従来の説を全面的に批判するものである。しかしこのような考え方は必ずしも学界に全面的に受け入れられたわけではなく、この後も様々な議論が展開された。

白翠琴は、<sup>24</sup>胡漢分治は各族建国者の発明した制度ではないが、五胡十六国時代の特殊な歴史条件下の産物であり、民族間に懸隔を作り民族融合の進展を遅らせ、また胡漢分治による部族制の存続は、各族上層部が強力な軍事的政治的勢力を持つ事を容易にし、社会の分裂の原因となり統一に不利であったとする。但し「当然、歴史時期が違い社会発展状況も各々違うので、胡漢分治については具体的分析が必要で一概には言えない。」と結論して比較柔軟である。

方慧・劉小兵・林超民は、<sup>25</sup>胡漢分治はある程度各族の経済文化と風俗習慣に適応してはいるが、胡漢間の懸隔と矛盾を作り各族の交流と融合を阻んだという。

馬欣・張習武は、<sup>26</sup>当時政治上だけでなく軍隊内でも胡漢分治が行われ、胡人部隊、特に各政権の本族人で構成される部隊は政権の中核であり、胡人部隊の統帥権は大单于が掌握した。政権初期の軍制は皇帝が大单于を兼任して完全に胡漢二重体制だが、次第に大单于には皇太子が就任し漢人的官職を併せて帯びるようになり、やがて大单于制は廃止されて最終的に漢人的体制に一本化されるという。但し、五胡十六国は胡漢分治に終始した時代であると述べ、否定的評価は与えていない。

このように、胡漢分治問題は一九八〇年代前半に特に活発に議論されたが、その論調は胡漢分治を全面的に否定するものであった。それが一九八七年を境に変化し始め、肯定否定両論が交わされるようになったが、一九九〇年代以降はかつてのような全面否定論は陰を潜め、歴史的に一定の意味があったという点では一致するようになってきている。<sup>27</sup>

### 三 君主評価

五胡十六国時代はかつて「五胡乱華」と呼ばれた。中華人民共和国成立の前後にもこれを暗黒時代とする研究者は少なかった。<sup>28</sup>従って後趙の君主である石勒や石虎の評価も散々で、ほとんど悪魔のようにさえ言われた。この傾向も一九五〇年代に入って徐々に変化し始め、一九八〇年代に入ると胡人君主に対する評価は一変し、石勒は優れた人物として高く評価されるに到る。

後趙及び石勒に対する肯定的評価は一九七九年から現れた。王仲犛は、<sup>29</sup>石勒は胡人を優遇し漢人を圧迫したが、漢人流民を吸収して農業を回復し、人民はその治下で西晋末や前趙よりは良い生活をおくったとする。石虎は残忍な性格で、漢人は残忍な政治経済的圧迫に耐えられず、後趙末期の起義に至ったという。一九八〇年には邢友徳が<sup>30</sup>やはり石勒を評価する論考を発表している。

一九八一年にはこの論調が一気に学会の主流となり大きく唱えられるようになった。その口火を切ったのは田居儉である。<sup>31</sup>田は、後趙には民族による役割分担があり、羯人は軍事、漢人は政治を担当したという。この考え方自体はさして目新しいものではないが、田の論の特色は、後趙政権は「羯族貴族」と「漢人士大夫」の合作であるという図式にある。これはそれまでの、五胡十六国の諸政権は、羯等の胡人が一方的に支配し搾取するものである、という図式とは大きく異なる。田は石勒を、農業生産の回復に努め節約に注意し漢族の優れた人材を用いて相対的に安定し統一した社会状況を出現させた、と絶賛する。その反面、石虎を「史上空前の昏逆無道の暴君で極端な権力亡者」「石虎の時流に逆らう政策は石勒生前の功績を食いつぶし、やっと回復した社会経済を破壊し、緩和された階級矛盾と民族矛盾を激化させた。」と口を極めて罵り、後趙滅亡の元凶としている。

韓国磐は、<sup>32</sup>石勒が農業を重視し租税を軽減し漢人を登用し教育を振興し儒教を重んじた事を高く評価し、思想的見識も高いとする。石勒は多くの虐殺を行った事等問題も多いが功績の方が大きいとし、前秦苻堅と並んで五胡十六国時代最高の君主であると位置づける。そして後趙政権について「短所は多かったが石勒時代の政策には見るべきものがある。」と延べ、石勒

の功績を評価している。石虎については、残酷に各族人民を使役し特に漢人を苦しめて、その統治下の社会階級矛盾を日増しに先鋭化させたとし、「殺数の惨禍は歴代でも突出している。」と徹底的に否定する。<sup>33</sup>

張秀平は、<sup>34</sup>一九八一年の石勒再評価の旗手の一人である。張は「関于石勒的再評価問題」で後趙政権を「胡人貴族と漢人地主の連合政権」と位置づけた上で、石勒は「内遷少数民族酋長の後進的で残酷な特色」を持つにせよ、「政治は比較的清潔で、社会秩序が保たれ、人民の生活が比較的安定した後趙国家」を指導した優れた人物と評価する。張の石勒評価で最も特徴的なのは、初期の石勒を農民戦争の指導者として劉邦、朱元璋と同列に論じた事である。また「試論十六国時期漢族士族の歴史作用」(『浙江師範学院学報』一九八四——)では、石勒は漢人士族と合作しすんで連合政権を樹立した最初の胡人君主であるとし、漢人士族を優遇してその権利及び漢人文化を尊重し、農業を重視して生産回復に努めたとする。石虎は胡人を偏重し漢人仕族優遇を止めたので後趙は滅びたという。

万繩楠は、<sup>35</sup>石勒は前趙劉氏に比べると民族的偏見が少なく、漢人士人を保護しその登用を進め税制を整備し勸農に努め行政機構を整える等、社会に安定をもたらしたという。胡人を優遇して民族融合の潮流に背いたが、全体として後進性より先進性の方が多とする。

方慧・劉小兵・林超民は、<sup>36</sup>石勒は比較的優れた行政機構と法律を整備し、漢族士族を籠絡し政権に取り込んでこれを強化し、教育を重視し人材育成に努めた当時第一の傑出した政治家であり軍人であるという。石虎は暴虐な政治を行ったとして否定される。

陳可畏は、<sup>37</sup>この時期の論文では珍しく石勒に辛い点をつけている。陳によれば石勒は露骨に漢人を蔑視搾取し、胡漢分治を実施して民族矛盾を激化させたという。石虎は五胡十六国時代で最も残酷な君主で、民族間、統治集団内部に空前の対立矛盾を引き起こし後趙を滅亡に導いたという。

以上見てきたように、一九八〇年代の後趙君主評価は一部の例外を除いて、石勒への称賛と石虎の全面的否定という論調に

終始している。ここでは特に取り上げなかった論文も多いが、何れにせよ後趙に言及する論文はほとんどこの論調に従っている。このような後趙君主再評価の動きは、同時期の五胡十六国時代見直しの論調に連なるものであり、その根底には各族間の団結と融合を強調する史観がある。

しかしこの論調には大きな問題がある。石勒を称賛する論者の多くは漢族中心主義的な「五胡乱華」史観の払拭を唱えるが、彼らが石勒を称賛する理由が「漢人士族優遇・登用」「教育重視（この場合儒学）」「人材育成」「官僚機構整備」「農業振興」と全く漢人的発想なのである。「農業振興」は別として、他の理由は何れも漢人と漢文化への優遇措置である。それに対して石虎を暴虐とする理由は「胡人偏重」「漢人冷遇」そしてその結果としての「民族矛盾激化」である。いくら胡人君主再評価といっても、漢人を優遇すれば称賛し冷遇すれば否定するのでは、大漢族主義的発想そのままと言わざるを得ない。また日本では、『晋書』が漢人的発想に貫かれており、特に史上暴君とされる漢の劉聡や後趙の石虎の記述には問題点が多いとして、

劉聡石虎暴君説に疑問を唱える論考が早くから発表されているが、中国にそのような論考は少ない。<sup>38</sup>

このように中国の後趙君主評価論には甚だ問題が多いが、ともあれ後趙の君主達を野蛮人呼ばわりし全面否定する論は陰を潜めた。そして石勒を符堅と並ぶ五胡十六国時代随一の君主とする評価は、ほぼ定着したと言って良いであろう。<sup>39</sup>

おわりに

以上のように文革終了後から一九八〇年代の中国における後趙史研究を概観してきたが、ここでは若干の私見を述べて結びに代えたい。

「はじめに」で述べたように、中国では五胡十六国時代史研究が日本に比べ盛んであり、特に民族関係史の研究者は、本来の専門がどの時代であれ言及しない者はない。従って論点も非常に多岐にわたる。本稿ではその中から特に論議が活発だった

ものを取り上げた。ここに示した論点そのものが、中国史学界の一つのあり方を如実に示している。

「階級矛盾と民族矛盾」は現在の日本では考えられない論点である。これはマルクス主義の史観に忠実なあまりの原則的議論であり、また同時に現実の民族問題の陰を引きずる議論である。「胡漢分治」「君主評価」も同様に現実の民族問題と分ち難く結びついた議論になってしまっている。そして全てが「民族融合＝漢化」という命題に収斂していく。これは大漢族主義以外の何物でもない。これらの何れもが、「統一された多民族国家」としての中華人民共和国の正当性を確保するという関心乃至目的に則っている事は、容易に見て取れるであろう。民族問題はとりわけ政治的に微妙な問題であり、五胡十六国史研究はその影響を直接に被ってしまうのである。

事情が事情だけに日本人である私が軽々しく口を挿し挟む事ではないだろうが、このような状況は学問的には不幸としか言いようがないであろう。そしてこのような状況は既に見てきたように、ひとり後趙史研究のみならず五胡十六国史ひいては魏晋南北朝民族史全てにおいて言えることなのである。

<sup>1</sup> 杜榮坤「中国民族史学的現状和展望」『民族研究』一九八九―一は、中国民族史学は、特に一九七八年十二月の中国共産党十一期三中全会以来、発展したと述べる。この十一期三中全会は、鄧小平派が主流となり文革中に失脚した多くの幹部の名誉が回復された重要な会議である。

<sup>2</sup> 韓国の朴漢濟は「北魏王権与胡漢体制」『北朝研究』一九九三―一の中で、中国の胡漢問題に関する論稿には、できるだけ民族矛盾を縮小し階級矛盾を拡大しようとする傾向があると指摘し、その代表例として邢友徳「從劉淵、石勒起兵看十六国時期的階級矛盾与民族矛盾」を挙げている。

- 盾」(『河北師院學報』一九八〇—四)と柯友根「十六國時期少数民族民族愛國主義的歷史特点」(『光明日報』一九八四年十月十日)を挙げている。
- 3 主要矛盾が最後まで階級矛盾であつたと明確に主張しているのは、管見の限り前掲邢友徳「從劉淵、石勒起兵看十六國時期的階級矛盾与民族矛盾」だけである。
- 4 “南方經濟大發展、北方民族大融合”質疑(『中國歷史博物館館刊』一九七九—二)
- 5 『魏晉南北朝史』第三章「西晉的暫時統一及其崩潰」(上海人民出版社、一九七九年)
- 6 「劉淵的、漢、旗号和慕容廆的、晉、旗号」(『北京師院學報』一九七九—四)、「十六國時期的民族鬭爭及其实質」(『民族研究』一九八〇—五)、「魏晉南北朝時期歷史地位述論」(『北京師院學報』一九八四—二)。
- 7 「東晉十六國時期北方各少数民族的融合」(『史學月刊』一九八〇—二)。
- 8 前掲「從劉淵、石勒起兵看十六國時期的階級矛盾与民族矛盾」。
- 9 「魏晉時期北方各民族的遷徙与融合」(『歷史教學』一九八一—一二)。
- 10 黄烈の考えは「略談魏晉南北朝的民族關係」(『文史知識』一九八六—一一)、「中国古代民族關係史研究」(人民出版社、一九八七年)等に要領よくまとめられている。
- 11 「魏晉南北朝民族關係的几个理論問題」(『歷史研究』一九八五—三)。
- 12 このような傾向の論文としてはその他に高詩敏「黃河流域各族人民的大融合」(『歷史教學』一九八一—一)、高光晶「兩晉時期北方的民族融合」(『湖南師院學報』一九八一—一)、方国瑜「南北朝時期内地与边境各族的大遷移及融合」(『民族研究』一九八二—五)、柯友根「試論十六國時期社会經濟的緩慢發展」(『中国社会經濟史研究』一九八四—三)、欧陽熙「略論魏晉南北朝時期的民族融合」(『広州師院學報』一九八五—二)、王希恩「五胡政權中漢族士大夫的作用及歷史地位」(『蘭州學刊』一九八六—三)等がある。
- 13 「論魏晉南北朝時期中国北部的民族關係及其經驗教訓」(『中国民族關係史論集』青海人民出版社、一九八八年所収)。
- 14 「論魏晉南北朝時期民族的遷徙与融合」(『中央民族学院學報』一九八七—一)、「論十六國時期民族關係的特点」(『中国民族關係史論集』



青海人民出版社、一九八八年所収）。

15 白翠琴は『中国民族関係史綱要』第二編「魏晋南北朝到隋唐的統一」（翁独健主編、中国社会科学出版社、一九九〇年）の中では、基本的立場こそ変わっていないものの、以前に比べて民族矛盾の存在と激化を強調している。

16 前掲「東晋十六国時期北方各少数民族的融合」。

17 前掲「十六国時期的民族闘争及其実質」。

18 「関于石勒的再評價問題」（『民族研究』一九八一—二）。

19 『魏晋南北朝史論稿』第七章「民族矛盾的激化及其演進」（安徽教育出版社、一九八三年）。

20 「十六国官制初探」（『東北師大学報』一九八四—四）は胡漢分治について一節を立てて論じ、当時の最も特色ある重要な官制の一つと評価する。

21 「略談五胡十六国与北朝時期的民族關係」（中国魏晋南北朝史学会編『魏晋南北朝研究』、四川省社会科学出版社、一九八六年所収）。

22 「十六国時期的胡漢分治」（『中央民族学院学報』一九八七—二）。

23 「後趙政權胡漢分治政策再認識」（『中国史研究』一九八八—二）。

24 前掲「論十六国時期民族關係的特点」、『中国民族關係史綱要』第二編「魏晋南北朝到隋唐的統一」。

25 『中国民族史』第三編「三国魏晋南北朝的民族及民族之進一步融合」（民族出版社、一九九〇年）。『中国民族史』の「後記」には、第三編はこの三氏が担当したと書かれている。但し各章の執筆分担は不明なので、本稿に特に関連が深い第三章「十六国時期少数民族政權的更迭」の執筆者は特定できない。

26 「十六国軍制初探」（『天津師大学報』一九九〇—一）。

27 王鋒・羅樹傑は、『中国民族政策史鑑』第四章「三国两晋南北朝的民族政策」（广西人民出版社、一九九二年）の中で、五胡十六国時期の胡漢分治政策は、政權の建設と安定に重大な意義を持ち、社会經濟の回復に一定の効果があつたとする。後趙の胡漢分治については、石勒は前趙の胡漢分治政策を改善整備して、漢人士族集団と胡人軍事貴族集団の権力範圍を確定し、これによって政權内での両勢力のバラ

ンスを確かなものとし、胡漢分治政策の運用は石勒の時代に一つの頂点に達したという。なおこの本は第四章五節「十六国北朝的民族政策」の中に「胡漢分治政策」という一項目を設けている。

28 呂思勉『兩晉南北朝史』（開明書店、一九四八年）、范文瀾『中国通史』第二卷（人民出版社、一九四九年）。

29 前掲『魏晉南北朝史』第四章「十六国」。

30 前掲「從劉淵、石勒起兵看十六国時期的階級矛盾与民族矛盾」。

31 「後趙興亡の歴史教訓」（『歴史教学』一九八一—二）。

32 前掲「談談石勒」は石勒という人物に焦点を絞った初めての専論である。

33 前掲『魏晉南北朝史綱』第四章「中国北方的割拠諸政權」。

34 前掲「関于石勒的再評價問題」。張はこの他にも「石勒的自知之明和知人之明」（『歴史知識』一九八五—五）、「石勒軍事戰略述評」（『民族研究』一九八七—六）といった石勒関係の論文を発表している。

35 前掲『魏晉南北朝史論稿』第七章「民族矛盾的激化及其演進」。

36 前掲『中国民族史』第三編「三国魏晉南北朝的民族及民族之進一步融合」。

37 前掲「論魏晉南北朝时期中国北部的民族關係及其經驗教訓」。

38 内田吟風「五胡乱及び北魏時代の匈奴」（『北アジア史研究匈奴篇』同朋舎、一九七五年所収、原刊一九三五年）。

39 陳琳国「從奴隸到皇帝的石勒」（『人物』一九八八—二）のように、雑誌の歴史読み物の中にも石勒を取り上げ称賛するものがある。

第一部 五胡十六国時代民族史への視点——研究史

## 第二部 五胡十六国時代前期における民族関係

### ——冉魏政権をめぐる

#### 第一章 乞活と後趙政権——五胡十六国時代前期における流民問題の諸相

はじめに

西晋末から五胡十六国時代初期は凄惨な戦争が頻発した時代であり、この戦乱に巻き込まれた華北の社会は根こそぎ転覆し、大量の難民が長江流域・河西回廊・遼東などの各地へと流離していった。彼らの多くは自衛のため塢・壁を築いて武装難民化し、強い自立性を保った半独立的軍事集団となり、中にはその時々群雄、政権の消長に大きな影響を与えるものさえ出現した。

華北の土崩瓦解とも言うべき状況に終止符を打ち、この地に一応の平穩をもたらしたのは、石勒によって建国された後趙である。石勒は襄国に本拠地を据え河北に勢力を確立した当初から、流民集団の取り込みに熱心だった。とりわけ黄河を挟んで東晋の祖逖と対峙する状況になると、塢壁集団の動向は彼の勢力の消長を左右する決定的要素となった。石勒と祖逖は塢壁集団の向背をめぐる駆け引きを繰り返したと言っても過言ではない。石勒は帰順させた塢壁集団の指導者に官職を与えて懐柔

し、その多くを首都襄国及び鄴周辺に徙民し、監視すると同時に軍事力として駆使した。首都周辺に徙民された塙壁集団は、後趙を支える重要な基幹軍事力の一部となった。

このような塙壁集団の一つに乞活がある。乞活は西晋末の動乱期に形成され、様々に分裂しながらも五胡十六国時代を通じて活動を続けた、稀にみる息の長い集団である。彼らの大半は後趙に吸収されてその軍事力の一翼を担い、後趙が崩壊するに際しては冉閔・李農と結んで重要な役割を果たした<sup>1</sup>。そこで乞活集団の動向を追うことを通じて、後趙政権と塙壁集団の関係の一端を考察してみたい。

# 一 乞活集団の形成と変遷

永康元年（三〇一）趙王倫の挙兵により始まった八王の乱は、中国全土を泥沼の動乱に陥れた<sup>2</sup>。この中で三〇四年に南匈奴の劉淵と巴氏の子雄が自立し、それぞれ「漢」及び「成」を建国する。かくして五胡十六国時代の幕が上がる。南匈奴の集住地である并州を中心に勢力を伸ばした劉淵は、并州刺史東嬴公司馬騰と戦うが、騰は光熙元年（三〇六）に都督鄴城諸軍事となり并州を退去した。この時飢饉に喘いでいた并州の民万余人が「乞活」と号して騰に従い鄴に「就穀」した<sup>3</sup>。これが乞活の起りである。彼らは鄴で新蔡王司馬騰麾下の兵となった<sup>4</sup>。要は飢饉で食い詰めた者達が有力な宗室の一人の配下となって武装難民化し、食糧事情が少しは良い冀州に移住したわけである。まさに当時の典型的な難民集団と言えよう。

八王の乱の中で東海王越に与していた新蔡王騰は、永嘉元年（三〇七）成都王穎派の残党である公師藩と汲桑に攻め殺され、鄴もあえなく陥落した。鄴を追われた乞活は東海王越の配下に入り、河北で汲桑やその盟友石勒と対峙する。この年六月乞活の武將田甄は石勒と戦い敗れている<sup>5</sup>。十二月には田甄・田蘭・薄盛等が新蔡王騰の仇討ちと称して汲桑を攻め、これを楽陵に斬った<sup>6</sup>。この功績により田甄は汲郡太守、田蘭は鉅鹿太守に任じられる。ところが田甄は汲郡太守を不服として魏郡太

守を求め、東海王越が許さないと怒って越から離反した。永嘉二年（三〇八）四月、王彌の許昌攻略を恐れた東海王越は乞活を招き寄せようとするが田甄は応じず、越は田甄を討った。李暉・薄盛は田蘭を斬って越に降り、田甄・任祉・祁濟は軍を棄てて上党に奔った。<sup>7</sup> こうして乞活成立当初の武将である田甄・田蘭・任祉・祁濟・李暉・薄盛は東海王越に従う者と背く者に分裂した。田甄はこの年十二月に石勒に殺され、越から離反した乞活勢力は壊滅し余衆は石勒に吸収されたと思われる。<sup>8</sup>

一方李暉・薄盛等は東海王越に重用され、越麾下の重要な軍事力として活動していく。永嘉三年（三〇九）十一月、劉聡・王彌等率いる漢の軍が洛陽を襲うと、李暉・薄盛は洛陽救援に駆けつけて劉聡を破り、さらに王彌を予州に破った。永嘉四年（三一〇）十一月、越が石勒討伐のためと称して出陣すると、李暉は越の妃裴氏、世子毗、右衛將軍何倫と共に洛陽の守衛を命じられた。<sup>10</sup> 永嘉五年（三一）に越が死ぬと李暉と何倫は越の喪を秘し、妃裴氏と世子毗を奉じて洛陽を脱出するが石勒に敗れ、暉は妻子を殺して冀州の廣宗に奔った。<sup>11</sup> 洛陽が漢軍の猛攻の前に陥落し懷帝が捕らえられるのは、それから間もないこの年六月のことである。この永嘉の乱によって西晋の中央政府は事実上滅亡した。

河北に逃れた乞活は、かつて新蔡王騰及び東海王越の与党だった幽州刺史王浚の配下となった。永嘉五年七月、王浚は李暉を青州刺史に任ずる。<sup>12</sup> 当時王浚の勢力は幽州冀州に及んだに過ぎず、青州刺史の肩書きは実効支配を伴うものではなく、李暉等は廣宗周辺で活動したようである。建興元年（三二三）四月李暉は廣宗県上白で石勒に敗れ斬られた。石勒は暉の部衆を坑殺しようとしたが、たまたまその中に旧知の友人郭敬がいるのを見て彼にその指揮を委ねた。<sup>13</sup> 乞活挙兵以来の武将である薄盛が李暉の後を襲って青州刺史に任じられたが、盛もわずか一ヶ月後の五月には渤海郡で石勒に降伏した。こうして王浚麾下の乞活は石勒の支配下に入った。

同じ時期に李暉・薄盛とは別個に行動する乞活の一団が存在した。陳午に率いられた集団である。陳午は永嘉二年（三〇八）李暉と共に石勒と戦っており、この時はまだ両者は一緒に行動している。だが永嘉五年（三一）懷帝が東海王越の専権を憎み苟晞に越討伐の密詔を下した際、晞は「遣王讚率陳午等將兵詣項」と答えているので、この時点で陳午が苟晞の配下に



いたことは間違いない。苟晞と東海王越は当時激しく対立しており、陳午の集団は乞活とはいえ李惲や薄盛とは全く別個に行動していたのである。

永嘉五年に東海王越に属していた乞活集団が一旦壊滅し河北に逃れると、陳午は河南における乞活最大の指導者となる。この年七月に陳午は蓬閼で石勒と戦っている。<sup>15</sup> 陳午は陳留郡浚儀に塙壁を築いて根拠地とし、祖逖と結んで執拗に石勒と戦い続けた。石勒もこれには手を焼いたようである。陳午が死ぬと従父の陳川が指導者となる。陳川は当初は祖逖と協力して石勒と戦ったものの、やがて祖逖と対立し太興二年（三一九）四月石勒に降った。祖逖が陳川を攻めると石虎が救援に駆けつけ、川を襄国に従し武將桃豹にその故城を守らせた。<sup>16</sup> こうして陳午の集団もまた石勒の支配下に入ることになった。この後も河南や長江流域に乞活の活動は認められるが、乞活の大半はこうにしてかつての仇敵である石勒の下に集まる結果となったのである。

## 二 乞活集団の構成

先述のように、乞活は飢饉に苦しんだ并州人が武装難民化し、司馬騰の麾下に華北平原に繰り出したものである。乞活に加わった人々はかなり幅広い階層に渡っていたと考えられる。<sup>17</sup>

乞活は成立当初は当然の事ながら、ほぼ純粹に并州出身者だけで構成された集団だったと思われる。そしてその後も并州人を中心とする集団であった。<sup>18</sup> 乞活成立から集団が石勒の後趙政権に吸収されていくまでの間に、乞活の指導者として名に見える者はことごとく并州人であり、<sup>19</sup> 彼らの多くは石勒に降伏或いは殺されるまで乞活の指導者であり続けた。また石勒が李惲を斬った後にその部衆の指揮を委ねた郭敬は、石勒が故郷上党郡武郷にいた頃、彼の人物を見抜いて援助を惜しまず、石勒もそれに感謝して郭敬の田を耕した人物で<sup>20</sup> 無論并州人であり、李惲集団は惲の死後、石勒の下でも并州人に率いられた。こ

のように乞活は一貫して并州出身者の主導権下にあったと言えるのである。

しかし各地を転戦する中で、乞活は多くの他州出身者を取り込んでいった。冉閔の父贍は石勒が陳午を破った時に捕らえられ石虎の養子となったのだが、彼は「魏郡内黄人」<sup>21</sup>であり并州人ではない。冉贍が捕らえられたのは永嘉二年（三〇八）と思われるので、彼は乞活が魏郡の郡治鄴に駐屯していたときこれに加わったものと思われる。乞活は并州から鄴に移住した直後の段階から、既に他州人を取り込み始めていたのである。

乞活は新蔡王騰、東海王越、王浚、東晋と主を変えながらも一貫して石勒と戦い続け、冉閔の政権奪取時に際しても冉閔側に立って関与したため、胡人と対決する漢人集団という印象が付いて回る。<sup>22</sup>確かに乞活が漢人を中心に構成されていたことは間違いないだろう。そしてそのような集団が反胡人的感情を抱いていたことは想像に難くない。特に乞活と石勒の因縁にはただならぬものがある。八王の乱が激化すると、并州刺史だった司馬騰は軍費調達のため、州内の胡人を捕らえ奴隷に売り飛ばした。そうして捕らえられた者達の中に若き日の石勒もいたのである。<sup>23</sup>そのため石勒は汲桑と挙兵するや真っ先に鄴を襲い、騰を血祭りに上げて積年の恨みを晴らした。これに対し乞活は騰を主と仰いで并州から移住した者達である。いわば石勒と乞活は仇敵の間柄であった。特に陳午は『鳴沙石室佚書』所収『敦煌石室本晋紀』に「午臨卒戒其衆勿事胡」とあるように、胡人への敵愾心を燃やした人物であり、陳午集団はかなり反胡人的意識の強い集団だったと考えると良いだろう。

このように乞活は胡人とりわけ石勒と戦い続け、その一部は陳午集団のように反胡人的感情を濃厚に帯びていた。しかしそれと乞活が純粹漢人の集団であったかどうかはまた別問題である。『晋書』卷一百四石勒載記上には「烏丸薄盛執渤海太守劉既、率戸五千降于石勒」とある。『資治通鑑』卷八十八晋紀十愍帝建興元年条にも「薄盛率所部降勒、山東郡県、相繼為勒所取」とあり、これは乞活の薄盛に関する記事である。つまり乞活の有力武将の一人薄盛は烏丸人だったのであり、乞活は内部に非漢人をも含む集団だったのである。<sup>24</sup>

当時の難民集団の多くは胡漢混成であった。例えば氐族苻氏集団は永嘉の乱に際して成立し、蒲洪（後の苻洪）は石虎の命

により故郷の秦州略陽郡から枋頭に徙民されたが、その中には少なからぬ漢人流民を含んでおり、首長の蒲洪は流人都督に任じられている。苻氏集団はもとの居住地である略陽郡で有力者であった蒲氏を中核として拡大したので難民集団とは言えないが、他地域の出身者を大きく取り込み胡漢混成であり、その構成は難民集団に類似していると言えよう。乞活は漢人を主体とするので苻氏集団と構成は正反対だが、やはり胡漢混成の難民集団である。西晋末五胡十六国初期の動乱は余りにも激しかったため、このような胡漢混成集団が発生するのはむしろ自然の成り行きであった。

以上見てきたように、乞活は当初并州の幅広い階層を含む人々から形成され、次第に他州人を取り込むようになってはいたが、一貫して并州人が主導権を握り并州人に指導される集団であった。また漢人を中心に構成されていたが、一部に烏丸など胡人をも含んでいた。ただしあくまで漢人中心の集団であり続け、陳午集団のように反胡人感情を抱いて執拗に胡人政権に抵抗する者達を生んだ。胡人を含みはするが漢族中心で、并州人を核に強固な団結力を保ったことが、その大きな特徴である。この性格が後趙末期の政局の中で彼らの行動を大きく左右することになる。

### 三 乞活と冉閔

光熙元年（三〇六）の成立以来分裂を繰り返した乞活は、先述のように太興二年（三一九）の陳川の帰順を以て、その主力の大半が石勒の支配下に入った。東海王越や王浚に従った李憚・薄盛の根拠地は、冀州廣宗及び近隣の司州上白にあった。<sup>27</sup> また薄盛が石勒に降伏したのは廣宗の隣郡の渤海郡であり、彼らは冀州南部から司州北部を活動範囲としていたと思われる。彼らはその後も廣宗、上白に根拠地を持続けた。<sup>28</sup> 陳川の集団は川の帰順後直ちに祖逖の攻撃を受けたので、襄国に徙民されている。<sup>29</sup> 廣宗・上白は襄国から八十キロ足らずの距離にあり首都圏の一部と言って良い。乞活は襄国周辺に集結していたわけである。

その後乞活が後趙の支配下でどのような活動をしたのかは詳らかではない。明らかなのは乞活出身の冉閔が後趙政権の中枢にその地位を占めていたという事である。先述のように冉閔の父贍は、石勒が陳午を破った時捕らえられ石虎の養子となった。冉贍は捕らえられた時まだわずかに十二歳の少年であり、その後乞活とどのような関係を持ったのかは明らかではない。しかし冉贍は左積射將軍となっており、冉閔も軍事関係の要職を歴任している。冉閔は石虎の養孫とはいえ皇族であり、当時主だった皇族は半私兵的な軍団を配下に置いてるのが普通であった。<sup>30</sup> 冉閔は石虎時代後期の幾多の戦役に出陣し、石虎の死後石遵がクーデターで政権を奪取した際には、その最大の軍事的功労者となっている。石遵を殺害して実権を握ってからは、彼の配下の武將の名が続々と史上に現れることから考えても、配下に強力な私兵集団を持っていたのは間違いない。父の出身母胎である乞活と何らかの関係を保っていたと考えるのが自然である。冉閔の配下の軍団に乞活が加わっていた可能性は非常に高いだろう。

後趙政権末期になって乞活は再び表舞台に姿を現す。後趙の建武十四年（三四八）に石虎が死去すると、後継者をめぐる暗闘が激化し、幼少の皇太子石世を強引に即位させた張豺が李農の殺害を謀った。恐れた李農は廣宗に奔り、乞活を率いて上白に籠城した。<sup>31</sup> 李農は後趙において冉閔と並び称せられる漢人武將であり、かねて乞活と密接な関係にあったと思われる。そして李農と冉閔は後趙末期の政局の中で「閔・農」と称される盟友関係にあり、冉閔による後趙篡奪、冉魏の建国まで固く協力していく。冉閔が革命を起こした時、乞活は間違いなく冉閔の重要な軍事力であった。<sup>32</sup> 三四九年に冉閔が漢人政権復興を標榜し鄴周辺の胡人二十万人を虐殺した時、乞活もその渦中にいたのである。

しかし後趙末期に乞活が姿を表すのはこれが最後である。三五〇年閏二月に冉閔は後趙を奪い魏国を建てた。五胡十六国南北朝時代を通じ中原における唯一の漢人国家の誕生である。建国の功労者である李農は齊王・太宰・領太尉・録尚書事となった。ところが四月に冉閔は李農と三人の子を殺害してしまった。これより後、魏の漢人勢力は分裂を繰り返し、三五二年に前燕に滅ばされて結局強大な胡人勢力の前に跡形もなく消え去っていく。この間乞活の消息は杳として知れない。次に乞活が

史上に表れるのは三五四、「江西乞活」<sup>33</sup>としてである。分裂崩壊する魏の漢人勢力の中で、乞活もまた離反流離の道を選ったであろう。しかし冉閔の革命において乞活の果たした役割は極めて大きく、革命の立役者と称してよいであろう。

#### おわりに

以上のように、并州人の難民集団として成立し、漢人を中心にしながらも一部胡人を含み、次第に他州人を取り込みながら成長した乞活が、華北の群雄に仕え頼りになる軍事力として各地を転戦しつつ最終的に後趙の支配下に入り、後趙最末期にあつては冉閔・李農を助け後趙を倒すに至った様子を追ってきた。一つの難民集団が後趙という巨大帝国を揺さぶり続ける姿は、当時このような集団がどれほどの力を持っていたかを示す良い例である。と同時にこれは後趙を初めとする五胡諸国が、難民集団の取り込みで涙ぐましいほど腐心した理由をも示している。

後趙が華北に安定をもたらすには、バラバラに崩壊した社会を曲がりなりにも紡ぎ直す作業が必要であつた。後趙はそのために各地の難民集団を帰順させ首都周辺に徙民するという方法を採用した。それによって生産を回復し、半独立的武装集団が地方に盤踞し中央に反旗を翻す危険性の芽を摘んだのである。<sup>34</sup>これは難民集団の向背が後趙の死命を制していたことを意味している。乞活はそのような難民集団の最強のものの一つとして後趙を振り回し、最後には文字通りその死命を制し後趙政権に止めを刺す役割を果たしたのである。

乞活はその後江淮の間を中心に活動を続ける。そして難民集団に政権が振り回され政権基盤を脅かされる状態は、最も端的には五胡十六国時代、長い目で見れば南北朝時代を通じて続いていくのである。乞活はこの難民の時代の露払いを極めて劇的な形で努めたと言えるであろう。

1 乞活に関する専論としては周一良「乞活考——西晋東晋間流民史之一頁——」（『燕京學報』三七、一九五〇年。『魏晋南北朝史論集』中華書局、一九六三年に所収）がある。

2 広義の八王の乱は二九〇年の汝南王亮・楚王 的 挙兵から始まるとされるが、その後の十年は恵帝の外戚賈氏が政権を握り、政治情勢は比較的安定していた。西晋を崩壊させる動乱は三〇一年から始まるので、本章では乱の後半部分を特に八王の乱と呼ぶ。

3 『晋書』卷五十九東海王越伝には「初東・公騰之鎮・也、攜并州將田甄・甄弟蘭・任祉・祁濟・李憚・薄盛等部衆万余人至鄴、遣就穀冀州、号為乞活。」とあり、『晋書』卷一百一劉元海載記には「騰懼、率并州二万余戸下山東」とあることから、およそ一万ないし二万戸（八万から十万人）の者が従つたと思われる。また『晋書』卷六十二劉琨伝には「時東嬴公自晋陽鎮鄴、并州土饑荒、百姓随騰南下、余戸不滿二万」とあり、この時并州の人口が大きく減少するほどの大規模な住民の難民化と移住があつたことが知られる。

4 『晋書』卷三十七新蔡武哀王騰伝によれば、騰は鄴に鎮するにあたり新蔡王に改封されている。

5 『晋書』卷一百四石勒載記上。

6 『晋書』卷五孝懷帝本紀。

7 『晋書』卷五十九東海王越伝。

8 『晋書』卷一百四石勒載記上。

9 『晋書』卷五孝懷帝本紀、卷一百一劉元海載記。

10 『晋書』卷五十九東海王越伝。この時李憚は龍驤將軍である。

11 『晋書』卷五十九東海王越伝、卷一百四石勒載記上。

12 『晋書』卷三十九王浚伝。



- 13 『晋書』卷三十九王浚伝、卷一百四十石勒載記上。
- 14 『晋書』卷六十一荀晞伝。
- 15 『晋書』卷一百四十石勒載記上。
- 16 『晋書』卷六十二祖逖伝、卷一百四十石勒載記上。
- 17 都築晶子「西晋末期の諸集団について——その統合の過程と理念——」（『名古屋大学東洋史研究報告』十、一九八五年）は、『晋書』東海王越伝に田甄等が「并州將」と記されているところから、官僚士大夫とは明確に区別された地方武吏に率いられた集団と分類する。しかし『樂府詩集』卷八十五并州歌引『樂府広題』に田蘭、薄盛は「并州大姓」とあり、このことから「乞活は并州の地域社会の卑賤の家から在地豪族までの様々な階層を背景としていたのであろう。」と分析している。
- 18 前掲周一良「乞活考」は、乞活は始終その純粋性を保持し并州人の集団であり、その部衆組織の固い団結は、一般流民が烏合の衆に近かつたのと異なるという。
- 19 注2に引く『晋書』卷五十九東海王越伝に名に見える武將達はいずれも并州將であり、東海王越伝に名のない陳午、陳川についても、羅振玉『鳴沙石室佚書』所収『敦煌石室本晋紀』に「川本大陵県吏」とあることから、并州出身者であることは明らかである。
- 20 『晋書』卷一百四十石勒載記上。
- 21 『晋書』卷一百七十石季龍載記下。
- 22 周一良「乞活考」は乞活が胡人に抵抗を続けたことを強調する。王仲犛『魏晋南北朝史』上（上海人民出版社、一九七九年）第三章「西晋的暫時統一及其崩壊」は、乞活は西晋末には反胡人闘争の中心となり、陳午は反胡人的精神を持っていたという。
- 23 『晋書』卷一百四十石勒載記上。
- 24 周一良「乞活考」は、載記が「烏丸」と記したのを司馬光が削り取ったので『資治通鑑』には烏丸の二字がないのであり、薄盛が并州の烏丸で東嬴公騰に随って乞活になるなどあり得ないと、薄盛と烏丸の関係を否定する。これに対し唐長孺「魏晋雜胡考」（『魏晋南北朝史論叢』三聯書店、一九五五年、所収）は、并州にはもともと烏丸が多数居住しており、石勒や多くの羯が乞活に略奪誘拐された「軍実」

だった可能性を指摘して、薄盛を烏丸としている。周氏の論は強引で載記の記述を否定するには軽率に過ぎる。また并州に大量の烏丸が居住していたのは事実であり、薄盛が烏丸人である可能性は非常に高い。

<sup>25</sup> 『晋書』卷一百十二苻洪載記。

<sup>26</sup> 町田隆吉「後趙政権下の氏族について——「五胡」諸政権の構造理解に向けて」『史正』七、一九七九年

<sup>27</sup> 『晋書』卷五十九東海王越伝に「李憚殺妻子奔廣宗」とある。また『晋書』卷五孝懷帝本紀及び卷一百四石勒載記上によれば、李憚は上白で石勒に敗れ斬られている。

<sup>28</sup> 『晋書』卷一百七石季龍載記下。

<sup>29</sup> 『晋書』卷六十二祖逖伝。

<sup>30</sup> 谷川道雄「南匈奴の自立及びその国家」『名古屋大学文学部研究論集』三十五、一九六四年。後『隋唐帝国形成史論』筑摩書房、一九七一年、所収。

<sup>31</sup> 『晋書』卷一百七石季龍載記下に「農懼、率騎百余奔廣宗、率乞活数万家保于上白」とある。なお後趙末期から冉魏にかけての経過については大澤陽典「李農と石閔——石趙末期の政局——」『立命館文学』三八六—三九〇、一九七七年に詳しい。

<sup>32</sup> 周一良「乞活考」は冉閔、李農が直接間接に乞活と関係を持っていたとする。王仲犛『魏晉南北朝史』上（上海人民出版社、一九七九年）第四章「十六国」は、李農が廣宗に逃げ込んだとき乞活は後趙政権を転覆するのに有利と判断し、自ら李農の指揮を受け入れ共に起ち、こうして両者は友誼を結んだと述べ、それ以前に密接な関係があったとは考えない。そして李農が冉閔に誅されると、乞活は冉閔と積極的な関係を結ばなかったという。

<sup>33</sup> 『晋書』卷八穆帝本紀。

<sup>34</sup> 五胡諸国における徙民政策の重要性と意味については、關尾史郎「前燕「屯田」政策に関する二、三の問題」『上智史学』二十二、一九七七年）及び「南涼政権（三九七—四一四）と徙民政策」『史学雑誌』八九一、一九八〇年）、田村実造『中国史上の民族移動期』「五胡篇」（創文社、一九八五年）に詳しい。

## 第二部 五胡十六国時代前期における民族関係——冉魏政権をめぐって

## 第二章 冉閔の胡人虐殺について

### はじめに

五胡十六国時代は、中国史上民族関係が最も複雑を極めた時代の一つである。華北では様々な民族が混在して活動したため、たびたび大規模な衝突が発生し、民族戦争とも言うべき様相を呈した。各民族の関係は錯綜しており合従連衡の様相も実に複雑怪奇であるが、一般的に言えば、五胡の諸民族と漢人との対立が最も激しく明確な形をとって現れた対立関係であった。後趙末期に漢人の石閔が首都鄴周辺の胡人二十万人余を虐殺した事件は、しばしばその典型的な例として取り上げられている。

ただでさえ血生臭い時代であった五胡十六国史上においても、とりわけ酸鼻を極めるこの事件には、特に中国において多くの言及がなされている。事件の原因については、日中の先学諸氏ともに、「後趙の胡人中心政策、あるいは漢人への民族的圧迫に対する反抗」という点でほぼ一致している。しかし冉閔が事件を引き起こすに至った動機、事件の性格など、細部にわたる考察は充分とはいえない。

また冉閔・胡漢対立・胡人虐殺事件が一直線に結び付けられて解釈されている事も問題である。冉閔による胡人虐殺が、胡漢の激烈な対立を背景として発生した事は言うまでもない。しかしそれはあくまで背景であり、胡漢の対立が必然的に事件を生んだとは言えず、また冉閔の行動が始めから胡人虐殺を志向していたとも思われないからである。

そこで本章では石虎の死から胡人虐殺に至る過程を検討し、この事件の性質について考察を加えたい。

# 一 後趙の崩壊と石閔の動向

では最初に石虎死後の後趙政局における石閔の軌跡をたどり、彼が胡人虐殺の時点でのどのような状況下に置かれていたのかを考えてみよう<sup>2</sup>。

石閔は漢人出身で本姓は冉氏である。父贍は幼くして流民集団の一つ乞活に加わり、石勒に捕えられ石虎の養子となった。

石閔は石虎の養孫に当たる<sup>3</sup>。石閔が史上に始めて登場するのは後趙建武四年（三三八）五月の鮮卑慕容部との戦いであった。

この年三月に慕容部と同盟して、長年後趙を悩ませてきた鮮卑段部を滅ぼした石虎は、間もなく慕容部と対立し兵を出したが、

「趙諸軍皆棄甲逃潰」〔資治通鑑〕卷九十六晋紀十八・成帝咸康四年条」という惨敗を喫した。この時石閔の軍だけは壊滅せず陣容を保ったまま肅々と撤退した。この功績で石閔は後趙にその人ありと言われるようになった。以後、東晋の荊州・揚州

への侵攻、後述の梁犢征討と次々に武勲を輝かせ、石虎朝後期の重要人物の一人と目されるようになる<sup>4</sup>。

石閔が初めて政権の座に手の届く位置に立ったのは、建武十四年（三四八）五月である。この年の四月、石虎の死去と同時に後趙宗室の内紛が表面化する。石虎の末子である皇太子石世はまだ幼かったため、石虎は死の床で宗室の重鎮石遵、石斌、および張豺に後事を託そうとした<sup>5</sup>。しかし張豺は、石世の生母劉氏と結んで政権を牛耳ろうとし、劉氏は世より年長で宗室第一の有力者である斌が世を害する事を恐れていた。そこで両者は陰謀を巡らし、石虎の命と偽って石斌の官を奪い監禁した上、石虎が危篤に陥ると殺してしまった。もう一人の有力者石遵は、張豺に石虎への謁見を阻まれ、追われるようにして河内郡に向かった。

その年二月、前涼との国境に謫戍された兵士達が定陽の人梁犢を首領に反乱を起こし、長安に至る頃には十万に達し、関中の後趙軍を撃破して潼関を破り洛陽を抜いた。意外に頑強な梁犢軍に石虎は手を焼き、李農・張賀度・張良・石閔・石斌・姚弋仲・蒲洪等を次々繰り出して鎮圧に当たらせ、総計十万を越える大軍を動員した。この部隊は五月の時点で河内郡に駐屯し

ていた。石遵は河内郡でこの部隊に擁立され、鄴を攻め落とし世を廢して即位する。

この戦いで石閔は前鋒を務め、石遵政権成立の第一の功労者となった。重要なのは、遵が出陣に当たり石閔に「努力。事成、以爾為儲貳。」(『晋書』卷一百七「石季龍載記下」)と約束した事である。つまり石閔を皇太子にするというのである。この時石閔は政権を獲得し得る位置に立った。

ところが石遵は即位するや石閔との約束を破り、石斌の遺児衍を皇太子とした。<sup>6</sup>裏切られた石閔は、軍権を握ったとはいえ不満は隠すべくもなく、

既而立衍、閔甚失望、自以勲高一時、規專朝政、遵忌而不能任。

という有り様だった。石閔がいかに皇太子の座を望んでいたかが知られよう。石遵即位までは、石閔は皇太子となって合法的且つ平和的に後趙皇帝の座を譲り受ける事を志向している。

しかし衍が皇太子となった時点で、少なくとも石遵政権下では、石閔が合法的平和的に政権を獲得する道は断たれた。遵が石閔に政権を譲る可能性がない以上、力づくで奪い取る他にない。即ちクーデターによる政権獲得である。石閔は自己の勢力拡大に走った。

閔既為都督、総内外兵権、乃懷撫殿中將士及故東宮高力万余人、皆奏為殿中員外將軍、爵閔外侯、賜以宮女、樹己之恩。

(『晋書』卷一百七「石季龍載記下」)

という行動に出たのである。こうして石閔は合法的手段からクーデターへと、政権獲得の戦術をエスカレートさせた。

軍権を掌握し強大な勢力を持つ石閔に対し、石遵側近は警戒の目を向けるようになった。十一月、石遵は宗室諸王を集めて密議を行い衆議は石閔誅殺で一決したが、出席者の一人である石鑒がこれを石閔に漏らしたため、石閔は李農と共に遵を襲い殺害した。石閔の勢力は石遵一派を簡単にひねり潰しクーデターは成功した。遵に替わって即位した石鑒は即位のいきさつからして完全に石閔・李農の傀儡である。石閔は政権の実権を握ったのである。



石閔の権勢の前に皇帝とは名ばかりの石鑒は十二月、石苞・中書令李松・殿中將軍張才等に命じ石閔、李農に夜襲を掛けた<sup>10</sup>が失敗し、禁中は大混乱に陥った。鑒は石閔に廃されるのを恐れて自分は無関係であったかの如く装い、密かに李松・張才を斬り石苞も誅殺してしまった。同月、襄国に在った新興王石祗が姚弋仲・蒲洪と結び、石閔・李農誅殺の檄を飛ばし挙兵した。石閔、李農は石琨・張華・平延盛に兵七万を率いせしめて石祗討伐に向かわせたが、彼らは石祗を討伐するどころか逆に石祗に寝返ってしまった。間もなく中領軍石成・侍中石啓・前河東太守石暉等が石祗に呼应し、鄴において石閔・李農の誅殺を企てた。石閔はこれを即座に返り討ちにしたものの、続いて龍驤將軍孫伏都・劉錫等が羯士三千人を率いて石閔・李農誅殺を謀った。鑒は伏都に「卿は功臣、好為官陳力。朕従台觀卿、勿慮無報也。」と述べ励ましたが、伏都等が勝てず石閔・李農の兵が迫ると、自分が殺されるのを恐れて門を開き、「孫伏都反、卿宜速討之。」と命じたので、伏都等は斬られ反乱は鎮圧された。こうして石閔は辛くも敵対勢力の反乱を封じたが、石鑒政権樹立二ヶ月目にして後趙は分裂状態に陥った。とりわけ後趙帝室たる石氏はことごとく石閔に敵対した。

石遵による石閔誅殺の密議は石氏一族の共同謀議であり、帝室石氏的主要人物が一致して石閔を危険人物とみなし、他所者扱いしていた事がわかる。皇太子問題、誅殺の密議、さらに石苞の襲撃、石祗の謀反、石成等の反乱と石閔は何度も石氏一族に裏切られた。孫伏都の乱を鎮圧した時点で、石閔は石氏一族の支持を一切期待できない状況に置かれていた。石閔に残された道は篡奪しかなかった。胡人虐殺はその直後の事であった。

ここまでの経過を見ると、石閔の政権獲得に向けた行動には幾つかの段階があるのがわかる。「合法的政権獲得」「クーデターによる政権掌握」「後趙篡奪」である。石遵から皇太子の地位を約束された時点では、石閔は「合法的政権獲得」の段階にある。石遵が石衍を皇太子としてからは、「クーデターによる政権掌握」段階に入る。石遵を倒し石鑒を擁立した時点でこの目的は達せられた。しかし度重なる石氏、胡人勢力の反抗の前に、石閔は次第に「後趙篡奪」の段階に踏み出していくのである。

強調しておきたいのは、「合法的政権獲得」「クーデターによる政権掌握」「後趙篡奪」は各々レベルが違い、自動的にエスカレートするものではないという事である。一般的に言えば「合法的政権獲得」は最も安全確実で理想的な政権獲得方法である。「クーデターによる政権掌握」はかなりの抵抗を伴う。「後趙篡奪」は革命であり相当の危険を覚悟する必要がある。そして後に続く「胡人虐殺」は後趙政権の体制自体を破壊する破滅的なものである。これらは後者になるに従って過激度を増していく。当然危険性も増大する。政権の安定を図るならば過激な方向へのエスカレートは避け、出来るだけ前段階で事態の收拾を図ろうとするはずである。しかし石閔の行動は次第にエスカレートし、危険な行動に踏み切っていく。これは先述の経過を見れば明らかのように、石閔が政権を獲得し得る条件が次第に厳しくなり、より過激な行動にエスカレートしなければ政権を獲得できない状況が発生したからである。つまり石閔は周囲の状況に迫られて止むを得ず行動をエスカレートさせていったものと考えられるのである。

政権獲得行動の際限無いエスカレートの果てに胡人虐殺がある。これはまさに最悪の選択である。だが石閔は敢えてこれをした。そこで次に石閔がこのような行動を選択した原因を探りたい。

## 二 胡人虐殺の原因と背景

ここでは石閔が胡人虐殺を引き起こした原因について考察したい。そこで先ずその経緯を史料に即して検討してみよう。閔・農攻斬伏都等、自鳳陽至琨華、横尸相枕、流血成渠。宣令内外六夷敢称兵杖者斬之。胡人或斬閔、或踰城而出者、不可勝数。使尚書王簡・少府王儁帥衆数千、守鑒于御龍觀、懸食給之。令城内曰「与官同心者住、不同心者各任所之。」敕城門不復相禁。於是趙人百里内悉入城、胡羯去者填門。閔知胡之不為己用也、班令内外趙人、斬一胡首送鳳陽門者、文官進位三等、武職悉拜牙門。一日之中、斬首数万。閔躬率趙人誅諸胡羯、無貴賤男女少長皆斬之、死者二十万余、尸

諸城外、悉為野犬豺狼所食。屯拋四方者、所在承閔書誅之、于時高鼻多髭至有濫死者半。〔『晋書』卷一百七「石季龍載記下」〕<sup>11</sup>

これは冉閔の胡人虐殺に至る経過を記した『晋書』の核心部分である。これによれば事態は次のように進展したものと考えられる。

一 石閔、鄴城内における市街戦の末、孫伏都の反乱を鎮圧。

二 内外の胡人に武装解除を命じる。

三 胡人が続々と鄴から脱出。

四 石鑒の下で食料配給。

五 「与官同心者住、不同心者各任所之。」の令。

六 漢人が続々入城し、胡人はことごとく鄴を出る。

七 冉閔は胡人が己を支持しない事を悟り、胡人虐殺を命ずる。

史料を見る限り、この一連の事態は非常な短時間（長くても数日）のうちに発生したものと考えられる。孫伏都の反乱から胡人虐殺まで、事態は急展開したのである。

石閔が胡人虐殺に踏み切った直接の契機となったのは

令城内曰「与官同心者住、不同心者各任所之。」勅城門不復相禁。於是趙人百里内悉入城、胡・去者填門。閔知胡之不为己用也、班令内外趙人、斬一胡首送鳳陽門者、文官進位三等、武職悉拜牙門。

という事態だと言われている。<sup>12</sup>これが石閔に最終的な決断を促した事はまず間違いないだろう。しかしながら、胡人の鄴脱出は既に

宣令内外六夷敢称兵杖者斬之。胡人或斬閔、或踰城而出者、不可勝数。

の時点から始まっている。ここで問題となるのは「宣令内外六夷敢称兵杖者斬之。」という措置である。これは明らかに鄴城内の胡人を孫伏都反乱の同調者、少なくとも共鳴者とみなし、監視する事を目的として取られた措置である。つまり孫伏都の反乱鎮圧直後から、冉閔と胡人勢力との抜き差しならない緊張状態は始まっていたのである。これに対し胡人達は身の危険を感じて鄴から脱出を開始した。<sup>13</sup> 両者の対立は決定的になりつつあった。

しかし事態は未だ一気に胡人虐殺へと進まない。石閔は城内に食料を配給する。この措置は特に対象を胡漢いずれかには限定していないが、石鑒の元で行われた点から考えると、胡人の脱出を食い止めようとする意図に重きが置かれたものと考えて良いだろう。

続いて問題の令が発せられる。『資治通鑑』卷九十八晋紀二十・穆帝永和五年十二月条によればそれは

下令城中曰「近日、孫・劉構逆、支党伏誅、良善一無預也。今日已後、与官同心者留、不同者各任所之。」勅城門不復相禁。というものである。つまり、一般の人間は孫伏都の乱に連座しない、とわざわざ断っているのである。石閔は既に胡人を孫伏都の同調者と見て警戒しており、城中の胡人はそれを感じて脱出を始めていた。「近日、孫・劉構逆、支党伏誅、良善一無預也」の一文は、明らかに石閔に恐怖心を抱く胡人に向けて発せられたものであり、動揺する胡人の人心を鎮め、その離反を防ごうとする石閔の意図を示していると言えるだろう。即ちこの時点に至ってもなお、石閔は何とか胡人を自己の陣営に引き留めようと図っているのである。

しかし胡人はこの令に報いるに「胡羯去者填門」という行動を以てした。ここに至って事態は最終的破局を迎えた。そこで石閔は遂に胡人虐殺を命じるのだが、では一体石閔はなぜ「与官同心者住、不同心者各任所之。」などという令を出したのだろうか。

この令を出した時、石閔はよもやこんな結果になるとは予想していなかったと思われる。「胡羯去者填門」という事態は、鄴在住の胡人に露骨な不信任を叩きつけられるに等しい。しかもそれを天下に非常に印象的な方法で示してしまうことになる。

これは直ちに国中の胡人の反乱を誘発する可能性が大きく、石閔にとってはまさしく死活問題である。そのような事態が予想できていながら、なおこの令を出すとは到底考えられない。「閔知胡之不為己用也、班令内外趙人、斬一胡首送鳳陽門者、文官進位三等、武職悉拜牙門。」という史料は、裏を返せば石閔がこの時点までは胡人を己のために使おうと考えていた事を示している。つまり石閔は胡人が城内に残留すれば虐殺はしなかった訳であり、石閔は自己に従う胡人が多数いる事を期待して「与官同心者住、不同心者各任所之。」の令を出したと考えられるのである。

このように石閔は孫伏都の乱鎮圧後の短期間に胡人懐柔のため手を打ち、最後の最後まで胡人との全面対決を避けるべく努力を続けている。石閔はギリギリの段階まで胡人を虐殺する意図を持ち合わせていなかったと考えて良いだろう。石閔が胡人虐殺に踏み切ったのは、胡人が挙げて石閔に背を向けたからである。胡人虐殺は、胡人に全く見放され追い詰められた石閔が、状況に迫られて止むを得ず取った最後の手段だったと言えるのである。

従ってそれは前もって入念に準備された計画的行動ではなかった。胡人虐殺が慌ただしく決定実行された事は、その手際の悪さにも表れている。石閔が鄴近郊の胡人を虐殺した時、これに呼応して行動した者は「屯拠四方者、所在承閔書誅之」<sup>14</sup>という程度に留まった。胡人虐殺は鄴とその周辺でしか行われなかったのである。石閔の主敵である石祗等の胡人勢力内部の漢人を切り崩し味方につける事もできなかった。胡人を排斥し漢人国家を復興する壮挙にしては、余りにもお粗末である。

また虐殺の翌年一月には

王朗・麻秋自長安奔于洛陽。秋承閔書、誅朗部胡千余。朗奔于襄国。麻秋率衆奔于符洪。《晋書》卷一百七「石季龍載記下」

という事態が発生している。つまり親石閔勢力の中にも胡人が少なからず含まれており、それが虐殺から一か月を経ても処分されていないのである。王朗が石閔の胡人虐殺と政権奪取を知りながら、胡人を引き連れて石閔の元に赴こうとしていた事、麻秋が石閔の書を受け取ってはじめて胡人を誅した事は、親石閔勢力の中でも胡人に対する対応が一定しておらず、必ずしも

石閔の方針が徹底していなかった事を物語る。さらに王朗が配下の胡人を殺されたため石祗に奔るに至っては、石閔が味方の漢人すらまとめきれない事は明かである。

胡人虐殺は石閔と胡人の関係を決定的に悪化させ、両者を不具戴天の敵とした。翌年（三五〇）一月、石閔は後趙の国号を「衛」と改め、帝室の姓を石氏から李氏とし、青龍と改元した。後趙の全面否定である。これに対し胡人勢力は一斉に反旗を翻した。

太宰趙鹿・太尉張挙・中軍張春・光祿石岳・武衛張李及諸公侯・卿・校・龍騰等万余人出奔襄国。石琨奔拋冀州、撫軍張沈屯釜口、張賀度拋石洸、建義段勤拋黎陽、寧南楊羣屯桑壁、劉国拋陽城、段龕拋陳留、姚弋仲拋混橋、符洪拋枋頭、衆各数万。（『晋書』卷一百七「石季龍載記下」）

という事態を迎えて、石閔の勢力範囲は僅かに鄴のある魏郡一郡のみとなる。二月、石閔は姓を冉氏に復し、石鑒を廃して皇帝に即位し、国号を「大魏」とした。後世「冉魏」と呼ばれる国である。かくて後趙は最終的に滅亡した。冉閔は漢人王朝の復活を標榜し、胡人勢力との全面戦争に突入する。周囲を敵意むき出しの胡人勢力に包囲された冉閔は、以後慕容部に滅ぼされるまでの二年余りを、血で血を洗う戦いの中に明け暮れる。<sup>15</sup> 追い詰められた石閔が窮鼠猫を咬む勢いで敢行した胡人虐殺は、反って彼を絶体絶命の窮地に追い込んだのである。

おわりに

以上、石閔は政権獲得を目指しながら周囲の状況に迫られて行動を段階的にエスカレートさせ、遂に胡人虐殺に至ったこと、石閔にとって胡人虐殺は追い詰められた末の最後の手段であって、最初からそれを志向していたのではないことを論じてきた。



石閔を追い詰めた最大の要因は、石氏一族の石閔に対する激しい反発である。石閔は名目的には石氏一族の一員であり、皇帝の座に権利を有する者である。しかし彼には大きな弱点が二つあった。一つは石虎の養孫に過ぎず石氏と血縁関係がなかった事、もう一つは漢人出身だった事である。どちらも石閔の後趙皇族としての正統性を著しく損なうものであった。

石氏一族が石閔を同胞と認めたかに見えたのは、石遵が石閔を皇太子とする約束を交わした時だけである。遵が約束を破った事情について史料は一切沈黙しているが、もし遵が初めから約束を履行する積もりがなかったのなら、石閔はペテンにかかったも同然であり、周囲の反対により遵が翻意したのならば、石氏一族の間に石閔への違和感が相当強かったことになる。何れにせよ石閔は石氏一族の中で極めて正統性が低い存在に過ぎなかったのである。

以後の石閔と石氏一族は対立一方となる。石遵を打倒したクーデターの時点で、石閔に積極的に味方した者は石鑒ただ一人であった。石閔は石氏から異姓同様に扱われたのである。異姓養子の地位が低いのはこの時代に限ったことではないが、石閔が石虎の養孫で異姓の者だったことに加え、漢人出身だったことの両方が絡み合って、石閔への強烈な拒否反応が生じたのであろう。

石氏を敵に回し、胡人から離反された石閔が最後に抛り所としたのが漢人の血である。ここで石閔は漢人を扇動して己の政権基盤とし、ほんの二年余りとはいえ、五胡十六国史上唯一の中原における漢人王朝を樹立する。<sup>16</sup> 胡人虐殺事件は両者を結び付ける契機となった。即ち胡人虐殺事件は、政権への夢已み難い石閔の野心と、漢人の胡人への怨念が結びついて引き起こされた事件なのである。従って事件の時点における石閔を漢人の代弁者のように考えるのは誤りである。

しかし石閔が一声扇動すれば漢人が続々と味方に馳せ参じ、忽ち二十万人の胡人が虐殺されるという事態は、胡漢の激烈な対立を物語るものである。胡人虐殺を突破口として噴出した漢人イデオロギーとも言うべきものは、それに乗って政権を樹立した冉閔を胡人との果てしない闘争に駆り立て、華北を争乱の巷と化した。これ以後、冉閔は漢人の代表者として振る舞い始める。政権樹立後の冉閔は中原における漢人王朝の復興を目指した。だがそれはその後五胡十六国、南北朝時代を通じて実現

される事はなかった。

1 冉閔は石虎の養孫であるため、後趙が存続している期間は石閔の名で史料上に登場する。本章では石閔と呼ばれていた時期を扱うので、以後専ら石閔と呼称し、姓を冉に復した後について言及する時にのみ、冉閔と呼称する。

2 本章では石閔に直接関わる事柄のみを取り上げる。後趙末期から冉魏にかけての政局については、大沢陽典「李農と石閔——石趙末期の政局——」（『立命館文学』三八六～三九〇、昭和五十二年）に詳しい。

3 『晋書』卷一百七「石季龍載記下」に

閔字永曾、小字棘奴、季龍之養孫也。父瞻、字弘武、本姓冉、名良、魏郡内黄人也。其先漢黎陽騎都督、累世牙門。勒破陳午、獲瞻、時年十二、命季龍子之。驍猛多力、攻戰無前。歷位左積射將軍・西華侯。閔幼而果銳、季龍撫之如孫。とある。

4 『晋書』卷一百七「石季龍載記下」に  
及敗梁犢之後、威声彌振、胡夏宿将・不憚之。とある。

5 『晋書』卷一百七「石季龍載記下」に  
季龍疾甚、以石遵為大將軍、鎮閔右、石斌為丞相・録尚書事、張豺為鎮衛大將軍・領軍將軍・吏部尚書、並受遺輔政。とある。

6 石遵即位時の政府首脳の内容は『晋書』卷一百七「石季龍載記下」に

以斌子衍為皇太子、石鑒為侍中、石冲為太保、石苞為大司馬、石琨為大將軍、石閔為中外諸軍事・輔国大將軍・録尚書事、輔政とある。

7 『資治通鑑』卷九十八晋紀二十・穆帝永和五年条には

十一月、遵召義陽王鑒、樂平王苞、汝陰王琨、淮南王昭等入議於鄭太后前、曰；「閔不臣之迹漸著、今欲誅之、如何」鑒等皆曰「宜然」鄭氏曰；「李城還兵、無棘奴、豈有今日。小驕縱之、何可遽殺。」

とあり、反対らしい反対をしたのは鄭太后（遵の生母）だけだったようである。

8 姚薇元『北朝胡姓考』（北京科学出版社、一九五八年）は李農を漢人とする。

9 石鑒即位に伴う政府首脳人事は

以石閔為大將軍、封武德王、李農為大司馬、並録尚書事、郎為司空、秦州刺史劉羣為尚書左僕射、侍中盧諶為中書監。〔『晋書』卷一百七「石季龍載記下」〕

というものだった。

10 鑒のこの行動は唐突で史料に動機は記されていないが、前掲大沢陽典「李農と石閔」は「鑒は帝位に即いたものの、クーデターの際に一時は皆と同腹した事がかりで、石閔及び閔のよき協力者である李農が、煙たい存在であつた筈である。」と述べる。

11 『資治通鑑』卷九十八晋紀二十・穆帝永和五年十二月条の記述は『晋書』とほぼ同様だが、多少異同があるので示しておく。異同の部分には傍線を施した。

閔・農攻斬伏都等、自鳳陽至・華、横尸相枕、流血成渠。宣令内外六夷敢称兵杖者斬之。胡人或斬閔、或踰城而出者、不可勝数。閔使尚書王簡・少府王蔚帥衆数千、守鑒於御龍觀、懸食以給之。下令城中曰「近日、孫・劉構逆、支党伏誅、良善一無預也。今日已後、与官同心者留、不同者各任所之。」勅城門不復相禁。於是趙人百里内悉入城、胡・去者填門。閔知胡之不為己用、班令内外趙人、趙人斬一胡首送鳳陽門者、文官進位三等、武職悉拜牙門。一日之中、斬首数万。閔親率趙人誅諸胡・、無貴賤男女少長皆斬之、死者二十万余、尸諸城外、悉為野犬豺狼所食。屯拋四方者、閔皆以書命趙人為將帥者誅之、或高鼻多須濫死者半。

- 12 内田吟風『北アジア史研究匈奴篇』（同朋舎、昭和五十年）、田村実造『中国史上の民族移動期』（創文社、昭和六十年）。
- 13 『資治通鑑』胡注には  
閔既誅孫伏都等、又禁胡人称兵杖、胡人知禍之将及、故去とある。
- 14 当時の胡人集団の中に相当数の漢人が含まれる場合があったことは、町田隆吉「後趙政権下の氏族について——「五胡」諸政権の構造理解に向けて」（『史正』七、昭和五十四年）に詳しい。
- 15 冉閔は三五二年四月に慕容儁に敗れて捕らえられ、五月に斬られた。八月には首都鄴が陥落し魏国は滅亡する。
- 16 五胡十六国時代の漢人王朝としては冉魏の他に前涼・西涼があるが、いずれも地理的に中原とは言えない。

## 第二部 五胡十六国時代前期における民族関係——冉魏政権をめぐって

## 第三章 冉魏政権と漢人たち

はじめに

第二章で論じたように、後趙末期に漢人出身の將軍冉閔<sup>1</sup>は首都鄴周辺の胡人二十万人余を虐殺し、漢人政権の復活を標榜して魏国を建て、周囲の胡人勢力と激烈な抗争を繰り広げた。この出来事はしばしばこの時代の激しい胡漢対立を象徴する例として取り上げられてきた。

五胡十六国時代を通じて最も凄惨なこの事件が、胡漢の激しい対立を背景に起きたことは言うまでもないだろう。しかしこの事件は一見すると余りにも構図が明確で、原因も結果もはっきりしている印象を与えてしまうため、その性格はともすると「胡漢対立」の一言で片付けられてしまい、冉閔の胡人虐殺事件や冉魏国の構造について踏み込んで論じられることはほとんど無かった。

前章ではこの冉閔の胡人虐殺事件について分析し、冉閔は異姓養子とはいえ皇族であり、皇族として合法的に後趙政権を掌中にしようと企てたが石氏一族の猛反発に逢い、最終的にほとんど全ての胡人に離反されたためやむを得ず胡人虐殺を決行したもので、当初から胡人との全面対決を志向していたわけではない、と結論した。

胡人虐殺事件以後、冉閔は漢人意識を強調し漢人の代表者然として振る舞い始めるが、冉魏政権が果たして彼の思惑通り華北の漢人を幾らかでも代表し得ていたかどうかは、大いに疑問のあるところである。そこで本稿では冉魏政権に従った漢人相將の動向を分析することにより、この政権の性格について考察していきたい。



# 一 冉魏政権の構造

まず最初に冉魏政権成立までの経過を概観しよう。羯族の石勒が建てた後趙は三二九年に南匈奴の前趙を滅ぼし、河西に拠る前涼を除く華北の主要部分を統一した。石勒は三三〇年に皇帝に即位し、ここに胡人政権が華北を束ね南の東晋と対峙するという形勢が成立した。後趙は石勒の後を継いだ石虎の時に全盛期を迎えたが、三四九年に石虎が死去すると後継者をめぐって内乱となり、わずか一年の間に石世（三四九年四月～五月）、石遵（同年五月～十一月）、石鑒（同年十一月～三五〇年二月）と三人の皇帝がクーデターによって次々に交代する異常事態に至った。冉閔はこの動乱の中で権力の座に上り詰め、三四九年十二月に首都鄴の胡人と決定的に衝突したことから、周囲の漢人に呼びかけて胡人二十万人を虐殺、翌三五〇年二月後趙を奪い冉魏を建国したのである。これに対し胡人勢力は一斉に離反し、襄国に拠る石祗を盟主として冉魏との全面戦争に突入した。こうして後趙は四分五裂の状態に陥り、華北は民族戦争の巷と化したのである。<sup>3</sup>

冉閔が政権樹立に当たって己が漢人であることを正統性の根拠とし、胡人虐殺事件から後趙篡奪にかけて胡人が全く離反したため、冉魏はほぼ純血の漢人政権となった。表一は冉魏の中央の将相一覧である。これから明らかなように、冉閔自身を含めた冉魏首脳部の多くはかつて後趙の将軍官僚だった者達である。その中には華北きつての名族も少なからず含まれている。『晋書』卷六十二劉琨伝付劉羣伝に

時勒及季龍得公卿人士多殺之、其見擢用、終至大官者、唯有河東裴憲、渤海石璞、滎陽鄭系、潁川荀綽、北地傅暢及羣・（崔）悦・（盧）湛等<sup>4</sup>十余人而已。

とある。ここで挙げられている人物の中で石璞、鄭系、劉羣、崔悦、盧湛は冉魏政権に参加したことが確認できる。また表一にある申鍾は魏郡、韋叟は京兆の名門出身である。このように冉魏は後趙に仕えた漢人有力者をかなりの程度吸収している。

後趙を篡奪したという事情を鑑みれば当然ではあるが、冉魏は後趙を支えた漢人將相をそのまま引き継ぎ、これを中枢として成立していた。戦死や誅殺などで次第に人材が枯渇したため、政権末期には後趙時代無名だった者も首脳に加わってくるものの、後趙時代の大官が首脳部の主な地位を占める傾向に変わりはない。

これに対し地方官等は、必ずしも後趙時代に名の知られた人物ばかりではない。表二をご覧頂きたい。彼らの多くは後趙時代全く無名、あるいはさほど地位が高くなく、冉閔が権力を握ってから史上に姿を表した者達である。このうち蘇亥と周成は冉閔が石遵を倒したクーデターの際その命により動いた人物で、かねて冉閔の配下、少なくとも影響下の將軍だったと考えられる。冉閔は石遵政権時代、將士に官職等をばらまいて勢力の扶植に努めていたので、冉魏の地方官や中級幹部の中にこの類の人物が多く含まれていたであろうことは想像に難くない。冉魏の地方官等は後趙の中下級將相から構成されていたと考えてよいだろう。

このように冉魏政権は後趙政権の漢人部分を継承する形で成立し、滅亡までそのままの人脈を保ち続けた。冉魏政権は二年半足らずで滅亡したため、政権成立後新たに政権に加わった者は少なく人材的広がりには乏しい。それは冉魏政権が多くの人を引きつける影響力を持たなかったことを意味していると言えるだろう。そこで次に冉魏政権の漢人達に対する影響力について考えたい。

## 二 冉魏政権の漢人に対する影響力

既に述べたように冉閔は政権樹立に当たって、己が漢人の血を引いており、漢人政権を復活することを正統性の根拠として強調している。三五年二月、冉閔は大司馬常煒を使者として慕容儁の下に派遣した。この時慕容儁の

冉閔養息常才、負恩篡逆、有何詳應而僭称大号。

という問いに対し常煒は

暴胡酷乱、蒼生屠膾、寡君奮劍而誅除之、黎元獲濟、可謂功格皇天、勲侔高祖。恭承乾命、有何不可。〔『晋書』卷一百十慕容儁載記〕

と答えている。また三五二年四月、慕容氏の軍に大敗して捕らえられ、慕容儁の前に引き出された冉閔は、儁が汝奴僕下才、何自妄称天子。

と詰問したのに対し

天下大乱、爾曹夷狄、人面獸心、尚欲篡逆。我一時英雄、何為不可作帝王邪。〔『晋書』卷一百七石季龍載記下〕

と反論する。ここに冉魏政権の政治的正統性の主張がよく表れている。即ち冉閔は自らを、中原から胡人を駆逐する英雄と位置づけているのである。問題はこの主張が当時の社会にいかほどの影響力を持ったか、という点である。

反胡人の旗を立てて漢人が蜂起するのは、この当時珍しいことではない。しかしそのような場合、彼らはほとんど例外なく東晋に藩を称した。漢人の多くが東晋に正統性を認めていたことについては枚挙にいとまがない。『晋書』卷四十四廬欽伝に

值中原喪乱、與清河崔悦・潁川荀綽・河東裴憲・北地傅暢並淪落非所、雖俱顯于石氏、恒以為辱。湛每謂諸子曰「吾身没之後、但称晋司空從事中郎爾。」

とあり、廬湛を始めとする漢人名族達が後趙への仕官に屈辱感を覚え、東晋に心を寄せていた事が知られる。

このように東晋は華北の漢人に強い影響力を持っていた。漢人が胡人と事を構える場合、東晋への帰順称藩が錦の御旗として大変有効なの言うまでもない。ところが冉閔は東晋に対し終始極めて冷淡な態度を取り続けた。彼の即位に際しては

司徒申鍾等上尊号於閔、閔以讓李農、農固辞。閔曰「吾属故晋人也、今晋室猶存、請與諸君分割州郡、各称牧・守・公・侯、奉表迎晋天子還都洛陽。」尚書胡睦進曰「陛下聖德應天、宜登大位、晋氏衰微、遠竄江表、豈能總馭英雄、混壹四

海平。」閔曰「胡尚書之言、可謂識機知命矣。」乃即皇帝位。〔『資治通鑑』卷九十八穆帝永和六年条〕

という経緯があつた。冉閔が東晋への称藩を提案したのは、李農に帝位を譲つたのと同様単なるポーズに過ぎず、全く本心でないのは明らかである。胡睦の言葉は東晋をひどく侮辱しその正統性を否定しかねないものであるにもかかわらず、冉閔はそれを「胡尚書之言、可謂識機知命矣。」と賞賛すらしてあつさり即位してしまう。東晋など彼の眼中にはなかったと言ふべきだろう。

周囲を胡人勢力に包囲され軍事的劣勢に置かれていながら、東晋と共闘しようとする動きも鈍い。東晋に使者を派遣したのは、即位後二ヶ月以上経つた三五〇年四月、しかも

閔遣使臨江告晋曰「逆胡乱中原、今已誅之、能共討者、可遣軍来也。」朝廷不答。〔『資治通鑑』卷九十八穆帝永和六年条〕という、東晋としては到底受け入れがたい高圧的な態度を示した上、無視されている。これでは冉閔に東晋と手を組む気が本当にあつたとは考え難い。この直前に冉閔は長年の盟友であつた李農とその一党を誅殺している。東晋への遣使は、李農誅殺による政権基盤の動揺と関係すると考えるのが自然であろう。冉魏と東晋との同盟が実現するのは三五二年五月、慕容評率いる軍が鄴を包囲した時である。冉閔は既に慕容儁に捕らえられ斬られており、東晋に使者を派遣したのは冉閔の遺児智を奉ずる大將軍蔣幹だつた。即ち冉閔は最後まで東晋を頼らず、独立路線を貫いたのである。

この冉閔の独立路線を批判し東晋への帰順を勧める者もいた。辛謐は西晋の散騎常侍だつたが、西晋滅亡後は劉曜、石勒、石虎の辟招を断り続けてきた人物である。彼は冉閔より辟招を受けると、

宜因茲大捷、帰身本朝、必有許由・伯夷之廉、享松喬之壽、永為世輔、豈不美哉。〔『晋書』卷六十四隱逸伝〕

という書を遺し絶食して果てた。このような意見は少なからず存在したのだろうが、冉閔の態度を動かすには至らなかった。

冉閔があくまで独立を貫き東晋に帰順しなかつたのは、彼のそれまでの行動を鑑みれば至極当然であつた。前節で述べたように、冉閔は石遵のクーデターに参加して以来、権力の座に就くことに執念を燃やし、そのために主君石遵、石鑒を相継い

で殺害し、胡人二十万の虐殺すら敢えてした。こういう人物が尊位を捨てて東晋に藩を称するなど全く考えられないことである。冉閔はあくまで独力で生き残りを図った。

東晋は冉魏政権が成立した同じ三五〇年閏二月、殷浩を中軍將軍・仮節・督揚豫徐兗青五州軍事に任じ北伐を開始した。<sup>7</sup> 東晋軍の北上につれ河南の諸勢力は次々と東晋に帰順したが、その中には冉魏の刺史、太守、將軍も多く含まれていた。三五年八月には河南方面の刺史達が一斉に東晋に降り、黄河以南の冉魏勢力はほぼ消滅した。<sup>8</sup> 東晋は同じ漢人であるはずの冉魏政権を遠慮なく切り崩し、その上鄴が慕容氏の軍に包囲されても傍觀し、冉魏側から救援を求めてくるまで一切接触を拒否しなかった。最終的に大將軍蔣幹の求めに応じ濮陽太守戴施が鄴に入城するが、率いる兵はわずか百名、しかも出兵の条件として鄴に保管されていた「傳國璽」の引き渡しを要求し、結局「傳國璽」は建康に送られてしまう。冉閔が東晋に冷淡だったのと同様、東晋も冉魏にはひどく冷淡だったのである。

冉魏が東晋の援助無しで圧倒的な胡人勢力と戦うためには、華北の漢人勢力を結集する必要があった。しかし冉魏はこれにも成功しなかった。そもそも胡人虐殺から篡奪に至る間の事態が、恐らく冉閔の予想を上回る規模と早さで展開したため、彼には漢人を結集して政権基盤を固める余裕がなかった。これを端的に表しているのが、前章でも言及した

王朗・麻秋自長安奔于洛陽。秋承閔書、誅朗部胡千余。朗奔于襄国。麻秋率衆奔于苻洪。〔『晋書』卷一百七「石季龍載記下」〕

という冉閔による胡人虐殺直後の事件である。王朗が石閔の胡人虐殺と政権奪取を知りながら、胡人を引き連れて石閔の元に赴こうとし、麻秋が石閔の書を受け取って始めて胡人を誅したことは、親石閔勢力の中でも胡人に対する対応が一定しておらず、必ずしも石閔の方針が徹底していなかった事を物語る。さらに王朗が配下の胡人を殺されたため石祗に奔るに至っては、石閔が味方であるはずの漢人をまとめきれない事は明らかである。また西晋の并州刺史劉琨の兄の子で、冉魏の尚書左僕射劉羣の従兄弟である劉啓は、血統経歴いずれの面においても華北の漢人豪族を代表する人物の一人であるにもかかわらず、

冉閔の篡奪後に石祗の側についてその兗州刺史となり、石祗が冉閔に滅ぼされると東晋に降った。<sup>10</sup> このように冉魏政権は漢人に対し必ずしも大きな求心力を持ち得なかった。

もちろん冉閔を慕って帰順してきた漢人も皆無ではない。渤海の逢約は衆数千家を率いて冉魏に付き渤海太守に任じられた。慕容儁は渤海出身の封奕<sup>11</sup>を派遣して約を冉魏から離反させようとし、約は応じなかったが人に誘い出されて捕らえられた。逢約はその後慕容氏から脱走して再起を図るが敗北した。<sup>12</sup> しかしこのような人物は極めて例外的である。逆にこの時冉魏の幽州刺史であった劉準は簡単に慕容儁に寝返り、渤海郡は封奕及び慕容儁の昌黎太守高開の切り崩しにあつて、完全に慕容氏の勢力圏に没してしまう。この出来事は冉魏政権の漢人に対する影響力の低さをよく示していると言えるだろう。

#### おわりに

以上冉魏政権の性格について述べてきたが、私見をまとめると次のようになる。

冉魏政権は冉閔が後趙を篡奪したため、後趙に仕えた漢人有力將相を中核とし、後趙の中下級漢人將相及び冉閔の私的部下を地方官等に配して成立した。基本的には胡人虐殺によって胡人勢力が離反した後に残された、後趙の漢人部分をそのまま引き継いで構成されている。政権樹立当初より、冉閔が漢人の血を引いており中原において漢人王朝を復活することを正統性の根拠として主張したが、東晋と一線を画しあくまで完全独立路線を貫いたこともあって、華北の漢人勢力を結集しまとめ上げることができず、漢人に十分な影響力を持ち得なかった。そのため支配領域は最大でも首都鄴周辺の数郡に過ぎず、最後まで河北南部の地方政権の域を出なかった。

華北の漢人勢力に幅広く影響力を行使して味方につけ、東晋に匹敵する漢人国家を建設するのが冉閔の理想であつたのであろうが、漢人の多くは冉閔に呼応せず、むしろ東晋、あまつさえ慕容氏になびいた。頼みの綱の漢人勢力に期待できず、東晋



からは援助を受けるどころか切り崩しにあい、胡人の激しい敵意と増悪にさらされた冉魏政権は、孤立無援のまま胡人勢力の集中攻撃を浴びてその短い歴史を終えたのである。

先述のように、冉閔は三五二年四月慕容儁に大敗して斬られた。そして同年八月鄴は慕容氏軍の攻撃の前にあえなく陥落、冉閔の遺児智を始め政府首脳は捕虜となって薊に送られ、冉魏は完全に滅亡した。その際数人の漢人官僚が自殺した。政権滅亡に際して漢人官僚がこれと運命を共にするなどこの時代には希有のことである。これは漢人政権の冉魏だからこそその悲劇であり、当時胡漢の民族対立がいかに激烈なものだったかを如実に示す出来事であった。だが漢人イデオロギーを振りかざして胡人に戦いを挑んだ冉魏政権は、慕容氏の精鋭によつてあつて粉砕された。圧倒的な胡人勢力の前に華北の漢人は無力であった。胡人による華北支配という大勢の中では、冉閔の「抵抗」はささやかなものに過ぎなかったのである。

<sup>1</sup> 冉閔の父冉良は後趙の初代皇帝石勒に捕らえられ、石瞻と名を改めて石虎の養子となった。従つて冉閔は石虎の養孫であり、後趙が存続している間は石閔の名で史料上に登場し、本来の冉姓に復したのは魏建国後である。本文では専ら魏建国後について扱うので、以後冉閔と呼称する。

<sup>2</sup> 『晋書』卷一百七「石季龍載記下」に

太宰趙鹿・太尉張舉・中軍張春・光祿石岳・武衛張李及諸公侯・卿・校・龍騰等万余人出奔襄國。石祗奔拋冀州、撫軍張沈屯金口、張賀度拋石洸、建義段勤拋黎陽、寧南楊羣屯桑壁、劉国拋陽城、段龕拋陳留、姚弋仲拋混橋、符洪拋枋頭、衆各数万とある。

- 3 後趙末期から冉魏にかけての政局については、大沢陽典「李農と石閔——石趙末期の政局——」『立命館文学』三八六—三九〇、昭和五十二年）に詳しい。
- 4 劉羣は西晋の并州刺史劉琨の子。崔悦は清河崔氏、廬湛は范陽廬氏の出身である。
- 5 『晋書』卷一百七石季龍載記に
- 閔遂劫李農及右衛王基、密謀廢遵。使將軍蘇亥・周成率甲士三十執遵于如意觀。
- とある。
- 6 『晋書』卷一百七石季龍載記下に
- 閔既為都督、総内外兵權、乃懷撫殿中將士及故東宮高力万余人、皆奏為殿中員外將軍、爵閔外侯、賜以宮女、樹己之恩。
- とある。
- 7 『晋書』卷八穆帝紀及び卷七十七殷浩伝。
- 8 『晋書』卷一百七石季龍載記下に
- 閔徐州刺史周成・兗州刺史魏統・豫州牧冉遇・荊州刺史楽弘皆以城歸順。平南高崇・征虜呂護執洛州刺史鄭系、以三河歸順。
- とある。但し『晋書勳注』が指摘するように、「冉遇」は『晋書』穆帝紀、謝尚伝、苻健載記、及び資治通鑑のいずれもが「張遇」に作つており、「張遇」とするのが正しいと思われる。
- 9 『晋書』卷七十九謝尚伝、卷一百七石季龍載記下。
- 10 『晋書』卷八穆帝紀、卷一百七石季龍載記下。
- 11 この時期の慕容政権が冀州、幽州出身者を多く登用していたことは、小林聡「慕容政権の支配構造の特質——政治過程の検討と支配層の分析を通して——」『九州大学東洋史論集』十六、昭和六十三年）に詳しい。
- 12 資治通鑑卷九十八穆帝永和七年条。

## 第二部 五胡十六国時代前期における民族関係——冉魏政権をめぐって

表1 冉魏政権中央将相一覧

	冉魏における官職	後趙の官職	備 考
李農	太宰・領太尉 大司馬・録尚書事	司空	350年4月冉閔に誅される
申鍾	司徒、太尉	侍中、司徒	352年8月冉魏滅亡時慕容氏に降る
郎闔	司空、司徒	光祿大夫、司空	352年4月冉閔が慕容儁に敗れた際自殺
石璞	司空	侍中、司徒	351年3月石祗に大敗した際死す
條攸	司空	太常	352年8月冉魏滅亡時慕容氏に降る
劉茂	司徒		352年8月冉魏滅亡時に自殺
董閏	大司馬		352年4月冉閔が慕容儁に敗れた際戦死
蔣幹	大將軍		352年8月冉魏滅亡時東晋に亡命
董閏	大將軍		352年4月冉閔が慕容儁に敗れた際捕えられる
冉胤	大单于		351年3月石祗に大敗した際死す
韋謏	光祿大夫	尚書、侍中、太子太傅	350年11月冉閔に諫言し誅される
王謏	尚書令	侍中	350年4月冉閔に誅される
徐機	尚書令	佐室	351年3月石祗に大敗した際死す
王簡	尚書令	尚書令	352年8月冉魏滅亡時に自殺
劉羣	尚書左僕射	中書令	352年4月冉閔が慕容儁に敗れた際自殺
張乾	尚書左僕射		352年8月冉魏滅亡時に自殺
張良	尚書右僕射	右僕射	
劉琦	尚書右僕射		351年3月石祗に大敗した際死す
郎肅	尚書右僕射		352年8月冉魏滅亡時に自殺
劉休	尚書		351年3月石祗に大敗した際死す
李垣	中書令		352年8月冉魏滅亡時慕容氏に降る
廬湛	中書監	常侍、侍中	351年3月石祗に大敗した際死す
聶熊	中書監	国子祭酒	352年8月冉魏滅亡時慕容氏に降る
王衍	侍中		350年4月冉閔に誅される
李淋	侍中		351年3月石祗に大敗した際死す
繆崇	侍中		352年8月冉魏滅亡時東晋に亡命
劉述	侍中		352年8月冉魏滅亡時東晋に亡命
嚴震	中常侍	中常侍	350年4月冉閔に誅される
趙昇	中常侍		350年4月冉閔に誅される

出典は『晋書』『資治通鑑』『魏書』『北齊書』『周書』『宋書』『南齊書』『梁書』『北史』『南史』『十六国春秋』に拠った。

表2 冉魏政権刺史・太守・将軍一覧

	冉魏における官職	後趙の官職	備 考
籍 翬	司隸校尉		352年8月冉魏滅亡時慕容氏に降る
劉 準	渤海太守、幽州刺史		351年4月慕容氏に降る
周 成	徐州刺史		351年12月東晋に帰順
魏 統	兗州刺史		351年12月東晋に帰順
張 遇	予州牧		351年12月東晋に帰順
楽 弘	荊州刺史		351年12月東晋に帰順
鄭 系	洛州刺史		351年12月呂護に捕えられ東晋に帰す
王 擢	秦州刺史	西中郎将	匈奴人。352年7月東晋に降る
王 午		幽州刺史	352年4月慕容氏に敗れ敗走
逢 約	渤海太守		351年8月慕容氏に敗れ東晋に亡命
侯 龕	中山太守	段遼の上谷相	351年8月慕容氏に降る
賈 堅	章武太守		351年8月慕容氏に降る
李 邦	趙郡太守		351年8月慕容氏に降る
蘇 亥	常山太守		352年8月慕容氏に敗れ敗走
王 朗		車騎将軍	350年石祗に奔る
麻 秋		征東将軍	350年符洪に降る
張 温	車騎将軍		352年4月慕容氏に敗れ捕えられる
胡 睦	車騎将軍		
王 泰	衛将軍		351年3月誅殺される
高 崇	平南将軍		351年12月東晋に帰順
白 同	寧北将軍		351年4月慕容氏に敗れ戦死
田 香	龍驤将軍		352年8月慕容氏に内応
呂 護	征虜将軍		351年12月東晋に帰順
劉 寧		安西将軍	352年8月冉魏滅亡時慕容氏に降る
桑 坦	南蛮校尉		東晋に捕えられる
馬 願	長水校尉		352年8月慕容氏に内応
劉 猗	譚事		352年8月東晋へ使者となる
崔 通	将軍		
孫 威	将軍		
金 光	蘇亥の将		352年8月慕容氏に敗れ斬られる
鄭 生	蘇亥の将		352年8月慕容氏に敗れ斬られる

出典は表1に同じ。

## 第三部 五胡十六国時代後期における遊牧民の活動——大夏と統万城

### 第一章 代来城の位置と統万城

はじめに

代来城は匈奴鉄佛部の劉衛辰が三七六年現在のオルドス地域<sup>1</sup>に築いた城である。しかし三九一年に鮮卑拓跋部の北魏に攻め落とされ、五世紀後期に北魏が軍事拠点として使用したもの、間もなく放棄されその位置も定かなくなってしまった。その後代来城の位置については諸説あったが、はっきりと確定はできなかった。一九八七年に戴応新氏が榆林市西方の白城台遺跡の現地調査を行ってこれを代来城と主張し、一九九一年に白城台は代来城遺址と認定された<sup>2</sup>。

私は二〇〇一年八月二三日にこの白城台遺跡を調査する機会を得た。代来城は、劉衛辰の子赫連勃勃が築いた統万城と共に、白い城壁を持つ独特の築城法で知られているが、その工法の様子も実見し、この遺跡の重要性をあらためて認識した。

そこで本章では白城台遺跡の現状について述べるとともに、併せて代来城遺跡の位置に関する研究史にも触れ、代来城遺跡の位置についてあらためて考察したい。



# 一 代来城の沿革

最初に代来城の建設と放棄の沿革について簡単に紹介する。

代来城を建設した劉衛辰は匈奴鉄佛部の首長で、当時オルドス一帯に勢力を持っていた人物である。匈奴鉄佛部は元来現在の山西北部に居住しており、三国西晋時期には匈奴南单于の配下にあつて、五部匈奴の一翼を担っていた。南匈奴单于是、その祖である呼韓邪单于が漢の皇室と通婚したことから、三国時代以降劉姓を称していたが、鉄佛部の首長劉氏一族もその姓からも判るように匈奴单于の末裔である<sup>3)</sup>。しかし西晋光熙元年（三〇六）、時の首長劉虎が反乱を起こし、西晋の并州刺史劉琨の要請を受けた鮮卑拓跋部に撃破され、オルドスに逃れた。

これより先、西晋は八王の乱により内乱状態に陥り、三〇四年これに乗じて南匈奴单于の劉淵が山西に「漢」を建国していった。「五胡十六国時代」の始まりである。三二二年には「漢」軍が西晋の首都洛陽を陥落させ、西晋は事実上滅亡した。鉄佛部はしばらくオルドスに逼塞していたが、三二四年に劉虎は同族のよしみもあつて、「漢」皇帝劉聡より楼煩公・監鮮卑諸軍事・丁零中郎将に任じられ、山西北部に帰還した。劉虎は三一七年に拓跋部を攻めたが大敗し、劉虎自ら単騎塞外に逃亡し部衆の一部が拓跋部に降伏するほどの打撃を受けた。劉虎と鉄佛部衆の多くは再びオルドスに逃れ、以後この地において活動していく。

劉虎は「漢」滅亡後は華北を制した後趙と関係を結び、三四一年には後趙と結んで拓跋部を攻撃するも返り討ちにあい、彼は間もなく死去した。劉虎の後を継いだその子劉務桓は、よく部衆をまとめてオルドスにおける勢力を築き、後趙より平北將軍・左賢王・丁零单于に任じられたが、拓跋什翼健の娘を妻に迎えてこれとも友好関係を保った。劉務桓が三五六年に死去すると鉄佛部は内乱状態に陥り、務桓の弟閼陋頭、務桓の子悉勿祈と覇権が移り変わったが、悉勿祈の弟衛辰が部衆を統一した。劉衛辰は三六一年には務桓と同様に拓跋什翼健の娘を妻に迎え、拓跋部とは引き続き友好関係を維持したが、オルドスの南方



関中を支配する前秦にも好を通じていた。三六五年には拓跋什翼健が兵を率いてオルドスに攻め込み、これ以後拓跋部はたびたびオルドスに侵攻し、三七四年に劉衛辰は大敗して前秦に亡命した。前秦天王苻堅は援軍を与えて衛辰をオルドスに復帰させ、以後衛辰は前秦に臣従する。

三七六年、既に華北を統一していた前秦は、劉衛辰を先導とし二十万の大軍を派遣して拓跋部を討ち、拓跋什翼健は敗死し拓跋部の勢力は一旦解体した。苻堅はこの地域を黄河を境として東西に分割し、黄河以東を劉庫仁に、黄河以西を劉衛辰に任せた。衛辰は西单于となりオルドスにおける覇権を確固たるものとした。これがオルドスにおける匈奴鉄佛部第一の全盛期と言えるだろう。劉衛辰はこの時に代来城を築きこれを本拠地とした。<sup>4</sup>

しかし三八三年に前秦が淝水の戦いに敗れ崩壊すると、鉄佛部の覇権も揺らぎ始める。かねて拓跋部に同情的だった東单于劉庫仁に匿われていた什翼健の遺児拓跋珪は、三八六年に自立し四月には魏王を称した。北魏の建国である。ここに拓跋部の勢力が再興した。宿敵拓跋部の復活は鉄佛部にとって重大な脅威であり、三九〇年に劉衛辰はその子直力鞬を派遣してこれを攻めたが敗れた。翌三九一年には再び直力鞬を遠征させるが大敗し、拓跋珪は勢いに乗じて黄河を渡りオルドスに侵攻、代来城を攻め落とし鉄佛部を徹底的に撃破した。鉄佛部衆は散り散りとなり、劉衛辰は西方に逃れたものの部下に殺され、その一族の多くも捕らえられ、拓跋珪は衛辰の首と大量の家畜を戦利品として東方に凱旋した。<sup>5</sup>

この時衛辰の子劉勃勃は追求を逃れて鮮卑薛干部、さらに鮮卑多蘭部の没奕于の下に亡命し、三九五年には当時関中を支配しオルドスにも影響力を及ぼしていた後秦より安北將軍・五原公に任じられ、その後援を得てオルドスに復帰する。彼は四〇七年には後秦より自立し、姓を赫連と改め天王・大单于を称し国号を大夏とし、初めはオルドス一円から後には関中にまで覇を唱え、東の北魏と拮抗する華北西部の最強勢力を築き上げた。赫連勃勃が四一三年に無定河畔に築いたのが統万城である。統万城は現在も陝西省靖辺県白城子の地にその偉容を誇っている。代来城が当時大夏国の領域内にあったのは言うまでもないが、史料上には全く登場しないため、どのような状態であったのかは明らかでない。

四二五年に赫連勃勃が死去すると大夏国はたちまち傾き、四二七年には北魏軍が統万城を攻略、オルドスは北魏の支配下に入った。北魏はその後も代来城を使用しており、オルドスに徙民した敕勒人が涼州に逃亡するのを防ぐため、ここに兵を配置している。<sup>6</sup>しかしこれより後、代来城は史料上に全くその名をあらわさなくなる。統万城が北魏以後モンゴル帝国期に至るまで一貫して重要な軍事拠点として史料に頻出するのと対照的に、代来城は全く忘れ去られてしまったのである。

## 二 代来城の位置に関する諸説

先述のように代来城は比較的早い時期に放棄され、その位置も忘れ去られてしまったようである。『水経注』等の後世の地理書は言うに及ばず、史料上にも全くその名は現れない。後に少なからぬ学者がその位置を問題にしたが、諸説紛々として定まらなかった。

胡三省は『資治通鑑』卷一百四孝武帝太元元年条の注に「代来城、在北河西、蓋秦築以居衛辰。」と記し、代来城は北河（陰山山脈南方で分流する黄河の北流）の西方にあるとする。しかしこれは統万城や劉衛辰の活動範囲とかけ離れた位置で、とても首肯できない。

顧祖禹『讀史方輿紀要』は代来城に言及するものの、その位置については卷三「州域形勢三」で「在今榆林衛北」、卷六十一「陝西十」では「在鎮北」と記すのみで、詳細な地点を比定していない。

楊守敬は、『水経注図』『歴代輿地沿革図』の中で代来城をウラムレン（烏蘭木倫）河上流、現在の内モンゴル自治区オルドス市エジンホロー（伊金霍洛）旗付近に比定した。楊はその根拠を記していないが、この説は後に広く踏襲された。譚其讓編『中国歴史地図集』が代来城をエジンホロー旗としたのは、やはり楊説に従ったものだろう。しかしその地に代来城に比定されるべき遺跡は存在せず、結局推定の域を出ないと言わざるを得ない。

日本では前田正名が代来城は統万城と同一位置あるいはほど近い無定河上流に在ったはずと主張し<sup>7</sup>、また田村実造が代来城は即ち統万城であるとの説を唱えたが<sup>8</sup>、いずれも根拠を詳説していない。

これに対し戴応新は一九八七年に榆林市西方の白城台遺跡の現地調査を行い、その成果をふまえて白城台こそ代来城であると主張した。戴がこのように考える根拠は四つある<sup>9</sup>。

第一に、北魏軍の侵攻経路から見て地理的位置が符合している。北魏の根拠地である平城（山西省大同市）からオルドスに入る場合、黄河湾曲部東北の君子津を通るのが一般的だが、北魏が劉衛辰を破った時はそこを通らず遠回りして、現在の包頭付近の金津から黄河を渡った。これは君子津から白城台までの道は山岳丘陵地で攻めにくい<sup>10</sup>が、金津からは一面の平地で大変攻めやすいからである。この金津から白城台までの間に、現在までのところ城跡は発見されていないので、白城台以外に代来城はあり得ない。第二に、劉衛辰は北魏に敗れて西方に逃走したが、彼とその家族が捕まった場所（現在の寧夏回族自治区塩池県付近）は全て白城台の西南にあり、これは史実と地理的に合っている。第三に、北魏は後に河西（黄河以西）に移住させた敕勒人が涼州に逃亡するのを防ぐため、五原黄河北岸と代来城に兵を配置したが、これは西方への逃亡を防ぐのだから、代来城は榆林以西の無定河流域にあったはずである。第四に、白城台と統万城は色も材料も工法もよく似ている。戴氏は両者を比較し、石灰を使用し城壁はどちらも石灰色であること、四周に敦台や角楼を築き城門に瓮城があること、版築は堅固で各層の厚さも比較的近い（白城台は八く十三センチ、城角部では五センチ）ことを類似点として挙げる。また白城台と統万城はわずか五十キロしか離れておらず、統万城は白城台から西南への逃走経路の途上にあり、赫連勃勃にしてみれば熟知した土地で、城を築くのに好条件であることも指摘し、根拠の一つに挙げている。

私は戴の示す根拠の全てに必ずしも賛同するものではない。第一の北魏の侵攻経路に関して言えば、代来城にほど近いはずの統万城を攻撃する際、北魏軍が二回も君子津を渡ったことをこれでは説明できない<sup>10</sup>。また第三の根拠も必ずしも十分なものとは言えない。とはいえ第二の根拠は充分首肯できるものである。またたとえ戴の挙げる根拠のいくつかが必ずしも十分な説

得力を持たないにせよ、代来城をエンジンホロー旗付近に比定することはさらに根拠が薄く、全く肯定できない。さらに私は白城台遺跡を調査し、戴の述べるように統万城との類似性が著しい様子を実見したことから、現時点では白城台遺跡を代来城とするのが最も妥当であろうと考える。白城台はまだ本格的発掘が行われておらず、現在までのところ明確な年代を特定できる遺物は採集されていないため、これを代来城と確定するには至っていないが、その可能性は極めて高いと言えるだろう。

この白城台遺跡は放棄された後、オルドスの沙漠中に千数百年に渡り放置されてきたのだが、巨大な構造物であるため、その来歴は不明でも故城址らしきものが存在しているということは、当地の人々に認識されてきたようである。光緒三十四年（一九〇八）撰の『綏遠全志』は、卷三「故城郡県考」で代来城について「在左翼界内」<sup>11</sup>と記すだけだが、「伊克昭盟旗故城廢州」の中に故白城という地名を挙げ「在右翼前旗内、直榆林西」と記している。鄂尔多斯右翼前旗は現在のウーシン旗に当たり、また榆林の真西ということから、この故白城は白城台である可能性が高い。また民国十八年（一九二九）刊の『横山県志』は古蹟として白城台を挙げ「在波羅口外五十里、無定河西。城係白土、所築甚大、四門宛存」と記す。これは位置から考えても城の様子から考えても、明らかに現在の白城台である。

このように白城台は代来城としてではなく一故城址としては文献記録に記載されてきた。しかし本格的調査が行われなかったため、一九八七年までは来歴不明の古蹟とされてきたのである。

### 三 白城台（代来城）遺跡の現状

次に二〇〇一年八月二三日に私が調査する機会を得た白城台遺跡の状況について紹介したい。

私は一九九六年八月に統万城には行ったが、<sup>12</sup>統万城を築いた赫連勃勃の父劉衛辰の築いた代来城とされる白城台遺跡を調査する機会はなかなか無かった。二〇〇一年八月、陝西師範大学西北歴史環境変遷与经济社会发展研究中心の先生方から、陝西

省榆林地区文物管理会主任の康蘭英先生をご紹介いただき、康先生の安排により調査することができた。<sup>13</sup>

当日は文物管理会副主任の喬健軍先生（現主任）と、同会研究員の周建氏が同行して下さった。喬先生は西北大学考古系の出身で、西北大学教授だった戴応新氏が一九八七年に白城台に第一回調査を実施した際調査隊に加わった。以来現地で行われた白城台への調査の全てに参加しており、白城台は既に四回目である。

白城台遺跡は榆林市のほぼ真西四十キロの地点にある。車は市街地を抜けるとすぐ沙漠に入る。遺跡に向かう道はまっすぐ西に延びている。街から少し離れると道は全く舗装されておらず砂利も敷いていない砂の道となる。所々穴があいており時々ひどく揺れる。運転手は巧みに穴を避けるのだが、その結果蛇行運転となり少し車酔いする。しかし喬先生の話では、一九八七年の第一回調査の頃は今よりも道が悪く、雨が降ってドロドロになってしまったという。走ること二時間あまりで巴拉素（バラス）鎮に着き、ここから十分足らずで白城台に着く。巴拉素鎮から道は南下し遺跡の西側に到着した。周りは本当の沙漠で何もない。城の西側に申し訳程度にトウモロコシ畑と防砂林があるだけである。東方数キロ先に低い尾根がありそこには漢代と明代の長城がある。あとは薄い黄色の沙漠が延々と続くばかりである。

白城台遺跡は先述のように戴応新を中心とする西北大学の調査隊が二度に渡り調査し測量している。それによると城はほぼ正方形を呈し、北壁は四六五メートル、西壁は四八〇メートル、南壁は四七〇メートル、東壁は四八五メートル、壁の厚さは十二〜十五メートル、城内外が砂丘に覆われているため城壁の基底部は埋没し、壁の残高は三〜五メートル、版築の一層は八〜十三センチだが、城門部分は堅固で五センチ、となっている。

西の城門から時計回りに歩き始める。西の瓮城は比較的よく保存されており載隊も詳しく測量している。ここが城の四つの門のうちで最も瓮城の残りがよい。壁自体はかなり風化しているが、黄色い砂の中から白い土塁状のものが一、二メートル突きだしている。現状でも白い土塁に囲まれた四角形の空間が確認でき、ここが瓮城であることが見て取れる。

白城台の城壁は統万城との著しい類似が指摘されている。統万城はその特異な工法で知られている。城壁は一般的に土（当



地の場合は黄土」を材料とするが、載説によれば統万城は砂、粘土、石灰を混ぜて水を加えたものを材料としている。これはいわばセメントに類するもので（統万城は生石灰を用いたので厳密にはセメントではないが）、単なる土に比べ遙かに強靱である。<sup>14</sup>石灰に水を混ぜると膨張して熱と水蒸気を発する。『晋書』卷一百三十赫連勃勃載記はこの様子を「蒸土築城」と記している。このような特殊な材料を使用しているため、統万城は極めて堅固で現在に至るまでよく保存されている。石灰で造られているため城全体が白く地元では白城子と呼ばれている。

白城台の城壁も白く確かに統万城によく似ている。周囲の沙漠の砂が黄色いので、壁が相当風化し砂丘に埋もれかかっている部分でも、白い色が浮き出ており城壁の跡を追うことができる。しかしそれほど固くは造られておらず、手で触るとざらざらとして削れてしまう。また色も白いことは白いが統万城のように純白に近くはなく、灰色を帯びている。おそらく石灰の量も少ないのだろう。西壁で版築の厚さを計ってみたところ、七、十センチで統万城のように緻密ではない。保存状態がよくないのはこのせいもあるだろう。喬先生のお話では、白城台の城壁は統万城同様石灰を用いているが、統万城よりは粗く作り方も雑である。ただ色については前日雨が降ったので湿って灰色になったらしく、普段はもう少し白いう。

西門から北に向かうが、城壁はかなり風化し版築の芯の最も堅い部分を残して削り取られており、基層から版築の跡がくつきりと階段ピラミッド状になって残っている。統万城の壮麗な保存状態とは雲泥の差である。城の西北角付近は風化が激しい。やはり冬の季節風の影響であろう。上に厚く砂が被さり木や草が生えていて壁は見えない。風化して壁の原形を留めず白い土塊と化している部分も多い。北壁に行くともた砂の中から階段状の壁が突き出している。壁の上部や日向の部分は乾いて白いが、基盤や日陰部分はまだ水を吸って灰色を呈し、所々苔が生えているようにも見える。この付近の版築は十二センチ程度の部分もある。

西壁北壁はかなり風化しており残存部分も高させいぜい一、二メートル程度だが、北東角はかなり保存状態がよい。地上から五、六メートルも突きだして、まさしく城壁という風情である。基台の厚さも十メートル近い。私は喬先生と一緒に壁

の上を歩いたがかなり高く感じる。但し城壁が完全に残っているわけではなく、上部は三角錐型に削られてしまっているので、城壁の上を歩くことはできない。北東の敦台ははっきりと原形を留めているわけではなかったが、角の部分は崩壊せずに北壁と東壁がきちんと繋がっていて、九十度の角度で城壁が角を作っているのがよく判る。

北東角から南下するとまた所々砂に埋まった部分があり、また階段状の残存部分も交互に出現する。東門の部分は残りがよい。瓮城は確認できないが城門両脇の城壁部分とおぼしき部分がよく残り、中央の門のあるべき所だけぽっかりと壁が途切れている。南壁も所々はかなり高い壁が残っている。南門も保存状態良好で、基層が厚く高さ五メートル程の壁が東西十数メートルに渡り残っている。ただ城門付近の壁の穴にスズメバチが巣を作っていて、残念ながらあまり接近する事はできなかった。東南角から西門までの城壁はかなり風化していて、砂の上にわずかばかりの白い土が顔を覗かせる程度である。

南壁まで城内に人の痕跡はなく全くの沙漠であった。城内に所々木が植林しており、東北角で枝の剪定作業をしに来ていた二人の作業員に出会ったくらいのものである。ところが南東角に近づくとも城内に畑が出現し、南東角敦台上に農民が版築の小屋を造り木の柵で囲っている。どうも家畜小屋のようである。喬先生によれば、これは明らかな法律違反で遺跡破壊だが、文管会は警察ではないからどうにもできない、とのことであった。西門から見た城外のとうもろこし畑も、この農民のものらしい。

こうして我々は城を約一時間かけて一周した。一六〇〇年以上前に建設された城としてはよく残っていると言いきだろうが、かなり風化が進んでいることは明らかである。しかも陝西省の文化財行政は漢・唐に手厚く他の時代には冷淡というのが一般的傾向で、これは榆林地区でも例外ではなく、考古発掘は漢墓を中心に行われ、白城台については二〇〇一年現在、本格的発掘計画も何らかの遺跡保存措置をとる予定もないということであった。この遺跡の重要性を考えれば、遺憾千万と言うほかにない。

劉衛辰の子赫連勃勃が築いた統万城は、その歴史的重要性もさることながら今や観光の目玉として期待され、既に統万城に



至る道路は整備され、地元政府は遺跡保存措置にも着手している。白城台にも何らかの保存措置がとられ、この貴重な遺跡が後世に末永く伝えられるようにすべきであろう。

#### おわりに

以上代来城と比定される白城台遺跡の位置と状況について述べてきた。康蘭英先生によれば、この遺跡を調査した外国人は私が初めて（二〇〇一年八月現在）ということである。

白城台遺跡を代来城と考えた場合、統万城とは五〇キロ足らずしか離れていないことになる。代来城をエジン・ホロー旗と考えた場合は、統万城より北に一〇〇キロ程度離れており、このことから劉衛辰およびそれ以前の匈奴鉄佛部はオルドス中央部を本拠地とし、ある程度広い活動範囲を持っていたと考えられていた。ところが白城台遺跡は統万城からほど近く、また劉衛辰が拓跋部に敗戦し捉えられた場所も統万城のすぐ西なので、このことから鉄佛部の本拠地はオルドス東南部に限られ、活動範囲はかなり狭いものと考えられる。

赫連勃勃は後秦の庇護下にあった際、オルドス東南縁と黄土高原北部を季節移動していた。これは鮮卑拓跋部に圧迫されてオルドス中央部から北部に進出できなかったための、やむを得ぬ行動と考えられていた。赫連勃勃にオルドス中央部進出の意図があり、それが鮮卑拓跋部のために阻まれていたのは事実だが、代来城の位置を考慮すると、匈奴鉄佛部の本拠地がそもそもオルドス東南縁であった可能性が高い。ここは農牧交錯地域であり、匈奴鉄佛部が赫連勃勃以前より、農耕が行われていた地域と深い関係を持っていたことを示している。これは赫連勃勃と大夏国の行動と発展過程を考察する上で、大変重要な点である。

大夏国は従来赫連勃勃の一代王朝であるかのようにみなされてきた。赫連勃勃という不世出の英雄あつての大夏国であることは言うまでもないが、そこには劉衛辰と代来城という原型ないし前段階があり、赫連勃勃はその基礎の上にこれを大きく発

展させたと考えるのが妥当である。五世紀前期に興起し大国となった大夏国は、劉衛辰と赫連勃勃の親子二代に渡る苦闘の産物であり、オルドスにそびえる代来城・統万城という二つの白い城は、それを象徴する建築物とすることができるだろう。

<sup>1</sup> 黄河上流湾曲部に囲まれた黄河右岸の地域。現在の行政区画では内モンゴル自治区オルドス（鄂尔多斯）市及び陝西省の長城以北に相当する。その名称は十五世紀末にモンゴルを統一したダヤン・ハーンがこの地にオルドス万旗を置いたことに由来し、以来この地のモンゴル族は「オルドス部」と呼ばれてきた。なおこの地域は清代以来行政区画上イフ・ジョー（伊克昭）盟とされてきたが、二〇〇一年九月に盟を廃し、従来イフ・ジョー盟を形成していた一市七旗はオルドス市に改編された。同時に当地の中心都市である東勝市もオルドス市と改称した。

<sup>2</sup> 艾有為・李海如「榆林調査前秦代来城址——認定是赫連勃勃幼年所居故城」『中国文物報』一九九一年第二十六期

<sup>3</sup> 鉄佛部の祖については諸説あるが、内田吟風『北アジア史研究 匈奴篇』（同朋舎、一九七五年）は、南単于の一族で後漢末期に活躍した左賢王去卑としている。

<sup>4</sup> 「衛辰入居塞内、苻堅以為西單于、督攝河西諸虜、屯于代來城。」（『晋書』卷一百三十「赫連勃勃載記」）。「苻」堅後以劉辰為西單于、督攝河西雜類、屯代來城。」（『魏書』卷九十五「鉄佛劉虎伝」）

<sup>5</sup> 「後魏師伐之、辰令其子力俟提距戰、為魏所敗。魏人乘勝濟河、克代來、執辰殺之。」（『晋書』卷一百三十「赫連勃勃載記」）。「登國中、衛辰遣子直力鞬寇南部、其衆八九萬、太祖軍五六千人、為其所圍。太祖乃以軍為方營、並戰並前、大破之於鐵岐山南、直力 單騎而走、獲牛羊二十餘萬。乘勝追之、自五原金津南渡、逕入其國、居民駭亂、部落奔潰、遂至衛辰所居跋城。衛辰父子驚遁、乃分遣諸將輕騎追之。陳留公元虔南至白鹽池、虜衛辰家屬。將軍伊謂至木根山、擒直力鞬、盡并其衆。衛辰單騎遁走、為其部下所殺、傳首行宮、獲馬牛羊

四百餘萬頭。」〔《魏書》卷九十五「鉄佛劉虎伝」〕

6 「潔等固執、乃聽分徙三萬餘落於河西、西至白鹽池。新民驚駭、皆曰「圈我於河西之中、是將殺我也」、欲西走涼州。潔與侍中古弼屯五原河北、左僕射安原屯悅拔城北、備之。〔《魏書》卷二十八「劉潔伝」〕悦拔城は代来城の別名である。

7 「代来城と統万城が同じ位置に築かれていたか異なった位置か不明であるが、たとえ位置が異なってもそれほど遠く離れていないと考えられる。」〔《平城の歴史地理学的考察》、風間書房、一九七九年〕

8 田村実造『中国史上の民族移動期』（創文社、一九八五年）

9 陝西省文管会「代来城故址考古記」〔《考古》一九八一—三〕、載応新『赫連勃勃与統万城』（陝西人民出版社、一九九〇年）

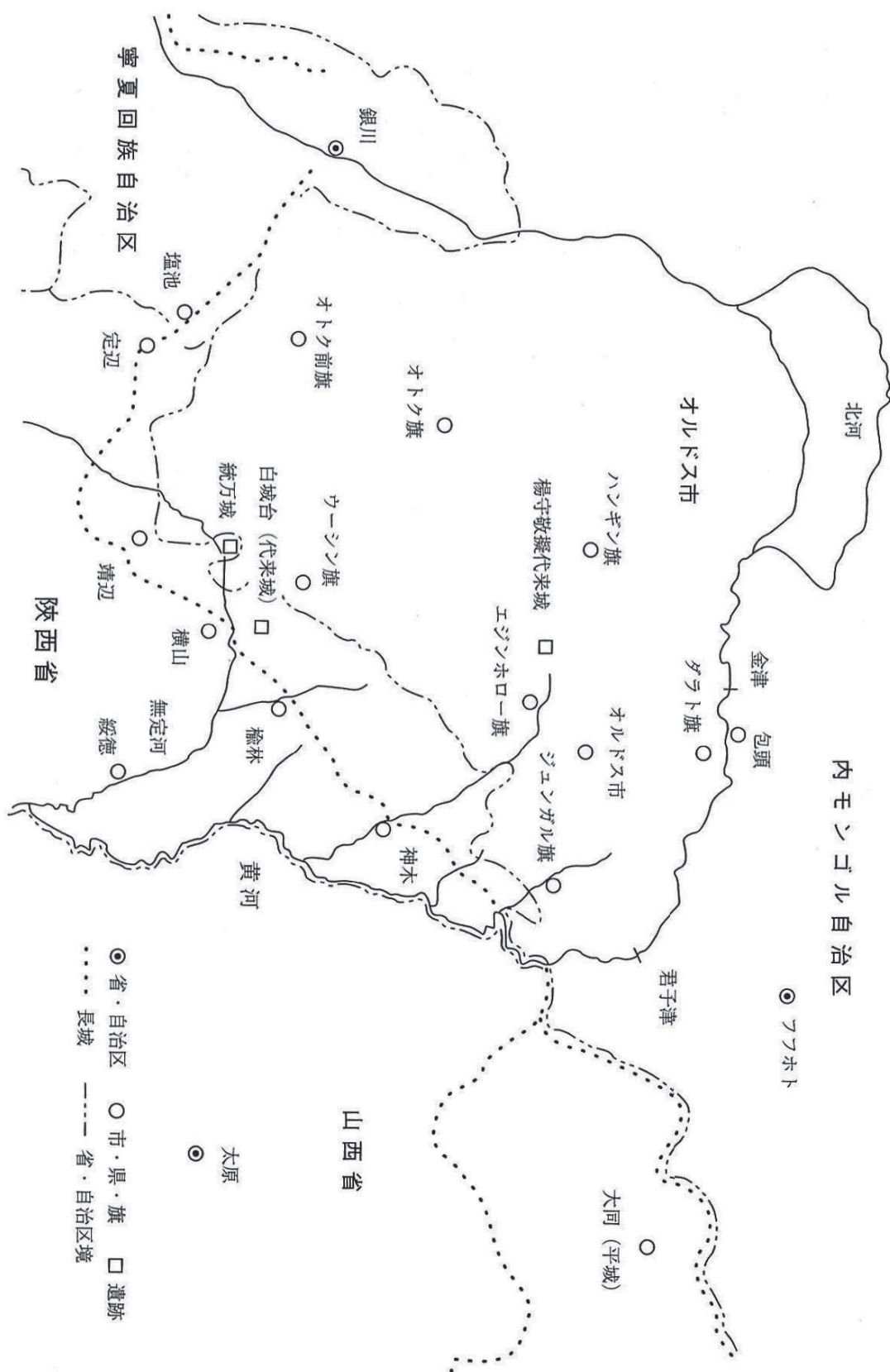
10 北魏は四二六年と四二七年にオルドスを攻撃し、四二七年には統万城を攻略しているが、この際二回とも君子津を渡っている。

11 伊克昭盟鄂尔多斯左翼前旗・中旗・後旗の境域内。現在のエジンホロー旗、ジュンガル（准格爾）旗、ダラト（達拉特）旗に当たる。明らかに白城台遺跡とは異なる。

12 この時私は陝西歴史博物館主催の「中国西北專線考察」団に参加しており、団として参観に訪れたものである。この調査の行程及び成果については、鶴間和幸編『黄土高原とオルドス——中国西北路寧夏・陝北調査記』（勉誠社、一九九七年）を参照されたい。

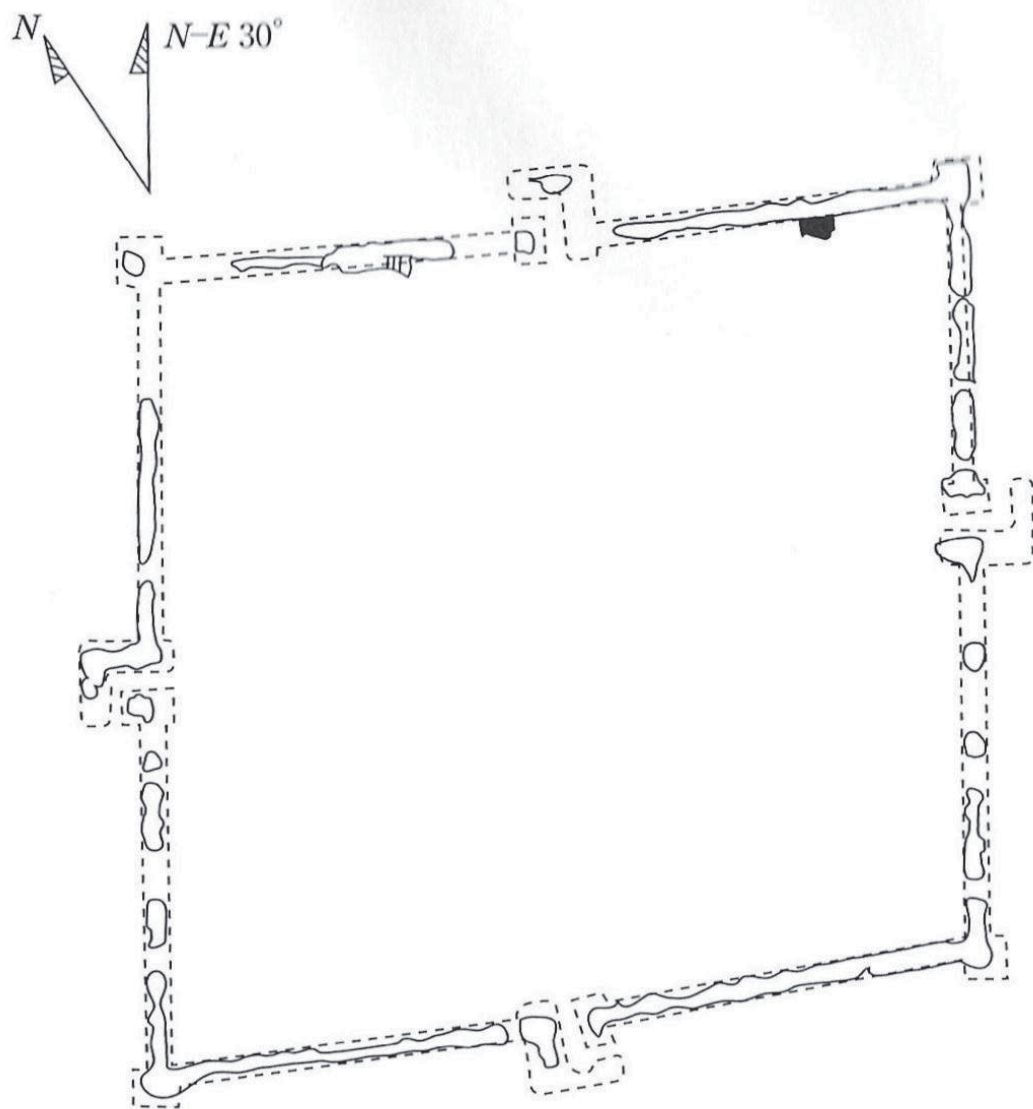
13 私の調査を許可し多くの便宜を図って下さった陝西省榆林地区文管会の康蘭英先生、喬健軍先生、周建氏、および文管会に紹介の労をとって下さった陝西師範大学西北歴史環境変遷与経済社会発展研究中心の侯甬堅先生、李令福先生、陝西省考古研究所の胡林貴先生に、この場を借りて深く感謝したい。

14 統万城の建築工法については諸説ある。これは第二章で詳説する。



<オルドス周辺地図>

譚其驤主編『中国歴史地図集』(地図出版社、一九八二年)を基に作成



—— 実測部分      - - - - 推測部分      馬道

白城台遺跡平面図（戴応新『赫連勃勃与統万城』より）

## 第二章 統万城の調査研究と戦略的位置

### はじめに

大夏統万城は現在の陝西省靖辺県白城子村にある。城は陝西省と内モンゴル自治区の境界付近に位置し、無定河の上流北岸にあり、白い城壁を持つことから地元では白城子と呼ばれている。無定河南岸にある最寄りの集落である白城子（白城則）村の名もこの城に由来する。

この城はオルドスを本拠地とし大夏（四〇七～四三二）を建国した匈奴鉄佛部の赫連勃勃によって、四一三年に築かれたものである。統万城は大夏の首都として繁栄したが四二七年北魏に攻め落とされ、間もなく大夏は滅亡する。北魏は統万城に統万鎮、次いで夏州を置きオルドス地方の要とした。唐はこの城を長安北方防衛の要衝として夏綏銀節度使を置き、ここは九世紀にはタングート族の根拠地となった。十一世紀初頭にタングートが宋の宗主権下から自立した際、この国は国号を「大夏」と称したが（北宋は「西夏」と呼んだ）、これは発祥の地夏州に由来する。統万城は十世紀に宋とタングートの係争地となるが、宋は九九四年に城を破壊して遂にこの地を放棄した。しかしこの破壊は徹底したものではなく、西夏は後にここに夏州を置いて対宋侵攻の拠点とした。西夏がモンゴルに滅ぼされると、統万城は砂漠の中で風化するに任されてきた。清の道光二十五年（一八四五）榆林知府で歴史地理学者として知られる徐松が、懷遠知県（現靖辺県）何丙勛に命じて現地調査を行い、白城子と呼ばれる廢墟がかつての統万城であることを発見した。考古調査が行われたのは中華人民共和国成立後のことである。

統万城は一六〇〇年近く前に築かれたにもかかわらず、当時の姿を良く留める非常に貴重な遺跡で、魏晉南北朝時代史研究、都



市・建築史研究、環境史研究に極めて大きな意味を持っている。そこで本章では最初に遺跡の沿革を紹介し、次に遺跡の状況を概観し、研究史を簡単にまとめ、最後に統万城の地理的戦略的位置について考察したい。

# 一 統万城遺跡の沿革

先述のように、統万城遺跡は五胡十六国時代後期に大夏を建国した匈奴鉄佛部の赫連勃勃によって築かれたものである。赫連勃勃以前の鉄佛部の前史については第一章、大夏の建国と発展の経緯については第三章に詳述しているのでそちらに譲り、ここでは城の沿革について紹介する。

統万城は四一三年に建設が開始された。それ以前の赫連勃勃は特定の首都を定めず、オルドスと黄土高原の各地を転戦しながら後秦と攻防を繰り返してきたが、この年までには後秦を現在の陝北から駆逐して一定の安定した勢力範囲を確立していた。独立以来六年を経て満を持しての首都建設である。それだけに統万城の築城は大夏にとって極めて大きな意味を持ち、この年に建国以来の年号「龍昇」から「鳳翔」に改元している。さらに統万城の宮殿が完成し、東西南北の門を「招魏門」「服涼門」「朝宋門」「平朔門」と名付けて天下を服従させる意志を示した四一九年には、「真興」と改元し、高祖・曾祖・祖父・父・母を追尊し、赫連勃勃の功績をたたえる頌徳碑を立てている。この年は言わば第二の建国の年であり、都城統万城の完成が大夏において特筆に値する出来事であったことをよく示している。赫連勃勃は四一八年に東晋を破って長安を手中にし皇帝に即位したが、長安には南台を置き皇太子赫連昌を留め、自らは統万城にあって北魏に睨みをきかせた。長安を含む関中平原の征服までは、統万城は南方への攻撃拠点として機能したが、これ以後は対北魏の防衛拠点としての意味が強くなる。

四二五年に赫連勃勃が死去すると北魏は直ちに大夏に攻勢を加え、四二七年に統万城は北魏に占領され、四三一年に大夏国は滅亡する。北魏は統万城にはじめ統万鎮、四八七年に夏州を設置した。統万城はオルドスの要衝に位置したため、以後も重要軍事拠



点となり、これ以後は長く夏州と呼ばれることとなる。北魏の東西分裂時には東魏と西魏の間で争奪戦が展開され、隋末の動乱期には梁師都がここに拠って皇帝を称し、突厥と結んで南進を図り唐と衝突した。唐は六二八年に梁師都を滅ぼすと夏州に都督府を設置し、長安北方防衛の要地と位置づけた<sup>2</sup>。六三〇年に突厥第一帝国が崩壊すると多くの突厥が唐に降り、六七九年にはそれら投降突厥人を靈州から夏州の南に移住させて「六胡州」という六つの羈縻州を設置し、ここに住んだ者を「六州胡」と呼んだ。彼らはやがて反乱を起こしてオルドスを離れ、突厥第二帝国に加わっていく。七五五年に安史の乱が勃発すると夏州は両軍争奪の地となり、乱の平定後には有力将軍僕固懷恩がここに拠って反旗を翻した。安史の乱によって唐の西方領土が縮小し隴山山脈が国境となると、吐蕃がしばしば国境を突破して長安に侵攻し、夏州も七七六年から数回にわたり吐蕃の攻撃にさらされ、しばしば陥落している。

八世紀に吐蕃の圧迫を受け、青海方面から隴西を経て夏州付近に移住したタングート族は、唐と吐蕃の抗争の中で時に吐蕃、時に唐に服属して叛服常無い存在だったが、八八一年に首長の拓跋思恭が、黄巢の乱鎮圧に協力した功績で定難軍節度使・夏国公となり、李姓を賜った。これ以後五代から北宋初期まで、夏州は定難軍節度使を世襲するタングート族李氏の本拠地となり、中国本土の王朝からは半独立状態であった。九八三年に夏州節度使の李繼捧は開封に入朝して領地を宋に献じ、自らは開封に留まってしまった。これに対して弟の李繼遷は反発し、宋に反旗を翻した。李繼遷は九九〇年に契丹から夏国王に封じられていよいよ勢いを増し宋を苦しめた。定難軍節度使はもともと夏綏銀節度使と呼ばれ、夏州・綏州（現在の綏徳県）・銀州（現在の横山県）・宥州（現在の内モンゴル自治区オトク前旗）を管轄地としていたが、李繼遷は綏州、銀州を奪回し宋軍は夏州に孤立したため、九九四年に宋は夏州城を破壊して撤退し、李繼遷は夏州を奪回した。もっともこの時の破壊はそれほど徹底したものではなく、夏州はこれ以後も軍事拠点であり続ける。一〇〇二年に李繼遷は靈州を攻略し、翌年に西平府と改め本拠地とした。これによりタングートのオルドス制圧は完成した。

一〇〇五年に李繼遷の後を継いだ李徳明は宋より定難軍節度使・西平王に封じられ、契丹にも服属し、宋と正面切つての対立を

避けながら西方に勢力を拡大していく。この頃夏州は既にタングートの首都ではなかったが、一〇三八年に李元昊が皇帝を称し宋の宋主権下より独立した時の国号「大夏」は、発祥の地である夏州に由来する。対宋戦争において夏州は重要攻撃拠点となった。一〇八一年に宋が大軍を以て西夏を攻めた際、西夏は戦略的に撤退して宋軍を領内深くにおびき寄せる作戦をとったため、夏州は一時宋に占領されたが、間もなく西夏に奪回された。このように夏州は西夏にとって宋国境の重要軍事基地であった。

一二二七年に西夏がモンゴル帝国に滅ぼされた際、夏州統万城は放棄されたと言われてきた。しかし近年の研究により、統万城がこれで歴史から全く消え去ったわけではないことが明らかになってきた。一二六九年にモンゴル大ハーンクビライの子マンガラが安西王に封じられた際、その冬都は京兆（西安）、初期の夏都は固原に置かれたが、後に夏都はオルドスのチャガンノール城に移った。「チャガンノール」とはモンゴル語で「白い海（湖）」の意味であり、恐らく塩湖のほとりにあったと考えられる。これこそ統万城ではないかという説があり、かなり有力視されている<sup>3</sup>。また城の周辺では一四世紀頃の銅製の十字架（西安碑林博物館所蔵）などが発見されており、ネストリウス派のキリスト教徒だったモンゴルのオングート部が牧地としていたようである<sup>4</sup>。

明の勃興によりモンゴル帝国が中国を去った後、オルドスは一時的な明の支配を経てモンゴルの勢力範囲となり、統万城は長城外にあつて中国史料からは全くその痕跡を絶つ。これ以後は沙漠の中で文字通り放置されていたのであろう。このように統万城が一四世紀まで何らかの形で使われ続けていたとすれば、城として九〇〇年以上の歴史を有したことになる。統万城はオルドスの要衝に位置するため、常に軍事拠点として争奪の対象となってきた。しかもオルドス南部という、もともと草原だが農耕も可能な自然環境にあつて、遊牧民同士、あるいは遊牧民と中国王朝との戦火の舞台となった。黄色い沙漠の中に屹立する白い城は、極めてダイナミックな歴史を見つめてきたのである。

## 二 統万城の現況と考古発掘

統万城は中華人民共和国成立後に一定の考古学的調査が行われ、ある程度詳しい実態が明らかとなった。比較的近年では、一九九六年に陝西省文物局が城の周囲について調査を行い、また二〇〇二年からは陝西省文物考古研究所の邢福来を主任とする調査隊により断続的に発掘が行われ、より詳細な構造が明らかになりつつある。城には外郭と内城がある。外郭城については一九九六年に統万城周辺の古墓、無定河南岸の高台にある遺跡等と共に調査が行われ、二〇〇六年と二〇〇八年にはボーリング調査が行われ基本的な平面図が描かれた。外郭城の周囲は計一三八五メートル、南壁四八五・五メートル、東壁八九一メートル、西壁二〇〇メートル、面積は七・七平方キロという広大なものである。しかし外郭の遺跡はほとんど残っておらず、東南の無定河に臨む一部分に幅八メートル程、西北部に幅一メートル程しか残存していない。しかも東は内城に接近しているのに対し西は遙か遠方まで伸びて突出しており、いびつな形状である。あまりに異様な形なので外郭の存在への疑問も呈され、またその建設目的や用途にも諸説ある。

内城は東西に分かれ、西城は五胡十六国時代に夏の赫連勃勃によって築かれたもの、東城は後代（おそらくは唐代）に築かれたものである。城の規模は、西城は東壁六九二メートル、西壁七二一メートル、南壁五〇〇メートル、北壁五五七メートル、周囲計二四七〇メートル、基厚約一六メートル、東城は東壁七三七メートル、西壁七七四メートル、南壁五五一メートル、北壁五〇四メートル、周囲計二五六メートル、基厚約六・二メートル、東西城の周囲計三六五七メートルである。

西城と東城は築かれた時代も工法も異なるため、現在の状況もかなり異なる。東城は黄土の版築で基厚も薄いため風化に弱く、現在辛うじて痕跡はたどれるが往時の面影はなく、高さ数十センチから一メートル足らずの土塁状の遺構が残存しているに過ぎない。遺跡は風化にさらされかなりの部分が崩壊寸前である。

これに対して西城は、築城以来一六〇〇年近くを経た現在でも堅固な姿を留めている。これは城壁の材質及び工法によるところが大きい。赫連勃勃は統万城を築くに当たり、「蒸土築城、錐入一寸、即殺作者而併築之」（『晋書』卷一百三十赫連勃勃載記）と伝えられるごとく、徹底的に堅固を期した。城壁は一般的に土（当地の場合は黄土）を材料とするため黄土色だが、統万城は「白城

子」の名の如く白色を呈している。これは特殊な材料を使用しているためである。

統万城の材質については、大きく二つの説がある。一つは戴応新等の主張する石灰説である。この説によれば、統万城は砂、粘土、石灰（生石灰）を混ぜて水を加えたものを材料としている。これは言わばセメントに類するもので、単なる土に比べ遥かに強靱である。生石灰に水を混ぜると膨張して熱と水蒸気を発する。<sup>5</sup>「蒸土築城」とはこの有様を指した表現である。門田誠一は、このような石灰を主剤として粘土や砂と混合して固める工法は、日本における三和土と同様であると指摘する。<sup>6</sup>もう一つの説は白土説である。白土とはケイ酸塩鉱物であるモンモリロン石を主成分とする粘土鉱物で、現代では自然粘土である酸性白土を精製した活性白土を材料として、洗剤や石鹼等に使用される。現地では今も「白泥土」と呼ばれて採掘され、建築資材等に利用されている。石灰・白土ともオルドス地域で産出される。材料についてはより詳細な調査が必要だが、いずれにせよこのような特殊な材料を使用しているため、統万城西城は東城とは比べものにならない程よく保存されているのである。

先述のように『晋書』赫連勃勃載記によれば、赫連勃勃は堅固を追求するあまり城壁に錐を突き立てて堅さを試し、錐が一寸入れば工人を殺し死体を壁の材料として築城したという。もちろん死体を材料にしたとは考えられないが、堅固なことは間違いない。実際版築の層は一五〜二〇ミリ、薄い部分では一二〜一四ミリと極めて緻密に作られている。版築層のつなぎ目部分は風化にさらされて削り取られているものの、最も固い層中央部分はかなり厚くよく残っている。土の版築は手で触ればたちまち数ミリも剥落するのが普通だが、統万城の表面はざらざらした手触りで固く、触れても崩れることはない。特殊な材料と緻密な版築によって、統万城は現在でも驚くほどよく原形を留めているのである。

統万城の構造上の大きな特質の一つは、中国史上最初期に属する馬面が設けられていることである。馬面は防御効果を飛躍的に高める築城技術上の一大発明であり、<sup>7</sup>統万城西城には東壁に七ヶ所、西壁に九ヶ所、南壁に八ヶ所、北壁に十ヶ所ある。最も大きい南壁の馬面は広さ十八・八メートル、壁面から十六・四メートルも張り出している。西城の基厚は十六メートルなので、この部分では城壁は馬面を併せると何と三十四メートル以上の厚さを持っている。また西城の四隅には角楼があり、最大の西南隅角楼は

高さ三一・六メートルに達する巨大なものである。私は西北隅と東北隅の角楼に登ったことがあるが、周囲が全くの平坦地であるため遠望がきき、数十キロ先まで見渡せた。その戦術的有効性は絶大である。

西城の東西南北には瓮城がある。西壁の瓮城は厚い砂の下に埋もれていたが、二〇〇八年に陝西省考古研究所の邢福来チームによって発掘された。瓮城は南北三八・五メートル、東西二二メートル、瓮城内底部は南北二七・六メートル、東西一六・三メートル、深さ一〇メートル、城壁の厚さは三・八メートルあった。瓮城内に堆積した厚さ八メートルの砂を取り除くと、城内底部から隋代の墓、唐代のごみ捨て穴、井戸などが発見された。このことから遅くとも隋代には瓮城は使われなくなり廃墟になっていたと考えられる。城門は南向きに開かれていたが、版築で封じられていた。また瓮城に隣接する城内の宋代の堆積層から木炭層が発見され、宋が統万城を放棄した際、ここに火をかけて建築物が焼失した痕跡だと考えられている。

西城西南角楼は基底部分が砂に埋もれていたが、二〇〇二年に砂を取り除き発掘調査が行われた。統万城の建築面より深い部分にトレンチを空けて調査した所、細かい砂の堆積層が発見されたので、統万城は砂の上に直接建設されたことが明らかになった。またこの時の調査で角楼から一一・三メートル離れた所に堀が発見された。堀は幅七・一メートル、深さ二・二メートルで、堀の底部には厚さ〇・八メートルの版築層があった。発掘されたのは西南の二八・五メートルの部分だったが、ボーリング調査により、西城の南・西・北、東城の北・東には堀があることが判明した。堀の状態や版築の状況から、水のない空堀だと考えられている。

また二〇〇六年には西城南城壁に穿たれた竈洞が発見され、モンゴル帝国期の住居址とわかった。二〇一〇年には西城内でやはりモンゴル帝国期の住居址が発掘された。このことからモンゴル帝国期にも統万城内に人が居住していたことが確認された。

先ほどから統万城は保存状態が良いと述べてきた。確かに同時代に築造された他の城郭都市に比較すれば問題にならないほど良好な状態で、築かれてから一六〇〇年とは到底信じがたい。これは統万城が異常なまでに堅固に築かれたこと、現地が現在半沙漠地帯で雨による風化がほとんどないこと等による。しかしそれでも風化はかなり進行している。

統万城で最もよく原形を留めているのは南壁である。茫々たる砂丘の中に屹立する白い城壁は感動を誘うほどの壮麗さである。



南壁中央部から西南角楼に至るまでの南壁西半部は、完全に近い保存状態である。ところが西南角楼から西壁を北上して五〇メートル足らずで城壁は全く砂に埋もれてしまい、砂丘には木が点々と生えて遺跡の痕跡すら確認できない状態となる。七〇〇メートル余ある西壁の南半三〇〇メートルはこのような有様である。先述のように二〇〇八年に陝西省文物考古研究所の邢福来を中心とする調査隊によって西瓮城が発掘され、その周囲は砂が取り除かれ城壁が露出しているが、西壁の北半も砂上に統万城特有の白い土が顔をのぞかせ、かすかに城壁の痕跡をたどることが出来るものの、やはり砂丘に覆われていて城壁は砂の中に埋没している。砂上に切れ切れに現れる白い痕跡の先に堅固な西北隅角楼がそびえている以外は、西壁の北半はほぼ砂の中にある。北壁は壁としての体裁を保ちその上を歩くことも可能で、南壁ほどではないが比較的良好な状態である。東壁は北壁より風化しているが西壁よりはずつと良く、城壁の跡をはっきりたどることができる。西壁だけが砂中に埋没しているのは、冬季に吹き付ける強い北西の季節風のため、砂が城中に進入してきているからである。

風化を促しているのは自然だけではない。人間による破壊も無視できない。西城南壁・西壁・北壁には窖洞が穿たれ、私が一九九六年に初めて訪れた時には、城内のあちこちが耕地となっていた。一九九六年当時人が居住していたのは北壁の窖洞だけだが、畑ではきび、とうもろこし、ひまわり等を作り、豚小屋を営むなど本格的に腰を落ち着けていた。宮址とされる地点は一面の畑で、周囲には耕作の際掘り出された瓦が積み上げられていた。遺跡は白城子村の子供達の遊び場となっており、多くの家庭が拾った瓦当を所有していた。要は統万城遺跡には全く保存対策が施されていない状態であった。二十一世紀になってからは遺跡保護のため城内住民の移住政策が進められ、現在城内に定住する農民はいないが、夏期には依然として城内で耕作が行われ、かつての窖洞は農機具小屋として使用されている様子である。

### 三 統万城の調査研究

先述のように統万城の考古学的調査は中華人民共和国成立以後になって初めて行われた。最初は一九五六年、陝西省文物管理局と陝西省博物館合同の陝北文物調査征集組が、統万城の写真撮影し遺跡地上に散乱していた遺物を表面採集した。<sup>9</sup>ただしこの時は発掘調査は行っていない。一九六三年には歴史地理学者の侯仁之が北京大学地理系の学生を率いて現地調査を行い、統万城周辺のいくつかの故城趾も調査した上で、当地の自然環境変遷とりわけ沙漠化の問題について考察を行った。<sup>10</sup>この時に提起されたオルドスの自然環境変遷史の問題は非常に重要なもので、この後多くの学者が研究に携わることになった。一九六五年には侯仁之の学生で一九六三年の調査にも同行した朱士光が再度現地を訪れ調査を行っている。一九七五年から七九年にかけて陝西省文管会の載応新がたびたび調査を行い、初めて正確な測量を行って図面を作成し、馬面などについてボーリング調査と試掘を行った。<sup>11</sup>この測量において西城内に宮殿遺址らしきものが描かれたが、これは現在に至るも本格的な発掘が行われておらず、はつきりとしていない。

一九九二年に統万城の西一六キロの内モンゴル自治区ウーシン（烏審）旗で、大夏時代の古墓が発掘され、銅器や陶器等の副葬品と共に、夏の建威將軍・涼州刺史だった田Ⅱの墓誌が発見された。<sup>12</sup>これは大夏の墓誌としては初発見のものである。一九九六年には外郭城および周辺の遺跡に関する調査が行われた。二〇〇二年には陝西省考古研究所が西城西南角楼付近を発掘調査し、統万城建築面の下部地層に砂礫層を発見し、堀も発見した。またこの時西城城内の建築物（永安台）の崩落防止のため、基礎部分を煉瓦で覆い保護した。二〇〇四年には陝西省考古研究所と北京大学合同調査隊が外郭城を調査した。二〇〇六年からは統万城遺跡の調査と保護は国家プロジェクトとなり、二〇〇六年、二〇〇八年、二〇〇九年、二〇一〇年、二〇一一年と断続的に発掘調査が行われた。二〇〇八年には西城西瓮城が発掘され、二〇〇六年と二〇一〇年には城内のモンゴル帝国期の住居址が発掘された。このように少しずつではあるが、統万城遺跡はその全貌を明らかにしつつある。

歴史学の方面でも統万城は研究されているが、統万城の存在自体が研究における非常に大きな鍵になっているのが歴史地理学、特に自然環境変遷史の分野である。統万城は現在ではオルドス中央部に広がるムウス（毛烏素）沙漠の南縁に位置しているが、常識



的に考えて一国の首都を荒涼たる沙漠の上に建てるはずはなく、建設当初の環境は現在とは異なると考えられている。当時の環境を伝える最も有名な史料は次のものである。

初昌父勃勃遊契吳、昇高而歎曰「美哉斯阜、臨広沢而帶清流、吾行地多矣、未有若斯之美者」。『太平御覽』卷五五五引『三  
十国春秋』<sup>13</sup>

勃勃はそこでこの契吳山のほど近くに統万城を建設したという。これによれば統万城の周辺には湖や川があり、当然草原も広がっていたはずである。統万城のすぐ南に無定河があるので、史料上の「清流」はこれに比定できるが、現在「広沢」は跡形もなく、環境は大きく変わってしまったている。また四二七年六月に北魏軍が統万城を攻略した際「獲馬三十余万匹、牛羊数千万」『魏書』卷四上「世祖本紀四上」とあり、統万城を州治とする夏州には後に北魏の官牧が設置され、「世祖平統万、定秦隴、以河西水草善乃以為牧地。畜産滋息。馬至二百万余、駝将半之。牛羊則無數。」『魏書』卷一一〇「食貨志」とあることから、豊かな牧畜生産が可能な環境だったことがわかる。夏州近辺の塩州（現在の陝西省定辺県）、銀州、綏州には唐代にも官牧が置かれ、重要な軍馬供給地であった。<sup>15</sup> それでは統万城周辺はいつ頃から現在のような沙漠と化したのだろうか。

侯仁之「從紅柳河上的古城廢墟看毛烏素沙漠的變遷」は、この問題を本格的に追求した初めての論考である。侯はこの地はかつては沙漠ではなく豊富な水が存在したことを、現地調査の結果をふまえて指摘し、『三十国春秋』等の史料を引いて、統万城建築当時の環境は現在とは異なり草原であったとする。そして唐代の詩などに砂丘の記述が見え始めることから、この地の沙漠化は唐中期頃から始まったと結論する。

史念海は統万城の状況など様々な史料を駆使して、黄土高原やオルドス地域はかつては現在のような沙漠ではなく、広大な森林や草原が広がっていたと主張した。統万城の位置するオルドスは、匈奴が支配した時代は草原であったが、漢代には農業開発が行われて少なからず農地に変わり、また森林も伐採を受けて面積が縮小したが、魏晉南北朝時代には農民は撤退し遊牧民の居住地となったため、農耕は大幅に減少して草原に戻り、また一部では森林植生も復活したとする。<sup>16</sup> 史は黄土高原の荒廃やオルドスの砂漠

化は人間による環境破壊が主な原因で、ムウス沙漠が統万城付近まで拡大してきたのは唐代以降とする。史の説において、大夏から北魏時代の統万城の状況は重要な根拠の一つになっている。このような史の説は現在広い賛同を得ている。なお史の説の背景には、一九六二年に譚其驤が提起したいわゆる「後漢以降黄河長期安流説」の影響が大きいと指摘されている。<sup>17</sup> 譚のこの説は、後漢以降に遊牧民がオルドスや黄土高原に進出して農地が減少し草原牧地となったため、黄土高原の土壌浸食が緩和され、その結果後漢から唐末までは黄河の氾濫が比較的少なかったとするもので、賛否両論の議論を巻き起こしながらも、現在まで基本的には広く支持されている。

このように統万城はオルドスの自然環境史研究に極めて重要な意味を持ち、ムウス沙漠は人間の活動により唐代以降に拡大したという説の根拠として取り上げられてきた。このような点からムウス沙漠は「人造沙漠」とすら言われている。<sup>18</sup> これに対しムウス沙漠は歴史時代以前から既に広大で、専ら気候変化など自然要因によって形成されたもので、人間活動によって拡大したのではないという説もあり、主に自然科学方面の学者によって主張されている。趙永復は自然地理学の立場から、ムウス沙漠が人為的に形成されたという説に本格的に反論し、自然要因説を主張した。<sup>19</sup> 以後人為要因説と自然要因説が論争を繰り返しているが、自然要因説の論者は統万城についてはあまり言及しない。そもそも自然地理や自然科学の研究者は、歴史文献は断片的であるとか文学的表現は科学性に乏しいと言って、歴史史料の価値自体あまり認めようとしないので、話が全くかみ合わないこともしばしばである。<sup>20</sup> しかし自然科学的方法によつて人為要因説を裏付ける結論が導き出されることもあり、<sup>21</sup> 論争は未だに決着を見ていない。

先述のように二〇〇二年に考古発掘により統万城が砂礫層の上に建てられた、即ち統万城建設以前にこの地に沙漠土壌が存在したことが明らかになって、研究は新たな局面を見せた。この事実がムウス沙漠自然要因形成説の有力な証拠と考えられたが、歴史地理の側からも反論が出された。侯甬堅は、統万城建設当時にオルドスに沙漠は存在していたが、決して現在のような大規模なものではなく、砂丘も移動砂丘ではなく固定砂丘であり、豊かな湖沼も存在し、ゴビの広漠とした沙漠を見慣れた遊牧民にとって、その環境は賛美に値するものであり、統万城の周囲は当時は沙質草原であり、砂と草が併存する半乾燥荒漠草原の景観であったと

する。<sup>22</sup> 鄧輝は、流動砂丘・固定砂丘・丘陵・草原が混在した環境がムウス沙漠の中に存在しており、統万城建設当時の自然環境は比較的良好で、生態環境の悪化には人類の不合理な活動が大きく作用しているとす。またオルドスのイフジョー（伊克昭）盟ウーシン（烏審）旗出身のモンゴル族である楊海英は、オルドスは一見沙漠に見えるかもしれないが、その上には豊かな草が生えており、遊牧民にとっては決して沙漠ではないとして「沙漠性草原」という呼称を提唱し、オルドス地域を沙漠と見なすこと自体に異議を唱える。<sup>24</sup> 実際、降水量が多ければ砂地の上にも草が繁茂し、表面上は草原と変わらない景觀を形成するのである。

なお史念海が長年教鞭を執っていた陝西師範大学では、日本の沙漠植林の専門家である東城憲治氏の資金援助と技術指導を受け、二〇〇二年から地元靖辺県林業局と協力して、統万城の周辺で植林事業を進めている。これは「人為的に破壊された森林は人間の力で回復することができる」という史念海の主張に共鳴した東城氏が一九九九年に陝西師範大学を訪問したことが切っ掛けである。二〇〇〇年と二〇〇一年に西北歴史環境与経済社会発展研究中心（当時。旧歴史地理研究所。現西北歴史環境与経済社会発展研究院）の侯甬堅教授・李令福副教授と共に現地調査を行って、統万城を植林地に選定し、二〇〇二年に「統万城緑色都市恢復基地」が設立された。以来二〇一一年までは基本的に東城氏の寄付した私財を資金として、地元の人々およびボランティアとして参加する西北研究院の学生の手によって、毎年植林活動が続けられている。<sup>25</sup> これは歴史研究者が自己の研究成果に基づき実践活動を展開している希有の例である。

このように統万城は歴史学、考古学、歴史地理学ばかりでなく、自然科学方面の学者も関心を寄せ、実践活動も行われている研究上の焦点の地であり、今後も様々な方面から学際的に研究が進められていくことが予想される。

#### 四 統万城の戦略的位置

統万城は赫連勃勃が国都として心血を注いで建設経営した都城である。結局彼の死後二年を経ずして北魏に攻め落とされ国都と

しての期間は短かったが、勃勃が長安を差し置いて最後までここを首都とし、北魏以降もこの地域の重要な軍事拠点であり続けたことは、統万城の持つ戦略的意味の大きさを如実に示している。ここでは赫連勃勃がこの地に国都を定めた要因について、軍事的な面から考察したい。

統万城はオルドス中央部に広がるムウス砂漠の南端に位置している。しかし先述のようにムウス砂漠は歴史時代に入ってから形成されたものであり、太古から現在のような状態だったわけではないと考えられる。現在とは全く異なり、当時この地は遊牧民にとつて文字通り垂涎の的とも言うべき緑豊かな牧地であった。そうであればこそ遊牧民は、匈奴以来オルドスの支配をめぐって中国王朝と攻防を繰り返してきたのである。赫連勃勃は遊牧経済の中心地に国都を築いたと言えるであろう。<sup>26</sup>

赫連勃勃は匈奴の正統の家柄であり、彼の配下の匈奴鉄佛部はいずれも遊牧民であった。鉄佛部は勃勃の父劉衛辰の時に北魏の攻撃を受けて壊滅し、勃勃は後秦に亡命した。そのため勃勃は鉄佛部だけではなく、并州出身の五部匈奴や廬水胡、烏丸等をも率い、

勃勃率烏合之衆（『晋書』卷一百二十六秃髮辱檀載記）

と言われる状態だったが、いずれにしても配下の者は遊牧民である。そして四〇七年に後秦より自立した際、彼は天王・大单于を称し、<sup>27</sup>遊牧民の君主としての立場を鮮明にしたのであった。

彼の戦い方もまさしく遊牧民のそれである。後秦から自立した際、配下の諸将が地形堅固な高平（現在の固原）を都にするよう勧めたのに対し彼は

我若専固一城、彼（後秦）必并力于我、衆非其敵、亡可立待。吾以雲騎風馳、出其不意、救前則擊其後、救後則擊其前、使彼疲于奔命、我則游食自若、不及十年、嶺北・河東尽我有也。（『晋書』卷一百三十赫連勃勃載記）

と答えている。騎兵の機動力を武器に遊撃戦を展開し敵を疲弊させるのは、匈奴以来遊牧民のお家芸と言える戦法である。実際勃勃に率いられた夏軍は神出鬼没で、後秦は「嶺北諸城門不昼啓」（『晋書』卷一百三十赫連勃勃載記）という状態に追い込まれ、数

年のうちに嶺北は夏によって制圧される。<sup>28</sup> 勃勃が統万城を築くのはこの嶺北制圧が一段落付いた後のことで、それまで彼は本拠地を定めず常に移動しながら戦っていたのである。遊牧君主の面目躍如といったところであろう。

赫連勃勃は自立前は後秦の將軍として朔方に鎮し、高平を襲って独立の狼煙を上げた。夏建国当初の彼の勢力範囲はこの二つの地点及びその周辺、即ちオルドス及び高平付近に限られていた。勢力範囲の北限は、赫連勃勃が後秦に敗れた時河曲（五原）まで逃れたことを見る<sup>29</sup>と、オルドスから黄河を越えて陰山付近まで延びていたものと思われる。これに対し建国当初領土の南限は北嶺で、一部黄土高原を含むものの関中平野には達していない。西は現在の銀川まで延び、東は黄河を境として北魏と接する。オルドスは言うまでもなく当時最高の牧地の一つであり、高平は農耕も可能だが遊牧民にとってはこれもまた優れた牧地であった。しかも勃勃の配下にはほぼ遊牧民で占められていた。つまり建国当初の大夏は、遊牧地帯を領土の中心とし人口の多くを遊牧民が占める、当時の五胡諸国の中では最も遊牧国家に近いものだったのである。

そして大夏の境域は専ら南方の農耕地帯に向けて発展していった。まず建国後数年で嶺北を制圧し領土の基礎を固めると、隴東及び関中への進出を開始、四一八年に東晋軍を打ち破り長安に入城して目的を達する。この一連の戦いの中で、統万城の位置は戦略的に絶妙な効果を發揮した。

赫連勃勃の生涯の主敵は後秦であり、侵攻の矛先は主にどちらも後秦領であった隴東と関中に向けられている。勃勃の本拠地オルドスから関中に侵攻する場合、主なルートは二つある。一つは洛水を下り長安東北方から侵攻するもの、もう一つは涇水に沿って南下し長安西北方から侵攻するものである。赫連勃勃はこの二つのルートのいずれからも侵攻しているが、隴東方面により多くの力を割いている。これは一つには彼のもう一つの根拠地高平にこの地方が隣接しているためであり、またオルドスから西域に向かう通商路（オルドス砂漠南縁路）がこの地域を通っていたためでもある。<sup>30</sup>

四一三年に統万城を築いて以来赫連勃勃はここを起点として遠征を行う。統万城はオルドス砂漠南縁路上に位置し、この道に沿って西行し高平川を遡って南下すれば高平に出ることができ、ここから涇水沿いに南下して関中平原に出る道は、古来長安から河



西回廊に向かうメインルートである。また統万城から無定河を遡って白于山を越え、現在の志丹県から洛水沿いに延安の南を通り現在の富県に抜ける道は「聖人道」と呼ばれ、赫連勃勃が南進のために拓いた街道である。<sup>31</sup>このように統万城は長安をねらう二つのルートの結節点に当たっていた。その上オルドスの中心に位置するため、東の北魏、北の柔然に対してある程度の距離を置きながらも軍事的圧力をかけられる。<sup>32</sup>オルドスを根拠地として南下を狙う場合、統万城は攻撃拠点としてこれ以上ない絶好の地点に位置していると言えるだろう。

このように赫連勃勃は遊牧地域を基盤とし遊牧民を国の根幹として、遊牧地域内に存在する統万城に拠点を置いて南方の農耕地帯を征服した。その意味で大夏は小規模といえども征服王朝型の国であり、<sup>33</sup>中国内地に長く居住し最初から中国内部を基盤に国を建てた前趙、後趙、前秦等とは異なる。むしろ遊牧民の力を結集して中国内地に進出したという点で、北魏と相通ずるものがある。

遊牧民が中国を支配する場合、北魏の洛陽のように中原の真っ直中に都を置くというのは例外的で、北魏の平城やモンゴル帝国の大都のように遊牧地域と農耕地域の境界線上に都を営み、両者ににらみを利かすのが一般的である。ところが統万城は周囲一望千里の草原に囲まれた遊牧地帯の中にある。赫連勃勃は長安に南台を置いて準首都として扱い、遊牧地帯と農耕地帯のそれぞれに拠点を持っていたので、この点は元の上都と大都の關係に類似している。しかし夏はあくまで統万城を正首都とし遊牧地帯に重心を置く姿勢を崩さなかった。遊牧地帯に都城を築き農耕地帯を支配するという統万城の位置は極めてユニークなものであり、特筆に値することである。これはこの時代が、遊牧民が中国内地に活動の場を広げ中国を席卷した時代だったということを、まざまざと示していると言えるであろう。

#### おわりに

以上、統万城の沿革および現況を紹介し、併せて研究史を概観した上で、その位置がオルドスを拠点として関中支配を狙う赫連



勃勃にとつて、戦略上絶妙な位置にあったこと、游牧地域であるオルドスの中に築かれた統万城が、游牧地帯から農耕地帯を支配するという首都として極めて特殊な地位を持っていたことを述べた。統万城は中国史上最初期の本格的馬面を持つというばかりでなく、游牧民による中国征服支配の拠点としても先駆ける役割を果たしたと言えるだろう。

<sup>1</sup> 三崎良章は「大夏紀年墓誌」に見える夏の建国意識」（原題「大夏紀年墓誌」に見える「大夏二年」の意味」、『早稲田大学本庄高等学院研究紀要』第二〇号、二〇〇二年。『五胡十六国の基礎的研究』第三部第八章）で、統万城西一六キロの内モンゴル自治区ウーシン旗で出土した「大夏紀年墓誌」が「大夏二年」の紀年を持つ事を取り上げ、「大夏元年」に当たるのは真興元年（四一九年）であると比定し、赫連勃勃の意識の中に、この年が夏にとつて記念すべき建国の年であるという思いがあったことを指摘している。赫連勃勃には年号に対する特別な意識があったことについては、三崎良章「夏の年号」（原題「十六国夏の年号について」、『史観』第一五二冊、二〇〇五年。『五胡十六国の基礎的研究』第三部第七章）に詳しい。

<sup>2</sup> 史念海「陝西北部的地理特点和在歴史的軍事価値」（『河山集』四、一九九一年所収）は、唐初に突厥がオルドスを突破して長安に迫ったことから、唐が北方の防衛拠点として夏州を非常に重視したと指摘している。特に唐代前期において、首都長安の軍事防衛上の第一線は陰山山脈、第二線は横山山脈であり、横山北麓の塩州・夏州・麟州の三州が防衛の要地だが、夏州の地位は其中で最も重要であったという。

<sup>3</sup> 周清澎「從察罕腦儿看元代的伊克昭盟地区」（『内蒙古大学学報』一九七八—二。『元蒙史札』、内蒙古大学出版社、二〇〇一年所収）。

<sup>4</sup> 周偉洲「統万城遺址出土元青銅十字牌考」（陝西師範大学西北環発中心編『統万城遺址綜合研究』、三秦出版社、二〇〇四年）。

5 現在のセメントや漆喰は、生石灰（酸化カルシウム）と水をあらかじめ反応させて作った物質である消石灰（水酸化カルシウム）を使用し、建築現場で水と生石灰を激しく反応させるといって荒っぽいやり方はしない。従って統万城は厳密にはセメントとは言えないが、生石灰と水は激しく反応して消石灰が生成されるので、成分はほぼ同じもののはずである。

6 門田誠一「遊牧民の造った白い城——中国・陝西省統万城踏査記」『旅する考古学——遺跡で考えた地域文化』昭和堂、二〇〇四年、所収）。

7 愛宕元『中国の城郭都市』（中公新書、一九九一年）は馬面の利点として、防御効果の他、城壁に敵が接近するのが困難になるため「壁厚をさほど厚くしなくとも馬面を設けることによつて十分にその薄さをカバーできるといふ利点もある。築城時に要する労働力の面からすると、城壁を仮に二分の一にして、余力を馬面構築に投入しても、なおおつりが出るという経済効果も無視できない。」と指摘している。

8 このような近年の発掘成果については、陝西省考古研究院・榆林市文物保護研究所・榆林市文物考古勘探考古隊・靖辺県統万城文物管理所「統万城遺址近幾年考古工作收穫」『考古与文物』二〇一一—二五）にまとめられている。

9 この成果を尙少逸が中心となつてまとめたのが陝西省文管会「統万城遺址調査」『文物參考資料』一九五七—一〇）である。

10 侯仁之「從紅柳河上的古城廢墟看毛烏素沙漠的變遷」『文物』一九七三—一）

11 陝西省文管会「統万城城址勘测記」『考古』一九八一—三）。このような初期考古調査の成果は戴応新『赫連勃勃与統万城』（陝西人民出版社、一九九〇年）にまとめられている。また戴応新「大夏統万城考古記」『故宫學術季刊』一九九九年第二期）にも詳述されている。

12 「内蒙古發現大夏国紀年墓誌銘」『内蒙古社会科学』一九九三—一）、「内蒙古首次發現大夏国墓誌」『内蒙古社会科学』一九九三—五）、王大方「内蒙古自治区的重大考古成果綜述」『内蒙古社会科学』一九九九—一）。

13 『元和郡県図志』卷四には

赫連勃勃北游契吳、嘆曰「美哉、臨広沢而帶清流。吾行地多矣、自馬領以北、大河以南、未之有也。」とある。

- 14 当時オルドス東部は、黄河の西という意味で「河西」と呼ばれていた。これについては前田正名「四一五世紀におけるオルドス沙漠南東縁辺地域——河西——」（『立正大学教養部紀要』七）が指摘している。
- 15 史念海「隋唐時期黄河上中游的農牧業地区」（原載『唐史論叢』一九八七—二、『黄土高原歴史地理研究』黄河水利出版社、二〇〇一年所収）
- 16 史念海「歴史時期黄河中游的森林」（『河山集』二、三聯書店、一九八一年）、「兩千三百年来鄂尔多斯高原和河套平原農林牧地区的分布及変遷」（原載『紀年陳垣先生誕辰百周年史學論文集』、一九八一年。『河山集』三、人民出版社、一九八八年所収）。史念海・曹爾琴・朱士光『黄土高原森林与草原的变迁』（水利出版社、一九八五年）。
- 17 濱川栄「漢唐間の河災の減少とその原因——譚其驤説をめぐる最近の議論によせて」（原載『中国水利史研究』三四号、二〇〇六年。『中国古代の社会と黄河』、早稲田大学出版部、二〇〇九年所収）。「後漢以降黄河長期安流説」は譚其驤「何以黄河在東漢以後会出现一箇長期安流的局面」（『學術月刊』一九六二—二。同『黄河史論叢』、復旦大学出版社、一九八六年および『長水集』、人民出版社、一九八七年に所収）で提唱された。
- 18 中国科学院『中国自然地理』編輯委員會編『中国自然地理』「歴史地理卷」（一九八二年、科学出版社）は、歴史時代に沙漠が形成された例として、遼寧のカルチン沙漠、甘肅・内モンゴルのウランブフ沙漠、ムウス沙漠を挙げている。
- 19 趙永復「歴史上毛烏素沙地的変遷問題」（『歴史地理』創刊号、一九八一年）。
- 20 何彤慧・王乃昂『毛烏素沙地——歴史時期環境变化研究』第二章「毛烏素沙地歴史時期環境变化研究述評」（人民出版社、二〇一〇年）。
- 21 陳渭南・高尚玉・邵亜軍・張会玲「毛烏素沙地全新生 粉組合与氣候変遷」（『中国歴史地理論叢』一九九三—二）は、花粉分析に基づいて古氣候の復元を行っている。それによれば、近二千年間では紀元前後から紀元後四〇〇年頃までは乾燥期、赫連勃勃が活躍した四〇〇年〜五〇〇年頃は湿潤期、五〇〇年〜六〇〇年は乾燥期、六〇〇年〜一一〇〇年は比較的湿潤、それ以降は乾燥が趨勢となり、沙漠の拡大が深刻化するという。
- 22 侯甬堅「統万城遺址：環境変遷実例研究」（陝西師範大学西北環発中心編『統万城遺址綜合研究』、三秦出版社、二〇〇四年。『歴史地理

学探索』第二集、中国社会科学出版社、二〇一一年所収）。日本語訳としては村松弘一訳「統万城遺跡——黄土高原・毛烏素沙地環境変遷の実例研究」(『東洋文化研究』七号、二〇〇五年)がある。

<sup>23</sup> 鄧輝「統万城与毛烏素沙地歴史時期環境変遷研究述評」(侯甬堅・李令福主編『走向世界的沙漠古都——統万城』、『中国歴史地理論叢』二〇〇三年專輯)。

<sup>24</sup> 『草原と馬とモンゴル人』(NHKブックス、二〇〇一年)

<sup>25</sup> 二〇一二年には県の正式事業となり、県林業局から多額の予算が投入されることになった。県はこれをテコとして、統万城の世界文化遺産登録を目指すという。

<sup>26</sup> 韓茂莉「歴史時期無定河流域的土地開発」(『中国歴史地理論叢』一九九〇—二は、無定河流域では遊牧経済と農業経済が時代によって交代したといい、魏晋南北朝時代は約三五〇年に渡り遊牧民が活動した、無定河流域では最も長く遊牧経済が続いた時期の一つと位置づけている。

<sup>27</sup> 五胡時代の天王号の意味については谷川道雄「五胡十六国・北周における天王の称号」(『隋唐帝国形成史論』筑摩書房、一九七〇年、所収)を参照。

<sup>28</sup> 一般的に「嶺北」は九嶷山以北の地を指すが、当時はより範囲が広く、関中以北・隴山東西の雍州秦州のみならず、雍州以北の朔方・上郡の諸地も全て嶺北の範囲であった。呉宏岐「後秦“嶺北”考」(『中国歴史地理論叢』一九九五—二に詳しい。ただしこの史料に関しては関中平原の北方のみを指しており、現在の陝西省・寧夏回族自治区・甘肅省東部の黄土高原地域と考えられる。

<sup>29</sup> 『晋書』卷一百三十赫連勃勃載記に

(姚)興遣将斉難率衆二万来伐、勃勃退如河曲とある。

<sup>30</sup> 前田正名『平城の歴史地理学的考察』(風間書房、一九七九年)第四章「平城をめぐる交通路」によれば、当時平城と西域間を通行する場合、河曲あるいは君子津で黄河を渡り、オルドスを抜けて涇水流域の安定に出、さらに上邽から秦州路に入って西行するのが最も主要

なルートであった。前田氏はこれをオルドス砂漠南縁路と名付けている。

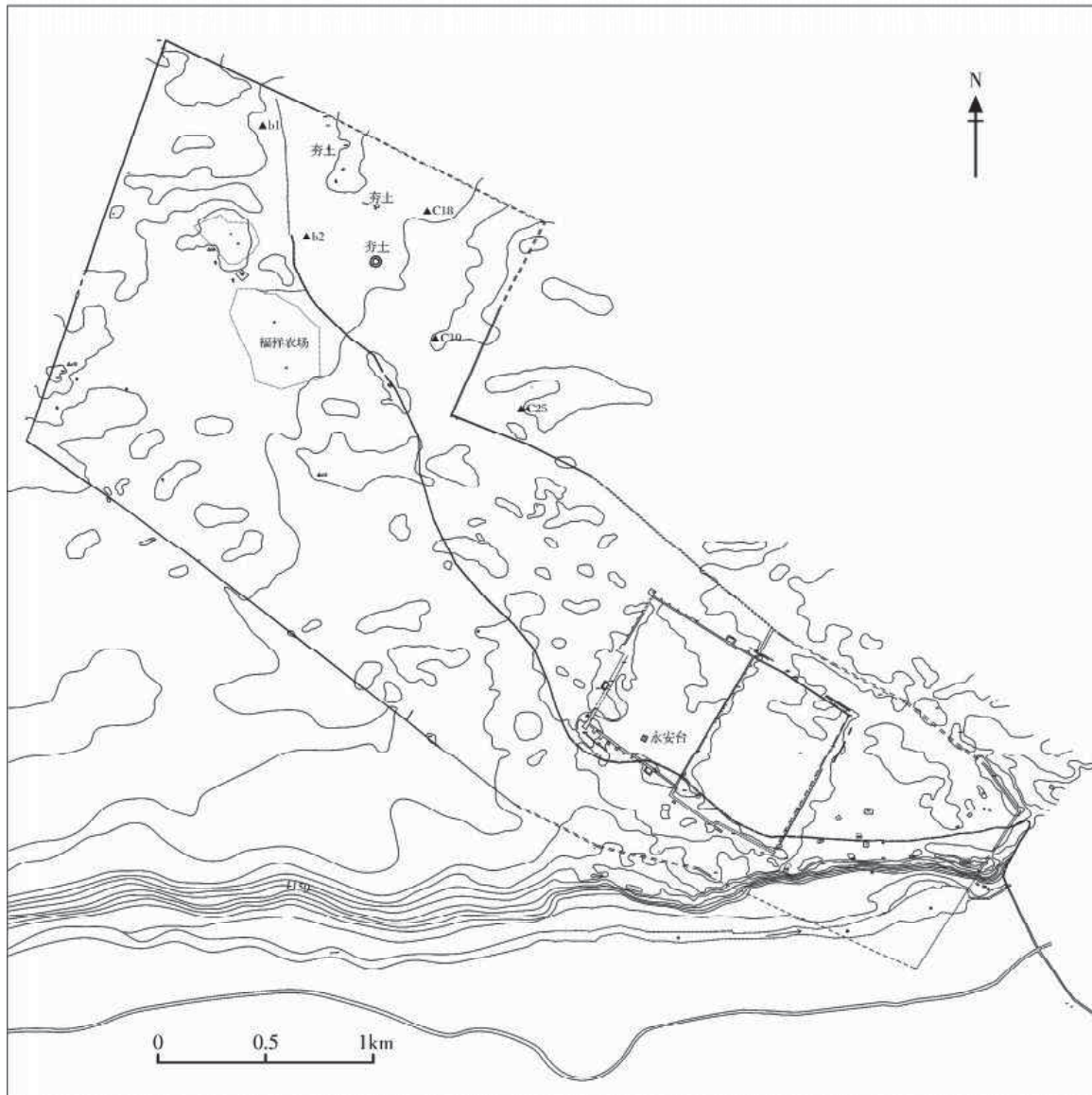
<sup>31</sup> 穆渭生『唐代関内道軍事地理研究』下篇甲「関内道南部軍事地理研究」（陝西人民出版社、二〇〇八年）。

<sup>32</sup> 『晋書』卷一百三十赫連勃勃載記に

群臣勸都長安、勃勃曰「朕豈不知長安累帝旧都、有山河四塞之固。但荊吳僻遠、勢不能為人之患。東魏與我同壤境、去北京裁數百余里、若都長安、北京恐有不守之憂。朕在統万、彼終不敢濟河、諸卿適未見此耳。」

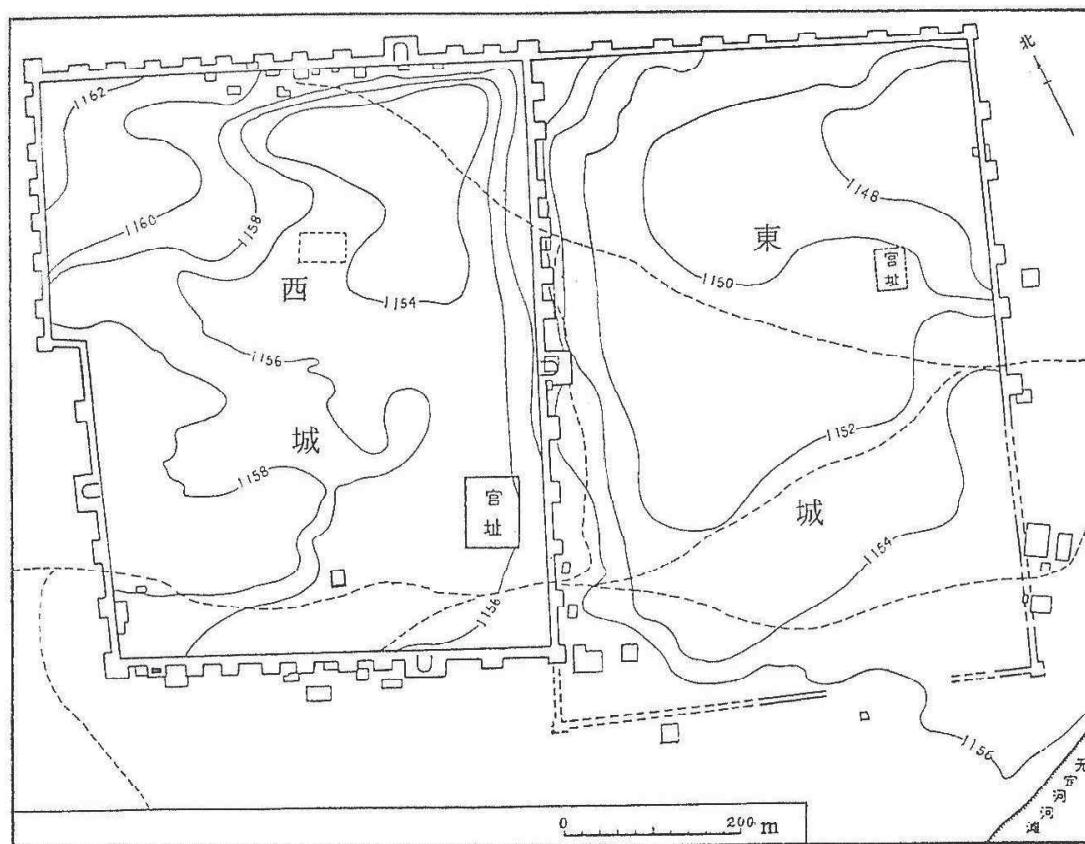
とあり、赫連勃勃が統万城の北魏に対する軍事的意味をよく理解していたことが解る。

<sup>33</sup> 周知のように征服王朝という考え方はウィットフォードによって提唱されたもので、彼は中国史上の王朝を「典型的中国王朝」と「征服型王朝」に分け、「征服型王朝」を、専ら中国内地を基盤とし漢族に吸収されていく「浸透王朝」と、独自の文化を保持し漢族に対抗する「征服王朝」に分類する。五胡十六国・北朝は前者、遼・金・元・清は後者に属する。これに対し五胡・北朝と遼・金・元・清の違いについて様々な議論が展開されたが、現在も定説と呼べる考え方はない。川本芳昭「胡族国家」『魏晉南北朝史上の諸問題』、汲古書院、一九九七年、所収）は五胡十六国を胡族国家とした上で「五胡の中国侵攻以降、胡族によって中国内部に建国された国家である」と定義している。



統万城外郭城図





統万城遺跡実測図（陝西省文管会「統万城遺跡調査」より）

### 第三章 赫連勃勃の領土拡大過程と農牧境界線

#### はじめに

匈奴鉄佛部の赫連勃勃によって建国され、オルドスの統万城を本拠地として華北西部を支配した大夏国（四〇七～四三二）は、その最盛期には北魏と華北の覇権を争った、五胡十六国時代後期を代表する有力国の一つである。

勃勃はもともと後秦の客将であったが、四〇七年五月に後秦から独立すると自ら白刃を振るって連戦連勝、四一八年には長安を占領し、わずか十年余で北は陰山から南は関中に至る広大な領土を築き上げた。

大夏国は五胡十六国の中でも最も遊牧的性格が強いことで知られる。匈奴鉄佛部は生粋の遊牧民であり、農耕民と雑居した経験をほとんど持たないという点で、中国内地に移住して長い時を経ていた山西の五部匈奴、羌、氐等の諸民族とは異なっていた。それがこの国の性質を極めて独特なものにさせている。本章では赫連勃勃の領土拡大過程の分析を通じて、大夏国の遊牧民的性格の一端を明らかにしていきたい。

#### 一 領土拡大過程の時期区分及び交通路

最初に赫連勃勃の領土拡大過程を追いつながら、その特色について考察する。

赫連勃勃は四〇七年五月に独立すると専ら後秦領を浸食する形で領土を拡大し、後秦が劉裕率いる東晋の遠征軍に滅ぼされると、ほどなく東晋軍を駆逐して四一八年十一月に関中を手中にした。関中征服後は積極的な軍事行動はあまり行われな

いので、ここでは主に建国から関中征服までの期間を分析対象とする。

この間の軍事行動は三期に区分できる。第一期は後秦から独立しその本拠地高平及びオルドスを制圧する時期（四〇七～四〇八年）、第二期は黄土高原において後秦と係争する時期（四〇九～四一七年）、第三期は後秦滅亡後長安を中心とする関中平原を平定する時期（四一七～四一八年）である。

第一期は後秦から独立し一応の勢力範囲を確立する時期である。勃勃は四〇七年五月、柔然の社崙可汗が後秦に献じるため送った馬八千匹を大城で奪い、高平川で狩猟すると偽って岳父没奕于を襲殺しその配下の高平鮮卑を併せ、十月には鮮卑薛干部を討ち、進んで後秦の三城を破った。さらに積極的に後秦領を攻撃し、後秦北辺の重大な脅威となった<sup>1</sup>。

これに対し後秦の姚興は四〇八年五月、姚弼・姚釁成・乞伏乾歸等に三万の兵を与えて南涼の秃髮傉檀を討たせ、同時に齊難に二万の兵を預けて勃勃を討たせた。この時姚弼等は勃勃征討を名目として出兵し、傉檀を油断させる作戦であった。勃勃は当初これに正面から対抗せず、勢力範囲の最北辺である河曲まで後退する。勃勃が奥地に退いたため齊難は大夏軍を捕捉できず七月に兵を引き、勃勃はこれを急襲大破して木城まで追撃し後秦の反撃を退ける。その後四〇九年一月と四一六年六月には高平南東三〇キロ余の朝那まで攻め込まれはするものの、これ以後勃勃は三城と高平を結んだ線以北への後秦軍の侵入を許さない。勃勃はこうして北方に一応の勢力範囲を確立することに成功する。

この時における勃勃の勢力範囲は、オルドス高原及び高平川流域であった。即ち元来匈奴鉄佛部の住地であり勃勃が後秦から守備を任されていた大城の周辺、没奕于の率いた高平鮮卑の勢力範囲である高平川流域、鮮卑薛干部の活動地域である三城周辺<sup>3</sup>である。後秦北辺の草原の地を切り取ったと言つてよいだろう。

第二期は北方に一応の勢力範囲を確立した勃勃が関中に向け南進を始め、後秦との間で十年近くに渡って衝突を繰り返す時期である。両者は断続的に戦闘を繰り返すが、大軍が激突する大きな山場は三回あった。

勃勃は四〇九年四月から四一一年一月まで数次に渡って執拗に出兵を繰り返す。この時期南燕が東晋劉裕の攻撃を受け後

秦に援軍を求めていたが、四〇九年九月に姚興が貳城で勃勃に大敗したため、洛陽に至っていた南燕救援軍は長安に引き返した。後秦にとって勃勃の攻勢は隣国を見捨てなければならぬほどの危機であった。この時勃勃は後秦軍を度々撃破し高平東南の幾つかの要地を攻略して、ある程度南方への勢力拡張を果たした。

四一三年から黄河を挟んで北魏と小競り合いを繰り返していた勃勃は、四一五年三月突如杏城を攻め落とし、九月には赫連建が勢いを駆って貳城、新平を抜いた。建が龍尾堡に捕らえられ長安を脅かすには至らなかったものの、大夏軍は初めて関中平原への侵入に成功した。

四一六年一月に姚興が死ぬと、後継者姚泓は統率力に欠け宗室の叛乱が続発する。これと相前後して西秦、仇池氏等が後秦への侵入を繰り返し、八月には劉裕率いる東晋の北伐軍が建康を発するなど、後秦を取り巻く諸国の行動は一気に活発化した。勃勃もかねてより姚興の死を待ち望んでいただけに、直ちに攻勢を開始する。四一六年六月、仇池氏の楊盛が後秦に侵入し上邽守将姚嵩が迎撃に出た隙を衝いて、勃勃は兵四万を率い上邽を急襲、二十日足らずでこれを落とし城を毀ち東へ去った。次いで陰密を抜き安定を降し雍を取り郿城を襲う。この時の攻勢は、姚紹等の迎撃に遭って安定に退き、安定が後秦に寝返ると杏城まで撤退を余儀なくされ、成功した<sup>4</sup>と言いが、その直後に赫連提が池陽に攻め込むなど、大夏軍は関中平原に大規模に侵入し長安を脅かすに至った。東晋の攻撃が強まると後秦の嶺北防衛は不可能となり、四一七年一月の安定占領を以て嶺北全域は大夏の有に帰した<sup>5</sup>。嶺北をめぐる大夏と後秦の戦いはこの時点で大夏の勝利に終わる。

この時期における勃勃の活動範囲は、専らオルドス高原と関中平原に挟まれた現在の陝北に相当する地域、即ち黄土高原である。この地域は当時「嶺北」と呼称された。

第三期は東晋の北伐軍を駆逐し関中平原を手に入れる時期である。四一七年九月、劉裕率いる東晋軍は長安を占領し後秦は滅亡した。劉裕は北伐の功績を背景に東晋を篡奪する準備を進めるため、早々に江南に帰還した。勃勃はこのことを予期し、劉裕が長安を離れると即座に出陣した。四一七年十二月、勃勃は赫連璜に二万騎を与えて長安へ、赫連昌を潼関へ、王

賈德を青泥へ向かわせ、自身は大軍を率いて後に続いた。翌年一月、璜は池陽で東晋に敗れ、直ちに長安攻略には至らないが、長安を遠巻きに孤立させる布陣は着々と出来つつあった。劉裕の幼い息子劉義眞を名目的な大將に頂く東晋軍は、王鎮惡・沈田子・王修等有力な將軍が内紛で相次いで殺されて士氣崩壊を始めており、大夏軍が関中平原を横行するのを止める力はなかった。四一八年十月、東晋は蒲阪・渭北の兵を引き上げて長安に籠城し、渭北は尽く大夏に帰した。勃勃は咸陽に兵を進めて長安の補給を完全に遮断し、翌十一月遂に劉義眞は掠奪の末長安を去った。長安の百姓は東晋の守將朱石齡を追い出し勃勃を迎えた。潼関・青泥付近の東晋軍も間もなく撃破されて大夏は関中を平定し、勃勃は長安東郊の灊上で皇帝に即位し、独立以来十一年の苦闘を経て宿願を達したのである。勃勃が本格的攻勢を開始してから東晋軍を完全に追い出すまでわずか一年足らずであった。

赫連勃勃の本拠地はオルドスである。彼の出身母体である匈奴鉄佛部は長らくオルドスを住地としており、彼自身オルドスの大城で後秦に対する独立の狼煙を上げ、後に統万城を築いて根拠地とした。このように赫連勃勃の領土拡大は、オルドスから関中へとひたすら南下する過程である。しかしその軌跡は必ずしも順調とはいえず、オルドスを占拠してから関中に進出するまで、十年に渡り後秦と一進一退の攻防を繰り返した。この時期即ち第二期には領土拡大は伸び悩んだ。

この第二期には安定・平涼・杏城が最大の係争地となっている。この三地点に勃勃は各々三回出兵しているのに対し、後秦も執拗に逆襲し争奪を繰り返している。特に安定は後秦にとって国家存亡の鍵を握る地とみなされていた。四一七年九月、洛陽を目指し押し寄せる東晋軍が河南の後秦軍を次々撃破している状況下、後秦朝廷では次のような議論がなされている。

姚紹聞王師之至、還長安、言于泓曰「晉師已過許昌、豫州・安定孤遠、卒難救衛、宜遷諸鎮戸内實京畿、可得精兵十萬、足以横行天下。假使二寇交侵、無深害也。如其不爾、晉侵豫州、勃勃寇安定者、將若之何。事機已至、宜在速決。」其左僕射梁喜曰「齊公姚恢雄勇有威名、為嶺北所憚、鎮人已與勃勃深仇、理應守死無貳、勃勃終不能棄安定遠寇京畿。若無安定、虜馬必及於鄜・雍。今關中兵馬足距晉師、豈可未有憂危先自削損也。」泓從之。〔晋書〕卷一百十九姚泓載記



後秦の河南防衛を担う姚紹が安定放棄論を唱えたのに対し、左僕射梁喜は、勃勃は安定を無視しては長安を攻撃できず、もし安定がなければ大夏軍は長安西郊の郿城、雍に必ず来寇する、と安定固守を主張し、姚泓はこれに従ったのである。当時の後秦の戦力では二正面作戦は到底不可能で、河南を放棄するか安定を棄てて長安を危険に曝すか、どちらかしか事実上選択の余地は無かったのだが、安定は東方から強大な敵が来襲しているにもかかわらず、なお兵を割き守るべき価値がある要地と考えられていたのである。また杏城も大変重視されていた。四一五年三月勃勃が杏城を抜くと、姚興は自ら長安東北方の北地に出撃している<sup>7)</sup>。これは杏城及び洛水方面からの侵攻を警戒したもので、杏城の重要性がよく解る。

安定、平涼、杏城が極めて重視されたのは、これらの諸城がオルドスから関中へ至る交通の要衝だったからである。オルドスから関中へ抜けるルートには大きく分けて三つある。一つは賀蘭山麓から高平川を溯り蕭関を抜けて、涇水流域の長武即ち安定・彬県を通って関中に入る蕭関道である。もう一つは賀蘭山麓から馬蓮河を溯り慶陽を抜け、涇水流域から関中に入る馬蓮河河谷道。最後は横山山脈を越えて延安を抜け、洛水を下る延州道である。赫連勃勃の本拠地である統万城はこのいずれの道にも容易に進出できる結節点にあり、オルドスから南下する際に最適の位置にあった<sup>8)</sup>。

赫連勃勃と後秦の係争地となった安定と平涼は蕭関道、杏城は延州道上の交通の要衝であり、勃勃が主に蕭関道と延州道を利用して進軍したことは明らかである。そしてこれらの諸城は蕭関道あるいは延州道が黄土高原から関中平原に入る関門に当たっていた。安定を例に取れば、この地は先述の梁喜の「勃勃終不能棄安定遠寇京畿。若無安定、虜馬必及於郿・雍」という言葉が示すように、ここを抜けば関中そして長安への道が開ける所なのである。係争地となるのは至極当然であった。赫連勃勃はこれらの地を攻略して関中平原への道を開こうとしたが、後秦の頑強な抵抗にあつてなかなか成功しなかった。しかしこれは彼にとって必ずしも予想外のことではなかった。四〇七年十月オルドスを一応制圧した時点で、勃勃の部下達には高平を都に定めるよう勧めた。これに対し勃勃は

卿徒知其一、未知其二。吾大業草創、衆旅未多、姚興亦一時之雄、関中未可図也。且其諸鎮用命、我若專固一城、彼必



并力于我、衆非其敵、亡可立待。吾以雲騎風馳、出其不意、救前則擊其後、救後則擊其前、使彼疲于奔命、我則游食自若、不及十年、嶺北・河東尽我有也。待姚興死後、徐取長安。姚泓凡弱小兒、擒之方略、已在吾計中矣。〔『晋書』卷一百三十赫連勃勃載記〕

と述べる。この言葉は彼の作戦方針をよく示している。勃勃の認識によれば、彼の軍事力は強大ではなく姚興は手強いので、まだ関中を狙うべき時ではない。まして高平に都を定めて定着すれば、後秦の集中攻撃を受けて滅亡する。そこで遊牧民中心の勃勃麾下の強みである騎兵の機動力を活かして、神出鬼没の遊撃戦を展開し、敵を疲弊させて嶺北・河東を奪い、姚興の死を待つて長安を取ろうというのである。嶺北の範圍については後述するが、この場合は関中以北の黄土高原地帯を指していると考えられる。つまりオルドスを押さえたこの時点で、勃勃は次の目標を「嶺北・河東」に定め、最後に関中を取るという明確なプランを描いているわけである。しかも関中攻略は「待姚興死後」とかなりの長期戦を覚悟している。

このような認識は勃勃一人のものではなかった。四一年十一月大夏に奔った後秦の鎮北参軍王買徳は後に勃勃の謀主として活躍する人物だが、彼は勃勃に帰順した折り策を問われて「今秦政雖衰、藩鎮猶固、深願蓄力待時、詳而後挙。」〔『晋書』卷一百三十赫連勃勃載記〕と答えている。買徳もやはり後秦にかなりの力が残っていることを理由に、関中攻略には時間がかかることを指摘している。そのため勃勃は四一五年三月に杏城を攻略した後も閭雲に関中に突出せず、蕭関道を確実に制圧しこの地域の諸民族を糾合することに務めたのである。

以上のように、赫連勃勃の領土拡大過程は三つの時期に分かれ、主に蕭関道と延州道を通って進軍していたことが解る。

## 二 領土拡大過程と地理的環境

赫連勃勃の領土拡大過程においては、第二期が長期に渡り戦線膠着状態に陥っていることが大きな特徴である。これに対

して第一期は電光石火でオルドス・高平を押さえ、第三期は怒濤の如き攻勢で一氣に関中を平定している。ここではその原因を地理的環境の方面から考察したい。

第一期の活動地域はオルドス・高平周辺である。オルドスは現在その中央にムウス沙漠が広がり全体として沙漠あるいは半沙漠地帯だが、第二章で述べたように、勃勃が活躍した時代には現在より環境が良く草原が広がり遊牧に適した土地であったと考えられる。勃勃がオルドス中央部の無定河上流に統万城を築いたのは、この豊かな牧畜生産を背景にしていることであつた。高平も古来牧畜適地であり、勃勃以前には高平鮮卑の活動地域で遊牧民の天地であつた。即ち第一期の活動地域は完全な遊牧地域であり、地理的には草原地帯に属していた。

オルドスは古来モンゴル高原の遊牧民族と中国内地の王朝の間で争奪が繰り返されてきた土地だが、赫連勃勃の活躍した当時は遊牧民の居住地であつた。この地には後漢期に南匈奴の単于庭があり、後漢崩壊後は中国本土の王朝からは全く離れ、郡県は置かれなかった。前秦がこの地を支配した時、勃勃の父で匈奴鉄佛部の族長である劉衛辰に西単于の称号を与え間接的に支配した。後秦のオルドス支配もそう強固なものではない。淝水の戦いの後、姚萇は羌族を率いて先ず安定方面を押さえ、続いて関中平原に入り長安を奪取する。この間後秦の勢力はしばらくオルドスに及ばなかったので、この地は匈奴鉄佛部・没奕于の高平鮮卑・鮮卑薛干部、さらに東からの北魏の勢力等が入り乱れる状態であつた。後秦はこれらを平定するほどの力を持たず、オルドスの各族首長に官職を与え間接支配下に置くにとどまつた。しかも北魏が三九三年に三城の鮮卑薛干部、四〇二年には高平鮮卑の没奕于を襲い、没奕于は逃走し北魏軍が一時高平を越えて南下の勢いを示すなど、その支配は非常に不安定であつた。

赫連勃勃自身も一度は拓跋部に敗れて力を失った後、姚興の「以勃勃為持節・安北將軍・五原公、配以三交五部鮮卑及雜虜二萬餘落、鎮朔方。」(『晋書』卷一百三十赫連勃勃載記) という措置で再び勢力を得たのだが、オルドスにおける他の勢力と同様に半独立的存在であつた。勃勃独立前夜のオルドスは、草原地帯で遊牧民が後秦の緩やかな支配下に活動している状

態だったのである。勃勃の後秦からの独立とオルドス制圧は、彼同様の遊牧諸勢力を束ねていく過程であった。つまり彼の第一期における活動は、オルドス高原における遊牧勢力の再結集と統一だということである。勃勃が極めて短期間にオルドス・高平を制圧できた原因はここにある。草原地帯と遊牧民という共通基盤の上に、遊牧民伝統の部族連合的国家を形成する場合、オルドス程度の範囲を短期間でまとめるのは比較的容易であった。

第二期の活動地域は史料上でしばしば「嶺北」と呼ばれる。この「嶺北」という地域名称の指す範囲には諸説ある。嶺北は『資治通鑑』卷一百八孝武帝太元二十年の胡注に「嶺北謂九嶷嶺北」とあり、これによれば九嶷山以北の地である。馬長寿氏は九嶷嶺は現在の礼泉県にあるので嶺北はこれ以北だとする。<sup>10</sup>これに対し呉宏岐氏は、嶺北の「嶺」は九嶷山に限らず関中北縁の山系を指し、後秦時代の嶺北は非常に大きな範囲を含み「関中以北・隴山東西の雍州秦州のみならず、雍州以北の朔方・上郡の諸地も全て『嶺北』の範囲の内である」という。<sup>11</sup>これによれば隴東隴西に加えオルドス方面まで嶺北の範囲に含まれることになる。私は呉氏に賛成であるが、オルドスは既に第一期に勃勃の手に落ちているので、第二期に大夏と後秦の係争地となったのは、この広大な嶺北からオルドス・高平を除いた部分である。これはそっくり黄土高原に当てはまる。従って第二期における勃勃の主な活動地域は黄土高原ということができる。

黄土高原は現在森林が極めて少ないが、かつては広い範囲に渡り森林が存在した。六盤山の東西麓、洛水上流からオルドス中部、陝西山西境の黄河両岸は特に森林が豊かで、森林地帯と草原地帯の境界線はオルドス中央部から西南に甘粛方面に延びていたと考えられる。<sup>12</sup>つまり第二期の活動地域は森林の広がる高原丘陵地帯ということである。

黄土高原は草原地帯ではないのだが、実は遊牧民と関わりの深い土地であった。『史記』によれば、漢代における農業と牧畜業の境界線は、今の北京市北方から河北北辺・山西中部を通じて黄河に至り、関中平原の北辺をかすめて甘粛に方面延びている。但しより子細に検討すれば、歴史上中国の産業区分は、農耕地区、半農半牧地区、遊牧地区の三つに区分するのが相応しい。『史記』の境界線は農耕地区と半農半牧地区との境界というべきである。そして農耕地区と半農半牧地区の境界線

は、関中平原と黄土高原の境界にほぼ相当する。<sup>13</sup> つまり黄土高原は漢代には半農半牧地区なのである。しかも魏晉南北朝時代は漢代より気候が寒冷でこの境界線はさらに南下していた。<sup>14</sup> そのため当時この地には匈奴等を中心として多くの遊牧民族が居住し、より牧畜の影響が濃くなりかなり牧畜地域に近くなっていたと考えられる。これは勃勃にとって非常に活動し易い土地である。

これに対し第三期の活動地域は関中平原である。関中平原南部の秦嶺山脈山麓は現在と異なり森林が豊かだったが、渭水北岸が一望千里の平原であったことは当時も現在と変わらない。この地は漢代は農業中心地のひとつであった。しかし後漢より羌族や氐族が徙民され、西晉期の関中は人口の半ばが遊牧系諸民族で占められるようになり、農業は依然として主要産業ではあるが、牧畜の比重が相当大きくなったと考えられる。従って第三期の活動地域は牧畜をかなり含んだ農耕地域、地理的には平原である。

赫連勃勃は第二期の戦いで後秦に苦戦し、平涼・安定・杏城といった黄土高原と関中平原の境界線上の都市の攻略に苦心した。言い換えれば勃勃は黄土高原までは容易に支配し得たということである。彼がなかなか越えられなかったのは、黄土高原と関中平原の境界線、即ち半農半牧地区と農耕地域の境界線であり、半農半牧地区は簡単に制圧していた。これは大夏国と匈奴鉄佛部の遊牧民的性質をよく示している。

これに対して後秦の支配民族である羌族も元来は遊牧民だが、長く中国内地に居住して一部農耕化しており、匈奴鉄佛部ほど遊牧的要素は強くなかった。後秦は関中の豊かな経済力を基盤としており、首都長安を守るためには何を置いても、たとえ東方からの東晉の攻勢を迎撃する兵力を出し渋ってでも、勃勃の関中平原侵入を阻止しなければならなかった。この後秦の最終防衛線が、黄土高原最南部に張り出した安定・杏城ラインであった。もともと遊牧民である羌族が、より遊牧民的な匈奴鉄佛部に半農半牧地区を奪われ、農耕地域を守り抜くという形勢となったのである。

以上見てきたように、赫連勃勃は遊牧地区、半農半牧地区については比較的容易に制圧し、農耕地域との境界線上で苦戦

したということが言える。この最大の原因は後秦の全国力を挙げての必死の抵抗だが、これは裏を返せばその後秦を短期間で農牧境界線にまで追いつめた大夏軍の精強さと、遊牧民的性格をよく表していると言えるのである。

おわりに

以上赫連勃勃の領土拡大過程について分析してきたが、まとめると次のようになる。

勃勃の領土拡大過程は三期に区分できる。その本拠地高平及びオルドスを制圧する第一期四〇七～四〇八年、黄土高原地域を舞台に後秦と長期に渡り係争する第二期四〇九～四一七年、長安を中心とする関中平原を東晋から奪取する第三期四一七～四一八年である。

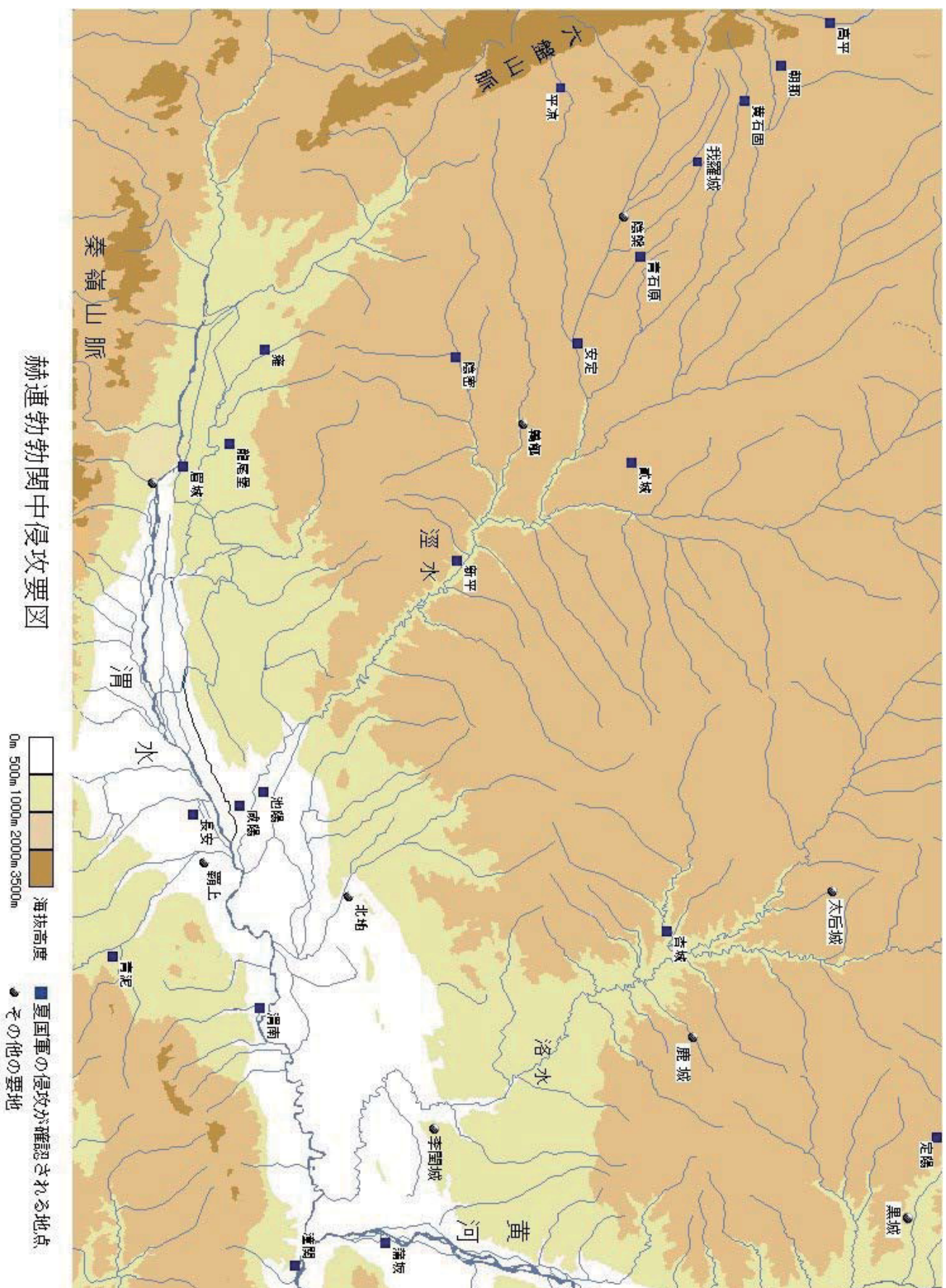
勃勃はオルドス制圧後、高平・安定・関中ルートとオルドス沙漠南縁路の二つのルートを通じて関中平原への侵入を企て、そのためこのような交通路が複雑に交錯する黄土高原を舞台に、足かけ九年に渡り後秦と攻防を繰り返す。そしてこの交通路上にあり、黄土高原から関中平原への入り口に当たる安定、平涼、杏城といった諸城が係争地となった。これらの諸城を制圧すれば関中平原に入るための地勢的障害はなくなり、そのため第三期の関中平定戦は大夏の圧勝に終わった。

勃勃は第一期にオルドス、第二期に黄土高原、第三期に関中平原を主な舞台として軍事行動を展開した。これらの各地域は当時の住民の生業形態から分類すれば、それぞれ遊牧地区・半農半牧地区・農耕地区に該当する。赫連勃勃は遊牧地区、半農半牧地区の制圧には容易に成功したが、農耕地区への進出には時間がかかったのである。大夏はオルドス近辺の遊牧民を核として建国し、五胡十六国時代の中でも最も遊牧的性格の強い国の一つである。以上のような領土拡大過程は、これによく反映していると言えるだろう。

- 1 于是侵掠嶺北、嶺北諸城門不昼啓（『晋書』卷一百三十赫連勃勃載記）
- 2 夏王勃勃聞秦兵且至、退保河曲（『資治通鑑』卷一百十四安帝義熙四年）
- 3 『魏書』卷二太祖本紀に「（登國八年）八月、帝南征薛干部帥太佛於三城……」とあり、薛干部が三城を活動地域としていたことが解る。
- 4 『晋書』卷一百三十赫連勃勃載記によれば、勃勃は杏城に引き上げた時群臣に笑つて  
劉裕伐秦、水陸兼進、且裕有高世之略、姚泓豈能自固。吾驗以天時人事、必當克之。又其兄弟叛、安可以距人。裕既克長安、利在速返、  
正可留子弟及諸將守關中。待裕發軔、吾取之若拾芥耳、不足復勞吾士馬。  
と述べ、兵馬に食料と休養を与えたという。彼がこの攻勢の中で関中攻略に大きな勝算を感じたことが伺われる。
- 5 『晋書』卷一百三十赫連勃勃載記に「尋進據安定、姚泓嶺北鎮成郡縣悉降、勃勃于是盡有嶺北之地」とある。
- 6 『中国軍事史』編写組編『中国軍事史』第二卷兵略（上）第十六章「劉裕“北伐”」（解放軍出版社、一九八六年）
- 7 赫連勃勃攻杏城、興又遣弼救之、至冠泉而杏城陷。興如北地、弼次於三樹、遣弼及斂曼嵬向新平、興還長安。（『晋書』卷一百十八姚興載記下）なお新平に兵を出しているのは、同時に涇水方面からの攻撃に備えたものと思われる。
- 8 史念海「陝西北部的地理特点和在歷史上的軍事價值」（『文史集林』第二輯、一九八七年。『河山集』四集、一九九一年、所収）
- 9 史念海「関中の歴史軍事地理」（『文史集林』第二輯、一九八七年。『河山集』四集、一九九一年、所収）
- 10 『碑銘所見前秦至隋初の関中部族』（中華書局、一九八五年）
- 11 「後秦“嶺北”考」（『中国歴史地理論叢』一九九五—二）
- 12 史念海「歴史時期黄河中游的森林」（『河山集』二集、三聯書店、一九八一年、所収）
- 13 史念海「秦漢時代的農業地区」（『河山集』三聯書店、一九六三年、所収）。なお魏晉南北朝時代の農牧境界線と氣候の關係については、  
第四部第一章「五胡十六国・北魏の牧畜」も参照されたい。
- 14 竺可楨「中国近五千年來氣候變遷的初步研究」（『考古學報』一九七二—一）



### 第三部 五胡十六国時代後期における遊牧民の活動——大夏と統万城



赫連勃勃関中侵攻要図

## 第四部 華北における牧畜民と牧畜業

### 第一章 五胡十六国・北魏の牧畜

はじめに

中国、とりわけ漢族と呼ばれる人々が集中的に居住する「中国本土」（チャイナプロパー）は、一般的には有史以来農業を主要産業とする地域であると思われる。つい近年まで中国人口の九割以上が「農民」に分類されていたから、これは大局的に見れば間違いない。しかし中華人民共和国の北方及び西方には広大な草原が広がり、そこに住む人々は牧畜を生業としている。草原の面積は実に農地の二倍に近い<sup>1</sup>。そして現代中国において広義の「農業」「農民」には、「牧畜業」「牧民」も含まれる。牧畜に従事するのは主に現代中国において「少数民族」と呼ばれる人々だが、草原は「少数民族」自治区に限らず中国本土にも広く分布している。つまり中国は現在でもその内に少なからぬ牧畜地域を抱えているのであり、この状況は過去においても同様だった。

牧畜とは家畜を飼育し専ら家畜から得られる生産物に頼って生活する生業である。牧畜民の中には大きく分けて一ヶ所に定住して放牧を行う者と、長距離移動型牧畜——遊牧を営む者があり、この二つを両極として、その間には様々なバリエーショ

ンがある。いずれも乾燥した草原地帯には最も適した生業である。

このような牧畜民は非常に古くから中国本土内に居住していたが、時代が下るにつれ多くが農民化し或いは農民化を迫られ、<sup>2</sup> 少なくとも三世紀までは彼らが中国史の主導権を握ることはなかった。ところが四世紀になると状況は一変する。中国内地に居住する牧畜民たちが一齐に反乱を起こし、時の西晋王朝を打倒し華北の支配者となるのである。

この時代の牧畜民は歴史的に「五胡」「胡人」と呼ばれる。五胡は南匈奴を先駆として華北において続々と独立を果たし、四三九年に鮮卑拓跋部の北魏が華北を統一し安定支配に成功するまでの一三〇年余に、多くの短命の王朝が興亡を繰り返した。後世それら王朝の主要なものが十六あるとみなされたので、この時代は「五胡十六国時代」と呼ばれるようになった。

五胡十六国の動乱を一応安定させた北魏も鮮卑族であり、やはり遊牧民である。これ以後華北は長く鮮卑系王朝の支配するところとなり、隋・唐の皇室も鮮卑の血を引いている。このように四世紀以降の華北の歴史は、完全に遊牧民の主導権下に推移した。これは社会の構造にも大きな変化を引き起こさずにはおかなかった。具体的には華北に大量の遊牧民が居住し、産業としての牧畜の社会的比重が極めて大きくなったのである。これは空前の事態であった。

そこで本章ではこの牧畜化した華北社会を概観し、農業との関係も交えながら当時の華北社会における牧畜の意味について考察したい。

### 一 三〜四世紀の人口移動

中国文明が太古以来黄河流域でのみ育まれてきたという考え方は、近年の考古発掘の成果により長江流域にも別個の高度な文明が発達していたことが明らかになってきたので、今や否定されつつある。しかし中国の古代文明を集大成した秦漢帝国が華北に依って建った国であり、当時の華北とりわけ黄河下流の華北平原と黄河上流の関中盆地が、政治経済文化のあらゆる面

で他の地域に比して圧倒的優位に立っていたのは間違いない。政府によって把握された人口の大部分がこの地域に集中し、巨大な生産力を持っていたことがその優位を支えていた。

このような状況は二世紀末以来の度重なる人口移動によって次第に変化し始める。その端緒は後漢光和七年（一八四）に勃発した黄巾の乱である。周知のように黄巾の乱で後漢中央政府は事実上瓦解し、各地に割拠した群雄が竜虎相打つ死闘を展開する。三国時代の幕開けを飾るこの動乱は、戦略的意味の大きい華北においてとりわけ激しかった。人口密集地の華北で長期に渡り戦乱が続いたため、戦禍と飢饉に追われて大量の難民が生じ、彼らの多くは当時比較的情勢が安定していた長江流域に避難した。こうして北から南への大規模な人口移動の波が起こった。

三国時代の人口移動はしかし南北の人口比率を逆転させるほどのものではなく、やがて魏が華北を安定支配するに至ると、呉蜀に対する優位は揺るぎないものとなり、咸寧六年（二八〇）、魏を継いだ西晋によって中国は再統一される。

だがやはりこの戦乱は中国の社会に深刻な打撃を与えた。後漢の人口は五千万から六千万人弱の間を推移したが、西晋の中国統一直後の戸口調査は全国戸数二五〇万戸弱、人口一六〇〇万人余となっている。単純に考えれば人口は四分の一になったのである。もちろん戦乱直後の当時にあつて正確な戸口調査などできるはずもなく、難民となって流浪し戸籍に登録されない者や、税金逃れのため調査から逃げ隠れた者が大量に存在したであろうから、この数字を額面通り受け取ることはいくが、戦乱によって人口が大きく減少したことは間違いない。

西晋は四世紀初頭に八王の乱によって呆気なく転覆し、西晋による中国統一はわずか二〇年ほどしか続かなかった。三国の争乱の傷を癒す間もなく、中国は再び動乱の渦に投げ込まれた。戦乱はやはり華北で特に激しく、華北社会は根底から覆されて收拾のつかない混乱に陥った。これ以後華北は一〇〇年以上に渡って戦乱が絶えず、飢饉と軍隊による略奪虐殺を避けて、再び多くの人々が南に逃れていった。彼らは移動中の危険を避けるため集団で武装難民化したのが、中には強力な武力にものを言わせて独立王国同然となり、時の政権を手こずらせるものさえ出現した。第二部で論じた乞活はその代表的な例である。



この時移動したのは華北の人口の多くを占めていた漢人である。こうして漢人が奔流となって南へ南へと去っていった後は、北方からあるいは西方から続々と牧畜を生業とする「胡人」が華北に移住して来た。南遷し主に長江流域に定住した漢人達は、この地の先住民である「越」「蛮」と呼ばれた人々を押しつけて開発を進めた。「越」「蛮」の人々は華中・華南の山岳地域に追いやられ、さらにインドシナ半島の山地へと南下する集団も存在した。かくて三〇四世紀の中国には、モンゴル・チベット高原から華北、華北から長江流域そして華南へ、という北から南への巨大な人口移動の波が発生した。これは各地域の人口や民族構成を激変させ、社会に未曾有の変化を迫ることになった。

## 二 遊牧民の華北支配

三世紀以降の人口減少の空白を埋めるかのように、中国内地に大挙して移住するようになったのが胡人と呼ばれる人々である。彼らには自主的に移住した者もいれば、強制移住させられた者もいたが、その急激な増加は西晋政府に脅威を抱かせるほどであった。二八〇年には郭欽が、二九九年には江統が「徙戎論」を上奏し、この問題に警鐘を鳴らしている。江統によれば胡人の中で最も危険なのは、并州（山西省）の南匈奴族と関中の氏族・羌族であり、特に氏族・羌族は華北の中樞の一つである関中地方の人口の半分を占めているという。江統はこれらの諸民族が反乱を起こし国の大患となることを恐れ、これを予防するため彼らを国境の外に強制移住させよと主張するが、受け入れられなかった。十年もしないうちに反乱が勃発し西晋が崩壊すると、人々は彼の見識に感服したというが後の祭りであった。江統は皮肉なことに、自身の予言した戦乱を目の当たりにしながら避難先の江南で亡くなった。

江統の主張は中国王朝の高官の立場からすれば妥当なものだったかもしれないが、移住の対象とされた諸民族からすれば迷惑な議論であった。というのは彼らの多くは自ら望んで中国内地に移住したわけではないからである。西晋は戦乱による人口



減少と辺境の荒廃を補うため、積極的に周辺の諸民族を内地に招致した。鮮卑族などはこれに応じて移住したものが多し。また氏族・羌族は後漢や魏にしばしば討伐を受け関中に強制移住させられたもので、関中地方の氐羌人口増加は中国王朝の政策の結果である。無理やり移住させた者を危険になったから追い返せとは随分ひどい話だが、このような乱暴な議論が飛び出すほど胡人問題は深刻化していたのである。

江統は胡人が反乱を起こす原因の一つとして、彼らが政府の厳しい搾取と漢人の差別迫害に苦しみ、激しい恨みを抱いていることを挙げる。事実慣れない環境下で多くの胡人が貧窮し、奴隷に売られる者も少なくなく、彼らは次第に不満を高めていった。

その最も典型的にして悲惨な例が南匈奴族である。そもそも彼らはモンゴル高原最初の遊牧帝国を建て漢と覇を競い続けた匈奴の子孫である。匈奴帝国は单于位をめぐる争いで四七年に南北に分裂し、南匈奴は後漢と結んで北匈奴を破り西方に追ったが、彼らは長城付近に居住して後漢の属国化し、後漢末の動乱期に内紛で力を失った上、曹操によって分割支配されるに至った。中国王朝の統制を受け次第に自主性を奪われていった彼らはしばしば反乱を起こすが、三世紀中はことごとく鎮圧された。こうして南匈奴は屈辱的な状態に陥るが、元来騎馬遊牧民である彼らが持つ強大な軍力は各王朝の注目するところで、後漢・魏・西晋は彼らを傭兵として便利に使いながらも、常に警戒を怠らなかつた。

南匈奴に好機がめぐってきたのは四世紀初頭、西晋が皇族同士の内乱で蜂の巣をつついたような騒ぎに陥ったときである。この八王の乱の展開はあまりに複雑怪奇なので詳細は述べないが、時の皇帝恵帝は知的障碍者と言って良い人物で自力では政務を執れず、常に補佐役を必要としたため、権力欲に取りつかれた皇族たちが骨肉の争いを繰り広げたのである。

この時代に南匈奴の指導者だったのは、モンゴル高原時代からの匈奴单于の子孫と称する劉淵だった<sup>3</sup>。彼は八王の一人成都王司馬穎と結び、南匈奴の軍を召集するという口実で故郷并州に戻ったが、そのまま西晋から離反して漢王を称し国号を「漢」とした。「漢」と号したのは、かつて匈奴单于は漢の皇室と通婚し劉淵自身もその血を引いているからで、单于の子孫が劉氏

を名乗ったのも漢の皇室が劉氏であることに由来する。この時一族の長老劉宣は劉淵に「晋は無道にも我々を奴隸のように扱ってきた」と語り、匈奴帝国の栄光を復興しよう勧めた。「漢」の建国は、中国王朝の下で忍従を強いられてきた匈奴族の高らかな自立宣言であった。

「漢」国はこの後并州を中心に急速に勢力を拡大し、ついに永嘉五年（三一）洛陽を攻め落とし西晋は事実上滅亡した。西晋は剽悍な南匈奴軍の前に呆気なくひねり潰され、ここに遊牧民が華北を支配する時代が始まる。それまで中国文明をリードしてきた漢人が異民族の支配に屈する事態となった。これ以後五胡十六国北朝時代を通じ、華北の歴史は常に游牧系諸民族の主導権下に展開し、漢人が主人公の座に座することはない。匈奴軍による洛陽陥落は、それまで誰も経験したことのない歴史の全く新しいステージの幕を開けたのである。

### 三 農牧境界線の南下

このような北から南への人口移動と胡人の勢力拡大が容易に起こった背景には、政治的な要因ばかりでなく自然環境の大きな変化があった。中国は前漢期までは比較的温暖だったが、後漢に入る頃（紀元一世紀）から徐々に気温は低下し始め、三世紀後半になると寒冷化が急激に進行し、この傾向は大局的には南北朝時代を通じ六世紀後半まで続いた。この寒冷期を通じ年平均気温は現在より少なくとも一〜二度低かったと考えられる。<sup>4</sup> 寒冷化が頂点に達した四世紀前半には、年平均気温は現在より二〜四度も低かった。<sup>5</sup> 一九九七年の地球温暖化防止京都会議では、現在のまま二酸化炭素が増加すれば一〇〇年後には気温が二度上昇し、その結果全森林面積の三分の一で現在生育している植物の生育が困難になる、として対策が協議された。平均二度の気温変化は気候に甚大な影響を与えるのに十分である。この時代の気候変動も、人々の生活と産業構造に非常に大きな変化を引き起こした。

現在中国では生産物により国土を農業区、牧畜区、農業牧畜交錯区に大別している。農業区は黒竜江省伊春・同ハルビン・北京北方・河北省石家荘・湖北省宜昌・広西チワン族自治区桂林・同南寧を結んだ線より東側である。牧畜区は大興安嶺山脈西部・内モンゴル自治区東南部・祁連山脈・西海湖・チベット高原東南周縁を結ぶ線より西側である。この二本の線の間の地域が農業牧畜交錯区となっている。<sup>6</sup>これによれば華北の北部、即ち河北省と山西省の北部、陝西省の大部分、甘肅省の全部は農業牧畜交錯区に分類される。この農業牧畜交錯区の中には、農業も可能だが実際は非常に条件が厳しく、牧畜区すれすれの土地も少なくない。

比較的温暖で技術が発達している現代でさえ、華北北部は農業と牧畜の境界線上に位置している。やはり温暖だった漢代の農牧境界線は現在よりやや南寄りで、今の北京市北方から河北北辺・山西中部を通り黄河に至る。<sup>7</sup>三世紀後半から進んだ寒冷化がこの線を一気に南下させたのは至極当然であった。華北のかなりの部分が農牧境界線以北に入り、ここに続々と胡人が移住してきたのである。この寒冷化は世界的なもので、所謂「ゲルマン民族の大移動」など北方に居住していた人々が南下する現象が、この時期世界各地で見られる。中国もこの世界的現象の例外ではなかったのである。

#### 四 遊牧民の人口

当時華北における非漢人人口の比率が上昇の一途をたどったのは事実だが、どれだけの胡人が華北に居住していたのかは、そもそもこの時代に関する史料が少ない上に、戦乱が続いて正確な戸口調査がほとんど不可能だったこともあって、決定的な数字は出し難い。だが方法がないわけではない。

この時代の政権は敵国を征服した場合、軒並み旧敵国の領土から自国の首都への大規模な徙民政策を行っている。これは敵対勢力をその本拠地から引き離して首都周辺で監視すると同時に、徙民された人々を労働力・軍事力として利用することを目

的とした。この際に徙民された人々の民族構成と人数はある程度史料に記されているので、大きな手がかりになる。

例えば四世紀前半に華北の大部分を統一した後趙は、三十回以上も徙民政策を行った。その大部分は征服した地域に住む胡人を中心とする人々を、首都である襄国および鄴周辺に移住させたものである。徙民の人数には諸説あるが、最大限に見積もつて九百万人余<sup>8)</sup>、少なくとも百万人は下らない。驚くほどの数である。後趙は最末期に内乱の中で漢人出身の將軍冉閔に乗っ取られ、冉閔は首都周辺の胡人を虐殺したが、この時わずか数日の間にたちまち二〇万人以上が犠牲となり、数百万の胡人たちが一斉に逃げ出したという。これを見てもその人口の多さが伺い知られる。

対する漢人の人口はこれまたはつきりしないが、後趙滅亡後四世紀後半に華北東部を支配していた前燕は、約一千万人の漢人を支配していた。前燕の領土はかつての後趙の首都圏を中心としていたから、その漢人人口と遊牧民人口を比較すると、もし遊牧民が九百万人という数字を取るならば、四世紀の華北東部における漢人と遊牧民の人口比はほぼ一対一ということになる。これはあくまで最大限の可能性だが、いずれにせよ当時の胡人人口は非常に多く、漢人はもはや人口の上でも絶対多数とは言えない状況だったのである。

## 五 五胡諸国における牧畜

こうして華北には非常に多くの胡人が居住し牧畜を営むようになった。ただ一口に胡人は遊牧民といっても実状は各族によってかなりばらつきがある。

鮮卑は中国内地への移住が遅かったこともあってほとんど純粋な遊牧民であり、特に鮮卑拓跋部はモンゴル高原における生活そのままだった。匈奴の中でも黄河湾曲部分のオルドス地方に住む鉄佛部は純粋な遊牧民で、ほとんど農耕化していなかった。鉄佛部は五世紀に赫連勃勃が出て夏国を建国したが、夏の初期の領土はオルドスと周辺の農牧交錯地域だけであり、領内

には当初郡県制も敷かれなかった。住民が遊牧民ばかりだったので、郡県制を施行する必要がなかったのである。

南匈奴・羯が居住していた山西方面は乾燥寒冷な気候で、温暖な前漢時代でもその北部は農牧境界線以北にあり、寒冷化が進むと全域が農牧交錯地域に入ったと思われる。山がちなところで、山岳・溪谷・盆地が組み合わさった地形である。このような土地ではモンゴルの草原のような長距離移動型の遊牧よりは、比較的短距離、それも山岳と盆地を季節的に往復する上下移動中心の遊牧が適している。森林を有する山岳（森林ステップ）を中心とする遊牧形態は、牧民にとって非常に豊かな収穫をもたらすもので、歴史的に見てもモンゴル高原における遊牧国家の中心地は、一望千里の草原ではなくハンガイ山脈あるいは陰山山脈周辺である。<sup>9</sup>これは森林ステップの豊かさをよく示している。

山西には古来漢人が農耕を行い、三国時代以降その人口は減ったもののこの時代にも依然として存在していたから、匈奴・羯の牧民たちは農地と牧地がモザイク状に混在する地域で牧畜を行っていた。彼らは中国内地に移住して久しく、中には農耕化する者も出現し始めていた。

氐・羌は原住地でも小規模移動牧畜と農耕を組み合わせた生活をしていたので、中国内地移住後かなり農耕化したが、牧畜を捨てたわけではなかった。

いずれにせよ寒冷化が進んだ四〜五世紀でも華北は完全に草原化したわけではないから、胡人の牧民は必然的に、農地と放牧地がモザイク状に存在する土地で農民と共存しなければならなかった。現代中国でも農業牧畜交錯地に分類される所では、このような例は珍しくない。その場合遊牧民は農地の間を縫って移動するため、移動時期やルートをめぐる農民との間に何らかの取り決めが必要になる。それでもトラブルは多発する。例えば清末から民国時代には、草原を農地化しようとする漢人農民と牧地を守ろうとするモンゴル族遊牧民の間で、武力衝突が頻発した。このような事態は農牧交錯地域なら世界各地どこでも見られることで、トルコでは一九七〇年代に至っても、遊牧民と農民が牧地をめぐる銃撃戦を繰り返しているほどである。<sup>10</sup>

トラブルがこじれた場合、最後は公権力を味方に付けていた方が有利である。西晋までは漢人が政府の力を背景に圧倒的に優位で、漢人農民が官と結んで胡人の牧民を圧迫する例は枚挙にいとまがない。ところが五胡十六国時代になると両者の立場は逆転する。五胡諸国はいずれも伝統的な部族組織を維持し、自民族出身の兵士から構成される強力な軍事力を存立の基盤としていた。各政権にとつて支配民族出身の遊牧民は、政権を支える軍事・政治・経済上の力の源であり文字通り虎の子である。従つて彼らが安定した遊牧生活を営めるように便宜を図るのが普通であつた。

五胡諸国は支配民族を「国人」と称し特権を与えることが多く、こうなると漢人は手も足も出ない。わずかに後趙の石勒や前秦の苻堅といった漢人びいきの君主が、国人に漢人の虐待を禁じたり、そのような行為をした支配民族の有力者を処罰したりしているが、これが史書に特筆大書されていることを見れば、日常的状況は推して知るべしである。

石勒の後を継いだ石虎は漢人を好まず、首都鄴で大規模な鬪兵と巻き狩りを行った。巻き狩りは遊牧民にとつて重要な軍事訓練だが、それを漢代には穀倉地帯だった華北平原の真ん中で堂々とやってしまうこと自体、当時の遊牧民勢力の巨大さと漢人農民の凋落を雄弁に物語っているだろう。

## 六 北魏における牧畜

先述のように北魏は鮮卑族拓跋部の建てた国である。拓跋部は所謂五胡の中で最も遅く中国内地に移住し、遊牧の伝統を色濃く残していた。彼らは長く内モンゴル草原の盛楽（内モンゴル自治区ホリンゴル市）を本拠地とし、中国内地の北辺に位置する平城（山西省大同市）に本拠地を移したのは、華北平原進出を果たした三九八年になってからである。彼らは言うならば五胡諸族の新参者だが、遅れてやって来た本命でもあつた。

盛楽を本拠地とした時代の鮮卑拓跋部の国家は代国と称したが、これは典型的な草原の遊牧国家であり、遊牧民を主要構成



員とする部族連合政権と言って良い。後燕を駆逐して華北平原に進出した際も、北魏配下の遊牧民たちは従来の部族組織のまま平城に移動し、郊外で遊牧生活を営んだようである。初代皇帝道武帝は平城遷都直後に「部族解散」を断行し、従来の部族長（部落大人）から部族の統率権を奪って部族制を解体したと言われている。しかし実のところ道武帝は各部族の放牧地を確定し長距離移動を制限して、彼らに対する統制を若干強化したにすぎず、部族組織はそのまま維持されたと考えられる。<sup>11</sup> 実際「部族解散」以降にも平城を含む華北の各地で、部族制を維持したまま生活する遊牧民は多数存在した。華北に足を踏み入れた北魏帝国の実態は、草原における遊牧国家そのままだったのである。

北魏の本拠地である平城は温暖な前漢期ですら牧畜地域であり、現在でも農牧交錯区に分類され、気候的にはモンゴル高原の一部といって差し支えない。寒冷化が進んでいたこの時代に遊牧適地だったことは言うまでもなく、内モンゴルの草原から中国を伺う北魏帝国にふさわしい土地であった。

北魏は平城周辺を国家の心臓部として強く意識し、敵国征服のたびにその領土からおびただしい数の人間を平城に徙民して、その充実に努めた。その中には漢人と同時に多くの胡人の人々が含まれており、彼らは平城付近で遊牧・狩猟生活を行っていた。また北魏は敵国から家畜を奪うことに非常に熱心で、人間だけでなく大量の家畜も平城に移された。これは拓跋部の遊牧性を如実に示す好例である。こうして平城付近に集められた遊牧民の軍事力と、広大な放牧地に蓄えられた大量の家畜による経済力が、北魏の華北制圧を強力に支えたのである。<sup>12</sup>

北魏は征服の過程で華北の要所要所に軍を駐屯させ、征服間もない頃はそこを鎮と称して軍政を敷き、征服地を威圧した。情勢が安定すると州に切り替えて文官による民政に移管するが、州に切り替わっても多くの場合軍は治安維持のため駐屯を続ける。北魏の征服事業を成功させたこの強力な軍事力は、鮮卑拓跋部を中核とする遊牧騎馬部隊によって構成されていた。地方駐屯軍兵士には一定の土地と労働力（主に漢人）が支給された。彼らは漢人に農業労働をさせつつ、自らは牧畜生活を行っていたと思われる。<sup>13</sup> 彼らは城民と呼ばれ一般の人々とは異なる戸籍に登録されていた。いわば牧民は国家を支える柱石として

特別待遇を受けたのである。<sup>14</sup> こうして北魏の征服地域の拡大に従って、鮮卑族遊牧民も華北各地に広がっていったのである。

#### おわりに

はじめに述べたように、五胡十六国・北魏時代は遊牧民の時代であった。彼らが政治の上だけでなく、経済・産業の上でも従来の農民の領分に大きく入り込み、華北が農牧交錯地となった様子は、以上見てきたとおりである。

もちろん五胡諸国や北魏が全く農業を無視した訳ではない。華北のかかなりの部分が農牧交錯地域になったとはいえ、人口の多数を占める漢人は基本的に農民であり、牧畜に全面的に依存する国家運営は、地理的経済的環境からして現実的ではなかった。従って五胡諸国は少数の例外を除いて、農業を国の主要産業として重視せざるを得ない状況に置かれていた。多くの胡人君主たちが農業復興に心を砕き勸農政策をとった。この中からやがて均田制が生まれてくるのである。

しかし遊牧民から被支配者である漢人へと軸足を移そうとした北魏孝文帝の改革は、わずか三〇年後に六鎮の乱という形で激しい拒否を突きつけられた。乱の中から生まれた北斉と北周が華北を二分し、武川鎮軍閥を基盤にする隋唐が中国を統一する趨勢を見れば、時代の主流が遊牧民側にあったのは明らかである。

隋の中国統一に連動するかのように、気候は次第に温暖になりはじめた。唐は農業生産の復興を積極的に押し進め、遊牧民の血を引く皇帝の下で農業が活況を呈するという状況となる。この頃には五胡十六国以来の牧民たちの子孫はすっかり漢人と混血し、農民化する者も増えていた。こうして中国は再び農業大国への道をたどっていくのだが、唐という新時代を拓いたのが遊牧民であり、彼らが華北の広大な牧地を闊歩していた数世紀が中国に存在したことを忘れてはならないだろう。この時代の大きな特色は、華北において広範に牧畜業が存在したことであり、牧畜業と牧畜民こそ、この時代を理解する最大の鍵なのである。

- 1 笹崎龍雄・清水英之助『中国の畜産―家畜の品種を中心に』（養賢堂、一九八四年。本書によれば草原は三十億ム―（二億一〇〇万ヘクタール）、農地は一六億ム―（二億一〇〇〇万ヘクタール）である。
- 2 原宗子「『農本』主義の採用過程と環境―古代中国における「共生」への一つの道―」（『史潮』四〇）、一九九六年。「中国農業の歴史的基础―「草地」の欠如を軸に―」（『途上国の経済発展と社会変動』、緑蔭書房、一九九七年）
- 3 劉氏一族が匈奴单于の子孫であることには否定的見解が出されている。町田隆吉「二・三世紀の南匈奴について―『晋書』卷一〇一劉元海載記解釈試論―」（『社会文化史学』一七、一九七九年）は、劉氏は後漢末から魏にかけて山西で新たに台頭してきた一族であるとする。
- 4 竺可楨「中国近五千年來氣候變遷的初步研究」（『考古学報』一九七二―一）
- 5 中国科学院《中国自然地理》編輯委員會編『中国自然地理』歴史自然地理（科学出版社、一九八二年）
- 6 前掲笹崎龍雄・清水英之助『中国の畜産―家畜の品種を中心に』
- 7 史念海「秦漢時代の農業地区」（『河山集』所収、三聯書店、一九六三年）
- 8 田村実造『中国史上の民族移動期』（創文社、一九八五年）
- 9 吉田順一「ハンガイと陰山」（『史観』一〇二、一九八〇年）
- 10 松原正毅『遊牧の世界―トルコ系遊牧民ユルツクの民族誌から』（中公新書、一九八三年）
- 11 北魏の部族解散については多くの研究がされている。松下憲一「北魏胡族体制論」（北海道大学出版会、二〇〇七年）は、第一章「部族解散」研究史」で今までの研究の論点を整理分析する。第二章「領民曾長制と「部族解散」」で、道武帝の「部族解散」は、内属した部族を「分土定居」によって指定地域に居住させるとともに、部族長を領民曾長に任命して部族の統治を委任したもので、「北魏初期の北族社会は、道武帝を頂点に、麾下の解体されなかった拓跋部と内属した諸部族（領民曾長を含む）から構成されて」といると結論している。

- <sup>12</sup> 勝畑冬美「北魏の郊甸と「畿上塞圍」——胡人政權による長城建設の意義——」『東方学』九〇、一九九五年。佐川英治「遊牧と農耕の間——北魏平城の鹿苑の機能とその変遷」『岡山大学文学部紀要』四七、二〇〇七年。
- <sup>13</sup> 古賀昭岑「北魏の部族解散について」『東方学』第五十九輯、一九八〇年。
- <sup>14</sup> 谷川道雄「北魏末の内乱と城民」『史林』四一—三・五、一九五八年。『隋唐帝国形成史論』筑摩書房、一九七一年に所収

## 第二章 五胡十六国北朝期の華北平原における牧畜民の活動

### はじめに

第一章で述べたように、四〇六世紀の華北には多くの牧畜民が居住し、広範な地域で牧畜業が営まれ、華北全体が農牧交錯地域と化していた。このような牧畜業の影響には大きな地域差があった。河西のように漢代においても牧畜業を主産業としていた地域では、基本的な産業状況は四世紀以降もあまり変化がない。山西や関中平原のように三世紀に既に多くの遊牧系諸民族が居住していた地域は、四世紀以降の漢人人口の大量流出に比例して一気に牧畜業の影響が濃くなり、完全に牧民の天下となった。河南では洛陽を中心として漢人勢力が根強く残存した。

華北平原とりわけ河北・山東は状況がめまぐるしく変化した地域である。春秋戦国時代以来の大都市が点在し、漢代においては穀倉地帯の一角を占めたこの地には、四世紀以降大量の遊牧系諸民族が移住し、牧畜業の比率が急激に高まったものの、農業が駆逐されたわけではなく、文字通り農業と牧畜業が交錯する景觀を形成した。そのような環境の下で先住民である漢人と移住者である遊牧系諸民族の文化が混じり合い、新しい文化が生まれていった。河北・山東は、関中平原と並んで所謂「胡漢融合」の揺籃の地となっていく。

そこで本章では四〇六世紀の華北平原における遊牧系諸民族の活動と牧畜業について分析し、その状況を明らかにするとともに、後世に与えた文化的影響にも言及したい。

一 三〇六世紀の政治過程と人口移動

黄河下流の平原地域は古くは黄河文明発祥以来多くの人口を有し、春秋戦国期には多数の有力国が存在し、前漢期には邯鄲と臨淄が洛陽・宛・成都と並んで首都長安を除く全国五大都市の一つに数えられており、一貫して政治経済の中心地であった。多くの人口と経済力を持つこの地域の様相は、三世紀末以来の戦乱によって一変する。

田村實造は四世紀から六世紀を「中国史上の民族移動期」と称した<sup>1</sup>。これはもちろんヨーロッパのゲルマン等の民族移動になぞらえたものである。ヨーロッパにおける四〇五世紀の民族移動は西ローマ帝国を滅亡に追い込みローマ時代の社会を根本的に改変させた、古典古代の終わりを告げる劇的な出来事であったが、中国でも民族移動の衝撃力はヨーロッパに勝るとも劣らなかった。大量の遊牧系諸民族が移住した結果、中国とりわけ華北の社会は根本的な変化を迫られたからである<sup>2</sup>。中国は歴史上何回も大きな民族移動を経験したが、四〇六世紀のそれは史上空前の激烈なものであった。

遊牧系諸民族の華北移住は既に漢代に進行していたが、光和七年（一八四）に勃発した黄巾の乱によって全土が動乱に陥ると一気に加速した。後漢期に現在のオルドスを本拠地とし長城線に沿って居住していた南匈奴は、この時期陸統と山西中部一帯に南下する。チベット系遊牧民である羌族・氐族の移住も増加し、三世紀末の関中平原は人口の半ばまでを彼らが占めるまでになった。二八〇年には郭欽が、二九九年には江統がこれに危機感を覚えて「徙戎論」を上奏し、匈奴氐羌などの諸民族を国境外に強制移住させるよう唱えている。このように西晋が中国を統一し三国時代を終わらせた二八〇年頃には、華北の西部や北部では既に遊牧系諸民族が隠然たる勢力を有するに至っていたが、華北平原では彼らはまだ人口も少なく、さほど大きな存在感は持たなかった。

皇族同士の内乱である八王の乱が始まると、西晋は統制力を失い中国は再び動乱の渦に投げ込まれた。南匈奴の首長劉淵は河北の中心都市鄴に拠る有力者成都王司馬穎の麾下にあったが、この期を捉えて故郷の并州に帰り三〇四年に西晋から離反



して独立し国号を「漢」とした。「漢」と号したのは、かつて匈奴单于是漢の皇室と通婚し劉淵自身もその末裔だからである。单于の子孫が劉氏を名乗ったのも漢の皇室が劉氏だからで、劉淵はモンゴル高原に君臨した匈奴单于と漢帝室の血を二つながら引く名門と目されていた<sup>3</sup>。

并州平陽（山西省臨汾市）に本拠を構えた「漢」は劉淵の死後も勢力を拡大し、永嘉五年（三一）にはついに洛陽を攻め落として懷帝を捕虜とし、西晋はここに事実上滅亡する。古来「中原」と呼ばれ中国文明の中心であった黄河中流の地は、匈奴の統治する所となったのである。この「永嘉の乱」は遊牧民が華北を支配する時代の訪れを告げる極めて象徴的な事件であった。

流民集団や各地の反乱軍を取り込んで急速に膨張した「漢」の体制は決して一枚岩ではなく、麾下の武将の多くは半独立的な存在だった。劉淵の後を継いだ劉聡は巧みな手腕で武将達をよく統率したが、彼の死後朝廷は内紛で瓦解し「漢」はたちまち四分五裂の状態に陥った。この中で黄河下流を本拠地として台頭してきたのが石勒である。石勒は山西中部の羯族出身で、八王の乱が激化すると并州刺史司馬騰に捕らえられ戦費調達のため奴隸として売り飛ばされた。後に盗賊に身を投じて頭角を現し、反乱軍の指導者汲桑と共に挙兵するや真つ先に鄴を襲い、ここに駐屯していた仇敵司馬騰を血祭りに上げた。石勒は間もなく「漢」に帰順し有力武将として華北平原を転戦するが、「漢」の混乱に乗じて三一九年に趙王を称し自立した。彼は河北の襄国を拠点に勢力を拡大し、三二九年には河西地方を除く華北の主要部を統一して皇帝を称した。彼の建てた国を史上「後趙」と呼ぶ。

八王の乱以来の動乱で華北の先住民である「漢人」<sup>4</sup>の多くは長江流域、遼東・遼西、河西等に難民として逃れ、華北中心部から人口が大量に流出した。石勒の勢力が一応の安定をみた後にも、長江下流を本拠とする東晋の勢力が河南方面に迫り一進一退の攻防を繰り返したため、黄河以北の人口を充実させることが後趙の急務であった。そこで後趙は各地から首都襄国および鄴周辺に人々を大々的に強制移住させた。このような徙民政策は当時珍しいものではないが、後趙は三五年間に三〇回以

上という五胡十六国の歴代王朝の中で最も多くの徙民を行った。これにより集められた人口は少なく見積もって優に七〇万人から一〇〇万人を越える<sup>5</sup>。しかも漢人・匈奴・氐・羌・鮮卑慕容部・鮮卑拓跋部・鮮卑段部・烏丸・高句麗・丁零など実に様々な民族が、襄国と鄴周辺の半径一〇〇キロ程度の圏内にひしめき合っていた。彼らの多くはそれぞれの首長に率いられて後趙の首都防衛の役割を担ったと考えられる。建国者石勒が低い身分から身を起こし、石勒の出身民族である羯族は人口が少なくこれだけに頼ることもできない後趙にとって、徙民が形成するこれらの軍団は国家の基幹軍事力であった。

後趙は三五〇年に漢人出身の將軍冉閔のクーデターにより滅亡した。冉閔は漢人を扇動し己に従わない「胡人」を虐殺したため、鄴周辺の「胡人」二〇万人余がたちまち犠牲となり数百万人が危険を逃れ脱出した。この地にどれほど多くの人口が集中していたかがわかる。冉閔はほどなく皇帝に即位して魏（冉魏）を建国したが、三三二年至遼東方面から進出してきた鮮卑慕容部に滅ぼされた。慕容部の首長慕容皝は鄴に遷都して大燕皇帝を称し（前燕）、華北平原は前燕の支配下に入った。遷都に伴い前燕の支配民族である鮮卑慕容部および、四世紀初頭に中原から遼東に難民として流入し慕容部の支配下にいた漢人の多くが首都鄴周辺に移住し、また後趙滅亡時にこの地を去らずに留まった者も少なくなかった<sup>6</sup>ので、人口は再び増加した。

前燕は三七〇年に関中平原を本拠地とする氏族の前秦に滅ぼされた。前秦は鄴の鮮卑四万余戸を長安に、「関東豪傑及雜夷」一〇万人を関中平原に移住させ、また三八〇年に氏族十五万戸を関東（太行山脈以東すなわち華北平原）の要地に移住させた。前秦は征服地である華北平原の主要勢力を首都周辺に徙民して監視し、支配民族である氏族を征服地に派遣して治安の維持に努めたのである。

前秦は三八三年に淝水の戦いに敗れて崩壊し、鄴に駐屯していた皇族の苻丕は氏族「六万余口」を率いて西方に去った。長安に徙民されていた鮮卑三十万は前燕皇族慕容永に率いられて東に向かい、前秦に仕えていた前燕皇族慕容垂は華北平原を制圧し燕を復興する（後燕）。かくて鮮卑慕容部の勢力が復活するが、三九八年に後燕は新興の北魏に首都中山を攻め落とされ、残存勢力は遼西（北燕）と山東（南燕）に分断された。南燕は四一〇年に東晋に、北燕は四三六年に北魏に滅ぼされ、慕

容部の勢力は後退した。

代わって華北の覇者となった北魏では一時鄴遷都の議論も出たが、結局元来の根拠地である内モンゴル南部の盛楽にほど近い平城に都を定め、ここに華北平原から「山東六州民夷及何高麗雜役三十六万」を徙民した。さらに支配民族である鮮卑拓跋部の軍団を各地に駐屯させ、新征服地には鎮を置いて軍政を敷いた。情勢が安定すると鎮は州に切り替えられるが、要地には引き続き軍団が駐屯しその兵士は城民と呼ばれた。城民は領内全土に分布するが、人口稠密地である華北平原には特に厚かった。かくてこの地の人口はまたも入れ替わった。

華北平原の黄河以北は四世紀初期から遊牧系諸民族の覇権が確立し、人口の上からも彼らの天下となったのに対し、黄河以南、特に黄河中流の中原の地は東晋の勢力が長く残り、後趙・前燕・北魏の前期には東晋との係争地となって安定せず、漢人の人口が比較的多かった。北魏は五世紀後半に南朝宋に痛撃を加えて河南の支配を安定させ、さらに四八三年には第六代皇帝孝文帝が中原の中心洛陽へと遷都した。これに伴い平城周辺に居住し「代人」と呼ばれた鮮卑拓跋部を中心とする遊牧系諸民族が洛陽に移住した。また首都防衛のための鮮卑軍団も河南に多く設置され、黄河以南でも遊牧民の人口が増加していった。

洛陽では漢人の伝統文化をベースに諸民族が入り混じった華やかな貴族社会が栄華を誇ったが、旧都平城防御のため北部国境の軍事要塞都市「六鎮」に駐屯する兵士達は、時代に取り残されて不満を鬱積させ、五二三年ついに反乱を起こした。この六鎮の乱により北魏は崩壊した。六鎮の兵士を率いた葛栄が一時華北平原を席卷し、洛陽は乱の鎮圧に功績を挙げた匈奴の爾朱栄に制圧された。爾朱氏の没落後は、共に六鎮の流れを汲む高歓と宇文泰が黄河を挟んで華北を東西に二分し対峙した。高歓と宇文泰はそれぞれ北魏の皇族を担ぎ北魏は東魏と西魏に分裂したが、どちらも皇帝は傀儡に過ぎず、五五〇年には東魏が高氏に乗っ取られて北斉に、五五七年に西魏が宇文氏に乗っ取られて北周となった。五七七年には北周が北斉を滅ぼして華北を統一するが、五八一年には外戚の楊堅が篡奪して隋を建国し、五八九年に南朝の陳を滅ぼし約三〇〇年ぶりに中国を統一する。

北齊・北周とも主な支配者は六鎮の乱に加わった鮮卑族であり、両者は乱から生まれた双子のような存在だった。六鎮の乱によって内モンゴル南部に居住していた遊牧民兵士が大挙南下したため、人口構成はまたもや激変した。六鎮の主力の多くは北齊に流れ込み、山西および華北平原には大量の鮮卑族兵士が駐屯した。北周の主力は六鎮の一つ武川鎮出身の軍団であり、彼らは關中平原および隴西の豪族と結びつき強固な支配者集団を形成した。<sup>7</sup>「關隴集團」と呼ばれるこの集団は北周・隋・唐各政権の母体となった。

このように三世紀から六世紀の華北平原はめまぐるしい人口移動を経験し、人口構成も大きく変化した。先住の漢人が長江流域等に流出し、北方から遊牧系諸民族が移住して彼らの人口比率が上昇する、というのが大局的な趨勢である。激しい戦乱が続いて人口調査はほとんど行われなかったため、当時の人口については推測に頼らざるを得ない。<sup>8</sup>譚其驤は当時の中国北方人口を七〇〇万人、南渡人口を九〇万人とし、北方人口の八分の一余りが南渡し、南方人口の六分の一が北方からの移民であつたと推定した。<sup>9</sup>譚の論文はこのテーマの古典的研究であるが、当時の華北の人口移動規模をあまりに低く見積もっている。<sup>10</sup>譚の高弟である葛劍雄は、五世紀初頭までに少なくとも二百万人が南方に移民した、と譚の推定より遙かに多い数字を出している。<sup>11</sup>路遇・滕沢之は永嘉元年（三〇〇年）の全国人口を三〇〇四万人、そのうち漢人二四六九万人、非漢人五三五万人と推定する。全国的には漢人人口が多いが、四世紀以降も北方から続々と非漢人の移住が続き、漢人の多くが中国南部と黄河以南に流出したため、四世紀前期には黄河以北の人口のほぼ半数は非漢人によって占められたとする。<sup>12</sup>田村實造は、石勒・石虎時代の河北・山東・河南・山西・陝西に居住した「五胡族」の総数は最少に見積もっても九〇〇万人を越え、前燕滅亡時の領内の漢人人口は約一千万人とする。<sup>13</sup>このように当時の華北において遊牧系諸民族の人口は先住の漢人に拮抗するに至っていたと考えられる。

現代中国では国内の漢族以外の諸民族を「少数民族」と呼称し、この言葉を歴史上の非漢族を指す場合にもしばしば用いる。しかしこの時代の華北における遊牧系諸民族は人口の上からも決して「少数」ではなく、政治軍事の面においてはマジョ

リティーの地位を確固たるものとしていた。四世紀以降の華北は三世紀以前とは全く様相を異にしていたのである。それは華北平原においても例外ではなかった。

## 二 気候と環境の変化

ではこのような遊牧民の大規模な移住はなぜ起こったのだろうか。二世紀末の黄巾の乱以来、三国時代の戦乱、西晋の崩壊と中国では動乱が相次ぎ、彼らが進出し易かった政治的状况があったのは言うまでもない。しかし事はそう単純ではない。実はこの時期ユーラシア大陸の東西では同時に遊牧民の南下現象が起こっているのである。四世紀に東方からのフン族の進出を切っ掛けとして、ヨーロッパではいわゆる「民族大移動」が始まっており、中央アジアではエフタルが大勢力を築きササン朝ペルシャなどを攻撃している。中国史だけを考えれば政治的状况だけである程度説明はつくかもしれないが、世界的規模でのこのような現象を考えるなら、やはり何か別のより大きな原因が想定される。それが世界的な気候の変動である。

気候変動の歴史は急速に研究が進んでおり、歴史学のみならず自然科学の方面からも、三〜四世紀には世界的に気候が寒冷化したことが明らかになっている。日本における三〜八世紀にかけての寒冷期は「古墳寒冷期」と呼ばれる。<sup>14</sup>中国における気候変動史研究の先駆者である竺可桢は、三世紀後半になると寒冷化が急激に進行し、この傾向は大局的には南北朝時代を通じて六世紀後半まで続き、この寒冷期を通じて年平均気温は現在より少なくとも一〜二度低かったとする。<sup>15</sup>

近年はより詳細な研究が進み、魏晋南北朝時代の各時期における気候変化が明らかになりつつある。満志敏は魏晋南北朝期の気候は基本的に寒冷であり、春期も冬期も現在より気温が低く、特に冬期の極端に寒い状況は「明清小氷期」にも勝るとも劣らないとし、この時期の寒冷な気候には二つの大ピークと一つの小ピークがあるとする。<sup>16</sup>第一大ピークは三一〇年代を中心として二九〇年から三五〇年に跨る時期、第二大ピークは五〇〇年代を中心として四五〇年から五四〇年に跨る時期で、第



二大ピークの方が期間は長くより寒冷である。小ピークは四〇〇年頃の前後三〇年程度に跨る時期である。第一大ピークの冬期気温は現在より一度程度低い。第二大ピークの冬期気温は現在より一・六～二度低く、寒冷化が頂点に達した時期は二～二・五度低い。二つの大ピークに挟まれた期間の冬期気温は現在と大差なく、また五五〇年頃から気候は温暖に転じていくとする。

葛全勝は魏晋南北朝期の気候変動を次の四段階に区分する。<sup>17</sup> 第一段階・三国西晋から東晋前期まで（二二〇～三五〇年代）はやや寒冷で、特に三二〇～三五〇年代は顕著に寒く、冬半期の平均気温は現在より〇・五度低い。第二段階・東晋中期から北魏の華北統一まで（三六〇～四四〇年代）は、気候が温暖化に転じ中でも東晋晚期（三六〇～四〇〇年代）は明らかに現在よりも温暖である。第三段階・南朝宋から梁まで（四五〇～五三〇年代）は、気候が再び寒冷に転じて冬半期の平均気温は今より〇・七度低く、最も寒冷な三十年間（四八一～五一〇年）は一・二度低い。第四段階・南朝梁末から陳の滅亡まで（五四〇～五八〇年代）は、気候が寒冷から温暖に向かい現在よりも温暖である。<sup>18</sup>

このように研究者によって差異はあるものの、魏晋南北朝期が寒冷期であり、三世紀後期から四世紀前期と五世紀後期から六世紀前期はとりわけ寒冷な時期だった点については、多くの研究が一致をみている。華北への遊牧系諸民族の移住が集中するのは、まさにこの三世紀後期から四世紀前期の寒冷期である。<sup>18</sup>

気候の寒冷化による被害は緯度が高い地域の方が大きく、北緯四〇度以北の中央ユーラシア草原地帯は雪害などの自然災害が頻発し、遊牧民の生活に甚大な被害を与えた結果、彼らの多くは従来の住地を離れ南下の道を選んだ。これが世界的な遊牧民の南下現象を引き起こした大局的な要因であったと考えられる。この現象が中国では五胡の華北移住と征服という形で現れたのである。<sup>19</sup> この気候変動は北緯三五度前後に位置する華北にも当然大きな影響を与えずにはおかなかった。

現在中国では国土を農業区・牧畜区・農業牧畜交錯区に大別している。農業牧畜交錯区とは農業と牧畜の両者が並存している地域である。このような分類自体中国独特のものである。華北のうち山西・陝西などの大部分は農業牧畜交錯区に分類される。現代においても華北は牧畜業の比重が大きい地域である。



そもそも華北では古来より牧畜が営まれ農業と併存していた。秦漢時代は穀物生産を第一とする「大田穀作主義」が推進されたため、狩猟採集牧畜漁撈等の生業は排斥され支配者の残す記録から意図的に排除されたが、実態として華北各地で牧畜は営まれ続けていた。<sup>20</sup>このような華北の農業と牧畜の分布は時代によって大きく変化する。史念海は華北を「牧畜地区」「半農半牧地区」「農業地区」に区分しその変遷を考察する。「半農半牧地区」とは現代の農業牧畜交錯区に相当し、牧畜地区と農業地区との中間にあつてどちらの生業も行い得る地区を指し、実際に両方が並存していた。史によれば漢代の牧畜地区と半農半牧地区の境界はほぼ当時の長城に一致し、半農半牧地区と農業地区の境界は、『史記』平準書によれば東は碣石山から上谷、常山関、太原北方を経て龍門から関中平原北部に至る線である。農耕地区の中でも主要な穀倉地帯は関中平原、河南東部、山東西部の平原である。<sup>21</sup>この線は唐代でもほぼ大差ない。

ところが魏晉南北朝時代には遊牧系諸民族の移住により、漢代の長城に沿った人工的な牧畜地区・半農半牧地区の境界線は徹底的に破壊される。半農半牧地区と農業地区の境界線はほぼ北緯三十六度に沿い、臨汾から洛川、固原を経て蘭州に至る線だが、これ以南でも山地は草原同様で漢代のような明確な線を引くことは不可能となり、各地で農業と牧畜が交錯する状況が生まれてくる。<sup>22</sup>これは当時の気候寒冷化と密接に関連しており、全体として農業の北限が後退し牧畜の分布が一気に南下してくるのである。中国史上農業と牧畜の境界線が最も南下したのがこの時代である。山西や陝北はいずれも牧畜適地となった。特に山西は長城以南で遊牧民に最も適した気候と自然環境を備えた牧畜可能な最南端地域となり、遊牧民が中原に進出する通路として軍事的に重要な地位を占め、この時代の匈奴・羯・鮮卑の本拠地となった。そのため東魏北齊期の晋陽は鄴を凌いで事実上の首都であつた。<sup>23</sup>このような牧畜の影響は太行山脈を越えて華北平原にも浸透し、四世紀には河北の中心都市である鄴周辺で遊牧民が草原で行うべき巻き狩りが堂々に行われ、周辺に駐屯する軍団を支える上で牧畜が少なからぬ比重を占めるに至る。<sup>24</sup>

農牧境界線の変化を決定づける要因には気候的なものと人為的なものがある。まず気候の寒冷化により特に緯度の高い地方

では農業が困難となり、牧畜に適した環境が広がる。華北平原でもかつての農耕地の多くが草原に変わっていく。さらに牧畜を生業としている人々が家畜を引き連れてこのような土地に移住し、牧畜を営み続けることにより、その地は名実共に牧畜地区あるいは半農半牧地区へと変化していった。

このような半農半牧地区は日本においても近年様々な意味で大きな注目を集めている。その政治的重要性にいち早く着目したのはアメリカのオーウェン・ラティモアである。ラティモアは万里の長城に沿った中国北方・東北方辺境地帯を「将来中国を征服し、次代の中国の歴史を左右するパワーが溜まる場所」という意味でリザーヴァー (Reservoir) と名付けた。<sup>25</sup> 石見清裕はこの「リザーヴァー」を「(異民族の居住する、あるいは漢人・非漢人が雑居する) ベルト状地帯」と呼び、ラティモアが一〇世紀の契丹以降を考察の対象としたのに対し、漢・唐代においてもこのベルト状地帯は「リザーヴァー」の役割を果たしたとし、北魏の華北統一がリザーヴァーそのものが独立した形態にほかならないとする。<sup>26</sup> 妹尾達彦はこれをはじめ「農業―遊牧境界線」のちに「農業Ⅱ遊牧境界地帯」と名付け、中国のみならずユーラシア大陸を東西に貫く一万キロを超す長大な地域であるとして、世界文明的に位置づける。特に地中海北部、イラン高原、中国華北は有力な農業地帯と遊牧地帯を繋ぐ境界地帯に立地し、農業と遊牧という異なる生業が接触し、多様な人々が交流して情報と富の集積する場となったため、都市と政治権力が発生し、後代に影響を与えるユーラシア大陸の重要な古典文化(ギリシャ・ローマ文化、ペルシャ文化、漢文化)が形成される地域となった。これらの古典文化は四、五世紀から七世紀の遊牧民の大移動により打撃を受け、移動してきた遊牧民と古典文化圏の農耕民が衝突・融合を繰り返しながら、この地域に新たに強大な政治権力(フランク王国・ウマイヤ朝・北魏・隋)が生まれたとする。<sup>27</sup> 森安孝夫は中国史の流れは農耕都市民と遊牧民がせめぎ合ってきたもので、中国史において草原を本拠地とする遊牧民は決して客人ではなく、農耕漢民族と並ぶもう一方の主人であつたとし、この地区を「農牧接壌地帯」と称し、遊牧民と農耕民の交わる「接点」であり、中国史のダイナミズムを生み出してきた中核部と捉える。この「農牧接壌地帯」は中国諸王朝にとって両刃の剣であり、それをうまくコントロールできれば繁栄をみるが、反乱勢力の揺籃の地ともな

り、「征服王朝」出現の舞台ともなる。<sup>28</sup>

これらはいずれも中国特に華北と、中央ユーラシアとりわけモンゴル高原の密接な関係に注目する考え方である。華北とモンゴル高原はいつの時代も深い関係を持ってきたが、魏晉南北朝期は二つの地域が自然環境上も接近し、遊牧民が両者を自在に往来した時代である。このような自然環境の背景があったため、両地域は隋唐の初期に至るまで政治的にも連動した動きを見せた。「唐の建国とは、中国の統一ではなく、南モンゴリアと華北とで形成される地域の統一だったのである。」<sup>29</sup>と言われる所以であり、この時代の華北は政治軍事ばかりでなく、自然環境や経済の上からも遊牧系諸民族の天地だったのである。

### 三 遊牧系諸民族移住の影響

ではこのような遊牧系諸民族の移住と自然環境の変化は、華北平原にどのような影響をもたらしたのだろうか。まず産業構造の大きな変化が挙げられる。

前節で述べたように、前漢期の農業中心地域は関中平原および河南・山東西部即ち華北平原の黄河以南（河南・山東西部）の地域だったが、三世紀からの気候の寒冷化と遊牧系諸民族の大量移住により農牧境界線は一気に南下し、華北北部の山西・陝西一帯は牧畜地域と化し華北平原でも牧畜の色が濃くなっていく。

移住してきた遊牧系諸民族は大量の家畜を持ち込み、華北平原においても牧畜生活を営み続けたので、この地では漢人の伝統的農業と牧畜が融合した独特の農業が生まれることになった。このような現象が生じたのは中国だけではない。ユーラシア大陸における北緯四〇度前後の「農業——遊牧境界線」上の一帯はいずれも牧畜の強い影響を受け、「農牧複合」と呼ばれる農業が生み出された。<sup>30</sup>この農法を今によく伝えるのが六世紀に書かれた農書『齊民要術』である。<sup>31</sup>著者の賈思勰は北魏から東魏時代の人で、『齊民要術』はそれ以前の様々な農書の内容を集大成し、その上に彼の同時代に行われた農法についての多

くの情報を加えたものである。賈思勰は青州益都（山東省寿光市）の人で高陽郡太守を努めた。高陽郡の位置については青州高陽郡（山東省淄博市）説と瀛州高陽郡（河北省高陽県）説があるが、山東省淄博市説が定説化している。いずれにせよ『齊民要術』は彼の家郷及び任地である華北平原を対象として書かれたものである。

『齊民要術』は農書であり内容の大部分は農業に関するものである。しかし中には遊牧文化の影響も数々記されており、特に重要なのが乳製品の普及である。世界には南米のリヤマ・アルパカ牧畜のように、家畜を飼育しながら乳を利用しない牧畜文化もあるが、ユーラシアおよびアフリカの牧畜業において乳利用は極めて大きな比重を占めており、乳利用文化の存在はその地域が遊牧文化の影響を受けたことを示す指標となっている。言うまでもなく肉を利用するためには家畜を殺さなければならず、資本としての家畜を目減りさせることになるが、乳は家畜を生かしたまま利用することができるため、乳利用により牧畜業はより大規模で持続可能なものとなった。出産をコントロールすることで群れの維持管理を可能とした去勢技術と、乳搾りの技術を前提として、はじめて牧畜という生活技術が完成したとさえ言うことができるのである。<sup>32</sup> 華北東部以南の中国本土は、現代では東南アジアやオセアニアと並んで乳利用の文化を持たない地域に分類されるが、<sup>33</sup> 華北平原は四世紀以降に遊牧文化の影響を強く受けて乳利用が普及し、以後数世紀にわたってこの文化は受け継がれた。

『齊民要術』巻六「養羊第五十七」には何種類もの乳製品の作り方が記されている。<sup>34</sup> まず羊あるいは牛の生乳を鍋に入れ弱火で加熱し柄杓で掻き上げて水分を蒸発させ、表面に浮く「乳皮」を取る。続いて「乳皮」を取った後の乳を濾過して、以前作った「酪」を「酵」として加えて寝かせ「酪」を作る。<sup>35</sup> 「酪」を天日に曝してできた「乳皮」をすくい取り、加熱してさらに天日に曝し「乾酪」を作る。<sup>36</sup> また上質の「酪」を布袋に入れ吊して水を切り、加熱して天日に曝し「漉酪」を作る。<sup>37</sup> 驢馬と馬の乳を混ぜ「酪」の「酵」として用いる「馬酪酵」を作る。<sup>38</sup> さらに「酪」を攪拌して「酥」を取り出し（搾酥法）、残った液体である「酪漿」は冷たい飯や粥に混ぜる。<sup>39</sup> 生乳の「乳皮」から作る「酥」は特に上質である。<sup>40</sup>

石毛直道はこの「乳皮」「酥」「酪」「乾酪」「漉酪」を現代モンゴルの乳製品と比較し、それぞれ生乳から取り出すクリー

ムであるウルム、それから作られるバター状食品のツアガン・トス、ヨーグルトであるタラグ、高発酵型乾燥チーズであるアローロール、即席タイプの低発酵型チーズであるビヤスラグに比定する。「馬酪酵」は現代モンゴルには存在しないが、タラグを作るための特別なスターターであろうと推定する。<sup>41</sup> 乳から「乳皮」を取り出す際に柄杓で掻き上げる工程はウルムを作る工程とそっくりであるし、ウルムを取り出した乳（ボルソン・スー）に以前作ったヨーグルトを入れて発酵のスターターとする点は、タラグと全く同様である。<sup>42</sup> 「乾酪」「漉酪」の工程については、『斉民要術』は現代とはやや異なる手法を用いているか、あるいはヨーグルトであるタラグと発酵が進んだ乳酒であるアイラグとを混同している可能性がある。ただし現代モンゴルでも両者はあまり明確には区別されないことが多い。なお私見では「酥」はツアガン・トスというより、これを用いて作られるバターオイルであるシャル・トスに比定した方が良いだろう。「搾酥法」で作られる「酥」は「酪」を「一食の時間」攪拌して取り出され、後にまとめて加熱して完成するが、これは現代モンゴルでアイラグを一五〇〇回ほど攪拌してバターであるアイラギン・トスを取り出し、加熱してシャル・トスを作る方法に酷似している。また生乳の「乳皮」から作る「酥」は、まさしくウルムから取り出すシャル・トスである。「酪漿」に当たるホエーはモンゴルでは革をなめす溶液や家畜のエサとして用いたり、乳の発酵容器に戻して再利用するが、中央アジアや西アジアではこれをさらに加工して保存性の高いチーズを作る。<sup>43</sup> 「酪漿」を積極的に利用しないという点でも『斉民要術』はモンゴルと極めて類似している。

このように『斉民要術』には現代モンゴルとほとんど同じ工程で同じような乳製品を作る方法が記されているのである。このような食文化を持ち込んだ遊牧系諸民族はモンゴル高原からやって来たのだから、現代モンゴルと似ているのは当然であろう。この時代だけでなく、やはり中国が遊牧文化の影響を強く受けたモンゴル帝国時代にも乳製品は中国に普及しており、当時のいくつかの料理書にミルク・バター・チーズなどを使う料理が記されている。<sup>44</sup> 中国における乳利用文化は北方民族が中国を征服するたびに持ち込まれ消長するが、<sup>45</sup> 『斉民要術』が書かれた六世紀の華北平原で乳製品がこれほど広く受容されていたことは、遊牧文化がこの地に深く根を下ろしていたことを如実に示すものである。



その他に血の利用法も注目に値する。血の食用を禁忌とするイスラーム圏ユダヤ教圏を除き、乳と同様に完全食品である動物の血液は、牧畜文化の伝統を持つ世界各地で利用されている。中国でも漢代の画像石に家畜を屠る際に血を保存する場面が描かれ、血を食用として利用していた。現代でも「血豆腐」と呼ばれる羊や豚の血を固めた食品や、鴨の血のスープである「鴨血湯」等が食用に供されている。

このような血を利用する食品は中国に伝統的に存在しているが、『齊民要術』巻第八「羹臠法第七十六」に記される血の食品は独特である。「羊盤腸雌」と呼ばれるこの食品は、羊の血五升を取り、羊の脇腹の脂肪、生姜、橘皮、山椒、たまり醤油、豉汁、小麦粉、米を混ぜてあじめしを作り、さらに水を加えて羊の大腸に詰めて腸詰めとし、これを長さ五寸に切って煮たもので、要は血のソーセージである。現代モンゴルには羊の血にネギやタマネギ等の薬味と塩を混ぜ、時には小麦粉を加え羊の小腸に詰める、ザイダスと呼ばれる血のソーセージがある。また羊の第四胃に血を詰めたアムサルという食品もある。<sup>46</sup> 薬味の種類、米を混ぜる、小腸ではなく大腸に詰める、といった違いはあるが、羊盤腸雌の製法はザイダスに非常によく似ている。これもモンゴル高原から持ち込まれた食文化と考えられる。

この時代の農法や食文化など基本的な日常生活文化には、遊牧文化の影響が非常に強い。特に比較的保守的な傾向がある食文化にまで大きな影響があるのを見れば、遊牧系諸民族が故郷から持ち込んだ文化がどれほどこの地に定着していたかがよくわかる。四世紀以降の華北平原は、もはや文化や生活においてもそれ以前とは大きく異っていたのである。

#### おわりに

以上述べてきたように、黄河下流の広大な平原地域は、三世紀以降の気候寒冷化と戦乱が相まって遊牧系諸民族の移住が進行し、四世紀にはついに彼らが華北を支配する時代を迎えた。これによりその移住には拍車がかかり、華北においては先住



民たる漢人に匹敵する人口を有するに至った。農牧境界線が南下し華北の相当部分が農牧交錯地域となり、華北平原では遊牧文化の影響を濃厚に受けた独特の農法と生活文化が形成されていった。

現在の華北平原はおよそ一望千里の麦畑であるが、四世紀以来の数世紀、この地では点在する農地の中で多くの家畜を引き連れた牧民が放牧を行い、牧畜が大きな比重を占める景觀が展開されていた。農牧が交錯する光景は現代の内モンゴルや中央アジアを彷彿とさせる。当時の華北平原はまさしく内陸アジアの一部だったのである。

そこで次章では、このような環境下で河北の中心都市として発展していった鄴について分析し、当時の都市と牧畜民および牧畜業の関係について考察を加えたい。

1 田村實造『中国史上の民族移動期——五胡・北魏時代の政治と社会——』創文社、一九八二年、三頁。

2 田村實造は「いわゆる五胡民族の華北への移動・潜住は、その人口のおびただしさ、またその規模の雄大さにおいて、はたまたそれが中国および東アジア世界におよぼした歴史的意義の重要性において、ヨーロッパ史上のゲルマン民族の大移動を上回るであろう。」と述べる。田村前掲書、四頁。

3 劉氏一族が匈奴单于の子孫であることには、日本でも中国でも否定的見解が出されている。町田隆吉「二・三世紀の南匈奴について——『晋書』卷一〇一劉元海載記解釈試論——」『社会文化史学』一七、一九七九年は、劉氏は後漢末から魏にかけて山西で新たに台頭してきた一族であるとする。また次の諸研究も、劉淵一族と匈奴单于の関係を否定している。片桐功「屠各胡考——劉淵拳兵前史」『名古屋大学東洋史研究報告』第一三号、一九八八年。唐長孺「魏晉南北朝史論叢」(『魏晉南北朝史論叢』北京、三聯書店、一九五五年)。

- 4 漢語を用いる華北の先住民は、四世紀前半には「晋人」と呼ばれたが、後に「漢人」と呼称されるようになった。ここでは便宜的に「漢人」の呼称で統一する。これに対して移住してきた遊牧系の人々は「胡人」「胡族」「五胡」などと呼ばれたが、ここでは主に遊牧系諸民族と呼称する。
- 5 史念海「十六国時期各割拠覇主的な人口遷徙」（史念海『河山集七』西安、陝西師範大学出版社、一九九九年）
- 6 前掲史念海「十六国時期各割拠覇主的な人口遷徙」。
- 7 西魏・北周の中央軍には漢人豪族が率いる郷兵も存在したが、平田陽一郎は、中央軍たる二十四軍を構成する軍事集団は地域的にも種族的にも極めて多様な存在で、漢人郷兵はその一部に過ぎず、二十四軍制は鮮卑の伝統に支えられた擬制的部落兵制で遊牧軍制の系譜に位置づけられるべきものとする。平田陽一郎「西魏・北周の二十四軍と「府兵制」」（『東洋史研究』第七十卷第二号、二〇一一年）。
- 8 胡阿祥、島田悠詔「東晋・十六国・南北朝の人口移動とその影響」（渡邊義浩編『魏晋南北朝における貴族制の形成と三教・文学——歴史学・思想史・文学の連携による』汲古書院、二〇一一年）は、この時代の人口移動と主要研究を概観し、研究上の課題を指摘している。
- 9 譚其驤「晋永嘉喪乱後之民族遷徙」（原載『燕京学報』第一五期、一九三四年。譚其驤『長水集』上、北京、人民出版社、一九八七年）。
- 10 譚自身もこの論文は初步的研究と考えており、この問題がさらに深く研究されることを期待していた。譚其驤「歴史人文地理研究発凡与举例」（『歴史地理』第一〇輯、上海人民出版社、一九九二年）
- 11 葛劍雄『中国移民史』第二卷（福建人民出版社、一九九七年）
- 12 路遇・滕沢之『中国人口通史』上（山東人民出版社、二〇〇〇年）
- 13 田村前掲書、八八〜九二頁
- 14 阪口豊は尾瀬ヶ原の泥炭層の花粉分析により、この時期が寒冷期であることを明らかにし、「古墳寒冷期」と命名した。阪口豊『尾瀬ヶ原の自然史』（中公新書、一九八九年）
- 15 「中国近五千年來氣候變遷的初步研究」（『考古学報』一九七二年一期、一九七二年）
- 16 満志敏『中国歴史時期氣候變化研究』（山東教育出版社、二〇〇九年）

- 17 葛全勝等『中国歴朝気候変化』（科学出版社、二〇一一年）
- 18 このような気候の傾向は中国周辺の各国と地域差があると考えられている。安田喜憲は日本の古墳寒冷期では二世紀と五世紀が寒冷期のピークで四世紀は温暖であり、また五世紀の日本は雨が多かったとする。安田喜憲『気候変動の文明史』（N T T出版、二〇〇四年）
- 19 妹尾達彦「中華の分裂と再生」（妹尾達彦編『中華の分裂と再生』岩波講座世界歴史第九巻、岩波書店、一九九九年）
- 20 原宗子『「農本」主義と「黄土」の発生——古代中国の開発と環境2』（研文出版、二〇〇五年）
- 21 史念海「秦漢時代の農業地区」（『河山集一』三聯書店、一九六三年、所収）
- 22 史念海・曹爾琴・朱士光『黄土高原森林与草原的変遷』（陝西人民出版社、一九八五年）
- 23 朴漢濟「東魏—北齊時代の鄴都の都城構造——立地と用途、その構造的な特徴」（『中国史学』第二〇巻、二〇一〇年）
- 24 第四部第三章「五胡十六国時代における鄴城周辺の牧畜と牧畜民」（原題「魏晋南北朝時代における鄴城周辺の牧畜と民族分布」、鶴間和幸編『黄河下流域の歴史と環境——東アジア海文明への道』、東方書店、二〇〇七年所収）。
- 25 Owen Latimore『Manchuria: Cradle of Conflict, New York, 一九三二年。リザーヴァーに関する核心部分である第二章「The "Reservoir" of Tribal Invasions」の一節「The Tribes and the "Reservoir"」は、石見清裕「ラティモアの边境論と漢唐間の中国北辺」（唐代史研究会編『唐代史研究会報告第八集 東アジア史における国家と地域』、刀水書房、一九九九年）に訳出されている。
- 26 前掲石見「ラティモアの边境論と漢唐間の中国北辺」。「ベルト状地帯」については石見清裕『唐代外国貿易・在留外国人をめぐる諸問題』（『魏晋南北朝隋唐時代史の基本問題』汲古書院、一九九七年。石見清裕『唐の北方問題と国際秩序』汲古書院、一九九八年所収）も参照されたい。
- 27 妹尾達彦『長安の都市計画』（講談社、二〇〇一年）
- 28 森安孝夫『シルクロードと唐帝国』（講談社、二〇〇七年）
- 29 石見清裕「唐の成立と内陸アジア」（『歴史評論』二〇一〇年四期）

- 30 前掲妹尾『長安の都市計画』三〇～三四頁。妹尾はヨーロッパの三圃式農業、イラン高原と華北の農業を代表的なものとして挙げる。
- 31 古賀登は、『斉民要術』に記される新しい農法は、華北に遊牧民が大量に持ち込んだ家畜や、西域からもたらされた作物といった「遊牧民インパクト」の産物であり、当時の華北平原が牧畜民の影響を濃厚に受けていた証左である、という。古賀登「均田制と墾共同体」(『早稲田大学大学院文学研究科紀要』十七、一九七一年)
- 32 梅棹忠夫『狩獵と遊牧の世界』(講談社学術文庫、一九七六年)
- 33 谷泰『神・人・家畜——牧畜文化と聖書世界——』(平凡社、一九九七年)
- 34 『斉民要術』の底本は繆啓愉校釈『斉民要術校釈』(中国農業出版社、一九九八年)を用いた。また次の諸研究を参照した。田中静一・小島麗逸・太田泰弘編訳『斉民要術——現存する最古の料理書』(雄山閣、一九九七年)。西山武一・熊代幸雄訳『校訂注釈 斉民要術』(アジア経済出版会、一九六九年)。石声漢『斉民要術今釈』(科学出版社、一九五七～一九五八年)
- 35 作酪法。牛羊乳皆得。別作、和作随意。……捋訖、于鑊釜中暖火煎之、火急則着底焦。……四五沸便止。瀉着盆中、勿便揚之。待小冷、掠取乳皮、着別器中、以為酥。屈木為棬、以張生絹袋子、濾熟乳、着瓦瓶子中卧之。……濾乳訖、以先成甜酪為酵、大率熟乳一升、用酪半匙着杓中、以匙痛攪令散、瀉着熟乳中、仍以杓攪使均調。……良久、以單布蓋之。明旦酪成。(『斉民要術』卷六「養羊第五十七」)。以下、注四〇までの引用出典は全て同じ。
- 36 作干酪法。七月・八月中作之。日中炙酪、酪上皮成、掠取。更炙之、又掠。肥尽無皮、乃止。得一斗許、于鑊中炒少許時、即出于盤上、日曝。湍湍時作团、大如梨許。又曝使干。得經数年不壞、以供遠行。
- 37 作漉酪法。八月中作。取好淳酪、生布袋盛、懸之、当有水出滴滴然下。水尽、着鑊中暫炒、即出于盤上、日曝。湍湍時作团、大如梨許。亦数年不壞。削作粥・漿、味勝前者。炒雖味短、不及生酪、然不炒生虫、不得過夏。
- 38 作馬酪酵法。用驢乳汁二三升、和馬乳、不限多少。澄酪成、取下淀、团、曝干。後歲作酪、用此為酵也。
- 39 抨酥法。以夾榆木椀為杷子。作杷子法。割却椀半上、剗四廂各作一円孔、大小径寸許、正底施長柄、如酒杷形。抨酥、酥酪甜醋皆得所、数日陳酪極大醋者、亦無嫌。酪多用大甕、酪少用小甕、置甕于日中。旦起、瀉酪着甕中炙、直至日西南角、起手抨之、令杷子常至甕底。

一食頃、作熱湯、水解、令得下手、瀉着甕中。湯多少、令常半酪。乃搾之。良久、酥出、復下冷水。冷水多少、亦与湯等。更急搾之。于此時、杷子不須復達甕底、酥已浮出故也。酥既遍覆酪上、更下冷水、多少如前。酥凝、搾止。大盆盛冷水着甕辺、以手接酥、沈手盆水中、酥自浮出。更掠如初、酥尽乃止。搾酥酪漿、中和飡粥。

40 初煎乳時、上有皮膜、以手隨即掠取、着別器中。瀉熟乳着盆中、未瀉之前、乳皮凝厚、亦悉掠取。明日酪成、若有黃皮、亦悉掠取。并着瓮中、以物痛熟研良久、下湯又研、亦下冷水、純是好酥。接取、作団、与大段同煎矣。

41 石毛直道「世界の中のモンゴルの乳食文化」(石毛直道編『モンゴルの白いご馳走』チクマ秀版社、一九九七年)。

42 モンゴルにおける乳製品の作り方については、小長谷有紀「加工体系からみたモンゴルの「白い食べ物」」(前掲『モンゴルの白いご馳走』)ならびに小長谷有紀『世界の食文化三 モンゴル』(農山漁村文化協会、二〇〇五年)を参照した。

43 前掲『齊民要術——現存する最古の料理書』五六頁

44 フランソワーズ・サバン、荒井ゆりか訳「一四世紀中華帝國における宮廷料理——忽思慧『飲膳正要』の調理の諸相(Ⅱ)」(『VESTA』第二二号、一九九二年)

45 篠田統は「満州・蒙古の文化は金・元・清三朝の中原征服によって漢人文化に溶けこんでおり、江南の蘇州ですらヨーグルトが年中行事にとりこまれた」という。篠田統『中国食物史』(柴田書店、一九七四年)

46 三秋尚『モンゴル 遊牧の四季——ゴビ地方遊牧民の生活誌』(鉾脈社、一九九五年)

#### 第四部 華北における牧畜民と牧畜業



## 第三章 五胡十六国時代の鄴城周辺における牧畜民と牧畜業

### はじめに

魏晋南北朝時代の華北平原において、鄴を中心とする現在の河北省南部地域はしばしば首都が置かれたこともあり、洛陽盆地と並んで政治軍事的に最も重要な地域の一つであった。この地域は唐宋期においても政治軍事的要地であったが、魏晋南北朝に比べて地盤沈下は否めない。何より鄴が王朝の首都となったのは魏晋南北朝期に限られており、この時期における鄴の重要性は突出している。

鄴は当時中国指折りの大都市であり、その膨大な人口は周囲に広がる華北平原の豊かな農業生産が支えていたと考えられていた。しかし四世紀から五世紀初頭について考えると、この地は度重なる戦乱で荒れ果て、農業を支える基盤も破壊されたため、漢代に比べ明らかに農業は衰微していたと考えられる。にもかかわらず多くの人口を擁する都市が存在し続けた。農業が衰退した地に巨大都市が繁栄したという事実をどう考えればよいのだろうか。本章ではこの矛盾の背景について若干の考察を加えていきたい。

### 一 鄴の発展と変遷

鄴の存在する河北省南部の平原は古くから政治経済上の要地だったが、後漢までその中心は邯鄲であった。言うまでもなく

邯鄲は戦国趙国の都であり、前漢期にも洛陽・臨淄・宛・成都と並んで、長安を除く全国五大都市の一つに数えられている。鄴は後漢期においては冀州の州治ですらなく、地方都市の一つに過ぎなかった。

鄴が河北南部の中心となったのは後漢末からである。袁紹がこの地に本拠地を置いたのがその端緒だが、都市としての鄴の地位を確立させたのは曹操である。曹操は袁氏勢力を滅ぼすと二〇四年に鄴に根拠地を移し大規模な都市建設を行った。やがて曹操が魏公に封ぜられると鄴は魏公国、後には魏王国の首都となった。二二〇年に曹丕が漢を奪って皇帝に即位し洛陽に都するまでの間、鄴は事実上の首都と言って良い地位にあり、魏王朝成立後には五都（洛陽・長安・許昌・鄴・譙）、西晋期にも四都（洛陽・長安・許昌・鄴）の一つとして、政治的に重要な地位を占め続けた。四世紀以降は華北の分裂状態に伴って鄴は幾つかの王朝の首都となった。魏晋南北朝時代に鄴に首都を置いた王朝は次の通りである。

魏王国（二〇四～二二〇年） 後趙（三三五～三五〇年） 冉魏（三五〇～三五二年） 前燕（三五七～三七〇年） 東魏（五三四～五五〇年） 北齊（五五〇～五七七七年）

首都として魏王国を含めて六朝八九年の歴史は、同時期の洛陽（三朝一三二年）、長安（五朝一二三年）と比べ決して長いわけではない。また鄴に首都を置いた王朝は華北の統一に成功しておらず、華北全土の首都として君臨したこともない。この意味で鄴はややローカルな存在ではあるが、当時の華北における政治経済軍事上の最重要都市の一つであったことは間違いない。

曹操は袁紹時代の都市に大幅な改造を加え、ここに東西七里南北五里（東西二四〇〇メートル、南北一七〇〇メートル）の都市を建設した。南北九里東西六里で「九六城」と呼ばれた洛陽を上回ることを曹操が憚ったため、このような規模になったと言われている。曹操はまた城の西北角に冰井台・銅雀台・金虎台という三基の台を築いた。これはやがて鄴のシンボルとなり「三台」と言えば鄴を指すようになる。この鄴三台は後の洛陽金甌城のモデルともなり、中国初期の馬面が造られるなど、鄴の都市建築は後世に大きな影響を与えた。

鄴は魏・西晋期を通じ首都に準ずる要地であったため、八王の乱が始まると一方の有力者成都王司馬穎の本拠地となったが、三〇四年には、洛陽に拠る東海王越の一派である并州刺史司馬騰と幽州刺史王俊の攻撃で陥落し、さらに三〇六年には代わって鄴に拠った司馬騰を成都王の殘党汲桑・石勒等が攻撃し敗死させた。この時城内の多くの建築物が焼失したものと思われる。やがて河北地方を本拠地として自立した石勒は、鄴の北方に位置する襄国に本拠地を定め後趙を建国した。石虎が後趙の君主となると鄴に遷都し、壮麗な宮殿などを次々と建設し、いったん戦乱で荒廃した鄴周辺はこの時代に急速に復興し繁栄を遂げる事となった。石虎の死後、後趙は内乱状態に陥った末、漢人出身の將軍冉閔に篡奪され、鄴は冉閔の魏国（冉魏）の拠る所となり、さらに鮮卑慕容部の前燕が冉魏を滅ぼして鄴に遷都するなど、情勢はめまぐるしく変転するが、前燕時代に再び首都としての繁栄を取り戻す。

前燕が前秦に滅ぼされた後も鄴は華北東部の最重要都市であり、前秦後期には皇族の苻丕が氏族の軍団を率いて駐屯していた。前秦崩壊後、燕国を復活させ後燕を建国した慕容垂は、苻丕の激しい抵抗にあつて中山を首都に定めざるを得ず、鄴は慕容部の軍団の駐屯地となった。三九八年に後燕は北魏に敗れ華北平原を失った。この結果鄴周辺は北魏の支配下に入った。北魏では当初盛楽から鄴に遷都する計画もあったが、結局行われず鄴は相州となった。この時点では前代までの建築物も相当残されていたが、四四九年には鄴民の反乱を恐れて石虎以来の宮殿等を焼き払い、都市としては大きく衰退した。

五三五年に東魏が鄴を首都とすると、従来の城（北城）の南に隣接して南城を築き、鄴の都市規模はほぼ倍増した。この新しい鄴は後の隋唐長安城の都市プランに大きな影響を与え、華北屈指の大都市として繁栄を極めたが、北周末の五八〇年に尉遲迥がここを拠点として、篡奪を目前にした楊堅に対し反旗を翻し鎮圧された後、大規模に破壊された。これ以後この地には鄴県が置かれたものの政治的地位は大きく低下し、北宋の熙寧六年（一〇七三）には県すら廃されて鎮となり、地方の小都市に落ちぶれた。このように鄴の繁栄は魏晋南北朝時代に限定されるもので、当時の分裂割拠の情勢と密接に関連するものであった。<sup>1</sup>

このような鄴の変遷をどう時代区分するかについては幾つかの考え方ががある。村田治郎は次のような時代区分を提起した<sup>2</sup>。第一期は魏の王都となつてから西晋まで。三〇七年に旧来の宮殿は焼失する。第二期は後趙より北魏まで。後趙の石虎は大規模建設を行い鄴に一つの絶頂期をもたらした。鄴は前燕まではよく繁栄したが、前秦・後燕期には衰退し、北魏初期にはやや回復したものの、四四九年の破壊で都市の面貌は一変してしまった。第三期は東魏・北斉期。南城が築かれ鄴が都市として最も整備された時期である。

これに対し塩沢裕仁は次のような時代区分を提唱する<sup>3</sup>。(一) 後漢以前。まだ河北南部の中心地が邯鄲だった時期。(二) 後漢末から前燕。曹操による都市整備から後趙と前燕の首都として繁栄する時代。(三) 後燕から北魏。後燕期に鄴は次第に縮小し、大きな破壊を受けた北魏後期には前代までの都市の面影はほとんど留めていない。(四) 東魏・北斉。全く新しい都市となる。

両者の大きな相違点は、西晋末及び前燕滅亡を以て時代を画するか否かである。村田は八王の乱で都市建築が焼失したことを重視し、西晋期の鄴と後趙期の鄴を都市として区別するが、塩沢は鄴周辺の土地利用や都市プランが魏王国期から後趙までさして変化していないことを重視し、後趙期の鄴はむしろ西晋期の基礎の上に発展したものと見なしている。西晋末の破壊は看過できないほど大きなものであろうし、また前燕滅亡によって鄴の首都としての歴史に一旦終止符が打たれたので、このどちらか一つの画期と見なすのが自然ではないか、と私は考える。

鄴遺跡は近年発掘が進み、次第にその全貌を明らかにしつつある。鄴は漳水のほとりに築かれたため、洪水の度に次第に泥に埋まり、当時の都市遺構は現在地下深く埋もれている。本来鄴は漳水南岸に築かれたのだが、現在の漳水は流路を大きく変えて北城と南城の間を流れるに至っている。そのため北城南壁は浸食を受けて確認されず、また南が若干低い地形のため南城はより深く土の下に埋もれてしまっている。

鄴北城城壁も現在は南城同様地下に埋まっているが、城西北の三台の一部は埋没を免れて地上にそびえている。先述のよう

に三台は北から氷井台・銅雀台・金虎台があったが、現在は金虎台と銅雀台の一部しか残っていない。最も保存状態の良い金虎台は南北一二〇メートル、東西七一メートル、高さ一二メートルある。銅雀台は後趙の石虎が高さ三〇メートル近くにかさ上げしたのだが、今は浸食されてわずかに南北五〇メートル、東西四三メートル、高さ四く六メートルを残すのみである。<sup>4</sup>氷井台は跡形もない。地上には三台以外何の痕跡も見あたらない。

鄴遺跡は一九五七年に兪偉超が、一九七六年から翌年にかけて河北省臨漳県文保所がまず北城について調査を行った。一九八三年秋より中国社会科学院考古研究所と河北省文物研究所合同の鄴城考古工作隊が大規模な発掘とボーリング調査を実施し、城壁・主要道路・宮殿等の都市プランが明らかになった。<sup>5</sup>鄴南城は一九八五年から始まったボーリング調査によって東西二六〇メートル、南北三四五〇メートルのプランが確認され、南壁の朱明門は発掘されて往時の壮麗な建築遺構が発見されている。<sup>6</sup>このように往時の鄴の姿は発掘によって明らかになりつつあり、それに伴ってその重要性も認識されるようになってきている。既に述べたようにその繁栄は魏晉南北朝時代に限られるものではあるが、この時代の黄河下流域を考える上においては最も重要な都市であると言えるだろう。

## 二 四く五世紀初頭の鄴周辺における人口移動

四く五世紀初頭すなわち五胡十六国時代の華北は、史上稀に見る激しい人口移動に見舞われたが、鄴周辺地域はそれが特に激的な地の一つであった。そこで先ず具体的な人口移動の様子を、時代を追って概観していきたい。

先述のように鄴は曹操が本拠地として以来、魏・西晋期を通じ首都に準ずる要地であったため、八王の乱で攻撃され焼失した。この戦乱で鄴は荒廃し、河北から多くの難民が黄河を越えて、山東方面そして江南へと流れていった。

やがて後趙時代に鄴周辺は急速に復興する。第二章で述べたように、後趙はこの時代の歴代王朝の中で最も多くの徙民政策

を行った。それは三五年間に実に三〇回以上に及び、後趙の司州・冀州即ち河北地方に集められた人口は、少なく見積もっても優に七〇万人から一〇〇万人を越える。これらの徙民は首都襄国と鄴を中心として半径一〇〇キロほどの範囲に居住させられ、広大な首都圏を形成して首都防衛の機能を担ったと考えられる。

後趙の大首都圏は三五〇年の内乱と漢人出身の將軍冉閔による胡人虐殺で崩壊し、「青・雍・幽・荊州の徙戸及び諸氏・羌・胡・蛮数百万、各々本土に還らんとして、道路交雜し、互いに相殺掠し、且つ飢え疫みて死亡し、その達する能う者は十に二三有るのみ。」<sup>7</sup>という惨状を呈した。鄴周辺の戦乱で被害を被り難民化した者が数百万人もいたわけで、後趙時期の鄴地域が巨大な人口を擁していたことがよくわかる。この後鄴は冉閔の魏国と後趙の残存勢力、そして北方から進出してきた鮮卑慕容部の前燕の三つ巴の戦場となり荒廃した。

冉魏を滅ぼした前燕は程なく鄴に遷都し、多くの鮮卑慕容部の人々が遼東より移住した。このことから見ると、後趙末の戦乱で鄴周辺の地域は荒廃したもの、都市としての鄴自体が灰燼に帰したとは考えられない。前秦が前燕を滅ぼした時、その領内の人口は二四五万八九六九戸・九九八万七九三五人であった。これは当時の前燕の全領域（河北・山西・山東・河南・遼寧）の人口だが、西晋時のこの地の戸口合計が一三万戸余だったので、人口がほぼ倍増したことになる。当時の戸口統計の不正確さを考慮しても西晋時より人口が増加したと考えざるを得ない。史念海氏はこれについて、後趙時に徙民された人には後趙崩壊後もこの地に留まった者が少なくなかったと推測している。

前燕滅亡後、前秦は鄴の鮮卑四万余戸を長安に、また「関東豪傑及雜夷」一〇万人を関中に移住させた。前秦崩壊時に慕容永は長安から関東に退去する際鮮卑三〇万を率いたが、その多くは鄴及び関東から移住させられた者であり、前燕時に鄴及び関東にどれほど多くの鮮卑が居住していたかがわかる。

前秦は三八〇年に氐族一五万戸を鄴をはじめとする関東の要地に移住させたが、前秦崩壊時に苻丕は「六万余口」を率いて西方に退去したので、氐族の多くが鄴を去ったと思われる。この時鄴は慕容垂と前秦勢力の係争地となつて荒廃し人口も激減



したため、慕容垂の後燕は首都を中山に定めることとなった。

三九八年に鄴周辺は北魏の支配下に入った。北魏は「山東六州民夷及何高麗雜役三十六万」を首都平城に徙民し、その代わり鮮卑拓跋部の軍団を鄴に駐屯させた。こうしてまた鄴周辺の人口と民族は入れ替わることとなった。その後北魏期に鄴周辺に何度も徙民が行われたが、この地域は比較的安定した状態が続く。鄴周辺が巨大な変動に見舞われるのは、北魏末の内乱以後のことである。

以上見てきたように、この時代の鄴周辺地域は華北の他の地域以上に激しい人口移動の波にさらされた。この当時の人口については、戦乱が続いて正確な人口統計が作られず、人口移動も激しかったため、極めて大まかな推測しかできないが、三世紀後半以降に北方から続々と非漢人の移住が続き、また漢人の多くが中国南部と黄河以南に集中したため、四世紀前期には黄河以北の人口のほぼ半数は非漢人によって占められたと考えられる<sup>9)</sup>。

このように鄴はこの時期に非常に大きな住民の入れ替わりを経験した。その主たる原因は戦乱で、四世紀から五世紀にかけて少なくとも三度にわたり壊滅的破壊を受け、その度に別の地域から大量の移入者を受け入れて人口を回復してきた。またこれ程の規模ではなくとも、主に徙民政策によって大きな人の異動があり、頻繁に住民が入れ替わっていたと見るべきである。住民の民族的バリエーションも大変なもので、漢・匈奴・氐・羌・鮮卑慕容部・鮮卑拓跋部・鮮卑段部・烏丸・高句麗・丁零等に及ぶ。そして非漢人人口が漢人人口を上回っていた。当時の鄴周辺地域は長安を中心とする関中平原と並んで諸民族雑居の地であり、最大の人口稠密地の一つでもあったのである。そこで次にこの地の人口を支えた背景について考察する。

### 三 鄴周辺地域の生業と牧畜

鄴を中心とする黄河北岸の地域は漢代における肥沃な農耕地の一つに数えられ、唐代においてもまた穀倉地帯の一角を占め

る土地であった。しかしこの地は漢代に黄河の洪水に頻繁に見舞われ、国家による治水事業が行われなければ大規模な農業は難しい場所である。そのため前漢後漢を通じて王朝は黄河の堤防建設等の治水事業に力を尽くすが、四世紀以降はそのような取り組みは全く放棄されたままであった。もともと四世紀から六世紀にかけて黄河の大規模な洪水と流路変更は無かったとされているが、近年これには疑問も呈されており、またいかに洪水が少なくなつたとはいえ、戦乱が絶えなかつたこの時代に漢代以上に農業が栄えたとは考え難い。では鄴の人口を支えたものは何だったのだろうか。

第一に考えられるのは外部、特に当時としては比較的人口が多かつた山東河南方面からの食料移入である。しかし結論から言えばこれはあまり現実的ではない。戦乱の中で安定した輸送路が確保できた可能性は低いし、また鄴進出直後の前燕や北魏のように、鄴に人口を養いながら山東河南を領土にしていなかつた場合もある。やはり河北南部程度の比較的狭い範囲で食糧を確保していたと考えるのが自然である。

次に鄴周辺一円の大規模農業というのではなく、各地で比較的小規模な農耕を行っていた可能性がある。後趙末期に鄴の南郊枋頭に駐屯していた氏族蒲氏の集団が農耕を営んでいたこと<sup>10</sup>、前燕期に皇族や有力者が配下の軍団内に「営戸」なる半隷属的な人間を抱え込み、鄴周辺で農耕に従事させていたこと等、このような例は史料上に幾つも発見できる。当時の徙民された集団や武装難民集団等は、多くの場合王朝に服属はしても食料等は支給されなかつたので居住地周辺で自活を図るケースが目立ち、鄴周辺の各集団も各自で小規模農耕を行っていたと考えられる。これは確かに農業ではあるのだが、漢代や唐代のような肥沃な農耕地・穀倉地帯云々というような状態とは程遠いものである。

最後に牧畜が営まれていた可能性がある。鄴周辺は若干の微高地を除けば一面の大平原であり、放牧に大変適した地形である。モンゴル帝国期に華北平原の漢人を追放してここを遊牧地としようという議論が度々持ち出されたが、地形の上から見れば確かに理解できる話ではある。後趙末期に石虎は鄴近郊で歩騎一八万人に巻き狩りを挙行させ、自らは鄴城上からこれを見てご満悦だつた。<sup>11</sup>城から見える程の近距離で大軍が巻き狩りを行う以上城周辺が農地ということはあり得ず、むしろ狩猟対

象の動物が棲息する草原だったと考えるべきだろう。この巻き狩り部隊は獲物を追って「三州十五郡」（司州・冀州・并州と  
思われる）を通過したというから、鄴周辺の広い範囲がこのような状態だったのであろう。まさに牧畜適地と言うべきである。

先に述べたように当時の鄴周辺は、華北諸民族の見本市と形容できる程の諸民族混淆の地であった。そしてその多くが元来  
牧畜を生業とする人々であり、彼らがこの地で牧畜を行うのは極めて自然なことである。彼らが農耕には利用されない鄴周辺  
の草原を利用して牧畜を営んだとすれば、ある程度の人口を支えることができたはずである。遊牧は広大な面積を必要とする  
が、固定住居に住み周囲の草原を牧地に当てる牧畜形態ならば、さほどの面積を必要とせず、人口稠密地だった当時の鄴周辺  
でも十分可能であった。

四世紀以降の華北平原に所謂五胡諸民族により大量の家畜が持ち込まれたことは既に指摘されており、以後長い時間をかけ  
て牧畜と農耕は互いに影響を受け合いながら融合していく。その集大成ともいえるべきものが六世紀に生まれた『齊民要術』の  
農法であろう。『齊民要術』は乳製品の活用等牧畜の影響を濃厚に受けており、この時代の農牧複合状況をよく反映している  
と言える。その先駆け的狀況が四、五世紀の鄴周辺には存在していたのではないだろうか。

#### おわりに

以上、当時の鄴周辺の大人口を支えた背景について考察してきた。当時の鄴周辺は戦乱で度々破壊され人口移動が激しく、  
農業は明らかに衰退していた。しかし牧畜を生業とする諸民族が主に徙民政策によって大量に居住するようになり、彼らが荒  
廃した旧農地に広がる草原を利用して牧畜を営み、これが鄴周辺の大人口を支えた柱の一つとなった可能性を指摘した。黄河  
下流の華北平原には漢代・唐代の穀倉地帯としてのイメージが非常に強いが、魏晋南北朝期には全く異なる相貌があったこと  
は、この時代及び地域の多面的な性格を考える上で考慮に値するものと言えるであろう。

- 1 雛逸麟「試論鄴都興起的歴史地理背景及其在古都史上的地位」(『中国歴史地理論叢』一九九五—一)
- 2 村田治郎『中国の帝都』(綜芸社、一九八一年)
- 3 塩澤裕仁「鄴城が有する都市空間」(『中国史研究』二〇〇六年)
- 4 兪偉超「鄴城調査記」(『考古』一九六三—一)
- 5 中国社会科学院考古研究所・河北省文物研究所鄴城考古工作队「河北臨漳鄴北城遺址勘探發掘簡報」(『考古』一九九〇—七)
- 6 中国社会科学院考古研究所・河北省文物研究所鄴城考古工作队「河北臨漳鄴南城朱明門遺址的發掘」(『考古』一九九六—一)、中国社会科学院考古研究所・河北省文物研究所鄴城考古工作队「河北臨漳鄴南城遺址勘探与發掘」(『考古』一九九七—三)
- 7 『晋書』卷一百七石季龍載記下。
- 8 「十六国時期各割拠覇主的人口遷徙」(『河山集七』、陝西師範大学出版社、一九九九年)
- 9 路遇・滕沢之『中国人口通史』(山東人民出版社、二〇〇〇年)
- 10 町田隆吉「後趙政權下の氏族について——「五胡」諸政權の構造理解に向けて」(『史正』七、一九七九年)
- 11 『晋書』卷一百七石季龍載記下。



後趙末期地図 (三五〇年頃)

◎ 州治

○ 郡治

● 要地

駐屯軍

## 第四章 魏晋期の酒泉と河西における家畜と牧畜業——画像磚の分析を通して

はじめに

甘肅省西部に位置する酒泉は、古来より現代に至るまで河西回廊において最も重要な都市の一つである。酒泉地域は現在酒泉市と嘉峪関市の二つの行政区画に分かれているが、地理的には一つのオアシスである。年間降水量はわずか八五mm余りと極度に乾燥しており<sup>1</sup>、祁連山脈から流れる北大河の形成する扇状地と沖積平野上にオアシスが営まれ、農業は灌漑に依存している。現在はダム建設等によって市北方のゴビにまで灌漑地が広がりつつあるが、これはごく最近のことで、本来のオアシスの規模はさほど広いものではない。この地域は何よりも祁連山脈の豊かな水の恵みに頼っている。

酒泉を含む河西地域は古来幾多の遊牧民が活動した地であり、古くは月氏が住み、続いて匈奴が支配した。武帝期に前漢が匈奴より奪って版図に加えた後、内地から多くの移民が入植し、本格的に農業が導入されるが、河西の平野部及び祁連山脈方面にはそれ以前から多くの羌族・氐族が居住しており、祁連山中には当地に残留した月氏（小月氏）も存在した。これらの人々は漢の支配下に入ってから以降もかなりの人口を有し、多くは牧畜に従事していた。この地は元来牧畜に適しており、漢代でも豊かな牧地として知られていた<sup>2</sup>。曹魏期に先進的な農業技術が導入され農業生産が拡大するが、この地の主要産業が牧畜であることに変わりはなかった。

四世紀以降、五胡十六国時代の河西には独立政権が次々と樹立された。前涼・後涼・南涼・北涼・西涼の所謂五涼である。そのうち前涼と西涼は漢人の政権だが、後涼は氐族呂氏、南涼は鮮卑秃髮氏、北涼は匈奴沮渠氏の建てたものであり、また



これ以外にも多くの遊牧系諸民族が活動していた。このような状況下の河西で牧畜業が盛んだったことは想像に難くない。四三九年に河西全土が北魏の支配下に入ってから河西は畜産の豊かさで知られ、唐代にも官牧が置かれるなど、河西は一貫して牧畜業が栄えてきた地域であった。酒泉は中でも豊かな牧地として知られた地である<sup>3</sup>。

魏晋北朝期河西の牧畜業については既に先学によくの言及がある。しかし具体的にどのような種類の家畜がどのように飼われていたのかについては、史料上の制約からなかなか詳細は明らかにし難い。その重要な手がかりになるのが、当時盛んに造られた磚室墓の壁面を飾った画像磚である。これらの磚には農業・牧畜・宴会・村落生活等実に様々な場面が描かれ、当時の生活を復元するのに絶好の史料である。ここでは嘉峪関市新城古墓群出土の画像磚を中心にして、当時の家畜及び牧畜の一端について考察し、若干の私見を付け加えたい。

#### 一 嘉峪関新城古墓群の概要

考察を始める前に、まず本稿で主に取り上げる嘉峪関新城古墓群の概要について略述しておく。嘉峪関新城古墓群は、嘉峪関市市街地の東北方から東方のゴビに広がっており、一三万㎡の広大な墓域に約千基の古墓が存在している<sup>4</sup>。この広大な墓域は酒泉市との境界を越えて東及び南へと延びており、実際は隣接する酒泉市の丁家閘古墓群と連続した墓域を形成している。

新城古墓群は一九七二年に当時の嘉峪関市文物清理小組（現嘉峪関市文物管理所）によって発掘が開始され、以後順次発掘が進められ、墓には発掘順に番号が付けられた。現在第一三号墓までの詳細な調査成果が発表されている。本稿ではそのうち墓室内に画像磚を有する八つの墓（一号墓、三号墓、四号墓、五号墓、六号墓、七号墓、一二号墓、一三号墓）を取り上げる。

これらの墓が造られたのは曹魏から西晋にかけてで、一号墓は魏の甘露二年（二五七年）造営と推定されている。これは新城古墓群で発掘されている墓の中では最も古い。他の墓はおおむね西晋時期と推定されている。一号墓の被葬者は「段清」という人物で、河西の豪族段氏の一族であり、郡の属僚だったと考えられる。他の墓については被葬者の個人名までは特定されていない。三号墓・五号墓・七号墓の墓主は將軍・刺史以下の武官、六号墓は比二千石あるいは千石以下の官品を持つ官吏、四号墓・一二号墓・一三号墓は地元の豪族地主と推定されている。

墓の構造は後漢以来造られてきた磚室墓だが、鮮やかな画像磚を持つことが大きな特色である。この種の画像磚の分布は、東は張掖東方の永昌から西は敦煌に及ぶが、敦煌の磚室墓には酒泉のような多数の画像磚を持つものは無く、基本的には酒泉・張掖を中心とする地域独特のものと言える。画像磚に描かれるモチーフは漢代の画像石と共通するものが多いが、嘉峪関新城古墓群画像磚の「最大の特徴は、被葬者とかれの周辺の日常生活に取材した現実の描写に終始すること」<sup>6</sup>で、それだけ当時の生活を復元する上で史料的价值が高いと言える。

現在の酒泉市内にも丁家閘や西溝等、多くの画像磚墓や壁画墓を持つ古墓群が存在しているが、墓域に對しまとまった発掘がされておらず、年代も魏晋から五胡十六国時代後半にまで及び、散漫な感が否めない<sup>7</sup>ので、本章では特定の墓域に比較的網羅的に発掘活動が行われ、時代も魏・西晋期に限定されている新城古墓群を考察の中心とする。

## 二 画像磚に描かれた家畜と動物

それでは画像磚に登場する家畜と動物について分析したい。これについては【表一】をご覧ください。今回分析対象とした八基の墓中の画像磚に描かれている家畜及び動物は合計で五一七匹（頭）である。内訳は馬一九一頭、牛一一七頭、羊（山羊を含む）八八頭、鶏四九羽、兔一六匹、豚一四頭、鷹一一羽、犬一一匹、野羊三頭、駱駝三頭となっている。

数としては馬が圧倒的に多く家畜全体の三七パーセントを占めるが、これは出行図に非常に多く描かれているからで、それを除くと牛が一番多くなる。馬が登場するのは出行図の他、騎乗図・狩猟図・牧馬図等である。牧馬図以外は全て人が騎乗している。馬は軍事的役割が大きく、威信財として大変重視されたので、最も多く描かれるのは自然なことである。出行図の中では被葬者のステイタスシンボルとして多く描かれたと思われる。しかしそれにしても馬の圧倒的多さは特筆に値する。先述のように河西は漢代から馬の産地として重視され、北魏期にも唐代にも官牧が設置される等、中国内地最大の馬匹産地であった。画像磚に描かれた大量の馬は、このことを如実に物語っていると考えるだろう。

続いて多いのが牛である。登場するのは大半が農耕図と牛車で、屠殺図にも出てくる。牽引用役畜としての姿と食用の姿の双方が描かれる。魏晋期には河西に大規模に牛耕が導入され、また従来の馬車に代わって牛車が車の主流になっており、画像磚もこれを反映している。

羊はほぼ全て牧畜図と屠殺図の中にのみ登場する。羊は役畜ではなくいずれも食用である。羊の群の中には山羊と思われるものも混じっており、八八頭というのはこれらを合わせた数字である。羊と山羊の区別や放牧形態については後述する。鶏の多くは人の近くに描かれる。農耕、特に収穫時の揚場図には、農夫の傍らでおこぼれを待つ鶏の姿が描かれる。現代中国の農村同様、家や農地の近辺で放し飼いにされている様子がうかがえる。また屠殺図では鶏を処理しているのは女性が多い。

豚は一四頭と意外に少ない。登場するのは屠殺図が大半である。一四頭とは牛の一割足らずの数だが、もちろんこれは直ちに当時牛が豚の一〇倍いたということを意味しているわけではなく、豚を描くような場面が少ない、あるいは豚が牛や羊ほど重要と認識されていなかったということであろう。ただし現在でも中国北部の農村では豚より羊及び山羊を多く飼育している地域もあり、豚の少なさはこのような地域性も反映していると考えられる。

野鳥・鷹・犬・兎・野羊はいずれも狩猟図に登場するもので、鷹は鷹狩り、犬は猟犬、野鳥・兎・野羊は狩りの獲物であ

る。また駱駝は当時交易で盛んに使われていたにもかかわらず、画像磚に描かれたのは僅か三頭と極めて少ない。これは画像磚に描かれたのが専ら農牧業を中心とするオアシスの農村風景及び豪族の生活場面、交易や商業の場面が全く描かれていないため、画像磚がいかなる視点で描かれたのかをよく示している。

このように画像磚からは当時の酒泉地域に様々な家畜や野生動物が暮らし、それが人々の身近に存在したことがわかる。

### 三 画像磚に家畜が描かれた場面

続いて家畜が登場する場面の分析から、当時の生業について若干の考察を加えたい。これについては【表二】を御覧頂きたい。

家畜が登場する場面の内訳は、出行七四例、農耕六九例、牧畜五四例、飲食五三例、狩猟三六例で、合計二二〇の画像磚に何らかの形で家畜が描かれている。これは全画像磚の三〇・五パーセントを占めており、当時の生活において家畜がいかに重要な意味を持っていたかがよく解る。

出行図に描かれている家畜の大半は馬であり、また先述のように画像磚に登場する馬の相当数が出行図の中に描かれている。

農耕図に描かれる家畜はほとんどが牛で鋤を引いている。生産活動面で農耕が最も多いのは、当時の河西地方で農業が発展していたことを反映していると考えられる。河西では曹魏期に中原の先進的農業技術が導入され、農業生産が大きく拡大した。<sup>7</sup>とりわけ中原の効率的な犁・耙・耨耙と耨（いずれも地面の土を碎きならす農具。ならしぐわ等）の導入は農業を大きく発展させたが、これはいずれも牛馬、それも主に牛に牽かせるものであり、当時の農業における牛は極めて重要であった。また画像磚の中で氏族や羌族と見える人物が農耕に従事している様子が描かれる等、農業はその裾野を広げていた。

なお農耕図が多いことには農業を重視する伝統的な考え方が影響している可能性も当然指摘できる。

牧畜場面が非常に多いことは河西地域の画像磚の大きな特色である。それだけ当時の河西経済において牧畜が重要だったことをよく示している。先述のように魏晋南北朝期の河西経済は漢代同様牧畜を主としていた。多くの研究者もそのように考えている。一例として袁祖亮は、魏晋南北朝期の河西における家畜は漢代より大幅に増加したと述べて、当時の牧畜業の繁栄を強調している。<sup>8</sup>これに対して近年蔣福亜は、漢代の河西は牧畜を主としていたが、魏晋南北朝期に農業が大きく発展したため、農業が河西経済の中心的位置を占めるに至ったとしている。<sup>9</sup>蔣はその根拠の一つに「自安遠門西尽唐境万二千里、閭閻相望、桑麻翳野、天下称富庶者無如隴右。」という『資治通鑑』卷二一六唐玄宗天宝十二載八月条の記載を挙げている。しかしこれはかなり誇張がある史料で実態に符合しないことは既に指摘されており、<sup>10</sup>また前涼期の農業発展と、戦乱による非漢人の人口減少を過大に見積もりすぎる傾向があり、私は蔣の主張には賛同できない。西晋末から前涼期に中原から大量の農民が難民として河西に流入し、彼らが河西農業を發展させたのは事実だが、これが急拡大して牧畜経済を上回ったとは考え難く、私も大方の先学同様、当時の河西は牧畜経済が卓越していたと考える。

画像磚は被葬者の生前生活を墓中に再現するという意味があり、その点で宴会飲食場面は重要である。その中で家畜は屠殺・解体・食肉と様々な形で描かれている。解体場面に描かれているのは牛・羊・豚・鶏で、牛は金槌のようなもので鼻先を殴打しての撲殺、羊は仰向けにして四肢を柱に縛り付けて、豚はうつ伏せで台に乗せての刃物による屠殺、鶏は首を絞める等、屠殺方法は動物によって違いがある。屠殺の方法自体は基本的に漢代と変わらない。<sup>11</sup>漢人にとって肉食はハレの食であり、上流階級に属する被葬者の生前の華やかな生活を描写するにふさわしい。古くから肉食の伝統を保つ中国の食文化をよく反映する場面と言えよう。

数多くの狩猟場面が描かれていることは酒泉画像磚の非常に大きな特色である。これ程多く描かれている以上、当時狩猟が頻繁に行われていたと考えるのが自然である。もちろん狩猟、とりわけ騎射によって獲物を仕留める狩りは、当時の貴族

のたしなみだったので、騎射狩獵場面にはそのような意図が込められた可能性もあるが、狩獵が日常的に行われていたことの証左と言えるだろう。

このように画像磚の様々な場面に様々な意味を持つて多くの家畜や動物が描かれている。当時の人々の生活に家畜が大きな位置を占めていたこと、とりわけ経済的に大きな意味を持っていたことをうかがうことができる。

#### 四 画像磚に描かれた牧畜と狩獵

次に画像磚から読み取れる牧畜と狩獵に関する特色を指摘しておきたい。

五号墓に一二匹の羊（そのうち一匹は小さく黒い）と一人の牧夫が描かれた図（M五—二八）があるが、この図の白いものは羊、黒いものは山羊であると解釈する説がある。<sup>12</sup>これによれば白いものはよく肥えていて体軀壮健、黒いものは小さいので明らかに山羊という。著者は山羊と解釈する根拠を明示していないが、中国では言語上も概念上も羊と山羊を明確に区別しないため、文献からこれを探り出すのは難しく、画像から両者を区別しようとする試みは意義深い。河西地域で伝統的に飼育される羊は蒙古羊と灘羊である。蒙古羊は角が小さく、灘羊は雄には比較的大きな角があるが螺旋状を呈している。そのような目で見ると、雄の角が大きくまっすぐである等、角の形等から羊ではなく山羊と考えられるものが描かれた画像磚が、他にも少なからず見受けられる。<sup>13</sup>それらはいずれも羊の群の中に混じっており、羊と山羊の混合放牧が行われていたと考えられる。

古代の羊放牧において山羊を群に混ぜていたか否か。このような問題は文献史料に記載され難いためなかなか証明が難しい。謝成侠氏はこれについて明確にわかるのは宋代以降とし、『松漠記聞』等を根拠として、金代の塞外では羊の群の中で山羊が群を先導する役割を果たし、また宋では雄の羊が群を先導する役割を果たしていたと言う。<sup>14</sup>



山羊あるいは体躯壮健な雄の去勢羊に群を先導させるのは、現代モンゴルで広く行われている技法である。<sup>15</sup> また現代中国でも一般的で、私自身も陝西省や甘肅省の農村で、羊と山羊を混ぜて放牧している光景には何度も遭遇した。羊は追随性の強い動物なので、自分から先頭に立ち飛び出していく性質を持つ山羊を群に混ぜると、羊はその後を追尾して群全体が誘導され放牧に都合がよい。このような方法は『斉民要術』等にも記載されていないので、謝氏の言う通り今のところ宋代までしか遡れないのだが、画像磚に羊山羊混合放牧らしき図像が複数見受けられることから、魏晋期河西においてこのような方法が行われていた可能性を指摘できる。

このような方法は豊富な牧畜経験を持つものでなければ行なわれないと思われる。画像磚に描かれた牧夫の多くが服装や髪型から非漢人と指摘されており（M四—一六、M五—一〇、M二三—〇六等）、ここから当時の酒泉周辺では牧畜に熟練した非漢人が日常的に放牧を行っていたと考えることができよう。五胡十六国時代に入ると河西地域では遊牧系諸民族の活動が活発になるので、彼らがそれ以前から活動していたことは明らかだが、その具体的姿を画像磚の中に見いだすことができるのである。

また狩猟場面が多くの画像磚に描かれているが、獲物は兎・野鳥・野羊が多い。これらはいずれも森林と草原に多く居住する動物である。実際狩猟場面を描いた画像磚の大半には、背景に樹木が描かれている。山地の森林あるいはオアシス内の林で放牧や狩猟を行うのは近年でも一般的なことである。<sup>16</sup> 野羊とは野生の羚羊系動物であろうが、これは主に山地に住んでいるので、当時の人々が山地にまで足を伸ばして狩猟を行っていたことも考えられる。豊富な獲物と森林は豊かな自然環境の存在を暗示しており、当時の酒泉オアシス周辺に比較的豊かな自然環境があったことを示していると言えるだろう。

おわりに

以上本章の内容をまとめると次のようである。

嘉峪関市新城古墓群の画像磚には実に様々な家畜や動物が描かれ、描かれる場面も様々で、当日の人々の生活の中に家畜やその他の動物が深く関わっていたことがわかる。とりわけ牧畜図には非漢人の人々が高度な技法を用いていた様子が描かれ、狩猟図には当時の豊かな自然環境が暗示され、当時の酒泉における非農業民と農業以外の産業、とりわけ牧畜と狩猟の存在感の大きさをよく示していると言いうことができるだろう。

1 中国地図出版社編『中国自然地理図集』（中国地図出版社、一九九八年）

2 『漢書』卷二八下地理志下に「自武威以西、……習俗頗殊、地広民稀、水草宜畜牧、故涼州之畜、為天下饒。保辺塞、二千石治之、咸以兵馬為務。」とある。

3 『元和郡県図志』卷第四〇隴右道下・甘州条に「張掖・酒泉二界上、美水茂草、山中冬温夏涼、宜放牧、牛羊充肥、乳酪濃好、夏瀉酥不用器物、置於草上不解散、作酥特好、一斛酪得斗余酥。」とあり、酒泉と張掖付近の祁連山中では盛んに放牧が行われ、乳製品が生産されていたことが解る。

4 甘肅省文物隊・甘肅省博物館・嘉峪関市文物研究所編『嘉峪関壁画墓発掘報告』（文物出版社、一九八五年）。以下の新城古墓群に関するデータは本書及び張宝璽編『嘉峪関酒泉魏晋十六国墓壁画』（甘肅人民美術出版社、二〇〇一年）による。新城古墓群の発掘情報としては嘉峪関市文物清理小組「嘉峪関漢画像磚墓」（『文物』一九七二年第二期）、張朋川「河西出土的漢晋絵画簡述」（『文物』一九七八年第六期）、甘肅省博物館「酒泉、嘉峪関晋墓的発掘」（『文物』一九七九年第六期）、嘉峪関文物管理所「嘉峪関新城十二、十三号画像磚

- 墓発掘簡報」(『文物』一九八二年第八期)等がある。また加藤雄三「画像資料に見る中国西北地方の生活誌——三・四世紀」(『オアシス地域研究会報』第一巻第一号、二〇〇一年)が各墓の概要を紹介している。
- 5 前掲張宝璽編『嘉峪関酒泉魏晋十六国墓壁画』。
- 6 小林宏光「嘉峪関魏晋墓壁画試論」(『堀敏一先生古稀記念 古代中国の国家と民衆』、汲古書院、一九九五年)
- 7 敦煌では魏の嘉平年間に敦煌太守となった皇甫隆が人々に先進的な農業技術を伝え「皇甫隆到、教作耬犁、又教衍漑、歳終率計、其所省庸力過半、得穀加五。」(『三国志』魏志卷一六倉慈伝注所引『魏略』)という成果を挙げた。
- 8 高敏主編『魏晋南北朝經濟史』下(上海人民出版社、一九九六年)、第一章「魏晋南北朝時期的畜牧業」。この章は袁祖亮が執筆を担当した。
- 9 蒋福亜『魏晋南北朝社会經濟史』(天津古籍出版社、二〇〇五年)
- 10 史念海「唐代前期隴右道的東部地区」(『唐代歴史地理研究』、中国社会科学出版社、一九九八年)
- 11 林巳奈夫「漢代の飲食」(『東方学報』第四八冊、一九七五年)、田中淡「古代中国画像の割烹と飲食」(石毛直道編『論集 東アジアの食事文化』、平凡社、一九八五年)
- 12 岳邦湖・田曉・杜思平・張軍武著『岩画及墓葬壁画』(敦煌文芸出版社、二〇〇四年)
- 13 M一—三二、M四—一六、M六—五一、M六—五二、M一二—三四、M一二—三五、M一三—一四。番号はいずれも前掲『嘉峪関壁画墓発掘報告』及び『嘉峪関酒泉魏晋十六国墓壁画』による。
- 14 『中国養牛羊史』(農業出版社、一九八五年)
- 15 小長谷有紀『モンゴル草原の生活世界』(朝日選書、一九九六年)
- 16 小長谷有紀・シンジルト・中尾正義編『中国の環境政策 生態移民』(昭和堂、二〇〇五年)には、祁連山脈から張掖を通り北上する黒河の下流、内モンゴル自治区エゼネエチナ旗オアシスの森林内で放牧する牧畜民の例が多く挙げられている。

【表 1 画像磚中の家畜一覧】

	馬	牛	羊	鶏	豚	野鳥	鷹	犬	兎	駱駝	野羊
1号墓	14	12	16	5	1	0	2	3	5	0	0
3号墓	67	20	2	5	3	1	0	2	0	0	1
4号墓	11	15	10	4	1	1	1	2	2	0	1
5号墓	32	20	14	9	2	8	4	2	0	2	1
6号墓	17	16	19	10	3	3	1	1	3	1	0
7号墓	31	10	3	2	2	1	2	1	1	0	0
12号墓	6	10	15	0	1	0	0	0	0	0	0
13号墓	13	14	9	14	1	0	1	0	5	0	0
計	191	117	88	49	14	14	11	11	16	3	3
百分率(%)	37.0	22.6	17.0	9.5	2.7	2.1	2.1	2.1	3.1	0.6	0.6

【表 2 画像磚中の家畜登場場面一覧】

	磚総数	牧畜	狩猟	農業	飲食(家畜)	出游	家畜磚総数
1号墓	57	3	5	2	7	3	15
3号墓	122	4	10	7	5	16	45
4号墓	70	4	5	11	4	8	27
5号墓	75	5	6	13	6	8	35
6号墓	144	6	2	13	14	8	32
7号墓	150	15	5	13	10	17	31
12号墓	53	9	0	3	3	7	13
13号墓	49	8	3	7	4	7	22
計	720	54	36	69	53	74	220
百分率(%)		7.5	5.0	9.6	7.4	10.3	30.5

## 第五章 遊牧民の千年の都——古都西安の歴史地理的概観

### はじめに

西安は中国における「古都の中の古都」である。四千年とも五千年ともいう長い歴史を持つ中国には、「古都」と呼ばれる都市が幾つも存在する。中国古都学会が公認する「中国八大古都」（西安・北京・洛陽・南京・開封・安陽・鄭州・杭州）はいずれも堂々たる歴史を有する都市ばかりではあるが、その中でもかつて長安と呼ばれた西安は、実に十三もの王朝が都を置いたため「十三朝之都」と称され、他の都市に比べ古都として飛び抜けて長い歴史を誇る。九つの王朝が都を置き日本の京都の別名ともなった「九朝之都」洛陽と共に、中国古代を代表する古都とすることができらるだろう。

日本人にとって長安は唐の都というイメージが強い。遣唐使として大陸に渡った人々の多くが長安に滞在し、豊かな都市生活を享受し華やかで高度な文化の摂取に努めたのだから、これは当然のことである。当時日本に持ち込まれ古代日本の血肉となった唐の文化の多くは実際は首都長安のものであり、長安こそ日本人が学んだ先進文化の核であった。また人口八十万から百万を数えた長安は当時間違いない世界最大の都市であり、国内外から多くの民族が集まった世界随一の国際都市でもあった。長安は言わば日本人が史上初めて肌身で知った大都市なのである。

古代の日本人にとって中国そのものであった唐朝だが、その皇室李氏は元来モンゴル高原に居住していた遊牧民鮮卑族の出身であり、唐を支えた有力貴族の中にも遊牧民出身の家柄がかなり多い。遊牧民出身とは言っても既に中国本土に移住して数百年も経ている場合がほとんどだが、先祖以来の文化はよく保持されており、当時の唐の支配階層には遊牧民的性質が濃厚

に存在した。さらに国外から多くの遊牧民が続々と長安を訪れ、また長安のある関中平原は農耕地域と遊牧地域の接点にあり、中国における遊牧地域への窓口の位置を占めていた。このような特色が長安の繁栄を支え独特の文化の背景になっていたのである。

そこで本稿では、歴史地理的観点から都市西安と周囲の遊牧地域との関係を考察することで、「遊牧民の都」とも言うことのできる西安のユニークな性質の一端について述べてみたい<sup>1</sup>。

# 一 西安をめぐる五つの古都

先に西安は「十三朝之都」と述べたがこれは歴史的にも地理的にも最大限に見た数字である。歴史的には、西安に都を置いた王朝として最も有名なのは前漢（紀元前二〇二〜紀元後八年）と唐（長安に都したのは六一八〜九〇四年）だが、それ以外にもほんの短期間定都しただけの王朝や分裂期の地方政権も全て含めている。地理的には、「長安」と呼ばれた都市だけではなく現在の西安の周辺に置かれた都を全て含んでいる。従って十三という数字には異論もあり、必ずしも全ての学者が一致しているわけではない。

西安周辺で首都とされた都市は五つある。都市名と定都した王朝は次の通りである。

鎬京 西周

咸陽 秦

長安（漢長安城） 前漢・新・後漢・西晋・前趙・前秦・後秦・西魏・北周

長安（隋大興城、唐長安城） 隋・唐

西安 大順



西安は黄河の支流である渭河流域に広がる関中平原のほぼ中央に位置している。関中平原は南に秦嶺山脈、西に隴山山脈といういずれも三千メートル級の急峻な山脈に囲まれている。周は西方から中国にやってきた遊牧民である周族の建てた国で、はじめは隴山山脈西麓の天水盆地に居住していたが、やがて隴山を越えて関中平原西部の周原に進出し殷に服属していた<sup>2</sup>。次第に勢力を強めた周は東進し西安西郊澧水付近の豊京に遷都すると、間もなく東方の華北平原に兵を進め、紀元前一〇五〇年頃に殷を滅ぼして黄河流域を支配した。これ以後紀元前七七〇年に周が内乱で関中平原を放棄し東の洛邑に遷都する（東周）までの間、澧水東岸の鎬京（宗周）が周王の都となった。鎬京は現在の西安の西郊外だが、広義の古都西安に含まれる。

秦は周と同じく隴山山脈西方に起源を持つ遊牧民出身の王朝で、春秋時代に関中平原を制圧し、紀元前三五〇年に渭水北岸の咸陽に都した。咸陽は秦の首都として栄え、特に始皇帝の中国統一後は大規模な拡張が行われて巨大都市へと発展しつつあったが、紀元前二〇六年に項羽によって焼き払われ灰燼に帰した。秦の咸陽はほぼ現在の咸陽市街地に重なり、現在の行政区画では咸陽市に入り西安市ではないが、広い意味で古都西安の範囲に含む場合もある。

秦滅亡後に中国を統一し漢王朝を開いた劉邦は関中平原を根拠地とし、咸陽にほど近い渭水南岸の地に新首都長安を建設した。隋唐期の長安と区別するためこの時建設された長安を「漢長安城」と呼ぶ。長安は最初に宮殿を築き、その後幾つかの宮殿区をぐるりと城壁で囲む形で建設された。そのため城内の大半は宮殿と政府機関で占められており、一般住民の多くは城外および渭水北岸に建設された歴代皇帝陵附属の都市（陵邑）に住み、渭水を挟んで広大な首都圏を形成した。長安城自体は周囲二五・七キロの不規則な方形を呈し、前漢末には二五万の人口があったと考えられ、広義の長安首都圏全体では相当の人口を有したと考えられる。前漢期の長安は大都市に成長し繁栄したが、赤眉の乱によって破壊された。

後漢は洛陽を都としたが、董卓が献帝を擁して長安に遷都した一九〇年からの五年間、曲がりなりにも帝都であった。三国時代の魏や西晋も洛陽を首都としたが、三〇〇年に西晋の皇族同志の内乱「八王の乱」が起こると、各地に居住していた「五胡」と呼ばれる遊牧系諸民族（匈奴・羯・氐・羌・鮮卑）が反乱を起こして華北に次々と独自の政権を樹立し、中国は五胡十

六国時代に入った。三〇四年に現在の山西省を中心に南匈奴の劉淵が建てた「漢」国は、三一年に洛陽を陥落させ西晋皇帝を捕らえた。三一年には長安で西晋の皇族が即位し（愍帝）長安は西晋残存勢力の都となったが、三一年には漢の劉曜に滅ぼされた。五胡十六国時代の長安は前趙（南匈奴族）、前秦（氐族）、後秦（羌族）の都となったが、四二六年に鮮卑拓跋部の北魏に占領された。北魏は山西北部の平城を首都とし、長安は華北西部の要衝として重視されたが首都としての地位は失った。

北魏は五三四年に内乱（六鎮の乱）で東西に分裂し、長安は西魏および、有力者宇文泰の子孫が皇帝の位を奪って建国した北周の首都となった。この時期まで各王朝は全て漢代に建設された長安城を修築しつつそのまま使用していたが、城内の土地利用は大きく変化していた。かつては漢長安最大の宮殿で城南にあった未央宮を再建して使っていたと言われていたが、近年の考古発掘の成果によれば、城内東北の一角（現在の樓閣台遺址周辺）を区切って宮殿として使用していたようである。宮殿は東西二つあり当時は東小城・西小城と呼ばれていた。このような構造は前趙から始まり、隋初まで引き継がれたと考えられる。それに対し城の南側には西魏北周期の窯跡が発見されるなど、居住区としてはあまり使われていなかったようである<sup>3</sup>。城壁は歴代王朝が修築しており、西安市西北の市街からほど近い農村に城壁、護城河、宮殿基壇跡の一部が現在も残存している。

北周を奪って隋を建国した楊堅は、即位後間もなく長安東南の地に新首都大興城の建設を開始し、五八三年に遷都した。旧長安城は宮殿北方の禁苑にすっぽり含まれた。五八九年に隋はほぼ三〇〇年ぶりに中国を統一し、大興城は統一された大帝国の首都となった。大興城の建設がこの中国統一を前提としていたのは明らかである。大興城は全中国の首都としてふさわしい規模と威厳を備え、隋の威光を全中国に知らしめる政治的モニュメントとしての性格を強く持っていた。

隋が内乱で崩壊すると、その有力将軍だった李淵は六一八年に長安を占拠し唐を建国する。唐は大興城に改造を加えたが基本的都市プランはそのまま引き継いだ。そこでこの都市を「隋唐長安城」と呼ぶ。長安は東西九七二メートル、南北八六

五二メートル、市街を南北に貫く最大の街路朱雀門街の幅は一五〇メートルという、中国はおろか当時としては世界史上空前の規模を持つ巨大都市であった。妹尾達彦氏の言葉通り、長安は「どうてい人間の生活のスケールに合わせてつくられた町ではない」のであり、「超越的な神々や宇宙の諸力と直結する王権の所在地として設計され、支配の正統化を目指す儀礼の都として、機能していたのである」。<sup>4</sup>このような性格は漢長安城も具えてはいたが、隋唐長安城はまさしくそのために建設された、「宇宙の中心」を地上に具現化する「天子の都」であった。

北周・隋・唐の皇室、有力貴族、将軍はいずれも北魏末の六鎮の乱に加わった鮮卑系兵士の子孫であり、政権を支える基幹軍勢力も鮮卑族の軍団を中核としていた。隋唐の中国統一は、五胡十六国時代以来の乱世の最終的勝利者が鮮卑族であり、鮮卑族が中国全土を征服支配したことを意味していた。遊牧民の軍勢力を背景に征服者として君臨する隋唐政権ではあったが、「馬上で天下を取れても馬上で天下は治められない」と言われるとおり、いかに強力な軍勢力を有していようとそれだけで政権を安定させるのは難しい。建国当初はまだまだ不安定だった隋唐王朝にとって、隋唐長安城は人々を服従させる最大最強の文化的装置として、政権維持に必要不可欠なものだったのである。

このようにもとは政治的要請によって築かれた隋唐長安城ではあったが、やがてシルクロード貿易などを通じて経済的繁栄を遂げ、人口百万を数える経済都市、文化都市の顔をも持つに至った。しかし八八三年に黄巢の乱で見える影もなく破壊し尽くされ一気に衰退した。九〇四年に汴梁節度使朱全忠が皇帝に迫り洛陽遷都を強行した折、宮殿等を解体し材木をも洛陽に持ち去ったため、首都としての隋唐長安城の歴史はここに完全に終焉を迎えた。唐滅亡後広大な都市はもはや再建されず、唐代の皇城を基に隋唐長安城のわずか十六分の一の小規模な城壁が建設され、後世まで基本的に受け継がれた。以後長安は中国西北部の地方都市となり政治の表舞台からは遠ざかった。首都としての長安の歴史は唐で終わったのである。

歴史を熟知する西安の人々は、唐代までを西安の「古き良き時代」と考えている。それは中国四大博物館の一つに数えられる陝西歴史博物館の展示にも反映されている。この博物館は新石器時代から清末までの歴史を展示しているが、広大な展示

面積の前半は統一帝国の首都となった秦・漢時代に多くが割かれ、首都ではあったが分裂期の魏晉南北朝時代は秦漢の十分の一足らずの展示でさつさと済まされる。続いてひたすら唐代の文物が延々と展示され（国宝が山のようにあるので多くのスペースが必要なのはわかるが）、宋代以降の千年間の歴史が最後の展示室に申し訳程度に詰め込まれて終わる。陝西歴史博物館は事実上「漢唐博物館」なのである。他の時代の扱いのあまりの冷淡さには正直唖然とする。

だが宋代以降の西安の歴史に見るべきものが無かったわけではない。北宋期の長安は対西夏戦争の後方支援基地としての軍事的性格が強かった。これ以後の長安は軍事的要衝として軍事都市の色彩を強めていく。一二六〇年にモンゴル帝国第五代大ハーンに即位したクビライは、一二六六年に現在の北京の原型となる大都を建設し首都に定めるなど、中国本土を基盤とした国造りを推し進めた。長安にはクビライの三男マンガラが安西王に封じられて王府を構えた。マンガラは父クビライの信任も篤く、安西王は領内に数ある諸王の中でも最大級で、その子アーナンダーは大ハーン位をめぐる後継者争いに名乗りを挙げ、ほどの勢力を有した。この時期の長安は西方との貿易で経済的に繁栄した。

一三六八年に明が建国すると、長安は北方に逃れたモンゴル勢力と対峙する軍事拠点と位置付けられ、明の西方を安んずるということで「西安」と改称された。そして宋代以来の城壁が北方と東方にやや拡張された。現在残る西安城壁はこの時に築かれたものである。しかし常時大軍が駐屯する圧力と軍事的緊張は西安の経済的發展を大きく阻害し、西安を中心とする陝西地方はみるみる貧困化していった。西安の北、黄土高原の街米脂の貧農の家に生まれた李自成が率いる反乱軍が、各地を転戦した末西安を占領したのは一六四四年、彼は皇帝に即位して国号を「大順」とし、首都に定めた西安を後にして北京を攻め明を滅ぼした。しかし李自成は三日天下であった。直ちに清の大軍が長城を越え北京に押し寄せてきたからである。清に敗れた李自成は北京から西安に逃れたがこれも支えきれず、翌年に敗死した。西安はたった一年とはいえ大順国の帝都であったが、「十三朝之都」にはこの大順国時代は数えない。

このように「古都西安」と言っても時代によって性格に大きな差がある。大きく概観して言えるのは、唐代までの繁栄と

それ以降の落差が激しいことである。西安を中国「古代」の代表的古都と呼ぶ所以である。

## 二 西安の地理的特色

西安はなぜ都合千年にも及ぶ長期に渡って首都の座にあり続けたのだろうか。西安に都した王朝を見ると、前漢・西晋・大順を除く全ての王朝が遊牧民と深い関係を持っていることがわかる。大まかに言ってしまうと、西安は外来の遊牧系諸民族が中国を征服する場合の拠点だったのである。これは西安の持つユニークな地理的特性に原因がある。

中国を歴史的に考える場合、現在の中華人民共和国を一つの固まりとしてとらえるのは合理的ではない。一般的には今の中国を大きく五つの地域に区分する。中国本土（内中国・歴史的中国）、東北、モンゴル、新疆、チベットである。これらの地域はそれぞれ独自の歴史世界を形成しており、アジア大陸東部の歴史はこれら各地域の相互関係史である。中国本土の主要民族は漢族であり、伝統的中国王朝はこの地域を領土としてきた。従って歴史的には「中国」はこの地域に限定される。これは日本人が歴史文化に関して「中国」と言う場合は、ほぼ中国本土地域を指していることからよく解る。日本人が「中国文学」とか「中国料理」とか「中国語」と言う場合、それは中国本土の文学・料理・言語のことであり、モンゴル文学やウイグル料理やチベット語は決してその範囲には入らないであろう。日本が古くから交流した「中国」は中国本土に拠点を置く王朝であり、その領土は多くの場合中国本土に限られていたからである。西安は中国本土の中でも西北部に位置し、隣接するチベットやモンゴルの遊牧系諸民族と古くから深い関係にあった。

広大な中国は国の東西南北で気候差が激しく、それに伴って生業も大きく変化する。第一章でも述べたように、現在中国では国土を農業区、牧畜区、農業牧畜交錯区に大別している。農業区は黒竜江省伊春・同ハルビン・北京北方・河北省石家荘・湖北省宜昌・広西チワン族自治区桂林・同南寧を結んだ線より東側である。牧畜区は大興安嶺山脈西部・内モンゴル自治区東



南部・祁連山脈・西海湖・チベット高原東南周縁を結ぶ線より西側である。この二本の線の間の地域が農業牧畜交錯区となっている。<sup>6</sup> 農業牧畜交錯区とは、農業と牧畜のどちらかが圧倒的に卓越しているというわけではなく、両者が並存している地域である。このような分類自体中国独特のものである。農業牧畜交錯区の中には、農業も可能だが実際は非常に条件が厳しく、牧畜区すれすれの土地も少なくない。中国本土の中でも華北の相当部分は牧畜と深い関わりを持つている地域なのである。西安もこの農業牧畜交錯区に分類される。

そもそも華北北部では古くから牧畜が営まれ農業と併存していた。華北における農業と牧畜の分布は時代によって大きな違いがある。史念海氏は華北を「牧畜地区」「半農半牧地区」「農業地区」に区分してその変遷を考察する。<sup>7</sup> なお「半農半牧地区」とは現代の農業牧畜交錯区に相当し、牧畜地区と農業地区との中間にあつてどちらの生業も行えるグレーゾーンの地区を指し、実際に牧畜と農耕の両方が行われ並存していた。氏によれば漢代の牧畜地区と半農半牧地区の境界はほぼ当時の長城に一致し、半農半牧地域と農業地域の境界は、『史記』平準書によれば東は碣石山から上谷、常山関、太原北方を経て龍門から関中平原北部に至る線である。農耕地域の中でも主要な穀倉地帯は関中平原南部、河南東部、山東西部の平原となる。この線は唐代でもほぼ同様である。

ところがこの境界線は魏晋南北朝時代に激変する。遊牧系諸民族の移住により、漢代の長城に沿ったかなり人工的な牧畜地区・半農半牧地区の境界線は徹底的に破壊され、事実上消滅する。半農半牧地区と農業地区の境界線はほぼ北緯三十六度に近い、臨汾から洛川、固原を経て蘭州に至る線である。しかしこれ以南でも山地は草原同様で、漢代のような明確な線を引くことは不可能となり、各地で農業と牧畜が交錯する状況が生まれてくる。これは当時の気候寒冷化と密接に関連しており、全体として農業の北限が後退し牧畜の分布が一気に南下してくるのである。中国史上農業と牧畜の境界線が最も南下したのがこの魏晋南北朝時代である。

上述の地理区分によれば、西安を含む中国本土西北部に隣接するモンゴル・新疆・チベットは、現在においても歴史的にも



牧畜地域である。また華北の北部、即ち河北省と山西省の北部、陝西省の大部分、甘肅省の全部は農業牧畜交錯区に分類される。そして西安は現在は農業牧畜交錯区に入り、そのすぐ北には歴史的な半農半牧地区の境界線が走っている。つまり西安は昔も今も農耕と牧畜の境界線上に位置しているのである。<sup>9</sup> 西安を首都とする諸王朝を樹立した遊牧系諸民族は、いずれも中国の西方あるいは北方から關中平原に進出して来た。西安は彼らが故郷から中国に入って最初に出会う大都市であり、古代の人口稠密地だった華北平原と草原地帯を結ぶ交通の要衝だった。つまり彼らが中国を支配する上で絶好の位置を占めていたのである。

このような地理的特色によって、西安は遊牧系諸民族の政権によって首都に選ばれ続けたのである。なお前漢は遊牧系の王朝ではないが、この国は建国当初から秦の体制をそっくり引き継いだので、首都の立地という点では秦の延長線上にあると見なしてよいだろう。従って古都西安の性質について考える場合は、中国本土のみならず周囲の牧畜地域との関係を重視しなければならぬ。

### 三 西安に隣接する牧畜地域

遊牧民が中国に進出する場合、遙かモンゴル高原北部やチベット高原中央部から直接中原に侵入することは少ない。遊牧民は多くの場合中国周辺の農牧交錯地域に進出すると、そこで中国王朝と様々な関係を取り結びながら力を蓄え、同時に中国支配のノウハウを身につけ、しばらくの時を置いてから満を持して征服に乗り出すのが常であった。<sup>10</sup>

アメリカの東洋学者オーウェン・ラティモアは、万里の長城に沿った中国北方・東北方辺境地帯に注目し、ここを「将来中国を征服し、次代の中国の歴史を左右するパワーが溜まる場所」という意味でリザーヴァー (Reservoir) と名付けた。<sup>11</sup> ラティモアは十世紀の契丹以降、特に明清時代を中心に論を展開しているが、石見清裕氏は後漢から魏晉南北朝隋唐期の事例を

分析し、今日の遼寧省から北京方面を経て、現在の長城線に沿って山西省北部、オルドスさらにゴビの南に至る地帯について、漢・唐代においてもリザーヴァーとしての役割を果たしたとし、ラティモアの説くリザーヴァーの本質や機能をつぎのようにまとめている。1. 将来中国を支配する民族や勢力が溜まる場所であること。2. 彼らは中国を征服した者たちと自分たちを同一視すること。3. 「リザーヴァー」地帯は中国を外部から防衛するとともに、モンゴリア・マンチュリアに対する外敵の侵入を防御する機能をも果たすこと。4. 同地帯は中国に官人・軍人を供給すると同時に、中国から多大な富をも引き出すこと。5. そうした富によって「リザーヴァー」の遊牧民の生活がより安定に向かうと、彼らは中国に依存するようになるため、今度は同地帯とその外側との間により明確な境界線が出来上がってくる。6. このような「リザーヴァー」の変化には、移住した中国人も一定の作用を及ぼすこと。その上で石見氏は、このリザーヴァー地帯に「中国の王朝側が北方民族を受け入れて防衛地帯を形成すると、その経営が安定している間は中国に多大の利益をもたらすが、やがて種々の軋轢が生じてきてそれを統制できなくなると、同地帯は逆に中国に深刻なる不利益をもたらしかねない。」とし、その例として後漢後期の羌族反乱や五胡十六国時代を挙げ、北魏の華北統一をリザーヴァーそのものが独立した形態にはかならない、と述べる。<sup>12</sup>

この説に基づいて考えてみると、西安は周囲をぐるりとリザーヴァーと呼べる地域に取り囲まれていることが解る。チベット高原東縁の隴西地域と内モンゴルのオルドス高原である。

チベット高原東縁から隴山山脈までの山岳地域すなわち隴西は、歴史的に西方から中国本土に進出した遊牧民が力を蓄える場所である。先述のように周族は天水盆地において勢力を蓄えた後、隴山山脈を越えて関中平原西部の周原に本拠を移し、ここで国家体制を整えてから西安西郊の鎬京に遷都し、東の華北平原に進出して殷を滅ぼした。秦もまた紀元前九〇〇年頃に周王より秦の地（天水盆地）を与えられて国家形成した後、紀元前七七〇年の周の内乱に際して関中平原に進出し周原の雍に都を置き、次いで西安の北咸陽に遷都し、紀元前二二一年に東方の諸国を滅ぼして天下を統一した。このように周と秦はほとんど同じようなルートをたどって西から東へと勢力を発展させている。彼らの揺籃の地こそ天水盆地を中心とする隴西地域で

あった。

四世紀から五世紀に長安に都した前秦（氐族）、後秦（羌族）にとっても隴西は揺籃の地であった。チベット系遊牧民とされる羌族の名は殷周時代から史上に見えるが、<sup>13</sup>二世紀には後漢にたびたび討伐を受け、チベット高原東縁から隴西・オルドスへと強制移住させられた。後漢政府の苛斂誅求に対し羌族が起こした反乱はたちまち隴西・河西・オルドス一帯から関中平原にまで広がり、朝廷では長安放棄論まで取りざたされるほどであった。乱が鎮圧された後も羌族は隴西・オルドス一帯、さらに西晋期には渭水北岸にまで隠然たる勢力を持ち続けた。同じくチベット系遊牧民と考えられる氐族は隴西から四川北部の山岳地域に居住していたが、前秦を建てた略陽氐族は天水盆地東部を本拠地としており、隴西は彼らにとってまさに発祥の地であった。氐族は西晋期には次第に関中平原に移住して渭水南岸に広く分布しており、西晋時代には関中平原の人口の半ばが氐羌で占められていた。五胡十六国時代には関中平原の漢人の多くが戦乱を逃れて長江流域および河西に逃亡し、周囲から多くの遊牧系諸民族が流入したため、五胡十六国・南北朝時代の関中平原は非漢人の人口が漢人を遙かに上回り、所謂五胡の天下であった。前秦・後秦という政権はこのような地盤の上に建てられた。また隴西では鮮卑族の活動も活発で、特に二七〇年に起こった秃髮樹機能の乱は、一時関中と河西地方の交通を脅かすほどの勢力を有した。樹機能は二七九年に敗死し乱は鎮圧されたものの、隴西鮮卑秃髮部はこの後も大きな勢力を維持し、四世紀末から五世紀には今の青海省東部に南涼を建国するに至る。十世紀以降を考察対象とするラティモアは隴西に注目していないが、以上見たように周から魏晋南北朝時代の隴西地域はリザーヴァーと呼ぶに十分な資格を備えていると言えるだろう。

関中平原の北に広がるオルドス高原は、時に中国王朝の統治下に入りながらも古来よりほぼ一貫して遊牧民の天地であり、中国本土に隣接するという地理的特性のため、常に中国の動向に深く関与してきた。もともと匈奴の重要な牧地だったオルドスは秦始皇帝の命を受けた將軍蒙恬により占領されたが、秦崩壊後匈奴の領域に復帰し、前漢武帝が再び匈奴から奪い取って長城を築いたが、後に匈奴に戻り、後漢は黄河沿いに植民都市を築いて匈奴勢力を圧迫するなど、匈奴と中国王朝の間で争奪

が繰り返された。一世紀半ばに匈奴が内紛で南北に分裂すると、後漢政府は南匈奴が北部国境地帯に南下移住するのを許し、モンゴル高原の北匈奴を牽制すると共に北辺の防衛を担わせた。南匈奴の王畿である单于庭はオルドスに置かれ北匈奴と漢の緩衝地帯となった。二世紀半ばの羌族反乱はオルドスにも波及し、この地にいた漢人移民は内地に撤退し植民都市はことごとく放棄された。これ以後オルドスは中国王朝の支配を脱し、遊牧民が争奪割拠する土地となった。

三世紀以降オルドスの主導権を握ったのは南匈奴の一部族である鉄佛部であった。鉄佛部は東の鮮卑拓跋部、南の前秦・後秦と対立と服属を繰り返しながらも勢力を保ち、五世紀初頭に赫連勃勃という英傑が首長となると、たちまち黄土高原一帯を切り取って大夏国を建国し、無定河中流の地に壮大な統万城を築城した。<sup>14</sup> 赫連勃勃は四二一年に長安を占領し皇帝に即位した。オルドスの勢力が関中平原を征服したのはこれが初めてである。

大夏は間もなく北魏に滅ぼされたが、長安を首都とする西魏・北周・隋・唐王朝にとってオルドスは北方防衛の要であった。唐建国直後にはモンゴル高原から突厥の大部隊がオルドスを突破して長安に迫ったため、唐はこの地を重視し夏州（統万城）を中心に強力な軍団を配置した。さらに六三〇年に突厥第一帝国が崩壊し一〇〇万人以上の突厥遺民がモンゴル高原から南下すると、唐は彼らの亡命を受け入れ幽州（現在の北京）から靈州（現在の銀川）までの地域にその居住を許した。オルドスには突厥を受け入れるため六つの州が設置され「六胡州」と呼ばれた。六胡州に住む突厥人は六州胡と称され唐の北辺防衛に利用された。後漢時の南匈奴と大変よく似た状況である。しかしこれら亡命突厥人はやがて反乱を起こして唐の支配を脱し、モンゴル高原に帰還して突厥第二帝国を建国する。さらに一部の六州胡は七五五年から始まる安史の乱に呼応し、その後も乱の鎮圧に功績のあった將軍僕固懷恩の反乱に加わるなど、八世紀半ばには唐のオルドス支配は動揺する。そしてこのような動乱のたびに首都長安は北方から脅かされた。その頃チベット高原東縁からオルドスに移住したのがチベット系遊牧民タングート（党項）である。

吐蕃の圧迫を逃れて八世紀後半に隴西を経てオルドスに移住したタングート族は、唐への叛服を繰り返しながらも次第に

夏州（統万城）を根拠地に勢力を広げ、唐末には夏綏銀節度使としてオルドス中央部の支配権を認められた。タングートの首長李氏一族は五代歴代王朝および北宋からも引き続き節度使に任じられ、北宋に面従腹背しつつ西方に領土を広げ、一〇三八年に英主李元昊が皇帝を称し国号を大夏として宋と全面戦争に突入した。史上名高い西夏の建国である。結局西夏は宋の征服支配には成功しなかったが、西夏軍は長安占領を呼号して宋と激戦を繰り広げた。オルドスから関中平原への風はこの時代にも吹き続けていたのである。このようにオルドスはリザーヴァーとしては一流の地域であった。

以上見てきたように西安の歴史は周囲の牧畜地域と密接に結びつき、時にこれに動かされてきたとすることができる。牧畜地域との深い関係こそ西安の歴史を考える上で最大のポイントなのである。

#### 四 首都長安から地方都市西安へ

一国の首都たるもの、本来はその国の政治・経済・軍事等全ての中心地たるべきであろうが、国土の広大な中国ではその全ての条件を一つの都市が満たすのは難しい。例えば現代中国では北京が政治の中心地であるのに対し、経済は上海の方が中心地である。唐代までの長安は明らかに政治・軍事面が突出した首都であった。それに対し経済的首都と言える存在は、古代において最大の人口密集地だった華北平原に位置する洛陽だった。そのため唐までにおいては長安と洛陽のどちらかが首都に選ばれることが多かった。隋唐期には長安は首都、洛陽は副都とされ皇帝は時に洛陽に行幸し長期に渡って滞在した。

古代の長安と洛陽にはいわば「政治軍事の長安」と「経済の洛陽」という役割分担があり、そのどちらを首都に選ぶかは王朝の性格が強く反映された。概して言えば、長安を首都とする王朝は軍事を優先し、関中平原から西方地域との関係を重視し、対外的には積極的開放的である。長安に都した歴代の遊牧民王朝がこのような傾向を持つのは、極めて自然なことである。それに対し洛陽に首都を置く王朝は経済を優先し、華北平原から東方との関係を重視し、対外的には消極的で内向きの傾



向がある。これは中国本土に基盤を置く漢人王朝によく見られる特色である。<sup>15</sup> 実際洛陽に都した王朝の多くは漢人が建てたものである。このような特色は国防にも大きな影響を与える。長安に首都をおいた場合は先述のリザーヴァーに近いいためよく目が届きこれを容易にコントロールできるが、洛陽ではそれは難しい。唐は長安から広大なリザーヴァー地域をよく統制し得たが、洛陽に都を置いた後漢や北魏はリザーヴァー地域へのコントロールが効かず、大きな動乱が起これと手の打ちようがなかったことは、その良い例である。<sup>16</sup>

ところがこのような傾向は唐後半期の九世紀から次第に変わり始める。第一に中国本土の経済中心地が華北平原から長江下流域に移っていき、さらにそこから物資を運ぶ大運河が建設されたため、物流の中心が大運河と黄河が交差する開封を支点として東方に移動していった。そのため洛陽の地位は大幅に低下した。経済的首都の地位は開封からやがて江南の中心たる南京に取って代わられる。

第二に遊牧勢力の中心地が中国の西方から東北方に移っていった。その端緒を開いたのは、現在のシラムレン河（西遼河）中流に本拠を置いた契丹族であった。契丹は十世紀初頭に耶律阿保機が契丹族を統一した後急激に勢力を拡大した。五代の後晋は契丹に「燕雲十六州」（現在の北京・大同一帯）を割譲し、契丹の五都の一つ南京折津府となった北京は、事実上契丹の経済文化的首都となった。契丹は十世紀半ばにはモンゴル高原も制圧して東アジアの最強国となり、北宋にとって最大の脅威は西の西夏よりも北方の契丹であった。北宋は契丹の侵攻を恐れ、これを防ぐために澶淵の盟というある意味屈辱的な条約を結ぶことすら厭わなかった。こうして強力な遊牧勢力が中国の東北方に出現する時代が始まったのである。

一一二五年に契丹を滅ぼし続いて華北をも征服した女真族の金国は、本拠地が現在の黒龍江省にあり中国統治にあまりに不便なため、契丹の築いた南京を中都と改め遷都した。東北を本拠とする金にとって、本拠地と中国本土を結ぶ交通路上にある中都は首都とするに絶好の位置にあった。彼らにとって西安は遙か西方の辺境都市に過ぎず、首都選定に際しては当然ながら眼中に入っていない。金を滅ぼし中国全土を支配したモンゴル帝国にとっても、契丹以来の伝統ある中都こそ首都にふさわ



しい街であり、第五代ハーンクビライは現在の北京の原型となる巨大都市大都を建設した。こうして契丹・金・モンゴルの遊牧民王朝が三代に渡り首都としたため、北京の首都としての地位は決定的なものとなった。中国本土を本拠地とする漢人王朝の明も、その初期は経済的首都南京に定都したものの、第三代皇帝永楽帝が北京に遷都して以来これを踏襲し、やはり東北より興つて中国を征服した満洲族の清朝にとっても首都は北京以外にあり得なかった。こうして東北遊牧勢力の台頭とともに西安の戦略的地位は低下し、かつての帝都長安は西北辺境の地方都市西安へと変遷していったのである。西方遊牧勢力の都という西安の地理的特性が無意味なものとなった以上、これは仕方のないことであつた。

おわりに

「長安の春」と称された大唐長安の繁栄をよく伝える物の一つに墓室壁画がある。当時の貴族生活が活き活きと描かれているその中に、手に先の曲がつたラケット状の棒を持ち颯爽と馬を駆る貴公子達の姿がしばしば見られる。これは打毬と呼ばれる球技で今で言う所のポロである。打毬はもともと中央アジアの遊牧民のスポーツだったが、シルクロードを通じて長安に入り流行した。唐の貴族達が遊牧文化の伝統を受け継ぎ騎馬に巧みだったからこそその現象である。また墓中に副葬品として納められた唐三彩を代表するモチーフに胡人俑がある。彫りが深く髭の濃い三角帽の人物がラクダを牽いているものが多く、これは中央アジアの商業民族ソグド人の姿である。唐長安は西方からやって来た人々で溢れており、李白は盛り場で胡姬のダンスを見るのを何よりの楽しみとした。その華やかさの中には外来文化の影響が色濃かった。

既に述べてきたように古都西安は外部からやって来た人々が造り上げた街である。自然環境、地理、文化等の境界線上に位置し、外部から多くの人々を受け入れ続けてきたのがこの街の特徴である。様々な人々が行き交い、様々な文化が交わる時にこそこの街は最も輝きを放つのである。それは今も昔も基本的に変わらない。

現在の西安城内の中央部に回民街がある。伝承によれば彼らはモンゴル時代の安西王アーナンダーがイスラームに改宗した折、共にムスリムとなった麾下の兵士十五万人の子孫だという。<sup>17</sup>いかにも民族混淆の地西安らしいエピソードである。西安は現代中国西北随一の都市であり、西は甘肅新疆とも深い関係にあり多くの人々がやってくる。その独特の雰囲気がこの街の魅力の一つともなっている。

西安を訪れた者は古代の壮大な文化遺産に目を奪われ、千年二千年の時を越えてそのすばらしさに感嘆し、多くの場合ここに中国の歴史と伝統の連続性を見いだす。しかし周鎬京遺跡、秦始皇陵兵馬俑、唐乾陵を造ったのはそれぞれ違う民族である。我々はむしろいつの時代にも様々な人々を引き寄せ続けた西安の魅力と、その歴史のいわば雑種性にこそ注目するべきである。中国史は古来より多種多様な言語・習俗・宗教を持った人々によって作り上げられてきたものであり、雑多なものがぶつかり合い混じり合う中から新しい文化を生み出してきた。五千年来綿々と受け継がれてきた変わらぬ伝統などというものは幻想に過ぎず、絶えざる混淆の中で常に変化し続けてきたのが中国史の常態である。

遊牧民の築き上げた千年の古都西安は、中国史のこのようなダイナミズムを最も良く感じさせてくれる街なのである。そしてこの西安の歴史の中で最も遊牧民の色彩が濃く、最もダイナミックだった時こそ五胡十六国時代なのである。

<sup>1</sup> 日本における歴史地理学は地理学の一分野と位置付けられ、地理学の補助学と考えられているが、中国ではかなり事情が異なる。中国においても歴史地理学を歴史学あるいは地理学の補助学とする見方もあるが、現在では学際的性格を有する独立した一学問分野として認められている。中国における歴史地理学は顧頡剛が中心となって禹貢学会を設立したことを嚆矢とする。顧頡剛は中国における近代的人文

学の祖と言わなければならない。禹貢学会の学術誌『禹貢半月刊』（一九三四～一九三七年刊行）は歴史地理学ばかりでなく、地理学、歴史学、人類学、考古学等の次世代を担う学者を輩出した。禹貢学会に参加し歴史地理における顧頡剛の高弟と目されたのが、侯仁之、譚其驤、史念海の三氏である。侯仁之は北京大学地理系で教鞭を執り、歴史地理研究所を設立し北京の都市地理や沙漠地理等に大きな功績をあげた。譚其驤は上海の復旦大学に歴史地理研究所（現歴史地理研究中心）を設立し、『中国歴史地図集』を編纂するなど巨大な足跡を残した。史念海は西安の陝西師範大学に歴史地理研究所（現西北歴史環境と経済社会発展研究中心）を設立し、軍事地理の研究を進める一方、中国西北部や黄土高原の環境変遷史の分野を切り開いた先駆者である。主にこの三氏とその教えを受けた学者達の学術活動等を通じて、中国の歴史地理学は大きな存在感を有するに至っている。中国の歴史地理学は日本のそれと比較して歴史学にかなり接近しているのが大きな特色である。従ってその成果は日本の中国史学者に多くの刺激を与え、また日本の中国史学者の研究には中国では歴史地理学に分類される仕事が少ない。そのため中国の歴史地理学者は日本の中国史学者と交流する機会が多く、それは近年益々活発になっている。

<sup>2</sup> 周の西方起源説には異論もあり、長期にわたり様々な議論がされてきたが、本章の主旨ではないのでここでは触れず、定説に従い西方起源説に立つて論を進める。

<sup>3</sup> 中国社会科学院考古研究所漢長安城工作隊は二〇〇三年よりボーリング調査および一部の遺構に対する試掘を行い、宮殿区の輪郭はかなり判明している（中国社会科学院考古研究所漢長安城工作隊「西安市十六国至北朝時期長安城宮城遺址的鉆探与試掘」、『考古』二〇〇八—一九）。また二〇〇八年末には東小城と西小城をつなぐ城門遺跡が発見され（「十六国至北朝長安城宮門遺址面世」、『光明日報』二〇〇九年一月五日）、五胡十六国から北朝期の長安の全貌は次第に明らかになりつつある。

<sup>4</sup> 妹尾達彦『長安の都市計画』（講談社選書メチエ、二〇〇一年）

<sup>5</sup> 安西王マンガラがクビライ政権の中で非常に重要な役割を担ったことは、杉山正明氏の一連の著作の中で繰り返し強調されている。以下の諸論著等を参照されたい。杉山正明『モンゴル帝国の興亡』（講談社現代新書、一九九六年）。『遊牧民から見た世界史』（日本経済新聞社、一九九七年）。「元」（松丸道雄・池田温他編『世界歴史大系 中国史三—五代—元—』、山川出版社、一九九七年）。『モンゴル帝国と

大元ウルス』（京都大学学術出版会、二〇〇四年）

6 笹崎龍雄・清水英之助『中国の畜産―家畜の品種を中心に』（養賢堂、一九八四年）

7 史念海「黄土高原及其農林牧分布地区的變遷」『歴史地理』創刊号、一九八一年、後に『黄土高原歴史地理研究』、黄河水利出版社、二〇〇一年に所収）。史念海・曹爾琴・朱士光『黄土高原森林与草原的變遷』（陝西人民出版社、一九八五年）。史念海は中国環境史のパイオニアであり、著書『河山集』にはこの分野に関する多くの論文が収められている。また一九九七年から二〇〇〇年にかけて学習院大学

（鶴間和幸教授）および筑波大学（妹尾達彦教授・当時）と共同研究を行い、その成果は次の二冊の論文集にまとめられている。史念海主編『漢唐長安与黄土高原——中日歴史地理合作研究論文集第一輯』（陝西師範大学中国歴史地理研究所、一九九八年）。同『漢唐長安与関中平原——中日歴史地理合作研究論文集第二輯』（陝西師範大学出版社、一九九九年）。

8 魏晋南北朝時代が寒冷期であることについては、竺可楨「中国近五千年來氣候變遷的初步研究」『考古学報』一九七二―一を嚆矢として多くの研究があり、広く認められている。

9 妹尾達彦氏はこのような農業地域と遊牧地域の境界にある地域を「農業——遊牧境界地帯」と呼び、それが中国のみならず世界文明の発展に大きな影響を与えたことを強調し、「中国の長い歴史の中で、長安と北京が、それぞれ中国史前期と後期を代表する都城となった最大の理由は、ユーラシア大陸を貫く生態環境の境界地帯に立地したからである」（『中国の都城とアジア世界』、鈴木博之・石山修武・伊藤毅・山岸常人編『シリーズ 都市・建築・歴史1 記念的建造物の成立』、東京大学出版会、二〇〇六年、所収）と述べる。中国における農業牧畜境界地帯については、同「中華の分裂と再生」（樺山紘一他編『岩波講座世界歴史9 中華の分裂と再生』、岩波書店、一九九九年、所収）等も参照されたい。また妹尾氏を代表とする日本学術振興会科学研究費「歴史学的視角から分析する東アジアの都市問題と環境問題」研究組織は、二〇〇五年三月に「東アジアの都市史と環境史——新しい世界へ」、二〇〇九年三月に「都市と環境の歴史学…五年間の成果」と題して国際シンポジウムを行い、日中韓米シンガポール等から多くの学者が参加し、その成果は報告書として刊行された。

10 八〜九世紀の吐蕃の侵入は、チベット高原中央部から直接中国本土に侵攻した数少ない例だが、吐蕃は二度にわたって長安を占領したも

ののあくまで一時的なものであり、関中平原を長期的に支配することはなかった。

<sup>11</sup> Owen Lattimore *Manchuria: Cradle of Conflict*, New York, 1932. リザーヴァーに関する核心部分である第二章 *The "Reservoir" of Tribal Invasions* の一節 *The Trives and the "Reservoir"* は、石見清裕「ラティモアの辺境論と漢・唐間の中国北辺」(唐代史研究会編『唐代史研究会報告第Ⅷ集 東アジア史における国家と地域』、刀水書房、一九九九年)に訳出されている。

<sup>12</sup> 前掲石見「ラティモアの辺境論と漢・唐間の中国北辺」

<sup>13</sup> 殷周時代の羌と後漢後期から南北朝時代の羌族には何らかの関係があるとは認められているが、直接的な関係があるとは考えられていない。また現在の四川省アバチベット族・羌族自治州の羌族が、古代の羌族の直接の後裔であるかについても非常に疑問視されている。中国本土に隣接する地域のチベット系遊牧民を、古くから各時代を通じて漢字で羌と書き表したため、このような混乱が起こったと考えられる。

<sup>14</sup> 統万城は一九五〇年代に調査が始まり、一九八〇年代に測量と部分的発掘が行われた。調査の詳細については、以下の文献を参照されたい。陝西省文管会「統万城遺址調査」(『文物参考資料』一九五七—一〇)。侯仁之「從紅柳河上的古城廢墟看毛烏素沙漠的變遷」(『文物』一九七三—一)。陝西省文管会「統万城城址勘測記」(『考古』一九八一—三)。戴応新『赫連勃勃与統万城』(陝西人民出版社、一九九〇年)。また近年では陝西師範大学西北歴史環境与経済社会発展研究中心と地元政府によって、調査研究と遺跡保存が進められている。二〇〇三年からは日本の植林専門家東城憲治氏の指導と資金援助を受けて、城の周囲に植林し砂漠化を防ぐ事業が進められ、大きな成果を上げつつある。活動と研究の詳細は次の二冊の論文集を参照されたい。侯甬堅・李令福編『走向世界的沙漠古都——統万城』(『中国歴史地理論叢』專輯、二〇〇三年)。陝西師範大学西北環境中心編『統万城遺址総合研究』(三秦出版社、二〇〇四年)。

<sup>15</sup> 妹尾達彦前掲『中華の分裂と再生』および『長安の都市計画』。妹尾氏は清代の統治空間を「大中国」、明代の統治空間(中国本土)を「小中国」とし、唐以後の中国は外部の非漢人によって成立した「大中国」政権と、漢人が主体となって樹立する「小中国」政権が交替を繰り返し、「大中国」政権は農業—遊牧境界線上に位置する長安・北京に都を置き、「小中国」政権は中国本土の洛陽・南京に都を置く、とする。

- 16 石見清裕『唐の北方問題と国際秩序』（汲古書院、一九九八年） 附章「唐代外国貿易・在留外国人をめぐる諸問題」。
- 17 これは伝承であり歴史事実と証明されているわけではない。アーナンダーがムスリムになった可能性は高いが確証はなく、麾下の兵士が一斉にムスリムになったこと、それが現在の西安回族の祖先であることには大きな疑問が持たれている。詳しくは王宗維『元代安西王及其与伊斯蘭教的關係』（蘭州大学出版社、一九九三年）を参照されたい。



## 結語

最後に以上論じてきたことをまとめ、併せて展望と課題を述べたい。

第一部「五胡十六国時代民族史への視点——研究史」では五胡十六国民族史の研究史と諸先学の問題意識について述べた。

第一章「魏晋南北朝民族史研究と民族理論」では、議論の前提として中国における民族についての考え方の特色とその形成過程を略述した。一九世紀末から二〇世紀初頭にかけて、多民族を包括する「帝国」としての清朝を、近代国民国家としての「中国」に改変するために、全く実態のない方便あるいは仮説的概念として提唱された「中華民族」論は、複雑な政治過程の中で次第にあたかも実態を持つかのように取り扱われ、晩年の孫文に至って大漢族主義と変わらぬものと成り果てた。当時の学界にはこれとは立場を異にする顧頡剛のグループなども存在したが、結局費孝通によって集大成された「中華民族」論は、中華人民共和国の体制イデオロギーと化していった。費孝通は漢族と他の「少数民族」を対等の立場に置くと標榜して民族識別工作に従事したが、歴史観としてはやはり漢族に主たる地位を認め、大漢族主義への傾斜を拭い去れなかった。魏晋南北朝民族史研究においては、胡と漢に対等の歴史的地位を認め胡の側の主体性を重視する日本・韓国の研究に対し、中国の研究は胡漢の民族融合を認めながらも、あくまで漢の側が主であるという立場に固執する。このような大漢族主義的傾向は中国の最も良心的な研究者にもあり、民族に関する考え方が根本的に異なることが浮き彫りとなる。

第二章「中国における「淝水之戦論争」とその影響」では、一九七九年から数年に及んだ「淝水之戦論争」の論点を整理した。「淝水之戦論争」は文化大革命終了後初めての魏晋南北朝民族史に関する本格的論争である。従来は「野蛮な氏族による漢族に対する侵略・民族奴役戦争」とマイナス評価しか与えられなかった淝水の戦いの評価を、黄烈が一八〇度ひっくり返し

たことに始まるこの論争は、黄烈説への賛否両論が入り乱れて活発な議論が行われたが、次第に双方が感情的な非難の応酬に陥り明確な結論は出なかった。しかし多岐にわたる論点はその後の五胡十六国史研究に大きな影響を与えその基礎となった。

最大の論点は「前秦政権の民族的性質」と「淝水の戦いの性質」であったが、前秦を否定する論者は「氏族が漢化していない」ことを強調するのに対し、前秦を肯定する論者は氏族が「漢化」し、中国の統一を目指し、漢族とその文化を尊重したことを論拠としていて、どちらも中華思想的な大漢族主義の立場から評価を下しているに過ぎない。結局この論争は、中国の研究者の多くが、民族問題よりも階級問題を重視するマルクス主義史観と、中華思想的な大漢族主義の両方の影響を受けるため、遊牧系諸民族や五胡政権の立場に立った歴史観を持つのが極めて困難である、という大きな弱点を如実に示すものであった。

第三章「後趙史研究にみる民族史研究の焦点」は、五胡の一つ羯族によつて建国された後趙に関する一九九〇年代までの評価をまとめたものである。一九八〇年～九〇年代の後趙史研究は「淝水之戦論争」の強い影響を受け、論点も議論の展開もほとんど同じようなものであり、やはり大漢族主義的歴史観に基づいて評価を下している。これらの各章を通じて五胡十六国史を研究する上での困難さと問題点について明らかにした。

第二部「五胡十六国時代前期における民族関係——冉魏政権をめぐって」では当時の激しい民族対立の例として、五胡十六国時代前期を代表する大国である後趙の末期に起きた、冉閔による胡人虐殺事件を中心に引き上げ、その背景及び冉閔政権の性格について検討した。

第一章「乞活と後趙政権——五胡十六国時代前期における流民問題の諸相」では、冉閔を論じる前提としてその出身母体となった流民集団「乞活」について考察した。乞活は当初は西晋の皇族である并州刺史司馬騰に率いられた難民集団であり、鄴に「就穀」とするという形で華北平原に出てからは専ら黄河下流において活動した。一部に胡人を含むものの并州出身の漢人を主たる構成員としており、陳午集団のように強烈な反胡人的傾向を持ったグループもあったが、大半は後趙の軍門に降りその基幹軍事力の一部となった。冉閔の父冉瞻はこの乞活から出ており、冉閔の盟友としてその後趙篡奪に協力した李農も乞活と

は深い関係を結んでいて、乞活は冉閔が後趙を奪う過程の中で重要な役割を果たした。当時は強力な軍事力を持つ難民集団を取り込むことが政権の死命を制する課題であった。後趙の運命を左右した乞活はそのような難民集団の典型例であり、このような時代背景の中で冉閔の胡人虐殺と後趙篡奪は行われたのである。

第二章「冉閔の胡人虐殺について」では冉閔が胡人虐殺に至る政治過程を分析した。この事件は当時の激烈な胡漢対立を背景にして発生したのだが、冉閔・胡漢対立・胡人虐殺事件を直ちに結びつけるのは正確とは言えない。冉閔は権力の座に野心を燃やし、最初は石遵の皇太子となって合法的に政権を獲得しようとするが失敗し、続いて石遵を廃位し石鑒を擁立するクーデターに成功して政権の実権を握るが、これに反発する胡人の離反にあつてはじめて胡人虐殺と後趙篡奪に踏み出したのである。非常な危険を伴い多くの敵を作る胡人虐殺は冉閔が当初から意図したものではなく、彼が政治的に追い詰められていく中で選択した窮余の一策であり、冉閔が自分が漢人であることを正面に打ち出していくのはこれ以降である。

第三章「冉閔政権と漢人たち」では、冉閔が樹立した冉魏政権と漢人の関係について考察した。冉閔は胡人虐殺の後に漢人意識を強調し漢人の代表者然として振る舞い始めるが、その影響は華北の漢人に必ずしも広まらなかった。冉魏政権は後趙の漢人官僚や將軍を継承する形で成立したが新たに加わる人材は少なく、また地方官の多くが後趙の残存勢力である石祗や慕容部、東晋に寝返ってしまい、漢人に対して求心力を持たなかった。東晋に対して藩を称することなく独自路線をとったことも、漢人の支持を得られなかった大きな原因の一つである。このように五胡十六国時代における中原唯一の漢人政権である冉魏は、華北の漢人を糾合することに全く失敗した。そのため支配領域は最大でも首都鄴周辺の数郡に過ぎず、最後まで河北南部の地方政権に止まりしかも短命に終わったのである。

冉閔と冉魏政権の軌跡は、当時における胡漢の激しい対立を象徴するものであるが、同時に胡漢が入り乱れて単純に「胡漢対立」だけでは説明できないこの時代の複雑な状況をもよく示している。第四部で詳述するが、四世紀の河北地域は徙民政策により大量の胡人が居住し、人口の上では先住民である漢人を上回っていた。また胡人は鄴や襄国の周囲で牧畜を営み、農業

は主要産業ではなくなっていた。胡人が後趙の政治軍事の主導権を握り支配者として君臨していたのは言うまでもない。当地の漢人の地位はあらゆる意味で大幅に低下していた。それ故に漢人の胡人への反発と敵意は反って激烈なものとなった。冉閔の胡人虐殺の背景にはこのような状況があった。しかし当地の胡化・牧畜化という滔々たる流れはこの事件を経ても止まることはなかった。三五二年の時点において当地に漢人政権を存立させる社会的基盤は既に無く、冉閔の政権は短命に終わらざるを得なかったのである。

第三部「五胡十六国時代後期における遊牧民の活動——大夏と統万城」では、前秦崩壊後の五胡十六国時代後期を代表する大国の一つ大夏について、建国者赫連勃勃の築いた統万城を中心に歴史地理的観点から分析を加えた。

第一章「代来城の位置と統万城」では、赫連勃勃の父劉衛辰が築いた代来城の沿革を概観し、位置に関する諸説を検討して、陝西省榆林市巴拉素鎮の白城台遺跡が代来城であるとする載応新氏の説に賛同し、また二〇〇一年当時外国人として初めて同遺跡を参観した折の参観記を付した。代来城遺跡は統万城と工法がよく似ており、また地理的にも統万城に近く、劉衛辰時代の鉄佛部と赫連勃勃の大夏国の間の連続性に注目すべき事も指摘した。

第二章「統万城の戦略的位置」では、まず統万城遺跡の構造、調査の沿革、特殊な建築工法、現在の保存状況について紹介した。続いて当時の統万城周辺の自然環境が現在より良く牧畜適地であり、また統万城は大同方面からオルドスを経て河西に向かう重要通商路であるオルドス沙漠南縁路上に位置しており、関中平原へと通じる二つの交通路（蕭關道と延州道）の結節点にも当たっていて、オルドスを本拠地とする遊牧政権が関中平原征服を狙う攻撃拠点として絶好の位置にあることを論じた。

第三章「赫連勃勃の領土拡大過程と農牧境界線」では、赫連勃勃が大夏国を建国して以来の領土拡大過程を歴史地理的観点から検討した。勃勃の領土拡大過程は、その本拠地高平及びオルドスを制圧する第一時期（四〇七～四〇八年）、黄土高原地域を舞台に後秦と長期に渡り係争する第二時期（四〇九～四一七年）、長安を中心とする関中平原を東晋から奪取する第三時期（四一七～四一八年）に区分できる。オルドス・黄土高原・関中平原の各地域は当時の住民の生業形態から分類すれば、そ

れぞれ遊牧地区・半農半牧地区・農耕地区に該当する。赫連勃勃は遊牧地区・半農半牧地区の制圧には容易に成功したが、農耕地区への進出には時間がかかった。これには大夏国の遊牧政権の性格がよく表れている。

劉衛辰以来の匈奴鉄佛部と大夏国の軌跡は、四世紀以前は長城線周辺にあった遊牧民が次第に中国内地に進出し、先住の諸民族を征服支配していくという当時の趨勢の代表的なものである。劉衛辰から赫連勃勃にかけての匈奴鉄佛部・大夏国の軌跡を通観すると、関中平原を征服するまでは一貫して遊牧地区及び半農半牧地区を活動領域としており、中国本土に居住して長い南匈奴、羯、氐、羌とは明らかに性格が異なる。大夏は北魏と並んで、塞外の遊牧民が中国本土を征服統治した国である。大夏の発展は華北地域の胡化・牧畜化の深化を示すものである。

第四部「華北における牧畜民と牧畜業」では、華北に移住した遊牧民達が持ち込んだ牧畜業の影響および自然環境の問題について論じた。

第一章「五胡十六国・北魏の牧畜」は四く六世紀の華北における牧畜民と牧畜業についての概説である。三国時代そして五胡十六国時代の戦乱によって、当時の経済中心地であり多くの人口が密集していた華北において、先住民である漢人の多くは戦乱を逃れて長江流域、河西、遼東等に避難し、モンゴル高原およびチベット高原東縁から遊牧系諸民族が陸続と移住したため、華北における遊牧民の人口比率が大幅に上昇した。胡人と呼ばれた遊牧系諸民族は華北に自己の政権を樹立し、政治軍事のみならず人口の上からも名実共に華北の支配者となった。当時は気候の寒冷化に伴い華北においても牧畜に適した環境が広がっており、ここに大量の遊牧民が移住し牧畜生活を営んだため、農業と牧畜の境界線は漢代に比べて大々的に南下し、華北の大部分が農業と牧畜が入り混じる農牧交錯地域となった。これは北魏が華北を統一してからも同様で、鮮卑族の兵士が各地に軍事駐屯することによって牧畜はより広まっていた。魏晉南北朝時代の華北における牧畜業の存在感の大きさは特筆に値する。

第二章「五胡十六国北朝期の華北平原における牧畜民の活動」では、当時の華北平原とりわけ河北・山東における牧畜民の



活動とその影響について考察した。第一章で述べたように、胡人と呼ばれた遊牧系諸民族は、五胡十六国時代の華北において人口の上でも多数派であり、決して「少数民族」などではなかった。河西や関中平原、山西などは既に三世紀には遊牧系諸民族の人口が大幅に増加していたが、華北平原も四世紀には北方・西方から移住した遊牧系諸民族の天地となった。このような大量移住の背景には気候の変動がある。魏晉南北朝時代は全体として寒冷期だったが、三世紀後半から四世紀前半と五世紀後半から六世紀前半は特に寒冷で、華北は気候・自然環境ともモンゴル高原南部に類似する状態となった。そのため華北平原も半農半牧地域化し遊牧系諸民族の活動が活発となる環境が成立した。これは華北平原の産業構造に大変化をもたらした。ユーラシア大陸の北緯四十度付近には各地に「農牧複合」と呼ばれる牧畜の強い影響を受けた農業が生み出されたが、華北における農牧複合の姿をよく伝えるのが『齊民要術』である。ここには多種多様な乳製品や動物の血を利用した食品の製法が記されているが、それはいずれもモンゴル高原の遊牧民が現在行っている製法に酷似しており、モンゴル高原から持ち込まれた牧畜文化が華北に根付いていたことがわかる。当時の華北平原はあらゆる点で内陸アジアの一部だったのである。

第三章「五胡十六国時代の鄴城周辺における牧畜民と牧畜業」では、魏晉南北朝時代の華北東部における政治軍事的中心都市であった鄴の周辺における牧畜民と牧畜業について論じた。曹操の魏王国以来北斉に至るまで、六朝八九年の都として栄えた鄴は、後趙・前燕・前秦の時には徙民政策により様々な民族が大量に移住したが、その多くは遊牧系諸民族であり、彼らが鄴の周辺で行っていた牧畜が、戦乱により荒廃した農業に代わって鄴の人口を支える大きな柱だった可能性を指摘した。

第四章「魏晉期の酒泉と河西における家畜と牧畜業——画像磚の分析を通じて」では、酒泉新城古墓群の主に三世紀（魏・西晋）に造られた画像磚分析を通じて、魏晉期における当地の家畜と牧畜業について論じた。分析対象とした八基の墓中の画像磚に描かれている家畜及び動物は合計で五一七匹（頭）である。内訳は馬一九一頭、牛一一七頭、羊（山羊を含む）八八頭、鶏四九羽、兔一六匹、豚一四頭、鷹一一羽、犬一一匹、野羊三頭、駱駝三頭で、ここから当時の酒泉地域では人々の身近に様々な家畜や野生動物が暮らしていたことが解る。また家畜が登場する場面を分析すると、その内訳は、出行七四例、農耕六九



例、牧畜五四例、飲食五三例、狩猟三六例で、合計二二〇の画像磚に何らかの形で家畜が描かれ、これは全画像磚の三〇・五%を占めており、当時の生活における家畜の重要性を示している。牧畜場面が非常に多いことは河西地域の画像磚の大きな特色で、魏晉南北朝期の河西経済は漢代同様牧畜を主としていたという通説を裏付ける。数多くの狩猟場面が描かれていることから、当時狩猟が頻繁に行われていたのが解る。酒泉の草原や山地は多くの野生動物が住むほど豊かであった。また一部の画像磚に、モンゴルで行われているような羊山羊混合放牧らしき画像が複数見られる。従来羊山羊混合放牧は金代（十二世紀）までしか遡れなかったが、この画像から当時の酒泉周辺では牧畜に熟練した牧畜民が日常的に放牧を行っていた可能性を指摘できる。

第五章「遊牧民の千年の都——故都西安の歴史地理的概観」は、周代から唐末までの長安および関中平原の歴史地理的特色について概観したものである。「十三朝の都」長安は、「九朝の都」洛陽と並んで十世紀以前の中国を代表する故都だが、その特徴は洛陽とは対照的である。長安のある関中平原は牧畜地区と農業地区との中間にあつてどちらの生業も行えるグレーゾーンの地区である半農半牧地区の境界線上にあり、魏晉南北朝時代にはこの線は大きく南下して関中平原自体が半農半牧地区に入った。また関中平原北方のオルドス高原と西方の隴西地域は、ラティモアが「将来中国を征服し、次代の中国の歴史を左右するパワーが溜まる場所」という意味でリザーヴァー(Reservoir)と名付けた地域に相当する。実際長安に都した王朝のほとんどは遊牧民が中国内地に進出して建てたものである。彼らはいずれも中国の西方あるいは北方から関中平原に進出して来た。長安は古代の人口稠密地だった華北平原と彼らの故郷である草原地帯を結ぶ交通の要衝だった。つまり彼らが中国を支配する上で絶好の位置を占めていたのである。十世紀以降には契丹を嚆矢としてモンゴル高原東部から中国東方方面の遊牧勢力の力が強くなり、彼らが北京を首都に選んだため長安は首都としての地位を失った。このように首都の盛衰にも遊牧民の影響が極めて大きいと言ふことができる。

このようにこの時代においては、黄河下流の河北、河西、黄河上流の関中など各地で牧畜民の進出と産業の牧畜化が進行し

ていた。これは当時の気候変化の影響を強く受けたものだが、同時に牧畜民の進出は各地の自然環境を変化させていった。こうして華北各地の景観は次第に牧畜的なものに改変され、この地はさながら内陸アジアの一部と言って良い状態になっていた。自然環境・産業・景観までが様相を一変させていったのである。

以上のように民族観、民族関係、政治、考古遺跡、牧畜業などの産業、自然環境など様々な角度から五胡十六国時代を論じてきた。全体として言えるのは、この時代を通じて「胡化」「牧畜化」現象が華北の政治・軍事・経済・社会・生活・自然環境・景観などあらゆる方面で進行し、それ以前とは全く異なる時代を生みだしていったことである。華北の各地各階層各方面に牧畜民の確固たる社会が成立し、従来の漢人社会と厳しい緊張関係を孕みながらも共存し、時に激しく対立しながらも相互に影響し合っていた。五胡と呼ばれる牧畜民は少数の「ゲスト」などではなく主人公であり、彼らの進出は一時的現象ではなかった。彼らは当時の情勢や環境に巧みに適応し、先住民である漢人の文化を吸収しながら、時代に即した政治制度や新しい産業形態、生活文化を発展させた。そしてやがて様々な文化が混じり合う中から、それ以前とは全く違う社会を作り出していく。五胡十六国時代を通じて華北社会は根本から変容を遂げたのである。

中国史において五胡十六国時代の意義と位置づけを述べるとすれば、「中国」「中華」という概念そのものを相対化して考える貴重な機会を提供してくれる、極めて稀な歴史時期だと強調しておきたい。この時代における華北の自然環境はモンゴル高原に近く、人口構成の上からも華北は内陸アジアの一部であった。極言すればそこはもはや「中国」でしかない。古典古代の中国文明が華開いた中原の地はもはや中華でも中国でもなかった。

序言に倣って再び中世ヨーロッパのアナロジーを用いれば、フランク王国がいくら己を「ローマの正統な後継者」と強弁しようとも、結局はゲルマンでありフランクでしかないように、北魏がいくら己を「中華の正統な後継者」と強弁しようとも、結局胡人であり鮮卑でしかないのである。では南朝が「中華」なのかと言えばそうでもない。ローマの正統な後継者を自任するビザンツ帝国が、ローマ以来の伝統文化を保持するものの、ギリシア語を公用語とする「ギリシア人のローマ帝国」に過ぎ

なかったように、「中華」の正統な後継者を自任する南朝は、北来の亡命貴族の文化を保持するものの、「鳥語」と揶揄される南方語を話す「島夷の中華」に過ぎなかったのである。

ならば真正の「中華」はどこにあるのか。そんなものは無いのである。そもそも真正の「中華」を求める発想自体が、序言で指摘した「天命を受けた天子が天下を統治するという中国的正統王朝意識、伝統的中国認識」の産物である。ヨーロッパにおいて、特に東ローマ皇帝ユスティニアヌスによるローマ帝国再統一の試みが失敗した六世紀後半以降の歴史に、「真正のローマ」を求めるのが無意味なように、「中国」「中華」という枠組みにこだわればこだわるほど、この時代の特色は見えてこない。

真正の「中華」は隋唐以降に存在する。隋唐の統一によって「中国」という枠組みは復活し、中国は再び「中華」となった。この統一事業の最大の原動力になったのが、鮮卑族を中心とする騎馬遊牧民の軍事力だったことは言うまでもない。隋唐王朝による中国統一は、五胡による中国征服の完成を意味した。そして隋唐帝国に支配者として君臨した五胡の末裔達が、新たな「中華」の担い手となった。これを「漢化」云々と言うのは倒錯的な詭弁に過ぎない。新たな「中華」は五胡が造り上げたのである。五胡こそが真正の「中華」であった。そして後世のいわゆる「漢族」は、この五胡が造り上げた中華の枠組みの中から生まれてきたものである。

所与の「中国」が「乱れた」のではなく、一度壊れた「中国」を造り直していく時代。五胡十六国時代はどのような時代ではないかと考える。しかしそれは隋唐帝国へと至る一本の道筋ではなく、「中国」が全く面容を異にしていたり、あるいは「中国」そのものが解体するなど他に様々な可能性がある時代であった。

本稿ではまだその豊かな相貌の一端も充分には捉え切れていない。これからこの時代の汲めども尽きぬ魅力を掘り下げていきたい。

初出一覧

序言 (書き下ろし)

第一部 五胡十六国時代民族史への視点——研究史

第一章 魏晉南北朝民族史研究と民族理論 (書き下ろし)

第二章 中国における「淝水之戦論争」とその影響

(原題「中国における『淝水之戦論争』について」、『学習院大学文学部研究年報』第四二輯、一九九六年)

第三章 後趙史研究にみる民族史研究の焦点

(原題「近年の中国における後趙史研究」、『東洋学報』第七五卷一・二号、財団法人東洋文庫、一九九三年)

第二部 五胡十六国時代前期における民族関係——冉魏政権をめぐって

第一章 乞活と後趙政権——五胡十六国時代前期における流民問題の諸相

(原題「乞活と後趙政権」、『中國古代史研究』第七、中國古代史研究會編、研文出版、一九九七年)

第二章 冉閔の胡人虐殺について

(原題「冉閔の胡人虐殺に関する一考察」、『响沫集』7号、句沫集発行世話人会、一九九二年)

第三章 冉閔政権と漢人たち

(原題「冉魏政権と漢人たち——五胡十六国時代前期の民族関係に関する一考察」、『学習院大学文学部研究年報』

第四三輯、一九九七年)

第三部 五胡十六国時代後期における遊牧民の活動——大夏と統万城

第一章 代来城と統万城——匈奴鉄佛部の国家形成

〔原題「代来城の位置と現況について」、『東洋文化研究』第五号、学習院大学東洋文化研究所 二〇〇三年〕

第二章 統万城の戦略的位置

〔原題「統万城の戦略的位置について」、鶴間和幸編『黄土高原とオルドス——中国西北路寧夏・陝北調査記』、勉誠社、一九九七年〕

第三章 赫連勃勃の領土拡大過程と農牧境界線

〔原題「赫連勃勃の領土拡大過程について」、『東洋文化研究』第一号、学習院大学東洋文化研究所、一九九九年〕

第四部 華北における牧畜民と牧畜

第一章 五胡十六国・北魏の牧畜

〔『日中文化研究』一四「特集・環境から考える東アジア——歴史的展開と現在」、勉誠出版、一九九八年〕

第二章 五胡十六国北朝期の華北平原における牧畜民の活動

〔原題「魏晋北朝期華北平原における牧畜民の活動」、鶴間和幸編『東アジア海文明の歴史と環境』、東方書店、二〇一三年〕

第三章 五胡十六国時代の鄴城周辺における牧畜民と牧畜業

〔原題「魏晋南北朝時代における鄴城周辺の牧畜と民族分布」、鶴間和幸編『黄河下流域の歴史と環境——東アジア

海文明への道』、東方書店、二〇〇七年)

第四章 魏晋期の酒泉と河西における家畜と牧畜業——画像磚の分析を通じて

(原題「画像磚に見る魏晋期酒泉の家畜と牧畜——嘉峪関新城古墓群を中心として」、『西北出土文献研究』第三号、

新潟大学文学部、二〇〇六年)

第五章 遊牧民の千年の都——故都西安の歴史地理的概観

(朱浩東他編『教育の情報・協同・共生 比較教育研究別巻』、中山出版、二〇一一年)

結語  
(書き下ろし)